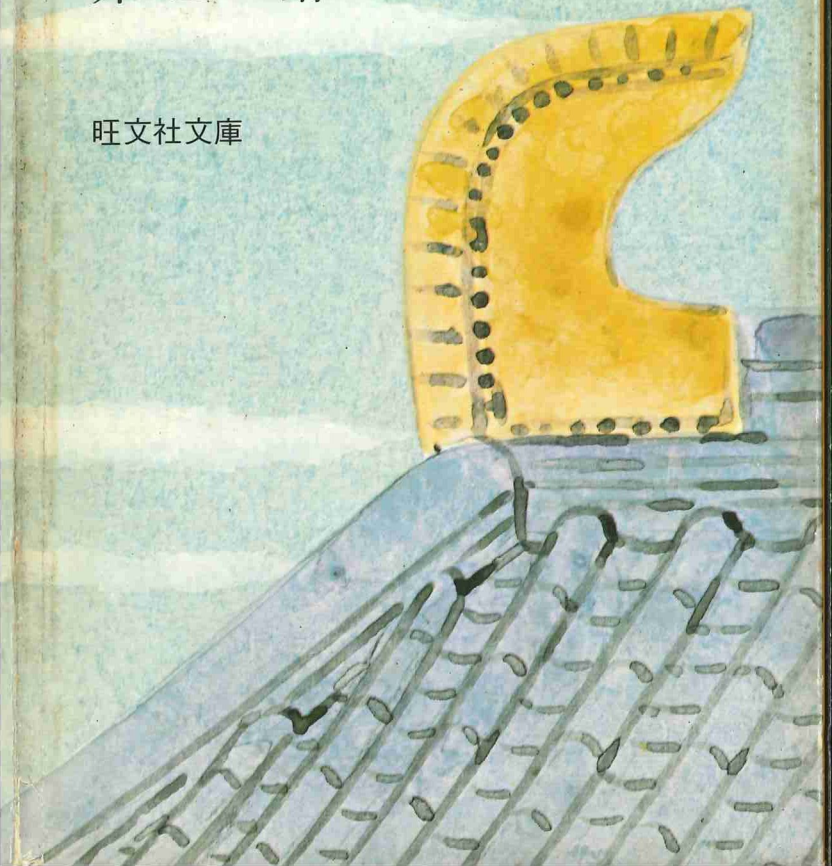
天平の甍（てんぴょうのいらか） 他一編

井上 靖

旺文社文庫



天平の甍 他一編

井上靖

旺文社文庫

天平の甍 他一編 井上靖 旺文社文庫 11 3 ¥220

¥220 0193 610-66 0724

天平時代、日本の仏教に戒律をもたらすために、遣唐船で唐に渡った四人の留学僧の足跡をたどりながら、深い孤独と虚無感のうちに、民族の運命を凝視した歴史小説。他に、死に直面した人間の恐怖を冷やかに描き、残酷なユーモアさえ漂わせる傑作短篇『補陀落渡海記』を併載。

カバー　守屋多々志

旺文社文庫収録
井上靖の作品

- あすなろ物語 他一編 [11-1]
- しろばんば [11-2]
- 天平の甍 他一編 [11-3]
- 蒼き狼 [11-4]
- 洪水・異域の人 他八編 [11-5]
- 孤猿・小磐梯 他八編 [11-6]
- 真田軍記 [11-7]
- 滝へ降りる道 他十編 [11-8]

〔 〕内の太字は作者・斜字は作品番号

旺文社文庫

天平の甍

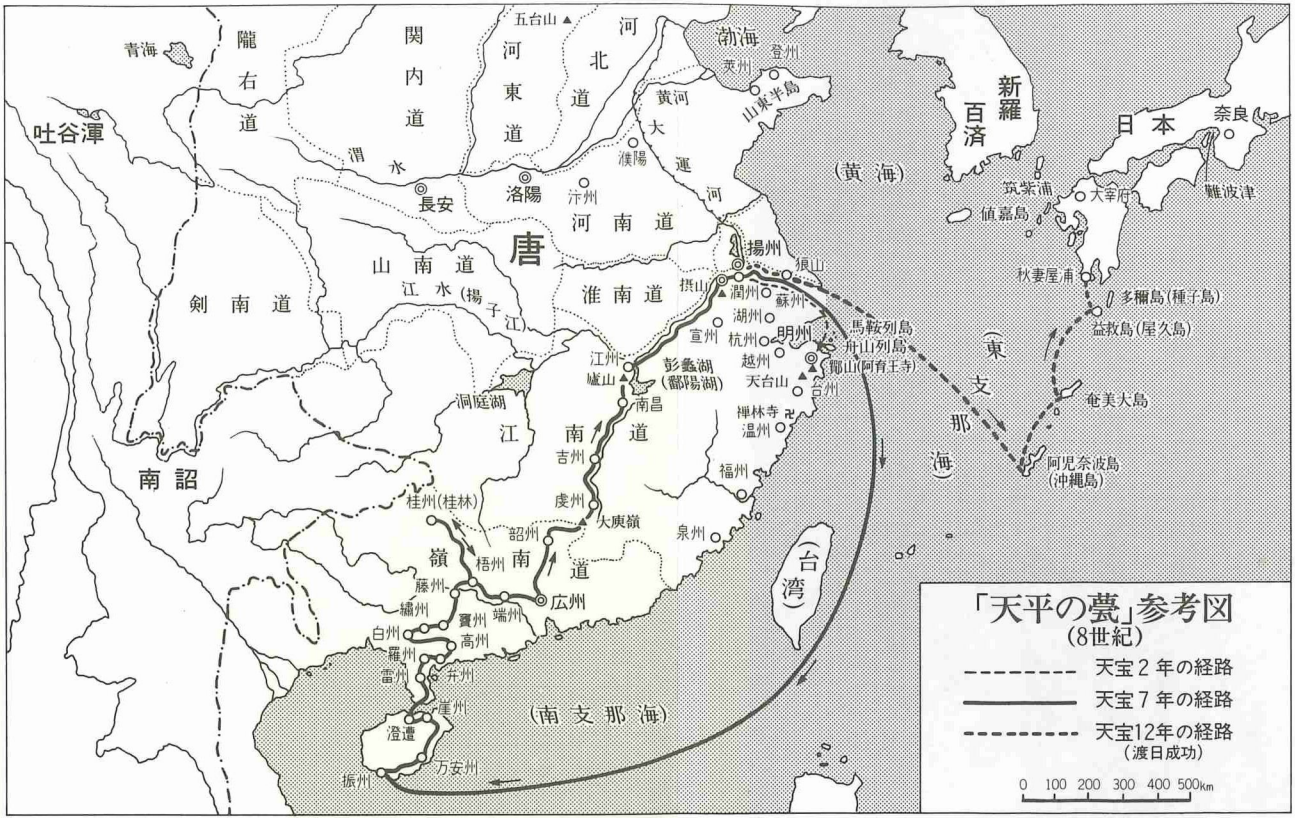
（他）補陀落渡海記

井上　靖著

天平の甍　他一編　井上　靖著

旺文社

Obunsha Library


「天平の甍」参考図
(8世紀)
天宝2年の経路
天宝7年の経路
天宝12年の経路
(渡日成功)
0 100 200 300 400 500km
唐
吐谷渾
南詔
隴右道
関内道
河東道
河北道
山南道
剣南道
淮南道
江南道
嶺南道
青海
五台山
渭水
長安
洛陽
汴州
濮陽
黄河
大運河
渤海
登州
萊州
山東半島
(黄海)
新羅
百済
日本
奈良
筑紫浦
大宰府
難波津
値嘉島
秋妻屋浦
多禰島(種子島)
益救島(屋久島)
奄美大島
阿児奈波島
(沖縄島)
(東支那海)
(南支那海)
(台湾)
揚州
狼山
潤州
蘇州
湖州
撰山
宣州
杭州
明州
越州
馬鞍列島
舟山列島
鄞山(阿育王寺)
天台山
台州
温州
禅林寺
福州
泉州
江州
廬山
彭蠡湖
(鄱陽湖)
南昌
洞庭湖
江南道
吉州
虔州
大庾嶺
韶州
桂州(桂林)
梧州
広州
藤州
繍州
賓州
端州
白州
高州
羅州
雷州
斉州
崖州
澄遷
万安州
振州

旺文社文庫

天平の甍

（他）補陀落渡海記

井上　靖著

旺文社

目次

天平の甍　五
『天平の甍』参考地図　一八六
補注　一八八
鑑真略年譜　一九三
補陀落渡海記　二〇一
解説　山本健吉　二三五
二つの僧の物語　河上徹太郎　二三三
四高の先輩たち　杉森久英　二三六
代表作品解題　二三〇
参考文献　二三四
年譜　二三六

挿絵　福田豊四郎

天平(てんぴょう)の甍(いらか)

原文の表現をそこなわない範囲で現代表記法にもとづいて漢字を削減した。また、難解な語句や事項には、小活字の傍注 および 補注(＊)を加えた。

(編 集 部)

一　章

天平の甍

朝廷で第九次遣唐使発遣のことが議せられたのは聖武天皇の天平四年で(1)、その年の八月十七日に、従四位上*多治比広成が大使に、従五位下中臣名代が副使に任命され、そのほか大使、副使とともに遣唐使の四官と称ばれている判官、録事が選出された。判官は秦朝元以下四名、録事も四名である。そして翌九月には近江(2)、丹波(3)、播磨(4)、安芸(5)の四か国に使節が派せられ、それぞれ一艘ずつの大船の建造が命じられた。

大使多治比広成は文武朝(6)の左大臣嶋の第五子で、兄の県守は養老年間(7)に遣唐押使(8)として渡唐している。広成は下野守(9)、迎新羅使の左副将軍、越前守等を歴任して、こんど新たに渡唐大使の大任を帯びたわけであった。副使の中臣名代は鎌足の弟垂目の孫で、島麻呂の子である。

この年のうちに、遣唐使の主要人員は決定され、正式の任命をみた。知乗船事、訳語、主神、医師、陰陽師、画師、新羅訳語、奄美訳語、卜部等の随員を初めとして、都匠、船工、鍛工、水手

(1) 西暦七三二年。(*以下*印のものは補注として一八八ページ以降にかかげた。) (2) 現在の滋賀県にあたる。(3) 現在の兵庫県の一部と京都府の中央部。(4) 現在の兵庫県南部。(5) 現在の広島県西部。(6) 文武天皇の御代(在位は六九七～七〇七)、その間に大宝律令の制定などがある。(7) 西暦七一七～七二四年。(8) 大使の上にさらに遣唐押使または執節使というものが置かれたこともあった。(9) 現在の栃木県あたりを治めていた地方長官。

長、音声長、音声生、雑使、玉生、鋳生、細工生、船匠等の規定の乗組員から水手、射手の下級船員まで総員五百八十余名。

ただこの遣唐使派遣の最も重要な意味をなす留学生、留学僧の銓衡(1)だけは、年内には決まらないで翌年に持ち越された。もともと時の政府が莫大な費用をかけ、多くの人命の危険をも顧みず、遣唐使を派遣するということの目的は、主として宗教的、文化的なものであって、政治的意図というものは、もしあったとしても問題にするに足らない微少なものであった。大陸や朝鮮半島の諸国の変遷興亡は、そのときどきにおいて、いろいろな形でこの小さい島国をも揺すぶってきていたが、それよりこの時期の日本が自らに課していた最も大きい問題は、近代国家成立への急ぎであった。聖徳太子によって律令国家としての第一歩を踏み出してからまだ九十年、仏教が伝来してから百八十年、政治も文化も強く大陸の影響を受けてはいたが、何もかもまだ混沌として固まってはいず、やっと外枠ができただけの状態で、先進国唐から吸収しなければならないものは多かった。人間の成長で言えば少年から青年への移行期であり、季節で言えばどこかにかすかに春の近い気配は漂っているが、まだまだ大気の冷たい三月の初めといったところであろうか。

平城京はその経営に着手されてから二十三年、唐都長安を模したという南北各九条、東西各四坊の整然たる街衢はいちおう完成はしていたが、都の周辺には、おびただしい流民がたむろし、興福寺、大安寺、元興寺、薬師寺、葛城寺、紀寺を初めとして四十余寺が建立されていたが、壮大な伽藍には空疎なものが漂い、経堂の中の経典の数も少なかった。

(1) わが国を代表して行くのであるから、学才あり彼地の事情に通じているものから選ばれた。

年が改まると、全国から選ばれた精進潔斎の僧侶九人が、こんどの渡唐の成功を祈るために、香椎宮、宗像神社、阿蘇神社、国分寺、神宮寺等に送られ、五畿七道(1)においては海神の怒りを和らげるための海竜王経が(2)読誦され、伊勢神宮を初めとする畿内七道諸社には奉幣使(3)が派遣された。

大安寺の僧普照、興福寺の僧栄叡とに、思いがけず留学僧として渡唐する話が持ち出されたのは、二月の初めであった。二人は突然、当時仏教界で最も勢力を持っていると言われていた元興寺の僧隆尊のもとに呼び出されて、渡唐する意志の有無を尋ねられた。普照も栄叡も、隆尊と親しく言葉を交えたのはこのときがはじめてであった。二人とも隆尊の華厳(4)の講義を聞いたことはあったが、平生はそばへも近寄れぬ相手であった。

栄叡はからだが大がらで、いつも堅い感じのごつごつしたからだを少し折り曲げて猫背にしており、顔には不精髭をはやしていることが多く、一見すると四十歳近くに見えたが、まだ三十歳を過ぎたばかりであった。普照のほうは栄叡よりずっと小がらで、貧弱なからだを持ち、年齢も二つほど若かった。

栄叡は隆尊の話を聞くと、すぐ、よし行ってやるといった不遜とでも解されそうな態度で応諾したが、普照のほうは返事をするまでに多少時間がかかった。普照は隆尊の顔をのぞきこむようにし

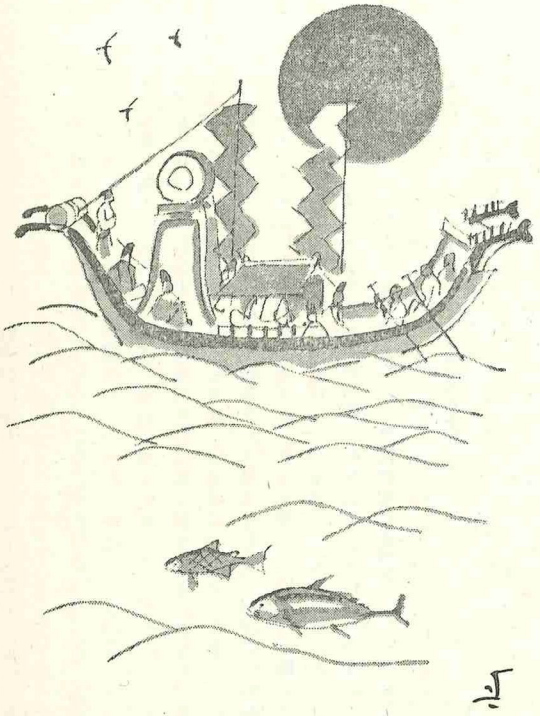
(1) 五畿内は山城国、大和国、河内国、和泉国、摂津国。七道は東海道、東山道、北陸道、山陰道、山陽道、南海道、西海道。(2) 釈迦が王舎城にあって海竜王のために菩薩の法を説き女人および竜王、阿修羅などもみな成仏をえることを説いてある。(3) 神に幣物を奉納するために諸神社に遣わされる役。(4) 七〇六～七六〇。元興寺の華厳学者。義淵の七上足(三六ページ注(2)参照)の一人。東大寺大仏開眼供養には導師となった。(5) 釈迦が成道してのち二十七日にあたってはじめられた最初の説法を録したもので、みずからの内証の本領を述べている「華厳経」の教義。

て、いったい唐へ渡って何を学んだらいいのかと尋ねた。普照らしい質問であった。何も生命を賭けてまでして唐土を踏まなくても、勉学はどこでもできるはずである。自分は今までにそれをして来ている。そのように、普照のひどく冷たい印象を人に与える二つの小さい眼は語っていた。これまで若手の秀才と言えば、いつも普照の名が挙げられてきたが、秀才という言葉を普照は軽蔑していた。自分はただほとんど一日中机から離れないでいるだけだと思った。

二人のまったく型の異なった若い僧侶に、隆尊は持ち前のおだやかな口調で説明した。日本ではまだ戒律(1)がそなわっていない。適当な伝戒の師(2)を請じて、日本に戒律を施行したいと思っている。しかし、伝戒の師を招くと一口に言っても、それは何年かの歳月を要する仕事である。よぶなら学徳すぐれた人物をよばなければならないし、そうした人物に渡日を承諾させることは容易なことではあるまい(3)。しかし、次の遣唐使が迎いに行くまでには十五、六年の歳月がある。その間には二人の力でそれが果たせるだろう。

普照は伝戒の師を請ずるのにそれだけの長い歳月が必要だという隆尊の言葉に驚かされたが、伝戒の師の選択には、それだけこちらにもそなわったものができていなければならないであろうし、またこちらで白羽の矢を立てた人物の招聘を実現するには、人と人との関係も何かとものを言ってくるであろう。そうした立場を作るためにはどうしても十数年の唐土の生活が必要になってくる。そのようなことを隆尊は言っているのであろうと思った。このとき、普照が入唐の話を承諾する気になったのは、十数年という長期にわたる唐土の生活が許されるということであった。もっと短期

(1)仏弟子の非道徳な行為を防止する法律。(2)戒(非を防ぎ、悪をとどめ、あらゆる善の発生する根元)を伝え授ける師僧。(3)当時、唐では戒律をもって入道の正門としていたため、戒を受けてない者は僧の仲間に加えられなかった。



の還学僧(1)としての入唐なら、そのために一つしかない生命を賭ける気にはならなかったが、それほど長期の入唐なら、一か八かの危険を冒して遣唐船に乗りこむこともあながち悪いことではないと思われた。

隆尊のもとを辞した二人は、早春の陽が散っている興福寺の境内で語り合った。栄叡はさすがに多少興奮しているようすで、いつもより少し早口にしゃべった。彼はこんどのことは知太政官事舎人親王と隆尊とが相談の結果持ち上がった話に違いないと見ていた。

課役を免れるために百姓は争って出家し、流亡していた。ここ何十年間かそうした社会現象を食いとめるために、幾十かの法律が次々に出されていたが、効果はいっこうにあがっていなかった。問題は百姓ばかりではなかった。僧尼の行儀の堕落もまたはなはだしく、為政者の悩みの種になっていた。僧尼令二十七条(3)という僧尼の身分資格を規定した法令も出ているが、実際にはそんなものは無力であった。仏教に帰入した者の守るべき規範は何一つ定まっていず、比丘および比丘尼の受けるべき具足戒は三師七証(4)（戒場に参会する十人の師僧(5)）の不足で行なわれていない。目下のところでは仏徒は自誓受戒(6)するか、三聚浄戒(7)を受ける程度で放埒に流れ次第である。これらの仏徒を取り締まるのは、まず唐よりすぐれた戒師を迎えて、正式の授戒制度を布くことである。人為的な法律は無力であり、仏徒が信奉する釈迦の至上命令をもってこれに臨むほかはなかった。正しい戒儀を整えることが、現在の日本の仏教界でいちばん必要なことはだれの眼にも明らかなことであった。こんどの遣唐使派遣の機に、二人の青年僧を渡唐させようとする舎人親王や隆尊の意図もここにあるわけであった。

「少なくともわれわれの使命はわれわれ二人の生命を賭けるだけの価値はあるようだな」

栄叡は言ったが、普照のほうは黙っていた。いつも、自分自身のことしか彼は頭の中になかった。戒師をよぶことがどのような意味を持つかということにはあまり興味はなかった。それより十六年間に自分が学びうる経典の量のほうが遙かに重要な問題であった。その経典の重さが普照には実際に感じられるような気がした。そしてそのことが普照の冷たい眼を多少いつもとは違った憑かれたようなものにしていた。

栄叡は美濃の(1)人、氏族詳かならず、興福寺に住す。機捷神叡(2)にして論望当たりがたし、瑜伽唯識(3)を業となす。――渡唐前の栄叡については、『延暦僧録(4)』によって、これだけのことを知るだけである。同じように渡唐前の普照については、興福寺の僧であり、一に大安寺の僧だったとも言われていたというはなはだたよりない一事だけが、われわれに残されている。しかし、それでも普照の

(1) 現在の岐阜県。(2) 機敏で、鬼神のようにさといさま。(3) 瑜伽論（心をととのえ主観と客観を一体にするとするもの）と唯識論（方法は心の所現なりとするもの）。(4) 八二ページ以下に登場する鑒真の弟子思託の著書で全五巻といわれるが現在は失われている。欽明天皇の御代以来延暦年間に至るわが国の高僧や菩薩伝を集録したもの。東大寺の学僧宗性上人が編した『日本高僧伝要文鈔』などに引用されて一部分が残っている。

(1) 遣唐使の往航に従って入唐し、また同じその遣唐使の帰航に従って帰って来る学問僧。(2) 八世紀初めに設けられた百官を統轄する官。舎人親王（六七六～七三五）は『日本書紀』の編者で七二〇年に完成してのち、知太政官事となって国政に参与した。(3) 養老令（七一八年制定）の第七編。自由勝手な出家、社会への接触伝道、吉凶の占、蓄財、飲酒、肉食、博戯などの禁止およびその間を規定している。(4) 涅槃に親近する意で僧・尼の受持すべき戒法。僧には二五〇戒、尼には三四八戒ある。出家してこの具足戒を受けた男子を比丘、女子を比丘尼という。(5) 授戒式をつとめる三僧は戒和尚（正しく戒を授けるもの）、羯磨師（表白と羯磨の文を読むもの）、教授師（戒を受ける者に威儀作法を教えるもの）で、証人として他に有徳の僧を七人えらんで受戒をする。(6) 受戒のときのように三師七証を請待せず、自誓によって具足戒を得ること。(7) すべての悪は摂断すること、すべての善はことごとくこれをなすこと、一切衆生をことごとくおさめとって利益をあたえること、この三つのうちにすべてが収められ、何よりも清浄である戒法。

ほうは、『続日本紀』に「甲午、授正六位上白猪与呂志女従五位下、入唐学問僧普照之母也」という一条があって、彼の出生の一端におぼろげながら一つの照明が当てられている。すなわち普照の母は白猪氏で、名は与呂志女、天平神護二年（西紀七六六年）二月八日に、正六位上から従五位下を賜わっている。白猪氏の祖は百済の王辰爾の甥であり、その一族には外国関係のことに携わった者が多いことが知られている。

大使広成が拝朝して節刀を受けたのは閏三月二十六日であった。節刀は帰国後返還するもので、これを受けることは、準備がここにまったく成って、今や渡唐大使として全権を委任されたということを意味し、それと同時に日和さえよければ待ったなしで解纜しなければならぬ立場に置かれることでもあった。

これに先立って、三月一日に広成は山上憶良を訪ねている。憶良はかつて大宝二年の第七次の遣唐使の一行に少録として参加しており、渡唐の経験者でもあり、広成の兄とも親しかったので、広成はそんな関係で挨拶に出向いたのであろう。憶良は三月三日広成に歌一首と反歌二首を贈っている。

（1）『日本書紀』につぐ勅撰の史書で六国史の一つ。延暦十六年（七九七）菅野真道らによって編まれた文武天皇の元年（六九七）から延暦十年（七九一）までの編年史。（2）天皇が遣唐使や征夷大将軍などにその権力を委託するしるしの大刀。（3）大陰暦では一年が三五四日なので季節と暦の月を調節するため閏月を設ける。いつもの年より月や日が多くなること。閏三月とは三月が二度くり返され、二度目のほうの三月をさす。（4）纜（ともづな）を解くこと。出帆する。（5）西暦七〇二年。（6）文武天皇の頃の遣唐使は録事を大録と少録とにわけていた。

神代より　言ひ伝てけらく　そらみつ　大和の国は　皇神の　いつくしき国　言霊の　幸はふ国と　語りつぎ　言ひつがひけり　今の世の　人も悉　目の前に　見たり知りたり　人さはに　満ちてはあれども　高光る　日の朝廷　神ながら　めでの盛りに　天の下　申し給ひし　家の子と　撰び給ひて　大み言　戴き持ちて　もろこしの　遠き境に　遣され　罷りいませ　海原の　辺にも沖にも　神づまり　うしはきいます　諸の　大み神達　船のへに　みち引きまをし　天地の　大み神達　大和の　大国魂　ひさかたの　天のみ空ゆ　天がけり　見渡し給ひ　事終はり　帰らむ日は　また更に　大み神達　船のへに　み手うち掛けて　墨縄を　はへたる如く　あちかをし　値嘉のさきより　大伴の　御津の浜びに　ただ泊に　み船は泊てむ　恙無く　幸くいまして　早帰りませ

大伴の御津の松原かき掃きて吾立ち待たむ早帰りませ
難波津にみ船泊てぬと聞こえ来ば紐解きさけて立ちばしりせむ

反歌のあとのほうは、夫の留守を守る広成の室に送ったものであった。

四月二日早暁、広成らは憶良の歌にある難波津へ向けて、奈良の都を立った。一行の大部分はすでに出航地難波津に集まっていて、この日奈良から立ったものは広成ら騎馬の一団三十名ばかりであった。普照、栄叡らもこの一団の中にいた。寺々からは海路平安を祈念する鐘が鳴り響いていて、春ではあったが、桜の蕾はまだ堅く、暁の風はま冬の冷たさを持っていた。

道は大和平野を突っ切って、まっすぐに北西へ伸びている。一行は王子(1)を経て竜田山を越え、(2)この日は国府で泊まり、翌日国府を立って、午少し前に難波の旧都へはいった。ここは九年前の神亀元年(4)から離宮の修営工事が始められ、それがいまだに引き続いて行なわれていて、ところどころに廷臣たちの邸宅が新しく造築されつつあった。春の光が白っぽく幾つかの工事場に散っている地帯を抜けると、やがて商舗の立ち並ぶ繁華地区へはいった。一行は幾つかの橋を渡った。そして最後の橋を渡ったとき、急に潮の香を含んだ風がま向かいから吹きつけて来るのを感じた。このあたりから左手の丘の中腹に難波館が見え、このほうは建物の朱と青の色が鮮かだが、続いて新羅館、高麗館、百済館といった今は名前ばかりの古い建物が見え始め、その丘の尽きる前方には蘆が一面に生い茂った港の一部が望まれた。

間もなく一行は港(5)にはいった。かつて三韓との交通はなやかだった当時の殷賑さは偲ぶべくもないが、それでも蘆の間からは、林のように立ち並んでいる何百という帆柱が見えた。港と言っても、ここはもともと何本かの川の河口がいっしょになった外海への出口で、潮とま水とがぶつかり合っている広い水域には、おびただしい数の大小の島や州が散らばり、そこに密生している蘆は一見港湾全部を埋めているように見えていた。ここに出入りする船は、その蘆の生い茂っている島や州の間を通るわけだが、船着き場のほうから見ていると、蘆の間をすべって来るものとしか見えない。蘆の間には点々とたくさんの澪標（水路標の杙）が立っており、その何本かには小さい鳥がとまっていた。その鳥の白さが、今日ここから遠く異境に旅立って行く人々の眼にしみた。

船着き場には異変が起きていた。切岸にはかなりの距離をおいて四艘の大船がつながれ、見送りの人や見物人がそのあたりにひしめき合っていた。船着き場の入り口には纜張りがしてあり、見送りの家族の者だけがその内部へはいることを許されている。纜張りの中だけでも二千人ほどの人間がいるであろうか。女の多いのが目立っている。老婆も、若い女も、子供もいる。纜張りの外の見物人はもう少し多く、こちらには流人や乞食の姿も混じっている。ときおり、読経と祝詞の声がその船着き場の混乱と騒擾の中から、急に大きく盛り上がっては聞こえてきていた。

旅人の宿りせむ野に霜ふらば吾が子羽ぐくめ天の鶴群。――という万葉集の巻の九の歌は、このときの遣唐船に一人子を送りこんだ母の歌である。もう一つ巻八に笠朝臣金村がこの日の入唐使に贈った歌がのっている。波の上ゆ見ゆる小島の雲がくりあな息づかし相別れなば。――しかし、これは夫を送る妻の歌で、笠金村が知人のために代作してやったものであろう。

大使広成ら三十人の、昨朝都を発って来た一団は、船着き場の一角で公私の見送り人たちとの挨拶をすませると、こんどはそれぞれ違った船に乗って旅立つ自分たちだけで互いに水杯をした。

四艘の船は、いずれも長さ十五丈(3)、幅一丈余の大船で、百三、四十人の乗員ならそう窮屈ではなく収容できる大きさだったが、作った国が違うだけに、少しずつ形が異なっていた。大使広成の乗る第一船は船の中央部が相当に広くなっており、副使中臣名代の乗る第二船はそれに比べるとずっ

(1) 伝未詳、当時から有名な歌人であったらしく、天皇に随行したときの作が多く、また頼まれて人の代作もしている。その作風は新風を追うよりもむしろ伝統的である。(2) 一丈は約三メートル。

(1) 現在の奈良市。北葛城郡王寺町。(2) 奈良県生駒郡三郷村立野の西にある山。(3) 大阪市南河内郡道明寺村（現在は藤井寺市）に属す、当時奈良の都より行程一日のところとされていた。(4) 聖武天皇即位の元年、西暦七二四年。(5) 発航地（難波津）は三津浦で現在の大阪市南区三津寺町であった。

と狭かった。それから船中に設けられてある屋形(1)の格好もその位置も異なっていた。判官の乗りこむ第三、第四の船は、これらの船だけがほとんど舷側をつけるように繋留されてあったが、船尾の形はまるで違っていた。第三船のそれは竜のおとし子さながらに大きくそり曲がっていて、第四船よりも一間(2)ほど高かった。

乗組員のだれにも、自分の乗る船が他よりいいか悪いかは判断できなかった。これはこれらの船の建造を受け持った造船使長官にも次官にもわからなかったし、直接木材を刻んだ近江、丹波、播磨、安芸の四か国の船大工たちにも見当がつかなかった。ただどの船も帆柱だけは船の中央部に付けられてあった。百済船の様式をとったもので、帆柱が船の中央部よりはずれたところにある唐の船とは違っていた。日本の船大工たちは漠然と昔から関係の深かった百済の船のほうに信用を持っていたのであった。

夕方、四艘の大船は潮の満ちて来るのを待って難波津の波止場を離れた。岸を離れると、見送りの人々の眼には、船はどれもそのまま蔬の間に傾き沈んでしまいはしないかと思われるほど重たげに見えた。どの船もそれぞれ百五十人近い人間と、それらの食糧と、滞在費に充てる物資と、衣料、医薬、雑貨の類と、それから唐の朝廷へ献ずる莫大な貢物とを満載していた。見送り人のどよめきは船が岸を離れるときだけで、あとは船着き場はむしろひっそりとした表情をとった。四艘の船がまったく港湾を出るには一刻ほどの時間がかかった。

(1) 船の上に屋根を設けたもの。(2) 一間は六尺(一尺は約三十センチメートル)、約一・八メートル。

四月三日難波津を発航した四船は武庫(1)、大輪田泊(2)、魚住泊(3)、韓生泊(4)、多麻の浦(5)、神島(6)、韓泊(7)、備後長井浦(8)、安芸速浦(9)、長門浦(10)、周防国麻里布浦(11)、熊毛浦(12)、豊前分間浦等(13)の内海の港港に、あるいは寄港し、あるいは停泊して、その月の中ごろに筑紫の大津浦(14)に到着した。そしてこの本土における最後の港で、四艘の船は順風を待つために何日かを過ごした。

そしていよいよ、広成の一行が大津浦を発航して外海へ乗り出したのは、節刀を受けてから約一月たった四月の終わりであった。

大津浦からは唐に渡るには二つの航路があった。天智天皇の第五次遣唐船まではいつもここから壱岐対馬に向かい、さらに南朝鮮の西海岸に沿って北上し、渤海湾口を横断、山東の莱州か登州のいずれかに上陸して、それから陸路を南下して洛陽より長安にはいっていた。しかし、これは南朝鮮が日本の勢力範囲にあって初めてその安全が保証される航路で、新羅が半島を統一(15)してからは、いやおうなしにほかの航路によらなければならなくなっていた。第六次以後の三回はいつも大津浦を立つと西航して、壱岐海峡を過ぎ、肥前値嘉島に出て、そこから信風(16)を得て一気に支那海を横

(1) 兵庫県の武庫川の河口の海。(2) 神戸市兵庫区和田崎町付近の浜。(3) 兵庫県高砂市阿弥陀町あたりであろうといわれている。(4) 兵庫県揖保郡室津村あたり。(5) 詳細は不明、岡山県玉島市の海あたりといわれている。(6) 岡山県笠岡市の瀬戸内海上に横たわっている島。(7) 所在不明であるが、岡山県邑久郡虫明の瀬戸に近い港であろうといわれている。(8) 広島県三原市糸崎港。(9) 広島県豊田郡安芸津町の三津湾西部。(10) 広島県安芸郡の倉橋島の西北側の江の浦あたり。(11) 山口県岩国市の今津川が海にはいるあたり。(12) 山口県熊毛郡平生町小郡のあたりとも光市の室積浦ともいわれている。(13) 大分県中津市田尻から今津にかけての海辺のうちあたりといわれる。間々崎または和間あたりという。所在不明。(14) 古くは娜大津(なのおおつ)を改め那津といっていた。博多湾のこと。(15) 法興王のとき王国の形を整え、唐と連合して六六〇年に南の百済を、六六八年に北の高句麗を滅ぼして半島を統一した。(16) 十月から翌年三月までは東北風、四月から九月までは西南風であった。

断、揚子江を中心とする揚州、蘇州の間のどこかへ漂着するという方法がとられていた。もちろん広成らの場合もこの航路によろうとしていた。

普照と栄叡の乗りこんだ船は、判官秦朝元の第三船であった。同じこの船にもう二人の留学僧が乗っていた。一人は名を戒融、一人は玄朗と言った。戒融は一人だけ発航当日に大津浦から乗りこんで来た筑紫の僧侶で、普照と同年配であったが、大がらなからだのどこかに傲慢なものをつけていた。玄朗のほうは二つ三つ若かった。玄朗は紀州の僧で、ここ一年ほど大安寺に来ていたということだったが、普照も栄叡もこの若い僧にこれまで会ったこともなく、またその名を聞いたこともなかった。容貌も整っていて、どことなく育ちのよさがその言動の中に感じられた。

船は筑紫の大津浦を出た最初の夜から、とくに海上が荒れていたわけではなかったが、外海の大きい波浪にもてあそばれて、木の葉のように揺れ動いた。船員を除いたほとんど全部の乗員がみな食物も喉を通らなくなり、ぐったりと死んだように横たわった。そしてそうした状態がその夜から何日も続いた。その中で普照だけは例外だった。初めの二日は人並みに苦しんだが、三日めには頭の痛みも胸のむかつきもとれ、正座して船のかなり大きい動揺にも平気で身を任せていることができた。しかし、他の三人の留学僧たちが、自分のかたわらで船酔いに苦しんでいるのを朝から晩まで見ていることは、普照にとっても気持ちのいいことではなかった。

なかでも栄叡がいちばんひどく傷めつけられていた。いつも口を半開きにして、そこから苦しそうな小さいうめき声を吐きづめに吐いていた。栄叡の眉の濃い眼の鋭い顔は、またたく間に憔悴し

(1) 古くは九州全域をさし、またのちの筑前筑後にあたる北九州地方をさす。

て、正面から眼を当てるのも気の毒なほどだった。玄朗のほうは死んだようになって、物も言わなければからだも動かさなかった。

ある日、海上に夕闇が漂い始めようとする時刻であったが、普照は、ふいにいちばん向こうの席に横たわっている戒融から声をかけられた。

「何を考えている?」

これが、なんとなくふてぶてしい面構えと大入道のような感じの風貌を持った同僚からの、面と向かって話しかけられた最初の言葉らしい言葉であった。乗船したとき、姓名と生国を名乗り合っただけで、あとはお互いにすぐ船酔いに取りつかれて、それぞれ孤独な闘いの中に身を置いていたので、言葉をかわすような機会もないままに今まで過ぎていた。

普照は、仰向けに身を投げ出して眼玉だけこちらに向けている筑紫出身の僧のほうに、

「何も考えていない」

と答えた。普照には初対面のときからこの大入道が、留学僧に選ばれるほどの何ものかを持っている人物とは思えなかった。いかにも筑紫あたりの僧侶でも持ちそうなあかぬけのしないものをその風姿に付けているのが感じられた。

「おれは考えとる」

戒融は言った。

「何を考えているのだ」

「人間の苦しみというものは、けっきょくは自分自身しかわからないということだな。そしてそ

れは自分が自分で処理するしかしかたがないものだ、それよりほかにどうすることもできないものだということだな。おれはいま苦しんでいる。おればかりではない。栄叡も玄朗もみな苦しんでいる。しかし、おまえはいま苦しんでいない。運のいいことに苦しみから脱け出してしまっている」

なんといやなことを言う奴だろうと、普照は思った。言われたとおり普照はいま自分が、きびしく考えれば、だれの苦しみにも同情していないことを思った。気の毒には思っているが、それをどうしようもないし、どうしてやろうという気持ちもなかった。それにしてもそれを指摘されることは愉快なことではなかった。すると、そういう普照の心を見透かしてでもいるように戒融は語を継いだ。

「気を悪くするな。おれはただほんとうのことを言ったまでだ。おれとおまえの立場がかわっていれば、おれもまたおまえと同じだ。人間とはそういうものだ」

そして戒融は、必ずしも普照に見せつけるためではなかったろうが、いきなり腹ばいになると、もう一物もはいっていない胃の中から何ものかを吐瀉しようとした。そして、ああ、苦しい、と口に出して言った。

普照は玄朗という年若い僧侶とは、それでもときどき口をきくことがあった。たいてい船が激しく揺れ始めたときだった。玄朗は自分のほうからいつも口をきった。いかにも何かしゃべっていることで気をまぎらせでもしているかのように、しゃべりだすと、その口調には一種の訴えともひとり言ともつかない弱々しいが、しかし、妙に熱っぽい調子があった。

「なに、これしき大丈夫だ。もう少しの辛抱だ。これで船が難破さえしなければ唐土へ着けるのだ。噂に聞いている長安の都も、洛陽の都も見られる。そこを歩き、そこで物を考えることができる。大慈恩寺も、安国寺も、西明寺も、この眼で見ることができるのだ。そのどこかの寺でおれは学ぶことになるだろう。知るべきことはいっぱいある。読まなければならないものも山ほどある。何もかもこの眼で見、この耳で聞く。広い唐土の全部からおれは吸収すべきものは吸収してしまう。もう少しだ。もう少しの辛抱だ」

聞いていると、しだいにそれの持つ妙に物悲しいものが、こちらの胸に伝わって来た。しかし、確かにその言葉は、たれもが胸の奥にいだいている素朴なものに触れていた。ただそれは他の者の場合、確とはわからないが、なんとなく口に出すのをはばかられるようなものであった。そんなとき玄朗の顔はまっさおだった。玄朗のしゃべるのを、いつもだれも取りあわないで聞いていた。勝手にしゃべらせておけといったところがあった。

しかし、一度だけ戒融が聞きとがめて、そんな玄朗の言葉をさえぎったことがあった。

「あまり夢みたいなことを言うな。船が無事に着くかどうかはまだわかっていないんだぞ」

とどめを刺すような言い方だった。そんなときでも、栄叡のほうは聞いているのかいないのか、終始黙って、眼を空間の一点に当てたままで、相変わらず大きい息を口から吐き続けていた。

一同にとってまさに地獄の苦しみというべき船酔いから、しかし、順々に脱け出すことができた。普照はべつとして、玄朗、戒融、栄叡と年の若いほうから二、三日ずつの間隔を置いて解放されて

(1) 貞観二十二年(六四八)に高宗が太子のとき長安に創建した寺。玄奘を上座に五十人の大徳、三百の僧を集め、さかんに訳経が行なわれた。(2) 景雲元年(七一〇)に陝西省咸寧県の東に創建された。唐の睿宗の旧宅で一名を光明寺ともいわれた。(3) 唐の高宗が顕慶三年(六五八)に長安に創建し、大徳五十人を住まわせ、道宣を上座に玄奘を監督にすえた。大いに栄えたが会昌年間(八四一～八四六)に全焼して絶滅した。

行った。船酔いが収まると、熱っぽい唐土への憧憬を口走っていた玄朗の口は重くなり、一日中黙していることも珍しくなかった。一種説明しがたい憂鬱がこの育ちのいい面差しを持った青年僧をとらえ始めていた。戒融はなまけ癖がついたのか、船酔いが直っても寝てばかりいた。栄叡は一日じゅうと言ってもいいほど法華経(1)を誦していた。普照はそんな同僚たちをときおり横眼でにらみながら、この航海中にあげてしまおうと思っている『四分律行事鈔(2)』の第七巻を片時も膝の上から離さないでいた。

この四人の学問僧の乗っていた第三船は、大使広成の第一船に続いて航行しており、すぐあとには第四船が続いていた。副使中臣名代の第二船はしんがりのはずであった。筑紫を出てから二十日ばかりの間は、前を行く第一船も、後の第四船も、かなり遠距離ではあったが、ずっとその船影を認めることができた。夜になると互いに何回となく燧火で連絡し合った。僚船の灯はいつも、お互いの間を埋めている波のためにある規則正しさで明滅して見えた。

二十一日めの夜、海上には深い靄が立ちこめ、そのため船は航行が困難となり、碇を降ろして一時停止することになった。その夜を最後として、以後第一船も第四船もその船影を認めることができなくなった。このころから乗員には水三合、糒一合(3)が一日の食糧として配給されることになった。

三十日めぐらいから海水は濃い藍青色を呈し、油のようなねばりを持った大きな波浪がゆったりと襲って来ては、船を山から谷へ、谷から山へと運んだ。船は進んでいるのか、後退しているのか、船員以外の者にはちょっと見当がつかなかった。海の色が藍青になってから逆風が吹く日が多くなり、そのたびに船は碇を降ろし、漂流することを避けて一日でも二日でも順風が来るまで、そこにそうしていた。

(1) 大乗仏典の一。『妙法蓮華経』の略。天台宗、日蓮宗がこれによっている。(2) 道宣の著、四分律宗における日用行事を組織的に叙述した書物。(3) ほして乾かし、長期の貯蔵にそなえた飯をいい、水にひたして食べた。

四十何日目に初めて激しい暴風雨に見舞われた。それまでも何回か小さい暴風雨には襲われていたが、そのときのような大きいのは初めてであった。暴風雨は午ごろ始まり翌日の午まで続いた。一時は海水が滝のように船内に落ちてきた。

その暴風雨の夜、普照は闇の中から戒融の声を聞いた。波と風の音の中からその声は聞こえてきた。だれへ話しかけたのか、それだけの言葉ではわからなかったが、普照はそれが自分に向けられたものであることを感じた。

「いま、何を考えておる?」

戒融の声はそう言った。

「何も考えていない」

普照はいつか同じ質問をされたとき答えたように答えた。普照は難船への恐怖に襲われていたが、戒融の問いに対してひどく腹立たしいものを感じた。戒融の人を食ったようなふてぶてしい顔つきも、ぬうっとした大きなからだも、それがこちらを向いているのが、闇の中に見えるようであった。

「なんにもか?」

戒融は念を押してきた。そして、

「おれは考えている。死ぬのはごめんだということをな。犬死にはいやだ。おまえはいやじゃないのか。おれはいやだ。死ぬのはまっぴらだ。それからもう一つ、こんなまったく同じ立場にあっても、人間はけっきょくは自分だけだということを考えている。そうじゃないか」

波と風の音がそのあとの戒融の言葉を消したが、次に急に騒がしさの消えたひっそりした短い時間が来たとき、あたかもその刻を待っていて、その中に投げこみでもするように、

「おれも考えている」

突然栄叡が言葉を発した。戒融ではなくて栄叡だった。

「こうしたことを、いままで多勢の日本人が経験して来たということを考えている。そして何百、何千人の人間が海の底に沈んで行ったのだ。無事に生きて国の土を踏んだ者のほうが少ないかもしれぬ。一国の宗教でも学問でも、いつの時代でもこうして育ってきたのだ。たくさんの犠牲によってはぐくまれてきたのだ。幸いに死なないですんだらせいぜい勉強することだな」

それは明らかに戒融に対して投げられた言葉だった。それに対して戒融は何か叫んだが、その場はそれでおしまいになった。議論どころではない状態が、それから明け方まで続いたのである。

普照は栄叡がどなった直後、さっきからおそらく生きた気持ちもなく恐怖と戦っているに違いない、玄朗のいるあたりの闇に眼を当てていた。普照には、身をかがめるようにして口もきけないでいる玄朗が、いちばん素直な、真実の姿であるように思われた。戒融の言葉にも、栄叡の言葉にも嘘偽りはなかったが、しかし、玄朗の見栄も外聞も捨てきった身の投げ出し方が、いつもはそれに多少の反発は覚えていたが、こうした場合にはいちばん好感が持てた。

普照自身の心はこのとき他の三人とは少しべつのところにあった。いつも彼は何ものかと闘っていたので、特別違った状態に置かれているという思いはなかった。もう何年も、毎日のように色欲との陰惨な闘いがのべつに彼をとらえていた。ただ、現在はそれが死の恐怖にかわっているだけの話だった。そう普照は思っていた。

この暴風雨のあとは、船中はひたすら神仏への祈りに明け暮れた。住吉神社[1]や、観音への祈願が行なわれた。栄叡は法華経を船の人たちに講義した。戒融は相変わらずからだを横たえていたが、普照と玄朗は身を起こしてかたわらでそれを聞いていた。ところどころまちがっているところが普照には指摘できたが、黙ってそれを聞いていた。

第三船が大陸に近い小さい島々で順風を待つためにいたずらに日を重ねて、ようやくにして蘇州へ漂着したのは八月であった。筑紫の大津浦を出てからじつに三か月間以上船は海上を漂っていたわけであった。他の三船も同じ八月に相前後して蘇州海岸に漂着した。

広成らが蘇州に漂着したことは、ただちに蘇州刺史[2]銭惟正によって中央に奏せられ、接待役として通事舎人[3]韋景先が蘇州へやって来て一行を慰労した。それから一行のうちで許されたものだけが大運河で汴州[4]へ上陸、陸路洛陽に向かうことになった。

大使広成らが洛陽にはいったのは翌天平六年、つまり、玄宗帝の開元二十二年の春四月であった。

(1) 大阪市住吉区住吉町にある。神功皇后が三韓から凱旋ののちに表筒男命、中筒男命、底筒男命の三神を祭り、のちには神功皇后もまつられた。海上の守護神で、航海者が奉幣して安全を祈る神であった。(2) 唐時代の州の長官。(3) 唐時代の役職、引導、辞見、承旨、学問を掌らしめた。(通訳官のこと) (4) 河南省の開封県の地。

蘇州へ漂着してから約半年を経ている。一行が西都長安にはいらず、東都洛陽にはいったのは、玄宗帝がこの年洛陽に幸して、そのまま長安には帰らず、唐の朝廷は洛陽にあったためであった。

広成ら一行は唐廷が洛陽にあることになんと言っても大きい失望を覚えたに違いない。これまでの遣唐使の一行はいずれもさし回しの官船で一路長安に向かっており、上都長楽駅に着くと、内使の出迎えを受け、ここで最初の饗応にあずかり、それから馬で長安にはいる。滞在中の宿舎四方館に旅の疲れを癒す暇もなく、宜化殿における礼見、麟徳殿での謁見、内裏の賜宴、それから中使の使院における豪華な宴会。——そうした長安の都における華やかな行事の数々は、広成らも何回も耳に入れていたはずである。もちろん洛陽においても、同様なことは行なわれたが、日本使節にしてみればやはり長安の晴れの舞台に自分を立たせ、そこで大唐の春を満喫したかったことであろう。

洛陽にはいった広成らは唐帝へ献上品として、銀大五百両、水織絁美濃絁各二百疋、細絁黄絁各三百疋、黄糸五百絢、細屯綿一千屯、別送綵帛二百疋、畳綿二百帖、絁布三十端、望陀布一百端、木綿一百帖、出火水精十顆、出火鉄十具、海石榴油六斗、甘葛汁六斗、金漆四斗、——こういった物を贈った。

一行の幹部たちが国使として四方館に迎えられ、そこで忙しい毎日を送っているころ、同じ洛陽にあって唐政府に委託された留学生や留学僧たちは、その勉学の目的と希望とを斟酌されて、それぞれ適当なところへ配されていた。普照、栄叡、戒融、玄朗の四人は大福先寺に入れられた。四人が

(1) 隋の煬帝のとき四方の使客を待つために建国門外においてその方国のことを学ばせたが、唐代になっても中書省に属して残存した。

大福先寺に預けられることになった動機は、希望する寺としてここを申し出ていたためであった。普照はここに『飾宗義記』を著して、法礪の『四分律疏』(2)を釈した高僧定賓がいることを知っていて、定賓について法を受けようと思っていた。こうしたことになると、普照の知識は遙かに他の三人の留学僧をしのいでいた。

大福先寺は則天武后の母楊氏の邸宅の跡にあって、上元二年（西紀六七五年）にここに太原寺が立ったが、後改めて魏国寺となり、天授二年（西紀六九一年）にまた福先寺と改まっていた。境内も広く、塔も、伽藍も立派であり、坊舎も多かった。三階院には呉道子の描く地獄変があり、三門の両頭にも呉画があった。

日本の若い僧侶たちはこの寺にはいって間もなく、この寺が訳場としては大きい歴史を持っていることを知った。二十年ほど前に物故した義浄は『金光明最勝王経』等二十部一百十五巻、『勝光天子、香王菩薩呪、一切荘厳』経等四部六巻の翻経をここで行なっていたし、現在九十幾つかの高寿を保っている善無畏が、ここに住して『大日経』(9)を訳したのもほんの十年ほど前のことで

(1) 趙州の生まれ、生まれたとき歯がまったくそなわっていて老後に至るまでそこなわれなかったという。「四分律」を学び年とともに功業があらわれ、貞観九年（六三五）に年六十七で没した。(2)「四分律」（戒律のいっさいを網羅した書）の注釈書。(3) 唐代の人。出生地、生没年とも不明。満意の弟子。論鋒敵なく、論敵懐素（東塔派）の法を破ったので、西塔派と呼ばれた。(4) 大福先寺の坊舎の名前。(5) 呉道玄。唐代の画家。百代の画聖と仰がれた大家。地獄変、諸経変相の鬼神仏像を多く描いた。(6) 山門に同じ。(7) 唐代にインドに留学し、仏典四〇〇部をえて帰国、則天武后はこの翻訳を命じた。訳出した仏典は五六部二三〇巻に達し、とくに戒律の訳出に力を尽くしその宣布にも熱心であった。先天二年（七一三）大薦福寺で没した。七十九歳。(8) 護国実民思想を内容としている。この経を信仰し流布すれば神明の加護を受け、正法に基づいて政治を行なえば諸天の守護を得てその国は繁栄し、社会の人々が奉持すれば福祉は増大し、個人が奉持すれば悟りの道が得られると説いている。(9) 善無畏の訳、七巻。教相、事相、供養法を説いている真言密教で最も重要な経典。

あった。そういうことを知ると、さすがに留学僧たちは身のしまる思いを感じた。

留学僧の生活は比較的自由であった。普照らはまず当分会話を覚えることに専心した。戒融だけは、どこで覚えたのか、唐語をしゃべることができた。洛陽の街衢はさすがに大唐の二つの都の一つだけあって、日本の留学僧たちの眼にはまばゆかった。奈良の都とは規模も違い、その殷賑さも比較にならなかった。周時代の王城の地でもあり、後漢、北魏、隋の都でもあり、それの持つ歴史の大きさも日本ではこれを求めることはできなかった。

四人の日本僧はそれぞれ違った坊舎の一室を与えられて、そこで生活をしていた。留学僧は絁四十疋、綿百屯、布八十端を出発の際下賜されてきていた。しかし、いちおう、唐の政府に引き渡されてからは、生活費はこの国から支給されることになっていたので、すぐ日本からの下賜品を金に換えなければならぬようなことはなかった。

大福先寺の生活が始まった春から夏へかけて、普照と栄叡と玄朗の三人は、自由な時間はことごとく都の名所仏跡の見物に当てていた。眼に触れるすべての物が驚愕と賛嘆の材料であった。三人の若い僧には日本という国も、奈良の都もひどく小さく貧しく思われた。戒融もまた春から夏へかけては、普照たちと同じように洛陽の名所仏跡を回って歩いていたが、戒融だけはいっしょにならず自分一人の行動を取っていた。

夏になったばかりのとき、普照は戒融とたまたま彼の宿所となっている坊舎の前で顔を合わせ、珍しく戒融から誘われて、彼の部屋へはいって行った。そのとき、戒融は、例のいくらか人をばかにしたような、いきなり相手に問いかける言い方で、普照に、唐へ来て、何をいちばん強く感じた

かと聞いた。普照はまたかと思った。そして船の中でのように、よほど何も感じないと答えようかと思ったが、

「来てよかった。来てみなければ唐という国はわからないからな」

と、そんなことを素直な気持ちで口に出した。すると戒融は、なんだ、そんなことかといった顔をして、

「おれは唐へ来て初めて見たのは飢えている人間だ。おまえも見たろう。蘇州へ上がってから、毎日のように飢えた難民ばかり見た。いやというほど見せつけられた」

それは戒融の言うとおりであった。普照たちが唐の土を踏んだ前年は、夏前の旱魃と秋の霖雨のために、作物は実らず、ためにどこへ行っても飢えた人間があふれていた。何十年にもない飢饉だということだった。

「あれだけの難民がいたら、日本ならたいへんなことになる。この国では雲が流れるように、黄河の水が流れるように、難民が流れている。まるで自然現象の一つのようじゃないか。経典の語義の一つ一つに引っかかっている日本の坊主たちが、おれにはばかに見えてきた。きっと仏陀の教えというものは、もっと悠々とした大きいものだと思うな。黄河の流れにも、雲の流れにも、あの難民の流れにも、結びついたものだと思うな」

そんなことを一種の熱情的な口調で話してから、

「おれはいつか、この唐土での生活に慣れたら自分の足でこの広大な土地を歩けるだけ歩いてみるつもりだ。僧衣をまとい、布施を受けながら、歩けるだけ歩くつもりだ」

そう戒融は言った。普照は戒融の大きな顔を見守りながら、戒融ならほんとうにそんなことをやりかねないと思った。

「しかし、何か選んで勉強しなければならないだろう」

普照が言うと、

「机にかじりついていることばかりが勉強と思うのか」

戒融は決めつけるように言った。しかし、何を言われても、このごろはもう渡唐の船中におけるような反感を、普照はこの男に感じていなかった。はっきりと指摘できるような形ではなかったが、少なくとも自分の持ってない何か特殊なものを、戒融が持っているのを感じていた。

「いったい、おまえらはなんのために唐へ来たんだ。何をやるつもりなんだ」

戒融が聞いたので、普照は自分は腰をすえて律部[1]を勉強するつもりでいる。それから日本へ優れた戒師を招ずることを託されて来ているので、自分の勉強をしながら、その地盤を作らなければならないと言った。

それを聞くと、戒融は、

「戒師なんて招ぶのは、そんなたいへんなことじゃない。大げさな言い方をするな。どんどん交渉して日本へ行ってもらったらいいじゃないか。道璿はどうだ？」

いきなりそんな言い方をした。そして道璿じゃいかんか、と重ねて聞いて、

「一流の高僧なんて、なかなか行ってくれるものか。それに高僧なんて言われる奴はたいてい八十、

（1）釈迦の教えのうち、僧の守るべき戒律を究める部門。

九十の高齢だ。よぼよぼしたからだでだいたいあの船に乗れると思うのか。三日もしないうちにくたばってしまうだろう。何年かかったって事情は変わらんよ。道璿でいいだろう。道璿に行ってもらえ」

普照もその道璿という律僧の名前も知っていたし、一、二度見かけたこともあった。年齢はまだ三十四、五歳であろうか。律[1]に明るく、天台[2]、華厳[3]を学んで、日常のことすべて華厳の浄行品[4]によって行動していると噂されている人物だった。彼は一部の僧侶たちからは特別の尊敬の眼をもって見られていた。

戒融は道璿で我慢しておけと言わんばかりの言い方をしていたが、道璿にしてみたところで、そう簡単に日本へ渡ることを承諾してくれようとは思われなかった。そのことを普照が言うと、

「当たってみなければ行くか行かぬかわからんじゃないか。おれは道璿とは二、三度話したことがある。一度当たってみてやろう。なあに、行くよ。法のためだ」

最後の法のためだという言葉を、戒融は多少皮肉な口調で言った。それだけで道璿の話は打ち切られたが、普照はその話をさして真に受けて聞いてはいなかった。雲をつかむようなそんな話より、戒融がその前に話した流民の話のほうが、いかにも戒融の話らしく、どこかに独自なものがひらめいているのが感じられた。

それから二、三日して、栄叡と玄朗が尋ねて来たとき、普照は戒融のまねをして、二人の友に、

（1）仏教徒集団の秩序維持のために制定した規則を律といい、この戒律を受持することによって成仏できると説いた宗派。
（2）隋代に始まる大乗仏教の一派で、法華経に基づききわめて高度で完備した観念論的哲学の体系をもっている。
（3）唐代に華厳経によってたてた大乗仏教の一派。華厳経こそ仏陀の理想を完全に表現したものであると説く。
（4）『華厳経』の第六巻。智首菩薩の問いに答えて、文殊が菩薩の日常生活について発すべき百四十の願を説いている。

唐土を踏んでからいかなることをいちばん強く感じたかという質問を出してみた。すると、栄叡は端座している胸を少しそらせるような格好をして、やや昂然とした面持ちで、

「おれはこの国はいまがいちばん絶頂だなと思った。これがいちばん強いこの国の印象だ。花が今を盛りと咲き盛っている感じだ。学問も、政治も、文化も、何もかもこれから下り坂になっていくのではないか。いまのうちに、おれたちはもらえるだけのものをもらってしまうんだな。たくさんの蜂が花の蜜にたかっているように、各国からのおびただしい留学生たちが、いまこの国の二つの都にたかって蜜を吸っている。おれたちもその一人には違いないが」

そう言ってから、

「しかし、それとはべつだが、恐ろしく多勢の人間が生きているな。仏教とも、政治とも、学問とも無関係に、生きものの意志で、食って、寝て、生きているな」

と言った。戒融は「雲や黄河の流れのように」と言ったが、栄叡は「生きものの意志で」と言った。普照が、

「同じようなことを戒融が言っていた」

そう言いかけると、

「戒融!? 何があんな奴に見えるものか。あいつは奇矯な言葉を弄して、人を煙にまくだけだ。取り柄と言えば、多少唐の言葉を話せるぐらいのものだ。しかし、それさえも、どの程度かわかったものじゃない」

戒融の話になると、栄叡はいつも苦々しい顔をした。戒融も栄叡を嫌っていたが、栄叡も戒融を

軽蔑していた。普照が次に玄朗のほうに問いの答えをうながすと、玄朗のほうは恨みでもあるようなねばっこい口調で、

「日本へ帰りたいということだ。日本がいちばんいいということだ。日本でなければ、日本人は金輪際、ほんとうに生きるといった生き方では生きることはできない。だれがなんと言ったって、これだけはほんとうだよ」

それから彼は、遣唐使の一行が十一月に帰るというが、できるならば自分も帰りたいくらいだと言った。玄朗は洛陽にはいったばかりの春の間はそうでもなかったが、夏になると再び、最初渡唐の船中で彼を襲った懐郷病に取りつかれて、すっかり元気をうしなって憂鬱になっていた。このときも、普照は戒融よりも、栄叡よりも、玄朗の泣きごとのほうにむしろ真実があると思った。玄朗に言われて初めて気づいたのだが、普照は自分の心にもまた入唐して半年にもならないのにすでに故国への思慕が頭をもたげていることを知った。

普照はこの席で、この間戒融が話していた道璿のことを単なる話として持ち出した。すると、栄叡は、

「道璿という人はちゃんとした人で、若手では一流ということを聞いている。もし行ってくれれば、それはありがたいが、しかし、そう簡単に引き受けようとも思われないし、簡単に、持ちかけられる話でもないからな」

栄叡もまた普照と同じように戒融の話のほうは真に受けてはいなかった。

ところが、それから三、四日して、普照は戒融の訪問を受けた。戒融は部屋へはいって来ると、

立ったままで、いきなり、

「行くそうだ」

と、ひとこと言った。

「交渉だけはしてやった。あとは知らん。もし招ぶ意志があるなら、改めて正式に交渉してみたらいい。簡単だが略歴をここに書いておいた」

それから彼は紙片を普照に手渡すと、すぐ部屋を出て行った。紙片には、「道璿、許州の人、三十四歳、俗姓、衛氏、春秋の衛の霊公の後、福先寺の信算の弟子、また華厳寺の普寂にも学ぶ」と、少し癖のある達筆でしたためられてあった。普照が戒融の筆跡を見たのはこのときが初めてであった。

九月になると、遣唐使広成らの一行の帰国の時期が十一月と決定した。このころから、普照らは、何年か前に入唐してそれぞれ学業の研鑽を終え、こんどの船で故国へ帰るはずになっている人人に会う機会が多くなった。

最初に会ったのは玄昉である。玄昉のことは普照たちも日本にいるときから聞き知っていた。竜門寺の義淵について唯識を学び、七上足(1)の一人と称せられたほどすでに渡唐前から頭角を現わし、

(1) ?～七二八。奈良時代初期の法相宗の高僧。門下に行基・玄昉・良弁を輩出。天智天皇以後、七代の天皇の帰依を受け、聖武天皇から岡連の姓を授けられた。(2)「上足」は上席の門弟、高弟のこと。義淵の七上足とは玄昉・行基・隆尊・良弁・宣教・良敏・行達の七人。

霊亀二年(1)に入唐、爾来今日まで足かけ十九年唐土にあった人物である。その間に濮陽の智周について法相を学び、玄宗にその学才を愛され、位三品に准ぜられ、紫の袈裟を賜わっていた。

玄昉が二人の唐僧といっしょに、大福先寺へやって来たとき、四人の日本の留学僧は自分たちの大先輩として玄昉を迎えた。玄昉が大福先寺を尋ねたのは、自分がこんど故国へ去るので、最後の見納めというつもりでこの洛陽の由緒ある寺を尋ねたものと思われた。普照は、日本僧で紫の袈裟を賜わったのは彼ただ一人だという、眉の太いがっちりした体格の五十前後の学僧の顔を、ある感動をもって眺めた。

玄昉は日本から来たばかりの若い僧侶たちに、これから何を学ぶかを一人ひとりに向かって尋ね、しっかり勉強するように言うと、あとは寺の境内を一巡してある落ち着かないあわただしい印象を残して帰って行った。一陣の強い風がさっと吹いて来て、たちまちにして通り過ぎて行ったような印象であった。普照は同じ血を持ったかつては留学生であり、いまは高名な僧である玄昉から、留学中の注意とか勉学に対する指示とかを受けたいと思っていたが、それをきり出す暇は与えられなかった。

彼は帰って行ってから、栄叡、玄朗、戒融、普照の四人は、久し振りにいっしょになって、いま自分たちの眼の前に現われてすぐ立ち去って行った自分たちの先輩について話し合った。みんな一様に多少の興奮をその面に現わしていた。普照は玄昉が帰国した後、奈良のどこかの寺で、堂内にあ

(1) 西暦七一六年。(2) 唯識論によって万法の相を窮めるとする宗派の学問。玄奘が戒賢からその学を伝え、弟子の慈恩が大成した。わが国へは孝徳朝（六五三）以来四度伝来した。

ふれる僧侶たちを前にして性相の宗義を講述している姿が眼に浮かぶようだった。ただ普照には、玄昉の武人のような太い眉と、しっかりとすわっている眼と、そして同胞に会った親しさなど微塵も示さない突き離した態度と、そしてまた学匠らしからぬあわただしさが気になった。そんなことを普照が口に出すと、栄叡は、玄昉のそういうところがえらいのだと言った。なまじっか、同胞などといってすぐ親愛の情を示したりしないそうしたところがあるからこそ、玄昉は唐土においても学僧として名をなし得たのだと言った。

玄朗は、玄昉が日本へ持ち帰る経論章疏は五千巻だそうだ、とどこから聞いてきたのか、そんなことをやはり興奮した面持ちで言った。

三人の話を黙って聞いていた戒融は、最後に口を開いた。

「玄昉は行基とともに義淵の門だ。年齢も同じくらいだろう。玄昉は入唐して濮陽の寺にはいった。行基は日本で庶民の中にはいった。玄昉は法相を学んだ。行基は病者に薬を与え、悩める者には祈禱を行なった。橋がないところには橋を設けた。街頭において道を説いた。玄昉は異国において法相を学び、その奥義を究め、学才群を抜いてその国の天子から紫の袈裟をもらった。行基は乞食と病人と悩める者の先頭に立ち、町から町へ、村から村へと説法して歩いた」

ここで、戒融は知らず知らずのうちに興奮してしゃべっていた言葉を切った。妙にその戒融の口調に気押されたような気持ちで他の者は黙っていた。すると、急に戒融は照れたように笑って、

（1）「性」は諸法の本性、「相」は相状。一切万有（事物）の本性と相状。（2）釈迦の説法を集めた経と経を注釈した論と仏典の注釈書。（3）六七〇～七四九。奈良薬師寺の僧。

「というわけだ。どちらがえらいか、それは知らん」

それだけ言うと、戒融は普照たちに背を見せ、そのまま歩き出した。

玄昉に会って何日かしてから、普照はこんどは大使広成らの宿所である四方館の一室で、下道真備と会った。このときは普照一人だけであった。真備は玄昉より一年あとの養老元年、第八次遣唐船によって阿倍仲麻呂らとともに入唐した留学生で、専攻は経史であったが、陰陽、暦算、天文の諸学を研鑽して、玄昉に劣らず盛名を馳せている学徒であった。

真備は二十四歳で入唐して、現在は四十一歳になっていた。普照には、真備は背の低い、むしろ穏やかな風貌を持った平凡な人物に見えた。強いて普通の人間と違っているところを捜せば、長い唐土の生活が、彼を日本人よりむしろ唐人に近い印象にしていることであった。皮膚の色も唐人のそれなら、眼もまた鷹揚な唐人そのままの眼であった。

真備はそのとき、自分が故国へ持ち帰ろうとしている将来品の目録を遣唐使の一行に報告したあとで、その荷作りと運搬のことを係りと打ち合わせているところであった。彼はゆっくりと将来品の名称を一つ一つ口に出して言い、それを相手に書き取らせ、そのあとで自分がのぞきこんでは、それがまちがっていないかどうかを確かめていた。その同じ部屋に普照がいることなど、ほとんど意識していないかのようであった。

真備の将来品は、種々多様なものにわたっていた。その量もどのくらいのものか、普照には見当がつかなかったが、相当膨大なものであろうと思われた。『唐礼』百三十巻、『大衍暦経』一巻、『大衍

（1）西暦七一七年。（2）経書と歴史。

暦立成』十二巻、『楽書要録』十巻、銅律管一部、測影鉄尺一枚、絃纏漆角弓一張、馬上飲水漆角弓一張、射甲箭二十隻、露面漆四節角弓一張、平射箭十隻――等々。

この真備といっしょに入唐して、現在は唐の官吏になっている阿倍仲麻呂の帰朝の噂も一時あったが、それはいつか立ち消えになっていた。仲麻呂は現在官左補闕となっていた。補闕の官は門下省に属し、供奉、諷諫、扈従、乗輿を掌る役柄である。仲麻呂ももちろん、その職掌上洛陽にいるはずであったが、普照たちは、この留学生としては毛色の変わった道を歩いた先輩には会っていなかった。

このころ、普照は同じこの大福先寺に最近一人の日本の留学僧がいるという噂を耳にした。これを聞いた翌日、普照は何かの話のついでにこのことを玄朗に伝えた。すると、それから一刻ほどしてどこで調べて来たのか、玄朗はやって来ると、その日本の僧が名を景雲と言い、今から三十年前単独で入唐し、三論と法相を学んでいたが、こんど遣唐船の帰国に便乗して日本へ帰るのだということを知らせた。

「会ってみようか」

(1) 補闕は天子の欠点を諫める諫官の一つ。官位は低いが名誉の地位として重んじられた。補闕は左・右一名ずつおり、左補闕は門下省、右補闕は中書省に属した。(2) 供奉は天子のお出ましに従うこと、諷諫は他のことにかこつけてそれとなく天子をいさめること、扈従は天子のお供をすること、乗輿は天子の乗りものを扱うこと。(3) 竜樹とその弟子提婆が中論・百論・十二門論の三論によって立てた説。わが国へは推古朝（六二五）以来三度伝来があったが中古以後は東大寺にのみ伝わっている。鳩摩羅什が伝え隋代に吉蔵によって盛んになる。法相は玄奘により栄え、当時の宗教界を二分していた。

と、玄朗は言った。日本人と聞くと、玄朗はたれにでも会わずにはいられないもののようであった。普照も、いかなる人物か知らないが、その僧から三十年間の唐土における生活の体験を聞いておくこともむだではあるまいと思った。

景雲は小さい寺の一室に乗船するまでの日を過ごしていた。二人が尋ねて行くと景雲はその柔和な顔をわずかにほころばせて、隅にあった椅子を与えた。髪に白いものが混じり、一見すると六十歳近くに見えたが、皮膚はつやつやしていて老人のそれのようではなかった。健康を害していると言っていたが、それらしいからだの弱りも見えず、勉学による苦渋の皺もその顔には見られなかった。

「わたしは三十年唐に遊んだが、たいしておもしろいことにも出会わなかった。こんなことなら、日本にいてもさして変わりはなかったろう。日本の田舎に住んでいたほうがましだったかもしれない」

そんなことを、別に卑下するでもなく低い口調で語った。三論と法相を学ぶために入唐したと聞いていたが、話題がそうしたことに近づくことを、この人物がつとめて避けていることが、普照には感じられた。

「持ち帰られるものは？」

思いきって普照が尋ねると、

「この身一つです」

老人は言った。老残の身を、唐土から日本へ運ぶだけが、現在の景雲の仕事らしかった。

「あなたのように長く唐土におられた方は他にいないでしょうね」

普照が言うと、

「そうたくさんはないでしょうな、しかし、いてもたいていなんとかものになって日本へ帰って行く。なんにもならんのはわたしぐらいのものでしょう」

景雲は言いかけて思い出したように、

「そう、一人あった。業行がいる。彼もやはり三十年近くいるだろう」

と言った。

「どんな人です」

「やはり法相の坊主ですよ。こんどいっしょに帰国することを勧めたが、あまり帰りたくもないらしい。彼にもとうとう陽が当たらなかった！」

いくらか感慨深そうに景雲は言ったが、その最後の言葉は二人にはよく理解できなかった。

普照と玄朗は間もなくそこを辞した。景雲の宿舎を出ると、二人は同時にひどくうそ寒いものを感じた。留学生でも留学僧でもなく、本人が自分の意志で入唐したのだから、景雲の場合、唐にいる間をどのように過ごそうとそれは勝手なはずであったが、同じ僧服をまとっている身として、経典一つ持ち帰ろうという意志を持たない景雲という人物は、やはり若い留学僧の眼には哀れに愚かに見えた。

それから、四、五日後の夕刻、玄朗がやって来て、

「行って来たよ。このほうはちょっと変わっている。一回会っておいたらよかろう」

と言った。聞いてみると、玄朗は景雲から聞いた業行という在唐二十何年かの僧侶のところへ行って来たということであった。とにかく変わっている。どんなに変わっているかは行って会ってみなければ口では説明ができない。そう玄朗は言った。その同じ業行の話を、普照は二、三日後栄叡の口からも聞いた。

「二十何年か唐にいて、彼の知っているところと言えば幾つかの寺しかない。寺を渡り歩いて経論を写している。どこも見もしなければたれにも会っていない。しかし、筆写本の数だけは膨大なものらしい」

「どんな人間なんだ」

「おれにもわからん。えらいのかもしらんが、ばかかもしれん」

栄叡は言った。普照は、玄朗にも、栄叡にも奇怪な人物として映じているらしいその業行という僧侶を、一度尋ねて行ってみようと思った。妙にその人物が、二人の話から気になった。

秋になってからは普照は日本にいたときと同じように一刻を惜しんで机に向かっていた。船の中では上げきれなかった『四分律行事鈔』十二巻を上げ、現在入唐して以来初めてその書の存在を知った法礪の『四分律疏』にかかろうとしているときであった。業行に会いに行く時間も惜しまれたが、普照はこんどの遣唐船で帰国するかもしれぬ業行に早く会っておかなければと思い、ある日午を少し回ったころ、普照が初めて耳にする郊外の小さい寺へ出かけて行った。

業行は陽の当たらぬ北向きの小さい部屋で机に向かって、筆をとっていた。そこへはいって行った普照には、その部屋がひどく冷たい陰惨なものに感じられた。しかし、彼の前にすわって改めて

あたりを見回してみると、べつに部屋そのものは特殊なものではなかった。北向きで陽は当たらなかったが、特別暗くも陰惨でもなかった。部屋には古文書か経巻かわからないが、紐で縛った反古の束がいっぱい乱雑に置かれてあった。そしてその中へ小さいすわり机を置いて、業行は今までそうしていたと思われるように、そこに端座して、顔だけを訪問者のほうへ上げていた。

年齢は五十近いであろうが、小柄で、ひどく脆弱なからだがそのまま老いこんでいたので、年齢のほどはしかとはわからなかった。風采はひどく上がらなかった。

「この間来られた、なんと言いましたかな、あの方のお連れですか」

業行はぼそっとした口調で言った。秋の初めではあり、まだ寒さが感じられる季節ではなかったが、彼はすわっている両膝の下に左右から手をさしこんで、からだを細かくふるわせていた。

「こんどお帰りになるんですか」

普照が聞くと、

「いやあ」

と、業行は曖昧な言葉を低く口から出した。普照は相手がなんとかあとを続けるものとばかり思っていたが、彼の口からはそれっきりなんの言葉も出てこなかった。

話のつぎほのない感じだった。普照が帰国することになっている何人かの人たちの名を口にすると、そのたびに業行は眼をちょっと普照のほうへ向けたが、べつにそれに言葉をさしはさむわけでもなく、かすかにその顔に羞恥とでもいいたい表情を見せるだけだった。

「お会いになってますか」

普照は何人かの名をあげたが、彼は、

「いやあ」

と、いつも例の曖昧な言葉を発した。だれとも会っているふうではなかった。仲麻呂や玄昉や真備に会っていないことはいいとして、はたしてその名さえ知っているかどうか怪しいものであった。たれの名を言っても、羞恥と受け取れるような表情を示すので、初め普照は、自分の学の成らないのを恥じているのかと思ったが、やがてまったく相手の表情がそうしたこととは無関係なことを知った。業行は自分にまったく無関心なことを話されるので、その応対にとまどっているのに違いないのであった。

業行の顔は、普照が唐土へ来て見るいちばん唐土とは無関係な顔であった。業行はまったく日本人の顔をしていた。顔ばかりでなくからだも小さくて貧弱で、日本の至るところで見る百姓のからだつきであった。普照は自分のほうで問いかけない限り、相手が言葉を発するということはなかったので、しだいに自分が何かひどくこの人物をいじめて、困らせているのではないかといった気持ちに襲われてくるのを感じた。

「長安にもいらしったんですね」

「いました」

「何年ぐらい？」

「そうですな。五年、いや、何回にもきれぎれに行ってますから、全部合わせると、七、八年になりますか」

「洛陽へはいつ来られました？」

「去年です」

そう言ったが、

「もちろん、前にも何回も来ています。全部合わせると、四年ですか、五年ですか」

業行は言った。

「何をやっておられます」

「これです」

業行は机の上のほうへ顎でしゃくるようにして、

「まだ、なかなかです。始めたのがおそかったんです。自分で勉強しようと思って何年かつぶしてしまったのが失敗でした。自分がわからなかったんです。自分がいくら勉強しても、たいしたことはないと早くわかればよかったんですが、それがおそかった。経典でも経疏でも、いま日本でいちばん必要なのは、一字のまちがいもなく写されたものだと思うんです。いまでもずいぶんいいかげんなものが将来されているでしょう」

このときだけ、業行は早口ではあったが、自分の意見らしいものを言葉として口から出した。その間も貧乏ゆすりは相変わらず続いていた。

多治比広成らの第九次遣唐使の一行が、帰国の途につくために洛陽の都を立ったのは九月の中ごろであった。一行は洛陽より蘇州に赴き、蘇州において四船に分乗した。十月の終わりであった。

第一船の大使広成の船には、僧玄昉、下道真備の二人が乗った。この二人の帰国は、前から決まっていたことであったが、一時彼らとともに帰国の噂があって、いつとはなしに立ち消えとなった阿倍仲麻呂はやはり唐土にとどまることになったのであった。玄昉、真備は唐土においていかに秀才の誉高いとは言え、留学僧、留学生の身の上であったが、仲麻呂のほうは唐朝の官吏であり、しかも玄宗の寵臣であったので、その進退は自由にならなかったのである。仲麻呂は故国の両親が老いたことを理由にして帰国を上奏したがついに許されなかった。「義を慕うて名空しくあり。忠をたのしんで孝まったからず。恩を報ゆるの日あるなし。国に帰るはいつの年とか定めむ」という『古今和歌集目録』に収められてある詩は、仲麻呂のこのときにおける述懐である。

副使中臣名代の第二船には雑多な人物が乗った。普照、栄叡の乞いを入れて渡日する道璿もこの船であったし、学問僧の理鏡や、理鏡に伴われて渡日する婆羅門僧菩提僊那、林邑国（安南）の僧仏哲、それから唐人皇甫東朝、袁晋卿、ペルシャ人李密翳ら賑やかな顔ぶれであった。異国人では菩提僊那の三十九歳が最年長で、渡日後帰化して唐楽を奏して知られた袁晋卿が最年少で十八歳であった。在唐何年かを無為に過ごした僧景雲は判官平群広成の第三船に便乗した。

時を同じくして蘇州を発したこれら四船の消息の第一報が、唐土にとどまった若い留学僧たちのところへ伝えられて来たのは、翌開元二十三年（天平七年）の上元（一月十五日）の張燈の夜であった。

（1）藤原仲実の著といわれ、平安時代の歌書。古今集の歌数と作者の略伝（大部分漢文で書かれている）を記したもの。（2）「婆羅門」は古代インドの最上位の僧侶・学者階級をいう。菩提僊那は良弁・行基らと近江石山寺を創建するなど、奈良時代仏教界に大きな功績があった。（3）菩提僊那にともなわれて安南から唐の五台山に至り、来日して大安寺で一般の崇敬を受けた。

った。この国では都会でも田舎でも毎年一月十五日の節句の前後数日、夜になるとどこの家でも門口に燈籠を連ね、人々は夜を徹して街に出て嬉遊する習わしだった。この期間洛陽の街衢も毎夜のように燈火で埋まった。軒におびただしい燈籠をつるしてある家もあれば、巨大な燈架や山棚を作って、そこへ燈籠をかけ並べてある家もあった。街の辻々には炬火がたかれ、そしてその真昼のような明るい火影の中を人々は練り歩き、歌い、踊った。

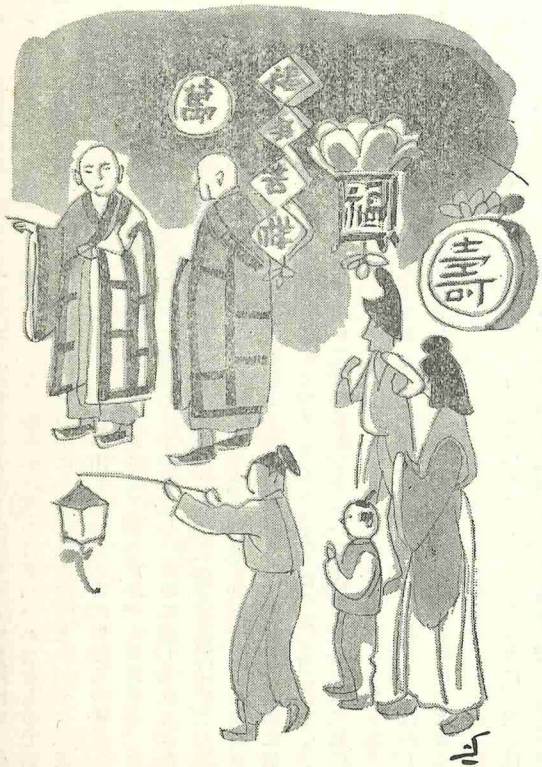
その上元の当夜、普照は坊舎の自室で栄叡、玄朗の二人を待っていた。夜がふけてから三人で連れ立って街の賑わいを見る約束だった。八時ごろ玄朗がやって来、半刻ほど遅れて栄叡がやって来たが、栄叡は二人の顔を見るとすぐ、去年十月蘇州を立った四船は、海に浮かぶと間もなく暴風雨に見舞われ、そのうちの一艘が越州（浙江省）に漂着し、再び日本へ向けて出帆したという報がはいったことを告げた。

「その越州に漂着した船がどの船かわからないが、無事に日本に着くとすれば、まあその船ぐらいだろう。その船に乗っていた者たちの話では、他の三船はおそらく難破を免れていないだろうということだったそうだ」

栄叡はこの噂を、ここへ出かけて来るほんの一刻ほど前に、揚州より来た僧侶から聞いたということであった。そんなことを語る栄叡の顔も暗かったが、それを聞いている普照、玄朗の顔も暗かった。

三人は暗い気持ちを持って祝祭で賑わっている異国の街へ出た。平日は早くから閉ざされている延福坊の巷門もその夜は開かれていた。運渠(1)を渡り、永泰坊の築地に沿って歩いて行く。南市に近

(1) 物資を運搬するために作った堀りわり。



づくと、夜空は赤く焼けただれていた。やがて三人は群集の乱舞している明るい街へはいって行った。普照は上元張燈とか元宵観燈とか言われているこの賑やかな巷の行事がいかなるものであるかを知るために二、三の書物をひもといていた。そしてその中にあった「燈樹千光かがやき、花焔七枝開く」という煬帝の詩の一句を雑踏の中を歩きながら思い出していた。この世ならぬ華麗な祝祭の街は、まさに燈樹千光かがやき、花焔七枝開くの形容がふさわしかったが、その言葉も、またその言葉で形容されている巷の賑わいも、しだいに普照には空虚な寂しいものに感じられてきた。

半刻ほど南市の賑わいを見て、三人は積善坊付近の比較的静かな暗い一画へと脱け出した。三人は歩きながらほとんど話をしていなかったが、暗いところへ来ると、栄叡はずっとそのことを考えていたのか、四船のうち一船でも日本へ着けば、それでいいとしなければならぬ。四船とも無事に帰国するということはよほどの天佑がない限り望めないことだと、そんなことをぽつんと言った。そして、

「玄昉、真備の乗った第一船に着いてもらうほうがいいか、あるいは道璿の乗った第二船に着いてもらうほうがいいか」

その言葉には、玄昉や真備が帰国後果たすであろう文化的役割りと、道璿のそれとをはかりにかけ、その重さを計っているようなところがあった。普照はこうした栄叡の考え方になんとなく同調できないものを感じて黙っていた。

すると、玄朗は玄朗で、彼もまたずっとそのことを考えていたとでもいったふうに、自分はこんどの一行とできることならいっしょに帰りたかった。そしてよほど健康を理由にその運動をしようかと思ったが、やっとのことで思いとどまった。もし行をともにしていたら生命はなかったかもしれない。そんなことを少し陰にこもった口調で話し、

「われわれの場合だって、無事に帰国できるとは決まっていないんだ。帰国できるかもしれないし、できないかもしれない。われわれはいま海の底へ沈めてしまうだけのために、いたずらに知識をかき集めているのかもしれない」

玄朗は言った。普照には、今から何年先のことかわからない自分たちの帰国のことを案じているそんな玄朗が女々しく感じられた。すると栄叡も玄朗の言葉に同じことを感じたのか、

「三人ともべつべつの船に乗ればいいではないか。そしてどれか一艘が着けばいいのだ」

栄叡は言った。いくらか意地の悪い言い方だった。それで会話はとぎれた。

三人はいつか再び長夏門街の燈火の光のただ中へはいっていた。前でも背後でも群集は押し合っており、喚声と、叫声と、金属音を混じえた歌舞の楽の音が四方から三人を包んでいた。ときどき火の粉があたりに散った。そうした中を栄叡は上体をまっすぐにして昂然と歩いており、燈火の光でみると、その顔はむしろ青白く見えた。玄朗は少し遅れて雑踏の中を四方から群集に押されて歩いていた。このほうは顔は赤く見えた。普照はときどき、冷たい眼を光らせては燈火に赤くただれている夜空を仰いだ。彼には大使広成や副使名代のことも、そして玄昉や真備のことも、また道璿のことも、もちろん気にかからないのではなかったが、それより無為に唐で半生を過ごして、身一つで故国へ帰って行こうとしていた、ただ一度だけ会ったことのある景雲の老いた姿が妙に執拗に

(1) 何千本とある街路樹のどれにも下げてある提灯の光が明るくかがやきわたり、その提灯の焔はたくさんの枝にまるで花が開いたようだ。原詩は「正月十五日于通衢建燈夜升南樓」と題した次の五言である。「法輪天上転　梵語天上来　燈樹千光照　花焔七枝開　月影凝流水　春風含夜梅　旛動黄金地　鐘発琉璃台」

浮かんできていた。

大使広成らの第一船が蘇州を出てから一度越州に漂着、再び発して十一月二十日かろうじて多祢島に着いたという報が洛陽に伝えられてきたのは、上元の日から一か月ほどたった二月の中ごろであった。

そしてそれと前後して、副使中臣名代の第二船が南海に漂着、全員生命だけはまっとうしたという噂がはいったが、それからしばらくすると、その噂を裏書きするように名代と、彼の一行の中の何人かが再び洛陽の街に姿を現わした。普照と栄叡は名代に会って、その遭難を見舞った。道璿は他の多くの者といっしょに出航地蘇州に待機しているということで洛陽には上って来ていなかった。

そしてその年の閏十一月、そろそろ冬の寒さがきびしくなるころに、名代らは再び帰国の途につくために洛陽を出発した。このとき玄宗は張九齢をして『日本国王に勅する書』を章せしめて名代に携行させた。

ちょうどこの名代らが洛陽を去る直前に、こんどは判官平群広成の第三船の消息が広州都督によって報ぜられて来た。広成らは遠く林邑国に流され、その大部分は土人に殺され、生存者はわずか広成ら四人であるということであった。玄宗はすぐ安南都護に生存者を救うことを命じた。この第

(1) 種子島。(2) 勅す、日本国王主明楽美御徳、彼の礼義の国、神霊の扶くる所、滄溟の往来未だ嘗つて患となさず(以下略)(『文苑英華』四七一)。(3) 軍政をつかさどり、外地を束縛監視する機関。とくに幷州、益州、荊州、揚州を大都督府とし、さらに全国の都督府に上、中、下の三等を設けた。その他、唐朝に和親し、あるいは帰順した外地の首長にこの称号を与えた。(4) 都護は、外地に設けた最高の鎮撫機関。とくに安南、安東、北庭などは有名である。これらの都護府がそろって唐の辺境を支えていたわけではなく、地元の王族を任命したこともあった。

三船の報を耳にしたとき、普照と玄朗は景雲のことを語り合った。生存者四名の中に、あの老いた僧侶がはいっていようとは、普照にも玄朗にも思えなかった。

翌開元二十四年の春、唐土へ来て二年余の歳月を送っている日本の留学僧たちにとっては、特筆すべき事件が二つあった。一つは栄叡、普照、玄朗、戒融の四人が大福先寺の定賓によって具足戒を受けたことであり、一つは受戒後間もなく戒融が出奔したことである。

戒融は同じ大福先寺にいながら、他の三人の日本の留学僧とはあまり頻繁には往来していなかった。三人の中ではまだしも普照がいちばん戒融とは親しかった。一か月に一回とか二か月に一回とかの割りで、思い出したようにお互いがお互いの坊舎を尋ねていた。

戒融が尋ねて来るときは普照はいつも机に向かっていた。反対に普照が尋ねて行くと、戒融のほうは自分の部屋に必ずだれか訪問者を持っていた。訪問者の顔ぶれは種々雑多で、唐人以外に、婆羅門僧のいることもあれば、またときには林邑国の僧や新羅の僧のいることもあった。おそらくかた言であるに違いないと思われたが、戒融はそれでもとにかく、そうしたいろいろな風貌を持っている異国の僧たちと談笑していた。

立春から半月ほど過ぎたころ、久しぶりに普照のところを尋ねて来た戒融は例の人を食った言い方で、近く大福先寺を脱け出して托鉢の旅に出るつもりだと語った。それを聞いて普照はさして驚きはしなかった。いつかそうしたことを戒融は言いだすのではないかと思っていた。普照はべつにそれをとどめることはしないで、托鉢の旅といっても、いったいどこを目指して行くのかと聞い

た。すると戒融は、どこへ行くという当てはない。しかし、たれでも行くようにけっきょくは五台山(1)へでも行く以外しかたないだろう。そしてそこから天竜山(2)へ行き、そのあとは方向を変えて廬山(3)へでも行くことになるだろうと答えた。他人事のような言い方だった。

「廬山のあとは、広い唐土を歩き回ってみる。何かにぶつかるだろうと思うのだ」

「何かとはなんだ？」

普照が聞くと、

「それは自分にもわからない。だが、この国には何かがある。この広い国をへめぐっているうちにその何かを見つけ出すだろう。歩いてみなければわからないことだ」

広い唐土を歩くというそのことに、現在の戒融の心は強くとらえられているようであった。普照はいかに広大な土地であるとは言えその中に何かがあろうとは信じられなかった。何かがあるとすれば、それはまだ自分などの知らない仏典の中にあるだろうと思った。新しい経典は続々印度からこの国へも持ちこまれつつあった。経典の林のほうが、普照には唐土よりむしろ広大に果てしなく思えた。

それから四、五日の後、普照は托鉢姿の戒融を建春門に送った。早春の陽を浴びて伊水(4)の水はぬるみ、河畔の柳は生暖かい風にゆったりと揺れ動いていた。ようやく李花のほころびようとする季節で、行楽の人々の姿も幾組かあたりに見受けられた。

戒融の出奔はうるさくはとがめられなかった。布施を受けながら寺から寺へと歩き回っている僧侶たちはおびただしい数に上っており、戒融の場合、唐朝からの衣服や食糧の支給を受ける資格を自ら放棄したことに問題はあったが、事件は幸い表立たないで、うやむやのうちに葬り去られてしまった。ただ、栄叡だけは、そうした戒融の留学生としての立場をわきまえぬ行動を、許すべからざることとして非難した。

春から夏へかけて普照は三、四回、写経に没頭している業行を郊外の寺へ尋ねて行った。最初のとき、普照はおそらく景雲を見舞ったであろう悲運について語ったが、写経に身も心もとられている五十近い僧はそのときだけ顔を上げて少し遠い眼をしたが、すぐまた無関心な表情に返った。景雲の悲運について彼はついになんの言葉も口から出さなかった。もちろん景雲を尊敬しようはずはなく、と言って軽蔑しているふうでもなかったが普照が不気味に思ったほどのみごとな無関心ぶりであった。

そのとき業行の机の上には『虚空蔵求聞持法』と書かれた経巻の写本がのっていた。それがいかなる経典か普照は知らなかった。普照は初めてこの人物と会ってから今日までに何回かここを尋ねていたが、いつもその机の上で写している経典の名は耳にしたことのないものが多かった。業行が

(1) 山西省代州五台県の東北にある山。東西南北中の五峰がそびえたち頂上に木がなく台の如くであるのでこう名づけられた。後漢のときインドから僧がきて仏教を伝え、この山に庵をむすんで住んだ。のち道宣などの名僧がこの山にこもって修行した。(2) 中国大原市の南西にある山。古代の石仏を多量に持つ石窟があるので名高い。(3) 江南省南康府にある江南の名山で東晋のころ慧遠がこの山にはいって修行して以来、江南一の仏教の中心地となった。(4) 渭水。黄河の大支流。甘粛省の鳥鼠山に源を発し、潼関西方で黄河に合する。

(1) 善無畏が唐の開元五年西明寺菩提院にて訳出。見聞知覚したことを忘れずに長く記憶にとどめるためになす秘法を説いたもの。

所持している経巻類はおびただしい数量に上っていたが、そのほとんどすべてが、二十四年前の先天二年に長安の大薦福寺において示寂した高僧義浄の訳出した経典類の転写であった。

義浄は律部に力を注ぎ律範を講じて律の弘布に勤めた僧だったので、したがってその訳経の仕事も律関係のものが多かった。そんなわけで普照はときおり業行のところへ、自分の求める律関係の経典のことを尋ねに行った。業行の写したものを借りて来ることもあれば、その経典の所在やその内容について教えてもらうこともあった。

業行はいつも机に向かっていた。それがこの世に生を享けている自分の本来のあり方でもあるごとく、義浄の訳出した経巻類ばかりを写していた。三回目に普照が業行を尋ねたときは、彼は『毗盧遮那成仏神変加持経』(2)の写しを机の上にひろげて、それとまったく同じような書体で、それを写していた。業行の文字はいつも彼が原本としているものの字に似ていた。わざわざ似せて書いているとしか思われなかった。こんなところから推すと、業行は自分自身のものを持っていない人物であるかのようにも思われたが、しかし、明けても暮れても筆をとったまま机の前から離れない業行の、それはただ一つのひそかな慰楽のようなものであるかもしれなかった。

春尋ねて来たときもそうであったが、このときも、普照には業行がいま写している経典がいかなるものか想像がつかなかった。普照がそのことを口に出すと、業行は、この春から取りかかっているものは義浄のものではなく、主として去年九十九歳の高齢で他界した善無畏が訳出した秘密部(3)の経軌であると、例のぼそぼそした口調で語った。そして、

(1) 釈迦の教えをひろめること。(2) 略して『大日経』ともいう。(3) 密教の経典。

「この前おいでのときは確か『虚空蔵求聞持法』だったのでしょう。二十年ぐらい前、善無畏が長安の菩提院で訳したものです。いまここにあるものは先年大福先寺で訳した大日経で、密教の教理はみなここに説かれてあります。まだ他にはあまり写されていないはずです」

業行は言った。業行は業行なりに、特殊な知己を持っているらしく、そうした経典類の入手の手蔓には普照などの想像できぬものがあった。業行は義浄の訳した経巻を写すことを自分の本来の使命としていたが、義浄訳のものが手にはいらないときは、いまのように他のものをも手がけているのであった。

普照はときたましか業行を尋ねなかったが、業行と向かい合ってすわっていることは好きだった。初めて彼に会ったときは陰気臭い感じだったが、たびたび会っているうちに、そうしたものは感じなくなっていた。ただいつも貧乏ゆすりしている彼を見ることだけは初めと変わらなかった。

この年夏の終わりごろから巷間では、二十二年正月以来、この地にあった唐朝が、近く西都長安に戻るという噂がもっぱらであった。この噂が流布されてしばらくしたころ、普照、栄叡、玄朗の三人は初めて阿倍仲麻呂に会うことができた。突然仲麻呂からの使いが来て、相談したいことがあるので門下外省まで御足労願いたいということであった。指定された日時に、三人の留学僧は左掖門をくぐって官庁街を形成している皇城(1)の中へはいって行った。

門下外省は、遣唐使の一行の宿舎のあった四方館からほど遠からぬところにあった。そこの建物の中の一室で、三人は初めて高名な留学生上がりの唐の官吏であり、文人でもある人物と会った。

(1) 天子の住んでいる城、長さは一九一五歩、広さは二二〇〇歩あったといわれる。

このとき仲麻呂は三十八歳であった。中肉中背の、興奮というものを顔に出すことのない人物で、真備、玄昉が無表情であったように仲麻呂もまた無表情であった。彼は三人に、同胞に対する特別な態度は示さないで、用件だけを手短かに話した。こんど玄宗皇帝は西都長安に還幸になるが、もし長安に移ることを希望するなら、皇帝の駕に随って西行するように取りはからうが、どうであろうかと尋ねた。栄叡と玄朗はすぐそのように取りはからってもらうことを頼み、普照は一両日決定に猶予をもらいたいと言った。普照は親しく定賓の法を受けていたので、師の意嚮を聞いてみる必要があった。

そして二日おいて、普照はもう一度門下外省に仲麻呂を尋ねた。このときも仲麻呂はこの前のときとまったく同じ態度だった。普照が自分もまた長安に行くことを希望する旨を伝えると、彼は軽くうなずいて、それではそのように手続きを取ろうと言った。ただ、こんどは訪問者が一人だったせいか、仲麻呂は一言だけではあったが、現在の普照の勉学の状態を尋ねた。

車駕が洛陽を発したのは十月二日であった。三人の日本の留学生も仲麻呂の取りはからいでとくに詔あって駕に随った。長安の都にはいったのはその月の二十日。この還幸の途中、玄宗は陝州に立ち寄って刺史盧煥の政治を賞し、その役所の壁にみずから賛した(1)。派手好きな玄宗らしい振舞いであった。

長安にはいると、こんどは三人の留学生はそれぞれ異なった寺に配せられた。栄叡は大安国寺に、玄朗は荷恩寺に、普照は崇福寺(2)にはいった。大安国寺と荷恩寺は皇城の東方にあって近接して

(1) 專城之重　分陝之雄　人多恵愛　性実謙沖　亦既利物　存乎匪躬　為国之宝　不墜家風（『全唐文』巻四一）。
(2) 長安にある。多くの僧が経典漢訳の事業に従事した歴史がある。

いたが、普照のいる崇福寺は皇城の西側にあって、友のいる二つの寺とかなり離れていた。

普照たちが西都にはいると間もなく、林邑国に漂流した第三船の生存者平群広成ら四人が長安にはいって来た。四人ともまったく別人の顔になっていた。

広成らは長安で二回正月を迎え、開元二十六年（天平十年）三月、仲麻呂の斡旋で、山東半島から船で渤海に出て、渤海国使とともに日本に向かったが、またまた暴風雨に会い、出羽国(2)に漂着、奈良の都にはいったのは翌天平十一年の秋も終わろうとする十月十七日であった。第一船の多治比広成らが多祢島に着いたのは天平六年十一月二十日、節刀を納めたのは翌七年三月、第二船名代が帰国して拝朝したのは天平八年八月であるから、第三船の帰国は第一船からは四年半、第二船からは三年余の隔たりを持っていた。名代らの帰国に先立つこと半年、大使多治比広成は従三位中納言をもって他界していた。

第四船の消息はついにどこからも伝えられなかった。

（1）七一三～九二六に今の中国東方にあった国。（2）現在の秋田・山形二県の地方。

二　章

開元二十四年（天平八年）に玄宗の駕に随って長安にはいった栄叡、普照、玄朗の三人の日本の留学僧たちは、そのままとどまって長安に学んだ。長安は大唐国の都として釈教の中心であり、内外の碩学高徳が雲集していた。東印度から新教を持って来た達磨戦涅羅も長安にいたし、密教の高僧金剛智三蔵も普照らといっしょに長安にはいり、薦福寺にとどまっていた。呉道玄が景公寺に地獄変相を画いたのは普照らが長安にはいった年であり、開元二十六年には諸郡に開元寺が建てられ、二十七年には長安に般若台が建てられた。

普照は崇福寺で、最初の目的どおりもっぱら律部の勉学に明け暮れた。崇福寺は義学、翻経のほうでは大きい歴史を持っている寺で、日照三蔵(4)もこの寺で訳業に従事したし、法蔵(5)の『起信論義記』もこの寺で成り、菩提流志の(6)『大宝積経』の訳もまたこの寺で成っていた。また智升(7)がここで『開元釈教録』の仕事を完成してからは幾ばくもたっていなかった。

またこの寺は普照たちが戒法を受けた定賓の論敵である懐素がかつて四分律宗をひろめたところで、その意味では普照には多少の因縁があった。普照はこの寺で、法礪の『四分律疏』やそれを釈した師定賓の『飾宗義記』それからまた霊祐の『補釈飾宗義記』等を座右に置くとともに、相対する懐素の学派にも、そしてまたもう一つの流れである南山宗(8)の学派にもはいって行った。こうした普照の勉学態度は栄叡には多少不逞に見えるようであったが、普照は純粋な学徒としての態度をかまわず押し通していた。

栄叡のほうは大安国寺にあって、師定賓の学説の流れの中にだけに身を置いていた。玄朗は荷恩寺にあって、律を中心に天台と浄土(3)を学んでいた。長安へ来てから玄朗もまた勉学に打ちこんでおり、まだ日本には伝わっていない浄土に眼をつけるところなどは、玄朗らしいところであった。玄朗は栄叡や普照も舌をまくほど頭脳明晰なところはあったが、しかし、一方ではそれが禍いして、一つのものに深くはいりこんで行けないところがあった。

そうした栄叡、普照らが突如帰国を思い立ったのは、長安に五年余の歳月を送った天平十四年、すなわち唐の天宝元年の夏であった。この早急な決意の裏には二つのものが動機となっていた。一つは最近日本から帰ったという新羅僧によって道璿のその後の消息が伝えられたことである。道璿

(1) 六三四～七〇七。唐代の僧。玄奘の弟子、ひたすら律部を修めて『四分律記』を著わす。(2) 南山律宗。「四分律」により唐末に南山の道宣が立てた律宗の一派。(3) 普賢を初祖とし、専修念仏本願で極楽へ往生することを主旨とする。わが国では法然に始まる。

(1) 東インドの人。開元二十年（七三二）長安にはいり、密教関係の経典を訳出。『貞元釈教録』に記事あり。(2) 六七一～七四一。南インドの王族出身、十歳で出家し、インドの諸所で学び密教の奥旨をきわめ、七二〇年洛陽に来た。玄宗は大慈恩寺に住まわせ、のち大薦福寺に移り、密教を広めさせた。帰国の意をはたせず洛陽で没した。(3) 法を修めるためでなく、学問として仏教を研究すること。(4) 唐代の人。中インドに生まれ、高宗の時入唐。太原寺、弘福寺にこもって訳経に従事、そのまま七十五歳の生涯を閉じたという。(5) 六四三～七一二。シナ華厳経の大成者。則天武后の信任を得て太原寺の住職となり、以後武后のために経を講じてしばしば奇瑞を生じたという。(6) ?～七二七。南インドの人。六十を過ぎて唐に迎えられ訳経に従事。(7) 唐代の人。崇福寺で経典の整理に従事。それまでの諸教録の不備を補うべく七三〇年『開元釈教録』二十巻を著わす。

は天平八年に名代の船で日本にはいっていたが、授戒の師として招かれたのにもかかわらず、衆僧が足らないために、戒法を行なうことができず、ただ大安寺で律蔵(1)、行事鈔を講じているのみだということであった。

さすがに栄叡と普照の二人はこの知らせを虚心に聞くことはできなかった。考えてみると、長安へ来てから足かけ七年、唐土を踏んだときからではすでに十年の歳月が流れていた。栄叡はすでに四十歳を越し、普照もまた四十歳に近かった。

栄叡はいまだに日本に戒律が施行されていないということを、まったく自分の責任として感じて、その日から再び伝戒の師僧の招聘ということが彼の頭の中を大きく占めたようであった。普照とて、それを自分の責任として感じないわけではなかったが、と言ってそれは早急にどうするということもできない問題であった。それにいまの普照をとらえているものは他にあった。唐土へ来て十年、ようやくこの国の慣習にも慣れ、何ものにもわずらわされぬ勉学三昧の毎日が、彼の顔をよりいっそう引きしまったものに、その眼を静かではあるが多少狂熱的なものにしていた。情欲に苦しまされた日々はすでに普照にとって遠い過去のことになっていた。

たまたまこのことがあってから間もないころ、普照は思いがけず業行の訪問を受けた。六年会わないうちに業行はやつれていた。もともとひどく老けて見えてはいたが、年齢はまだ五十歳を三つ

(1) 律に関する経典。(2) また唐の法律(唐会要)によると新羅や日本から唐へ来て学問している僧は、九年間、故国へ帰らないものは唐の戸籍に編入されるという規程があって、そうなると外交特権を失って行動の自由を奪われるおそれがあったともいわれている。

四つ越したぐらいのはずであった。それなのにからだ全体に老衰のような弱りがきている感じだった。

彼は二年前に洛陽から長安に移り、禅定寺に止住しているということだった。他の者なら同じ長安にいれば、二年の間には顔を合わせるとか、噂を耳にするとか、そうしたことがあるはずであったが、業行の場合は例外だった。

そうした業行がわざわざ尋ねて来た以上、何か容易ならぬ用件を持っているものと思われたが、はたして普照の想像どおりであった。業行は、自分の写経の仕事も近くいちおう片がつくので、なんとかしてそれを持って日本へ帰りたいが、その方法はないものであろうかと言う相談であった。何回か聞き返さなければ、その意味のはっきりせぬようなしゃべり方で、しかもよく聞き取れぬような低い声ではあったが、なんとなくそこには思いつめたものが感じられた。義浄訳の経典類は全部写してしまい、現在金剛智三蔵の訳した秘密経典の写経に専念しているが、ここ二、三年に金剛智が訳したものはべつとして、それ以前のものは間もなく全部写し終わってしまうということだった。

「帰ると言われるが、便船さえあれば一人でも帰るつもりですか」

普照が聞くと、

「もちろん一人でも帰ります。なるべくなら早いほうがいいんです」

そう業行は答えた。そんな言い方には無知なものさえ感じられた。そう簡単に便船があろうはずもなかったし、まして早いほうがいいといったそんな贅沢なことの言えるわけのものでもなかっ

た。今まで写経の仕事に没頭している間は帰国のことなどはまったく意にも介さないでいて、いざその仕事が終わるとなると、業行はこんどは一刻の猶予もなく帰国を急いでいるもののようであった。

それから数日してから、こんどは普照のほうが、栄叡を誘って、二人で禅定寺に業行を尋ねて行った。このときも業行は机に向かって筆をとっていた。洛陽の寺の場合とは違って、ここでは業行は自分の写した経巻類の中に身を埋めていた。栄叡も普照もすぐには部屋の中へ足を踏みこめない気持ちで、しばらく部屋の入り口に立っていた。業行が三十余年かかって、一字一句おろそかにせず写し取ったおびただしい経巻の束はあたかも業行を世俗の世界から遮断している壁のように、きちんと整頓されて彼の机の周辺にうず高く積み上げられてあった。

「この前の遣唐船に、このうちの半分でも託すとよかったんですがね」

栄叡が言うと、業行はうつ向いたまま、

「人に頼めるといいんですが、しかし、いざというときにはこの経本の身代わりになって、自分のからだを海に投ずる人でなければ困ります。そういう人はいないでしょう。やはり私が持って行くよりほかしかたがないんです」

と言った。ぼそぼそした口調だったが、あるきびしさがあった。栄叡にしても、普照にしても返す言葉はなかった。

その業行訪問の翌々日、栄叡は普照のところへやって来ると、少し青ざめた面持ちで、

「いま、自分たちのやるべきことは、業行の写したおびただしい経巻を日本へ持ちこむことと、しかるべき伝戒の師をこんどは何人か日本へ送りこむことの二つだと思う。それ以外に何があるだろう。おれはこれからこの仕事に全力を尽くそうと思う」

と言った。その栄叡の言葉には一種の決意のようなものが感じられた。普照が初めて業行に会ったとき、業行は自分で勉強しようと思って何年かつぶしたのが失敗だった。自分がいくら学んでもたいしたことはないことに早く気づいて写経の仕事に取りかかるべきだったと言ったが、かつて業行を見舞ったそれと同じような日本留学僧としての使命観の一種の転機が、いま栄叡をも見舞っているようであった。しかし、普照自身はそうした気持ちにはなれなかった。自分自身を、おのが自己完成を、戒法の招請とも、業行の写したおびただしい経巻類とも、取りかえる気にはならなかった。

栄叡はそんな普照にはかまわず、これからこれはと思う人物に白羽の矢を立て、それに当たって渡日を交渉してみようと思う。こちらの誠意が伝われば乞いに応じてくれる人も何人かいるだろう。そして、

「便船のほうは必ずしも当てがないわけではない」

と言った。栄叡の配せられている同じ大安国寺に道抗という僧侶がいるが、彼は宰相李林甫の兄である林宗の家僧である。道抗を通じて林宗に、さらに宰相林甫に頼みこめば、なんとか船を仕立

(1) 唐の宗室の出で、貴族のたまり場である千牛衛にはいってその長官となり累進して宰相となった(七三四年)。張九齢や裴耀卿を退けさせて中書令となる。権勢を得るためには手段をえらばず、反対勢力の台頭をおそれて節度使に異民族を任用する政策をとったが、これが安史の乱の遠因となった。

てるぐらいの便宜は与えられるだろう。これが栄叡の考えであった。

普照もまたけっきょく最後にこの栄叡の提案に同意したが、彼の場合それはまったくべつの事情からだった。一年ほど前から普照は自分の健康状態に不安なものを感じていた。少しのことで疲労がはなはだしくすぐ熱発し、食欲は目立って衰えていた。栄叡はそれを過度の勉学による疲労だと見なしていたが、普照はそうとばかりは考えていなかった。こうした自分のからだに対する自信のなさが、普照に栄叡たちと別れて一人で大陸にとどまっている気にはさせなかった。帰国できるというならやはり帰国すべきであろうと思った。次の遣唐船の来るのを待っていてはいつのことになるかわからなかった。

栄叡はそれから一か月ほどの間に、彼の周辺の四人の僧に渡日の話を持ちかけて、それを承諾させた。一人は栄叡が便船を得るため事情を打ち明けたとき、はからずも東遊に心を動かして来た道抗である。それから長安の僧澄観と、洛陽の僧徳清、高麗の僧(1)如海の三人も渡日することになった。いずれも、栄叡や普照が長安へ来てから知り合った僧たちであった。

この中で道抗が渡日を承諾したことは予想していないことであったが、一行の計画にはすこぶる好都合であった。宰相李林甫に会うきっかけを得られるばかりでなく、道抗の師は揚州の高僧鑒真だったので、これまた道抗を通じて、鑒真に彼の多勢の弟子の中から適当な伝戒の師僧を推挙してもらうことの便宜が得られる可能性があった。道抗、澄観、徳清、如海らはいずれも多年律を学んでいたが、もちろん伝戒の師とするにはいまだ十分でなく、他にしかるべき学徳ともにそなわった

(1) 九一八～一三九二、王建が新羅に代わって半島を統一して建てた国。

僧を捜さなければならなかった。

栄叡と普照は、それから幾ばくもなくして、道抗から林宗、林宗から林甫へという手順で、時の宰相李林甫に会うことができた。林甫はこのとき四十歳であった。唐の宗室の出で、下級官吏から身を起こし、後宮と結んで玄宗に取り入り、たちまちのうちにのし上がって宰相の地位に上った人物で、このときは彼の生涯での全盛時代であった。「性狡慧、口に蜜あり、腹に剣あり」と評せられ、権謀術策を弄し、後年大唐帝国腐敗の因を作った人物であったが、こうした場合にはかえって話がわかって、事を簡単に運ぶことができた。

二人が日本への帰国の便を乞うと、林甫は眼の冷たい唇の薄い顔を少しも動かさないで、遠くに視線をおいたままで言った。

「表向きは天台山へ奉納するものを持って、陸路は難が多いので海路を行くということにしてもらいたい。順風を得たらそのまま渡航すればいいし、逆風のため漂流した場合は、天台へ行く公文書が物を言うだろう(1)」

そして彼は、二人の日本僧の見ている前で、揚州の倉曹参軍事李湊宛に、「大舟を作り、粮を備えて、送遣すべし」という紹介状とも命令書ともつかぬようなものを書いてくれた。

栄叡、普照は長安を立つのを冬の初めと決めた。玄朗ももちろん行をともにすることになった。これに先立って、業行は一人で長安を立ち、洛陽に向かった。一行とは揚州の大明寺において落ち

(1) 当時、唐では国法によって、わたくしに外国へ出ることを許さず、国法を犯して海外渡航をすることになるので、こう忠告したのであろう。(2) 倉穀を掌る官職、各州の刺史の下にこの官をおいた。

合う約束だった。業行は自分が写した経巻類をまだ相当量各地の寺々に預けてあり、それらを蘇州出発までに手もとに集めなければならない仕事を持っていた。

栄叡、普照、玄朗らは、唐僧三人、高麗僧一人を連れて、七年を過ごした西都長安を発した。天宝元年(1)の冬の初めであった。陸路汴州に至り、それより大運河を下って一路揚州に向かう。運河の両岸の柳の老樹は黄ばみ、水ぎわの蘆は枯れて、すでに蕭条たる冬の眺めである。

この船旅のあいだじゅう、栄叡は口数少なく、いつも腕を組んでむっつりとしていた。彼は日本に戒法を伝える師として鑒真その人に東遊してもらえないものだろうかというまったく新しい一つの夢に取りつかれ始めていた。そしてもしこれが実現するなら、それの遂行と、業行がその生涯をかけて写し取った経巻類を運ぶ二つのことのためには、自分たちが学なかばにして帰国することなどいかに小さい問題であろうかと思った。大唐国から貴重なものを劫掠して行く興奮が栄叡の顔を終始むしろ気むずかしいものに見せていた。

普照は揚州に近づくにつれしだいに気持ちが重くなって来ていた。彼の場合はまだ唐土に未練があった。長安にも、崇福寺にも、そして彼がまだひもとかない無数の経典類にも未練があった。玄朗のほうは船に乗ってから急激にたかまって来た故国への思慕と、渡航に対する不安とに交互に襲われていた。彼はひどく怠惰になっていた。

一行が揚州についたのは十月のなかばを過ぎていた。揚州は長安、洛陽の二京に次ぐ大都会で、ここには大都督府が置かれ、淮南道採訪使(1)が常駐していた。一行は揚州に着いた日、宿舎の既済寺に旅装を解くと、すぐ鑒真に会うために大明寺(2)に出かけて行った。

揚州の街は採訪庁以下の官庁が並んでいる丘陵地帯の子城(3)と、子城の南方平地に長方形にひろがっている商舗街の羅城(4)の二区に分かれていたが、大明寺は子城のほうの西南角にあって、相対する大伽藍と、九層の塔とを持つ大きい寺であった。

この寺の一室で、一行は鑒真と会った。鑒真の背後には三十数人の僧が控えていた。このとき鑒真は五十五歳であったが、骨格のいかにもがっちりした感じの大がらな人物で、額は広く、眼も鼻も口も大きくしっかりとすわっており、頂骨(5)は秀で、顎は意志的に張っていた。普照の眼には、淮南江左、浄持戒律の者、鑒真ひとり秀で、これにおよぶものはないと言われている高名高徳な僧は、故国の武将に似ているように見えた。

道抗が鑒真に一行を紹介し終わると、栄叡は、仏法東流して日本に来たが、単に法が弘布しているばかりで、いまだに律戒の人がない。適当な伝戒の師の推薦を賜わりたいと言った。栄叡はまた聖徳太子のことを話し、太子が二百年後に聖教大いにおこるという予言をしたが、その二百年めが

(1) 西暦七四二年、日本では天平十四年にあたる。

(1) 唐の中宗のとき天下を十道にわけて巡察使をおいて管下の州を監督させたが開元二十年（七三三）あらためて十五道とし各道に採訪使をおいた。採訪使は管下の最重な州に治所を置いたので、しだいに民政官に変じていった。(2) その創立年代は明らかではないが、南朝の宋の大明年間に開かれたので、それを寺号としたといわれる。(3) 羅城に付属した小城。(4) 大城。市街をとりかこんだ城郭のこと。(5) 頭蓋骨のこと。

今年であることを伝えた。それからまた現在日本には舎人皇子があって、皇子がいかに仏法を信奉し、伝戒の師僧を求めるに熱心であるかをも語った。

話を聞き終わると、鑒真はすぐ口を開いた。大きい体軀から出る声は意外に低かった。諄々と説くようなその口調には魅力があった。

「私は聞いている。昔南岳の思禅師は遷化の後、生を倭国の王子に託して仏法を興隆し、衆生を済度されたということである。(4)またかかることも聞いている。日本国の長屋王子は仏法を崇敬して、千の袈裟を造ってこの国の大徳衆僧に施された。その袈裟には四句が縫いとりされてあった。

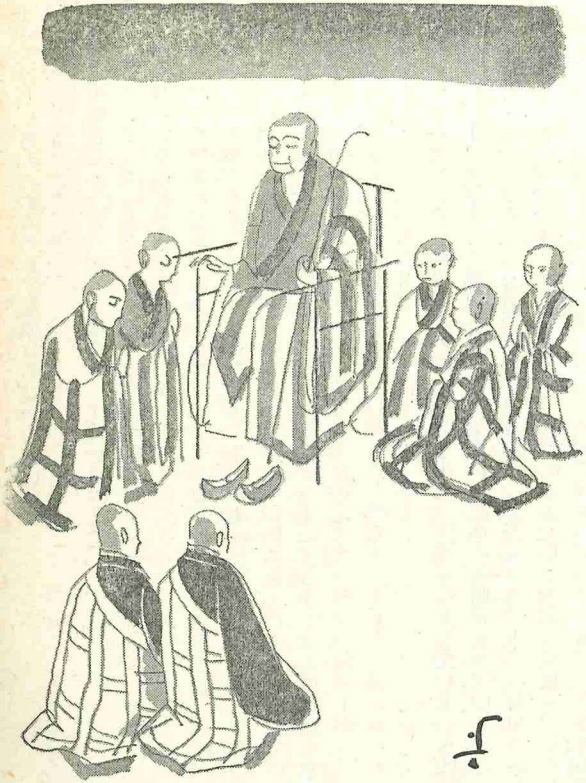
――山川域を異にすれども、風月天を同じゅうす。これを仏子に寄せて、ともに来縁を結ばん。

――こういうことを思い合わせると、まことに日本という国は仏法興隆に有縁の国である。いま日本からの要請があったが、これにこたえて、この一座の者の中でたれか日本国に渡って戒法を伝える者はないか」

たれも答える者はなかった。しばらくすると祥彦という僧が進み出て言った。

「日本へ行くにはびょうまんたる滄海を渡らねばならず、百に一度もたどりつかぬと聞いております。人身は得がたく、中国には生じがたし。そのように涅槃経にも説いてあります」

(1)「南岳」は湖南省の衡山の別称。「思禅師」は天台宗の第二祖、慧思禅師のこと。(2)僧侶の死去すること。(3)人間を迷いから救うこと、苦海から救い、彼岸へ渡らせること。(4)慧思禅師が没して聖徳太子に生まれ変わって日本の民衆を救ったという伝説を指す。前述(一三ページ)の思託の『延暦僧録』にある転生説。(5)六八四～七二九。天武天皇の孫、四十歳のとき左大臣となり藤原氏に対抗する勢力をなしたが、密告されて邸宅を囲まれ、天皇の命によって妻子とともに自殺した。(6)釈迦の入滅、及びその際に行なった説法を記した教典、この言葉は第二十三巻にある。世に値遇したがたきもの六つあり、仏世は遇難く、正法は聞き難く、怖心は生じ難く、中国には生じ難く、人身は得難く、諸根は具え難し。



相手が全部言い終わらぬうちに、鑒真は再び口を開いた。

「他にたれか行く者はないか」

たれも答える者はなかった。すると鑒真は三度口を開いた。

「法のためである。たとえびょうまんたる滄海が隔てようと生命を惜しむべきではあるまい。おまえたちが行かないなら私が行くことにしよう」

一座は水を打ったようにしんとなっていたが、すべてはこの間に決まったようであった。

訪問者の中では栄叡が初めに口をきいただけで、あとの者はひとことも言葉をさしはさむすきはなかった。普照は自分が奇妙な、名状しがたい酩酊感の中に置かれているのを感じていた。三十余人の僧の頭はことごとく深くたれていた。それは鑒真とともに渡日することの承諾を意味していた。鑒真は一人ひとりの名を口から出した。するとそれに応じて一つずつ頭が上がって行った。十七の頭が上がると、鑒真はそれで名を呼ぶことはやめた。鑒真と、十七名の高弟が日本へ渡ることが須臾のあいだに決まったのである。

日本僧の一行は宿舎の既済寺に帰るために大明寺を出た。大明寺のある丘の上からは下町の羅城一帯が見渡せた。中央を南北に大運河が貫流し、東西に十二条の街路が通っている。この町にあるものは土まで香るという詩の一句を普照はかつて読んだことがあった。大小の河川にかかっている二十四あるという橋の幾つかも、そして運河の岸に建ち並んでいる倉庫の屋根も、それから大小の伽藍も、その間を埋めている樹木の茂みもみな冬の陽に冷たく輝いている。いまの普照には確かに眼に映るもののすべてが香気あるものに見えた。大明寺の一室で受けた銘酊感から彼はまだ解放さ

れていなかった。

一行はすぐその日から南郊にある宿舎の既済寺を根拠地として、帰国の準備にとりかかった。半月ほど遅れて業行は揚州にはいり、既済寺へやって来た。二頭の馬と、三人の人夫が彼の荷物を荷っていた。

業行の到着した日に、四人の日本僧と三人の唐僧と一人の高麗僧は、それぞれ郊外の寺へ分宿することにした。官憲の眼を免れるためであった。もともと四人の日本僧の帰国のための渡航さえ非合法的なものであったが、まして唐土から鑒真ら十八名、道抗ら四名、総勢二十名を越える一団が日本へ渡るということは表向きには許さるべきことではなかった。事はすべて隠密に運ばなければならなかった。

既済寺には栄叡一人がとどまることになり、ここを一行の本拠とすることにした。鑒真もやがてここに移って来るはずであった。普照、業行はその日のうちに大明寺に移り、玄朗は開元寺に移った。

それから栄叡と普照は毎日のように顔を合わせて渡航準備に没頭した。二人は宰相林甫からの紹介状をもらって倉曹李湊に会った。船は揚子江口の東河(1)で造られることになった。普照たちは李湊に会ってから知ったことであるが、李湊は林甫の姪で、(2)林甫は倉曹参軍事の要職に己が一族の者を配していたのであった。李湊は画家としても高名で、『歴代名画記』(3)は、「筆迹は疎散なり、その媚

(1) 現在の揚子津（三叉河）付近の運河であろうといわれている。鑒真は以前にここから組んだ筏を揚げて揚州奉法寺の造営をしたことがある。(2) 甥。(3) 唐の張彦遠の著。中国の画の源流より述べて唐代までの画論、絵画史の代表的著作である。画家の人格と作画の心境や書画の価格、表装などまで記されており、太古から西暦八四一年までの画家三七一名の伝記をほぼ時代順に収録している。

態を言わば則ちその美を尽くせり」と評している。後年、林甫の死とともに起こった政変のために失脚、明州象山県の尉に貶せられた人物である。

一行の出発は好風のある翌天宝二年の春まで待つことになった。その間に食糧が集められ、それらは次々に既済寺へと運びこまれた。

鑒真は俗姓は淳于、則天武后の垂拱四年（西紀六八八年）に揚州江陽県に生まれた。持統天皇の二年に当たる年である。

鑒真の幼少時代については史書は何も語っていないが、武后が唐の宗室を倒し、国号を改めて周とし、みずから帝と称したのは、鑒真三歳のときである。父は州の大雲寺の智満禅師について戒を受け禅門を学んだが、その父に連れられて大雲寺に詣でたのは、鑒真十四歳のときである。このとき鑒真は仏像を見て大いに心を動かし、父の許しを得て出家の決心をした。そして智満を師として沙弥となり、配せられて大雲寺に住し、後に竜興寺に移った。

神竜元年、十八歳のとき、鑒真は道岸律師について菩薩戒を受け、景竜元年、二十歳のとき、志を立てて巡錫の旅に上り、まず洛陽にはいり、ついで長安にはいった。そして二十一歳のとき、

（1）載初元年（六九〇）十月、則天武后は神皇受命の説により天下四百余州におのおの一つの大雲寺を置かしめた。すべてが新設ではなく改名したものも多かったという。（2）仏門に入って十戒を受けまだ具足戒を受けない修行中の僧。比丘より低い。（3）大雲寺と同じく各州ごとに同名の寺が置かれた。その一つ。日本の国分寺のようなもので、揚州の竜興寺は唐の揚州城の廓内にあったといわれる。（4）西暦七〇五年。（5）勇猛心を持ち煩悩を断つことによって得られる知恵を求め行を修める人が、不殺、不盗、不淫、不妄語などの一般に受けるべき戒律。（6）西暦七〇七年。（7）僧侶が各地を巡行して教導・化益すること。

長安の実際寺において登壇、具足戒を受けた。実際寺は朱雀街の西、太平坊の西南隅にある寺で、三論の学者吉蔵もここに住し、ここに寂し、浄土門の高徳善導もここで法を説いた。授戒の師は荊州南泉寺の弘景律師であった。弘景は朝廷の帰依厚く、則天、中宗の朝より三度勅によって山を出で、宮中に入り、授戒の師となった人である。

青年時代の鑒真は東西両京において三蔵の究学に明け暮れた。融済について道宣の『四分律行事鈔』『注羯磨』『量処軽重儀』等を学び、義威について法礪の『四分律疏』を学んだ。次に西明寺の遠智にも法礪の律疏を、長安観音寺の大亮にも礪疏を聞いた。融済、義威ともに、その伝は明らかでないが、遠智、法礪とともにいずれも西塔宗の名識満意の門で、名声は一世に高かった。

開元元年、二十六歳のとき、鑒真は初めて講座に上がって律疏を講じた。そして間もなく、淮南の地に帰り、三十一歳にして『行事鈔』『量処軽重儀』を、四十歳にして『羯磨疏』を講じた。前後大律および疏を講ずること四十べん、『律抄』を講ずること七十べん、『軽重儀』『羯磨疏』を講ずること各十べん、人を度し、戒を授けること四万余人。

栄叡、普照が会ったころの鑒真について、『唐大和上東征伝』はわずかに記している。——「江淮

（1）隋代に創建された有名な寺。（2）涅槃に近づく意で悪を防ぎ非を止める掟、僧の受持すべき戒は二五〇ありこれを受けて正式の比丘となる。（3）釈迦がなした説法を経・律・論の三つに区分した呼びかた。（4）済度すること。（5）僧鑒真の伝記。鑒真の門人で、来日後もずっと近侍していた思託の撰述した『和上行記』により、宝亀十年（七七九）、淡海三船が選述したもの。鑒真の伝記で最も信頼できるもの。（6）江南から淮南にかけての地方。

問にひとり化主たり。仏事を興建して群生を済化す。その事繁多にしてつぶさに載すべからず」

栄叡、普照らは渡航の準備をほぼ九分どおり終えて天宝二年を迎えた。船は三月の初めにできる予定で、船ができ上がり次第、順風を待って発する手はずになっていた。

三月にはいると、台州、温州、明州等の沿岸地方に海賊が出没して海路をふさぎ、ために公私の航行はまったく絶えてしまったので、船はできたが、一行は出航を一時見合わせなければならなくなった。こうして三月を送り、四月を迎えた。そして四月も終わろうとするころ、道抗が栄叡と普照のところへやって来て、

「われわれがいま日本へ向かうのは戒法を伝えるためである。一行の者はみな行業粛清の人ばかりであるが、ひとり如海は素行収まらず、学行も乏しい。いっしょに連れて行くのはやめるべきではないか」

と言った。高麗僧如海は道抗の言うとおりの人物ではあったが、このときは栄叡も普照も道抗の言を取り上げなかった。しかし、このことがあってから間もなく、四人の日本僧のいる寺は役人の検索を受けた。問題の如海が、自分一人が渡航から除外されると思って、道抗を海賊の首領とし、日本僧をその一味として採訪使の庁へ訴えたためであった。

そしてその検索の翌日、捕吏がやって来た。普照、業行、玄朗はそれぞれ寝こみを襲われて、そのまま引き立てられ、栄叡のほうはのがれて既済寺の池の中へ隠れたが、間もなく発見されてぬれ

(1) 教化の主、つまり仏をいうが、転じて高僧の称となる。(2) つね日頃の品行が整っていて濁りのないこと。

鼠のまま捕えられた。道抗はのがれて民家へ隠れたが、翌日発見されてこれも捕縛された。

取調べは長くかかった。既済寺から莫大な量の海粮（航海用食糧）が発見されたことと、船を造ったことが問題になった。栄叡と普照は海路によって天台山国清寺へ行くつもりだったと弁明したが、なかなか取り上げられず、けっきょく取調べは宰相から李湊に送った文書にまでおよんで、それによって海賊でないことは証明されたが、すぐには釈放にならなかった。諜言した如海は罰せられて(1)、杖で打たれること六十、還俗させられて本籍地送還となった。

日本僧四人については、揚州はその処分方の指令を中央に仰いだ。上奏文は外国僧のことを取り扱っている鴻臚寺(2)に回され、鴻臚寺ではそれぞれ最初に四人の日本僧が配せられた寺に身元を照会した。栄叡、普照らを預かった洛陽の大福先寺からの返事は、「その僧ら開元二十四年駕に随って去ったまま、さらに来見せず」とあった。業行のほうはどういうものか名簿から名前が消えていた。

鴻臚寺は大福先寺からの報によって奏文し、やがて勅は揚州に下った。――その僧栄叡らはすでにこれ蕃僧なり(3)。朝に入って学問す。年ごとに絹二十五疋を賜い、四季に時服を給し、かねて随駕(4)に預かる。これ偽濫に非ず。今国に帰らんと欲す。意のままに放ち帰せ。よろしく揚州の例によって送遣すべし。

(1) これは反坐といわれるもので誣告が発覚したとき、誣告された者が量定されるであろう同じ刑量を誣告した者に処せられた。(2) 寺院ではなく三省六部九寺五監といわれた唐の官庁としての九寺の一つで外国に関する事務来聘のことを掌る役所。(3) 外国の僧侶。(4) 天子の乗り物に随う栄誉をもった。(5) うそいつわりのまぎらわしいもの。

宰相李林甫の好意的な処分であることは明らかであった。栄叡らは四月に獄に投ぜられ、放免されたのは秋八月であった。便船のあるまでは従前どおり官の支給を受けて生活し、便船のあり次第揚州の採訪使庁の指図で帰国させられることになった。四人は宿舎として民家の一室を当てがわれた。

思いがけない事件で渡航計画は失敗したが、自由になると間もなく、栄叡と普照はひそかに大明寺に鑒真を尋ねた。二人は鑒真に再度の東征を懇願するつもりだったが、鑒真の決心は少しも変わっていなかった。案ずるにはおよばない。物事というものはとかくこういうことになりがちなものである。渡日のことは、方便を求めて必ず本願をとげるつもりである。ただ前に用意した船や物は用いないことにしたほうが安全であろう、こう鑒真は言った。かくして再度の準備はすぐ始められることになった。

鑒真の決心は変わらなかったが、肝心の内輪のほうに思いがけない二人の脱落者が出た。一人は道抗ですっかり日本熱がさめてしまい、健康がすぐれないことを理由にして、さっさと荷物をまとめて、長安へ帰ってしまった。

もう一人は玄朗で小舟による渡航を危険に思って、次の遣唐使船が来るまで渡航を見合わせると言いだした。玄朗は帰国したいことは帰国したいが、仲間の無謀な冒険に身を託することはごめんこうむりたいというわけであった。そして彼は自分で採訪使庁へ出かけて行き、このことを申し入れ、揚州の地から離れ、再び長安に戻ることになった。栄叡は鑒真和上さえ身命を賭して海に浮かぼうとしている。それなのにどうしてその舟に乗り得ないかと、玄朗の態度をなじったが、普照は

栄叡をなだめて、とにかく一夕唐土に一人残る玄朗のために別離の宴を張った。

その席上で、また一人の脱落者ができた。業行であった。彼は低い声で、自分もやはり見合わせようとつぶやくように言いだした。鑒真和上と同船すると、全部の者が和上第一に考える。高徳な学僧であるから、これは当然な処置であるが、その点が自分には不安に思われる。言葉が足りないので、何が不安なのか業行の言うことは栄叡にも普照にもよく飲みこめなかったが、ただ彼がこんどの渡航を拒否していることだけは明らかであった。栄叡も普照も黙っていた。業行が言いだしたからには、もはや、その決心をひるがえさせることはできないことを知っていた。

普照は二、三日してから、改めて業行に彼の気持ちを聞いてみた。すると業行は、思いつめた者の表情で、船に水がはいった場合、みんな和上を助けることにかかって、自分の経巻類は打ち捨てられる心配がある。そうした船へ大切な経巻類を積みこむわけにはいかないと、乗船を拒むに至った自分の気持ちを説明した。普照はそれに対して、そうしたことはないとは言えなかった。いざという場合和上を助けるか、業行の写した経巻の山を助けるかというと、普照とて和上を助けないわけにはいかなかった。

普照がそうした業行の気持ちを栄叡に伝えると、栄叡はちょっと考えていたが、自分も業行の考えに賛成すると言った。

「鑒真和上もたいせつであるし、あの膨大な経巻類もたいせつである。もしほんとうにその二つのものを故国のためにたいせつに思うなら、それはやはり業行の言うようにべつべつの船に託すべきだろう」

それから三、四日して、普照はこんどの業行の宿舎である郊外の禅智寺の坊舎の一室へ彼の荷物を運ぶ手伝いをした。業行はこのまま揚州にとどまっていて、べつの便船を待つということだった。禅智寺の境内の一角からは台地の裾を走っている運河が見降ろせた。運河には舷々相摩するようにしておびただしい数の大小の舟が詰まっていて、どの舟にも何事かを大声で叫びながら、忙しそうにからだを動かしている舟夫の姿が見えた。

業行のこんどの宿舎は、普照の知っている洛陽と長安の彼の前の二つの宿舎よりも明るかった。業行はここで次の便船を得るまで、また写経の仕事に没頭するわけであったが、その止住する坊舎の明るいことは、業行の机に向かっているうそ寒い姿を知っている普照には、業行のために何よりも喜ぶべきことに思われた。

あわただしく秋が過ぎ、冬にはいった。この年の冬は例年になく暖かく、揚州の地は雪を見なかった。

渡船の準備は着々進められていた。こんどは鑒真が出した八十貫の銭が渡航費用にあてられた。それで嶺南道採訪使劉巨鱗の軍舟一隻を購入し、舟人十八人を雇い、海粮を用意することができた。

劉巨鱗から軍舟を得たのは十二月であったが、ちょうどこのころ、海賊呉令光は永嘉郡に寇し、江浙の海辺には警備の烽火がしきりに上がっていた。こうしたときに軍舟を売る劉巨鱗という人物が、普照たちにはひどく奇異に感じられたが、彼は後年贓職の罪で生命を捨てる運命を持った人物

であった。

十二月にはいると、大明寺内の空気にもなんとなく騒然としたものが感じられた。鑒真に相従う者は、僧では祥彦、道興、徳清、思託を初めとして、栄叡、普照を入れて十七人、前回のときよりは少し減っていた。他に玉作人、画師、彫刻家、刺繍工、石碑工ら、舟人と合わせて総員百八十五人。

このとき、鑒真の準備した将来品は、金字華厳経一部、金字大品経一部、金字大集経一部、金字大涅槃経一部、その他雑経章論疏計一百部。仏像類では、画五頂像一鋪、宝像一鋪、金漆泥像一軀、六扇仏菩薩障子一具。また仏具類では、月蝕の障子一具、行天の障子一具、道場幡一百二十口、珠幡十四条、玉環の手幡八口、螺鈿経函五十口、銅瓶二十口、華氈二十四領、袈裟一千領、褊衫一千対、坐具一千床、大銅盂四口、竹葉蓋四十口、大銅盤二十面、中銅盤二十面、小銅盤四十四面、一尺面の銅畳八十面、小銅畳二百面、白籐簟十六領、五色の籐簟六領。

それから薬品、香料の類は、麝香二十剤、沈香、甲香、甘松香、竜脳香、胆唐香、安息香、桟香、零陵香、青木香、薫陸香、合わせて六百余斤。畢鉢、呵梨勒、胡椒、阿魏、石蜜、蔗糖等五百余斤、蜂蜜十斛、甘蔗八十束。その他雑品には、青銭一万貫、正炉銭一万貫、紫辺銭五千貫、羅の襆頭二千枚、麻靴三十量、磨胄三十個といったものである。

準備まったく成って、人と物とをこぼれるように満載した軍船が、ひそかに揚州を発したのは十二月下旬、月明の夜であった。

（1）玉を作る技術者よりもむしろガラス技術者であろうといわれる。

帆を挙げて大江を下った。浪溝浦（江蘇省太倉）[1]まで来ると、月は赤くなり、悪風が吹き始め、波浪は高くなった。ひとまず海岸に船をつなぎ、一夜を明かすことになったが、舟を海浜に近づけたとき、激浪のために船の舳先のほうが破れて海水が浸入してきた。やむなく百八十五人の乗員は船を捨てて岸に上がった。しばらくすると、こんどは岸へ潮が押し寄せて来た。栄叡、普照、思託の三人は鑒真を烏蓋（蘆）の上に移し、鑒真以外の者は一人残らず水の中にいた。一晩中寒風は吹きすさび、水は冷たく骨の凍る思いであった。

翌日風が収まったので、一行は船を修理して、再び海に浮かんだ。そして江蘇の海中にある大板山（馬鞍列島の中の島）までたどり着いたが、依然としてまだ波浪高く、船を泊することができず、下嶼山に行き、そこに停泊した。そしてここで一か月を過ごした。

再び順風を得て、船は桑石山（徂山列島中の島）を指して発した。またまた海上は波浪高く、それでも桑石山へ着くだけは着いたが、岸には岩礁が散らばっていて、船を近づけることはできなかった。やむなく後退することにしたが、この後退も思うようにできず、波浪は船を遠く沖へ運んで行っては、やがてまた岸のほうへ連れ戻した。そうしたことを何時間か繰り返し、最後に船は岩礁の上に座礁するに至った。乗員の半分はかろうじて船を降りたが、残りの半分は船に乗ったまま岸に打ち上げられ、打ち上げられると同時に船体は幾つかに割れた。

夜が明けてみると、船に積みこんだものはことごとく浪にさらわれていて、食糧もなく飲料水も

（1）宋代には浪港浦、略して浪港といい、今では訛って琅玕口という。揚子江の南岸の江口に近く、唐宋時代は有名な港であったが大江の運んできた土砂のために現在はふさがっているらしい。

なかった。人々のいるところは大岸壁の裾の荒磯で、陸伝いにどこへ行きようもなかった。飢餓と渇に苦しみながら、百八十五人の乗員は狭い荒磯の上にすわって三日を過ごした。

三日たつと風はようやく収まり、紺碧に晴れ渡った空が見えだし、冬の弱い、しかし明るい陽の光が異様な風態の難破人たちの上に降った。四日めの夕刻漁船に発見され、一行はその漁船から米と水をもらった。

五日めの夕刻、海上警備の官船がやって来て事情を聴取して帰って行った。そしてそれから三日後に難破人たちは自分たちを収容するために一隻の官船が近づきつつあるのを見た。

一行はその島の荒磯から官船に乗り移らされた。揚州を発してから、四十日めのことである。百八十五人の乗員は官船の板子の上にすわると、みんな憑物がおちたような顔をして、お互いに黙りこんだまま焦点のない眼を海の向こうに向けていた。船の進む行手ゆくてには、よくもこれほど島というものがあると思われるほど大小無数の島々が現われた。海は静かだった。かつて自分らを乗せた船を木の葉のようにもてあそび、微塵に砕き、人間だけを荒磯に打ち上げ、他のすべてをどこへか持ち去って行ってしまったその同じ海とは、とうてい思えない穏やかさであった。船に積みこんだ膨大な将来品のすべても今はなくなっていた。経巻も、仏像も、仏具、医薬品も、一物残らず海底に沈んでしまっていた。

普照は業行が写した経巻類を積みこまなかったことが、せめてもの仕合わせだったと思った。もし業行が自分たちと行をともにしていたら、彼の大陸における三十幾年かの努力は、文字どおり水泡に帰してしまっていたはずであった。

栄叡は、官船に乗り移ってから普照のところへやって来て言った。

「鑒真和上はまだ渡日の意志を捨ててはいない。われわれはこれから鄧山の阿育王寺に連れて行かれ、そこに収容されることになるらしいが、和上はそこで再挙をはかると言っておられる」

普照はその栄叡の言葉を多少異様な気持ちで聞いた。いま身ひとつでようやく官船に救われたというとき、早くも再挙のことを考えているのは、乗員の中では鑒真と栄叡の二人しかあるまいと思われた。鑒真は船から支給された衣類をまとって船の舳先近くにすわっており、そしていつも影の形に添うごとく付き随っている祥彦、思託、道興らがいまもその背後に控えていた。鑒真以外のものはほとんど全部が半裸体であった。一月下旬の海風の冷たさは一刻も彼らのからだを静止させておかなかった。官船は船にあふれる半裸の難破人たちを明州（浙江省寧波）の海岸へと運んで行った。

百八十五人の乗員は再び大陸の土を踏んだ。揚州を発して、揚子江を下り、江口に散在する馬鞍列島中のいくつかの島々の間をいたずらに漂浪にもてあそばれ、それから官船に救助されて、舟山群島の間を縫って、いま杭州湾の一角へ連れ戻されたというわけであった。

一行は海浜の部落で何日かを過ごした。明州の大守が中央に一行の処分を申請したので、その指令が来るまでそこで待たねばならなかった。そして二十日ほどたって、乗員の大部分の者はそれぞれの故国へ引き揚げさせられ、十七人の僧侶たちだけが阿育王寺に収容されるという申し渡しがあった。

明州は数年前までは越州に属していたが、去る開元二十六年独立して一州となり、鄧山、奉化、

慈谿、翁山の四県が置かれていた。阿育王寺は鄧山の県治(1)から東へ五十支里(2)の地点にある古刹で、寺の後方には小丘があり、広い境内には竹林が多かった。かつては広壮な堂塔伽藍があったが、百七十年前の建徳五年(3)に火災をこうむり、現在の堂宇はそれ以後建てられたもので、小さい上に荒廃しており、往時の壮観を偲ぶよすがはなかったが、しかし、数々の古譚や伝説がこの古い寺を取り巻いていた。

阿育王寺という名は、この寺にある阿育王塔から出ていた。仏滅後百年に、阿育王が鬼神を役使して八万四千の塔を建てたが、それらの塔のことごとくがいまは土中に埋もれているというこの国のたれにでも知られている古譚があるが、現在この寺にある小塔は、その八万四千の塔の中の一つであると言い伝えられていた。

栄叡も普照もこの寺の阿育王塔にまつわる縁起は聞き知っていた。――晋の泰始元年(4)に幷州西河離石(5)の劉薩訶(6)という人が死んで閻羅王界(7)に引き出され、生前赤い馬にまたがり、黒い犬を連れ、青い鷹を放って禽獣を捕えていた現世の罪を裁かれたが、命数が尽きていないので、出家して仏道に入り、阿育王塔を求めるという条件で娑婆へ返された。現世に舞い戻った薩訶は出家して、阿育王塔を求めてこの鄧山の地に来たが、深夜地中から殷々と鐘の音が響いてくるのを聞いて、ここを掘り、ついに宝塔を発見、この寺が建てられるに至ったということであった。

(1) 県の役所のある町。(2) 一支里は約六五〇メートル。(3) 西暦五七六年。(4) 西暦二六五年。(5) 現在の山西省離石県。(6) 生前は猟師だったという。出家して名を慧達と改めた。(7) 閻羅王は閻魔王と同じ。衆生の罪を監視し罪悪の恐るべきことを知らしめる地獄を司る王の支配する世界。地獄。

塔の高さは一尺四、五寸、方七寸(1)ほどの小さいものであった。普照は舎利殿の中にあるこの塔を何回か見た。そのうちの一回は思託といっしょだった。思託は二十一歳で、一行の中でいちばん若年であったが、鑒真にとくに眼をかけられているだけあって、頭脳も明晰で、持ち前の丹念の性格からいつも見聞きしたものをつぶさに記録していた。このときも思託は阿育王塔について、「塔は金に非ず、玉に非ず、石に非ず、土に非ず、銅に非ず、鉄に非ず、色は紫烏色、四面には、本生譚の彫刻あり、相輪には露盤なく、内部には懸鐘あり」と書き記した。

思託は塔の色を紫烏色と書いたが、普照には淡紫色に見えた。そしてそれを造ってある材料は、思託の書いたように、なるほど金にも、玉にも、石にも、土にも、銅にも、鉄にも見えなかった。普照はその塔の内部の懸鐘をのぞいて見るたびに、伝説にある地中で鳴ったというのはこの鐘であろうかと思った。

普照は思託といっしょに、暇を見つけては寺の付近を歩き回った。眼鼻立ちの整った若い僧は、それが自分に与えられた使命であるかのごとくあらゆることを細かい字で記録していた。

寺の東南三里の小高い山の頂には仏の右足の跡があり、東北三里の丘の小さい巌の上には仏の左足の跡があった。いずれも長さ一尺四寸、前の広さ五寸八分、後ろの広さ四寸五分、深さ三寸、千福輪相が(2)はっきりと現われ、迦葉仏の足跡だと言われていた。

(1) 高さは約五十センチメートル、幅、奥行ともに各約二十センチメートル。(2) 仏三十二相の一で、仏の足の裏の網状の紋が多くの車輪のような形をしており、一切を統御する法王の相を表わすもの。(3) 釈迦の十大弟子の一人、摩訶迦葉。釈迦の没後、仏典を集結しようと首唱した。大富豪の子であったが、富と家がらをすてて仏門にはいった。

また寺の東方二里の地点には、路傍に深さ三尺ほどの井戸があって清水が噴き出していた。大雨のときもあふれず、旱魃のときも涸れないと言われ、中に長さ一尺五寸の鱗魚(鰻)がいるということで、土地の者は阿育王塔を守護する菩薩だと信じていた。福ある者にはその姿が見え、福のない者には見えないとか、ある者がこの井戸の上に屋根を造り、七宝をもってそれを葺いたところ、たちまちにして井戸の水があふれてきて、その建物を流してしまったとか、いろいろな物語がこの井戸をめぐって生まれていた。

また寺にはこんな話も伝えられていた。百年ほど前の貞観十九年(1)のことであるが、敏法師という者が数百人の弟子を率いてこの寺へ来て泊まり、一か月にわたって経論を講じ、ために土地の者は毎晩のようにここに集まった。そうしたある夜、人々は見知らぬ百人ほどの異様の風態の梵僧(2)が塔の周囲を行進するのを見た。そのとき一座の人々には小さい塔も、それを回って行進する侏儒たちも、なんの不自然さもなく拡大されて大きく見えた。みな不思議に思って、このことを寺僧に告げると、寺僧は、

「こんなことはいささかも異とするには当たりませぬ。毎年四大良日(3)には遠近の人々がこの寺へ集まって来るが、その夜半には、必ずいつも梵僧が塔をめぐって行進し、経を誦し、仏の功徳をたたえているのが見えます」

と語ったと言う。普照はこの塔をめぐる梵僧の行列の話にいちばん強く心をひかれた。小さい塔の周囲を侏儒の梵僧たちが行進している一枚の絵は、この寺に関する他のいかなる伝説よりも不思

(1) 西暦六四五年。(2) 梵土(インド)の僧。(3) 仏教の四つの大きい祭日。

議にある現実感を持っていた。

鑒真ら十七人の僧たちはこの阿育王寺で春を迎えた。庵園の竹の疎林に春の陽光が降り始めたころ、鑒真は越州竜興寺から講律授戒のための招きを受けた。鑒真はすぐそのもとめに応じ、栄叡、普照らもその行に加わって越州におもむいた。そして帰りは、杭州、湖州、宣州を巡遊し、土地土地でまた戒を授け、阿育王寺に帰ったのは夏の終わりであった。

こうした鑒真と行をともにすることによって、栄叡も普照も、今までとはまったく異なった勉強をした。留学僧につきものの独学から離れて、入唐十年にして初めて師を得た気持ちであった。二人は鑒真の同じ講義を何回も聴いたが、聴くたびに新しいものを発見した。また律の講義を聴く以外の大きい勉強もした。越州の竜興寺は鑒真の師道岸がかつていたところで、そこにおける鑒真の敬虔な立居振舞いも眼に収めることができたし、また同じ越州の開元寺では鑒真と同門である高僧曇一の謦咳にも接することができた。それからまた杭州の竜興寺では鑒真の先輩法慎の高弟である霊一にも会うことができた。

阿育王寺に帰ってからしばらくして一つの事件が起こった。それは越州の僧たちが、鑒真が日本に渡ろうとしていることを知って、これを阻止するために、主謀者栄叡の逮捕を州官に願い出た事件である。

栄叡はなんとなく周囲の空気のただならぬことを知って、王亟という人の家へ隠れたが、間もなく役人たちのために捕えられた。普照も同様に民家に隠れたが、このほうは詮索はなかった。

栄叡は枷を着せられて京へ護送されて行ったが、一か月ほどで再び阿育王寺へ帰って来た。杭州

で発病し、療養のために自由を得、年経て病死したという取りはからいをしてもらうことにして、ようやく逃げ帰ることができたということであった。

この栄叡の事件に刺激されて、一行の渡日の計画準備は急に活発になった。そして秋の初めに僧法進と二人の近事(1)が船を買い海粮の準備をするために、ひそかに福州へと旅立って行った。

三人の先発隊が出発して半月ほどして鑒真は僧と傭人、合わせて三十余人の一団を率いて明州を出立することになった。鄮山の地を離れるに当たって、一行はまず阿育王の塔を拝し、伝説の井戸の魚菩薩を供養し、付近の仏跡を巡礼し、それから台州を目ざして山越しの道をとった。鄮山を出ると、時の明州の大守盧同宰および僧徒は、一行を迎送し、一年間この地に滞在した鑒真らのために、旅の糧食の用意をし、白杜村寺まで見送りの人をつけてくれた。鑒真は白杜村寺に着くと、その壊れた塔の修理を指示し、郷人に勧めて仏殿を造らせることにした。

次いで一行は台州にはいった。そして寧海県の白泉寺に泊まった翌日、一行は天下の霊場として知られている天台山を目ざした。嶺険しく、道遠く、日が暮れてから雪が降りだし、雪片は顔をうってたれもが眼を開けていられなかった。その翌日も一行は一日じゅう嶺を渡り、谷を越え、日没時にようやくにして国清寺(2)にはいることができた。

栄叡、普照は、天台山にはいって、久しぶりに故国の山を見る思いがした。重畳たる山や峰には、松や柏や樟などが鬱蒼と生い茂っていた。

(1) 仏に仕える男子の僧。 (2) 隋の大建二年(五七〇)以来、智者大師が法を説き、没後の五九八年に隋の煬帝が檀越となり天台寺を造り「寺もし成らば国すなわち清からん」という夢のお告げによって国清寺と改めた。日本の最澄が帰国後、この寺にならって比叡山に天台宗を始めた。

山中には七十二の寺があった。一行の泊まった国清寺は五つの峰に囲まれ、天下四絶の一と称せられるだけあって、文字どおり幽邃の気のたてこめた霊場であった。二つの川は寺を挟んで流れ、それらは寺の前で合流していた。

一行は国清寺を宿舎として、三日間山中の聖跡を巡礼し、谷や峰や深い木立ちの中に次々に現われてくる宝塔玉殿の壮麗さに眼を奪われた。天台山の名を天下に喧伝した孫綽の『天台山賦』も、その万分の一をも言い尽くしていない感じであった。

一行は天台山を発し、始豊県を出て臨海県にはいった。何日間か峰伝いの旅を続け、山を下ると霊江に沿って進み、ようやくにして黄巌県に至った。ここからは永嘉郡（温州）を目指して海沿いの官道をとった。永嘉郡への途中、禅林寺という寺に泊まった夜、鑒真たちは思いがけず、採訪使の牒を持った役人たちに踏みこまれるという事件に見舞われた。役人の言うことによると、揚州の竜興寺にいる鑒真の高足で、江北では一名僧として知られている霊祐が中心となって、諸寺の三綱衆僧と相談して、鑒真の渡日阻止の運動を起こし、そのことを官に願い出たので、江東道の採訪使は牒を諸州に下して、鑒真らの過ぎた寺々の三綱を捕縛糺明し、一行の行くえを探らせていたということであった。霊祐は最初渡日の話が持ち出されたときから師真鑒の身の上を案じて、渡日ということには終始反対の態度を持ちつづけて来た人物である。

（1）六朝時代、晋の太原中都の人。博学文才に富み、朝廷に召されて太学博士となる。晩年廷尉卿に転じ、五十八歳で没した。（2）この道は今日でも用いられている主要な交通幹線である。（3）三綱は役僧。寺院において大衆を統率し、寺規を守らしめ、庶務をつかさどる僧正、僧都、律師の三役。

禅林寺にそのまま十数日止めおかれた一行は、陸路を揚州に送遣されることになったが、計画が挫折し、あまりおもしろくない禅林寺の滞在期間中に、普照は思いがけず戒融と再会することができた。

日本僧が尋ねて来たという寺僧の知らせで、普照が寺の門まで出てみると、そこには托鉢姿の戒融が立っていた。戒融が洛陽の大福先寺を出発したのは開元二十四年の春であったから、いつか八年近い歳月が流れていた。色は浅黒く、中年太りとでもいうのか、それでなくても大きい戒融のからだは一回り大きくなっていた。彼は普照たちとは反対に福州からやって来て天台山へ向かう途中で、ここまで来て、鑒真らの噂を聞き、一行の中に日本僧が混じっているということを耳にして、もしやと思って尋ねて来たということであった。

「やはりおまえらだったのか」

と、戒融は初め唐語で言ったが、すぐ日本の言葉で、

「なんのためにこんなところをうろついているのだ」

と聞いた。普照は戒融が懐しかった。普照は、彼と洛陽で別れてからのことをかいつまんで話し、次々と支障に見舞われている渡日計画のことも語った。すると戒融は、

「苦労してるな。二人とも可哀そうに」

と真顔で言って、

「宝を持って、向こうの小さい島へ渡りたくて、大陸の沿岸をうろうろしている。奇妙なことだ

（1）『新唐書』地理志には「右東道採使治二蘇州一」とあるから、あるいはいったん蘇州へ護送されたのかもしれない。

な」

と、さも感に耐えぬような言い方をした。

おまえのほうは何をしているか、と普照が聞くと、戒融は、おれか、おれは何もしていない。何かするとすればこれからだ。おまえと別れてからただひたすらに歩いた。砂漠も見たし、蛇が泳ぎ回っている海も見た。これからもまだまだ見たいところはたくさんある。そう言ってから、

「もうおれは、日本へ帰る気は持っていないよ」

と言った。

「死ぬまで日本へは帰らぬ気か？」

普照が聞くと、このときだけ、

「多分」

と、戒融は少しきびしい表情で言った。

「おれは両親もないし、兄妹もない。なんのために日本に帰らなければならないのだ。日本に生まれたというただそれだけの理由で日本へ帰らなければならぬのか」

普照が答えないでいると、戒融は再び言った。

「日本人の血を持っているから日本へ帰らなければならぬのか」

こんども、普照は答えなかった。なんのために日本へ帰らなければならぬのかと正面きって聞かれると、普照は答えられなかった。普照自身、日本へ帰ろうとしているのは、自分に故国へ帰りたい気持ちがあるからであった。そうした気持ちが起こるか起こらないかが問題で、これは理屈で決

められることではなかった。

そのとき、栄叡は役人の取調べがあってどこかへ出頭していたため留守であった。普照は彼が帰るまでもう少し待ってみるようにと戒融を引き止めたが、戒融はべつに栄叡を懐しむでもなく、よろしくと伝えてくれれば結構だと言い残して帰って行った。

戒融が帰ってしばらくして戻って来た栄叡に、普照が戒融の来訪を告げると、栄叡は一瞬ひどく懐しそうな表情を取ったが、その表情が消えると彼は、けっきょくは戒融と自分たちとは無縁な人間である。自分たちが尊いと思うことは、すべて彼には尊いとは見えない。しかし、彼には彼の思うところがあるのだろう、勝手に自分の道を歩めばよいのだ。そう多少怒りをこめて突き離すように言った。

一行は再び揚州の地を踏んだ。鑒真は彼の本寺である竜興寺にお預けの形で住まわされることになり、ここに渡海の体制はまったく解かれるに至った。鑒真は三十数人の一行の中で、自分の直弟子のみを残して、あとはそれぞれ郷里に引き取らせることにし、普照と栄叡の二人だけは居所が定まるまでということにして、一時的に竜興寺にとどまらせた。

鑒真が竜興寺に帰るや、これを伝え聞いた諸州の道俗(1)は、毎日のように争って供養の品々を調達して賀を述べにやって来た。しかし、揚州に連れ戻されてからの鑒真は、気むずかしく、無口になっていた。たれともあまり会いたがらず、とくに自分への好意的な妨害者ともいうべき霊祐には、絶対に面接を許さなかった。霊祐は師の怒りを解くために毎夜一更より五更(2)まで立って罪を謝し、

(1) 俗人と僧侶。(2) 一夜を一更から五更に分けた称。現在の午後八時から翌朝の午前五時まで。

六十日におよんだ。それでも鑒真の心は動かなかった。これを見かねて諸寺の役僧などが仲に立って詫びを入れ、ようやくにして鑒真の怒りを解くことができた。

祥彦と思託の二人は、二度と踏めないものとあきらめていた揚州の土を踏み、会えないはずの旧知と再会できたので、やはりなんと言ってもうれしそうであった。若い思託にはまだ冒険心もあり、未知の国へ行くということで夢もあるらしかったが、もう四十を過ぎている祥彦のほうは、師鑒真についてならどこへでも行くが、しかしなるべくなら、生命を賭けることまでして日本などへは渡りたくないという気持ちがあったに違いない。祥彦は一年間もの放浪で、その穏やかな顔は陽に灼けて黒くなり、両頬の肉は落ちてすっかり別人のようになってしまっていた。

こんどの事件でいちばん大きい打撃を受けたのは、当然なことではあるが、栄叡であった。計画が挫折したということより、将来の見通しがきかなくなったということが、彼の気持ちを暗く絶望的なものにしていた。当分再挙の機をつかめそうもないということと、肝心の鑒真がいかなる考えを持っているかわからないということが、栄叡を不安にしていた。淮南道の採訪使は寺の三綱に責任を負わせ、鑒真が再度他国へ向かうことのないように監視させていたので、栄叡としても鑒真に再渡航の意志ありや否やを聞きただすことは当分遠慮しなければならなかった。

普照はこんどの失敗に対してべつの考えを持っていた。鑒真ほどの高僧を、これほどの危険と艱難を冒してまでも日本へ渡らせるということに、むしろ一抹の疑念をさえいだき始めていた。しかし、現在はそのことより、やがて自分たちが鑒真のもとを離れなければならないであろうということのために気が重くなっていた。普照は一年間鑒真と労苦をともにし、朝夕その身辺に仕えていたので、いま鑒真のもとを離れることはつらかった。いつまでも竜興寺にとどまっていたかった。しかし、自分たちがいる限り、鑒真に対する官の監視がゆるまず、けっきょく鑒真に迷惑をおよぼしていることを思うと、一日も早くこの地を立ちのかなければならなかった。

栄叡と普照が、いよいよ揚州の地を離れることを決意し、鑒真のもとに申し出たのは、竜興寺で三か月を過ごしてからである。二人の話を聞くと鑒真はしばらく考えるようにしていたが、

「それもよかろう。そしていつでも再びここへやって来るがいい。法のためである以上、私の渡日の決心は変わらないだろう」

と言った。鑒真のもとを辞去した二人は、いつでも再び来るがいいと言った師の言葉と意味について話し合った。いつ来たらいいか二人にはその時期の見当がつかなかった。そしてけっきょく、鑒真と渡日とを結びつけて考える考え方がまったく世間の表面から消えてしまうまで、それを待つべきであろうということで、二人の意見は一致した。

二人は鑒真に申し出た日に、この寺へはいってから初めて、竜興寺の山門をくぐって揚州の町へ出た。禅智寺に業行を尋ねるためであった。禅智寺は子城のある岡へ上りさらに十五町ほどのところにあった。道の両側は葉を持たない裸木の疎林が続いていて、冬の陽が人家のない郊外の岡に散っていた。禅智寺に行ってみると、業行はすでに二か月ほど前に、筆写した経巻類を詰めた箱を数個預けたまま、姿を消していた。寺僧も業行の行くえは知らなかった。普照たちがわずかに想像しうることは、業行の写した経巻類はこの寺に預けた木製の箱数個に収まるだけの分量とはとても思えず、彼はその膨大な経典類の山を幾つかに分けて、ほうぼうの寺へ預けているのではないかとい

うことであった。

翌日、栄叡と普照は祥彦、思託らに送られて竜興寺を出た。そして羅城の西壁付近の双橋のところで、二人の日本僧は二人の唐僧と別れた。天宝四年(1)二月下旬のことである。

(1) 西暦七四五年。

三章

栄叡と普照がそれまで住んでいた同安郡（安徽省安慶付近）を出て、鑒真を尋ねるべく再び揚州へ上って来たのは天宝七年春のことであった。鑒真渡日の事件のほとぼりがさめ、その噂の消えるのを待って、二人の日本の留学僧は都から遠く離れた揚子江岸の地方都市に三年の歳月を送っていたのである。栄叡は四十代の半ばを過ぎ、普照もまたそれに近かった。

この同安郡における三年間には、この国には大きい事件はなかった。胡人(1)が辺境に寇した噂が二、三回、何か月か遅れて伝えられてきたぐらいで大唐の泰平な時代は続いていた。目ぼしい事件と言えば、なんといっても天宝五年に美姫楊太真が冊せられて三十歳にして貴妃となったこと、それに続いては、玄宗の寵遇を一身に集めている安禄山が御史大夫を兼ねたこと、宰相李林甫が天下の歳貢を賜わったこと、大臣で冤死するものが多くなったこと、そして天宝七年の春、栄叡、普照が三年振りで揚州へはいった同じ時期に、韋堅、李適之らの高官の死を賜わる事件があって、世は一般に泰平ではあったが、将来の大乱への準備は徐々に為されつつあったのである。

栄叡、普照の二人は、久しぶりで揚州の街を歩き、鑒真が崇福寺に住していることを聞いて、師をそこへ尋ねて行った。鑒真は二人の顔を見ると、以前と少しも変わらぬ静かな態度で口を開い

(1) 外国人・野蛮人。

た。

「よく尋ねて来てくれた。この前からすでに三年の歳月が過ぎている。こんどこそ仏の加護を得て、年来の目的を果たすことができると思う」

声も張りがあり、意気もさかんで、このとき六十一歳であったが、鑒真は二人の日本僧の眼には前よりむしろ若々しく見えた。

栄叡、普照は崇福寺にとどまり、夏までを準備期間として、ひそかに渡海のことに当たることになった。そして一行の者が乗る船は新河(1)で造り、将来品もほぼこの前の天宝二年のときと同じものを集めることにした。

同行の者の人選が成ったのは栄叡、普照が揚州へはいってから十日めである。祥彦、神倉、光演、頓悟、道祖、如高、徳清、日悟、思託ら、それに栄叡、普照を加えて道俗十四人。水手十八人。他に同行を願うもの三十五人。この前のこともあるのですべては迅速に進められた。

準備が九分どおり成った五月の終わりに、栄叡は普照に、あとに残された仕事は業行を捜し出して、彼の経巻類の一部をこんどの船に積みこんで行くことであると言った。業行のあの膨大な経巻類は一度に全部を運ぶことは危険であり、機会あるごとに、幾つかに分けて船便に託すべきである。自分たちも業行が承知するならこんど彼の経巻の一部を運ぶ仕事を受け持つべきであろう。普照もまたこの栄叡の考えには賛成であった。業行がどのように考えているかはわからなかったが、

(1) 三叉河から大江の沿岸、瓜州に至る運河で、開元二十六年に揚子津から瓜州まで直路二十五里の新しい運河をひらいて大江に直結させられた。

あの経巻の山を日本に運ぶには、栄叡の言うように、幾つかの船便に託すのがいちばん賢明な方法であった。現に業行は経巻類の保管を寺に頼んでいるが、この場合でも、おそらく盗難火災を要心してのことと思われるが、それを幾つかに分けて、幾つかの寺に預けている。まして運を天に任せて海を渡るのに、一つの船に全部を積みこむという愚はなすべきではないし、業行とてよもやそんな考えは持っていないであろうと思われた。

しかし、いずれにせよ、業行に会うことが先決問題だった。その話が出た日、すぐ普照は禅智寺へ出かけて行ってみたが、やはり業行の行くえはわからなかった。彼は経巻の一部を寺に預け放しにして、そのまま今日まで三年間一度も姿を見せていないということであった。今までの彼の行動から推せば、業行はどこへ行っているかまったく見当はつかなかった。洛陽に行っているかもしれないし、長安に行っているかもしれなかった。

普照は施す術がなかったので、禅智寺へ行っただけで、業行捜しは打ち切らざるをえなかったが、しかし、それから数日にして、大明寺の僧から、郊外の梵寺に最近日本僧が一人来ているという噂を聞いた。普照はそれを耳にした日、すぐそこを尋ねて行ってみた。なぜかその噂の日本僧が業行であるような気がしてならなかった。

その梵寺というのは郊外の山光寺のそばにあった。そのあたりは大運河を中に挟んで岡の上の禅智寺と相対している地点で、山光寺も梵寺もいずれも運河に沿っており、周辺一帯には墓や、土地神を祭った白壁の祠が多く眼についた。

案内されて梵寺の本堂の横手の一室にはいって行った普照が最初眼にしたものは、これまでいつ

も見て来たとまったく同じ業行の机に向かっている貧相な後ろ姿であった。

業行は振り向くと、訪問者がたれであるかを確かめるために、下から見上げるようにした。普照には瞬間、そんな業行の顔が血でも走っているような異様な形相に見えた。が、すぐ、それは業行の唇と口の周囲に赤と青の絵具が付着しているためであることを知った。業行は画筆をとっていたのであった。

彼の向かっている机の上には、思惟形の観音像を幾つか描いた大きい一枚の紙がひろげられてあった。その図像は子供でも描いたような稚拙な線を持ち、ところどころに簡単な色がつけられてあった。

「何を描いているんです」

普照は久濶を叙する挨拶の代わりに、ぶしつけにこう聞いた。業行はその普照の質問には直接答えず、

「最近、儀軌類を写しておりましてね」

と言った。言われてみれば、その小さい室には、各種の曼荼羅(2)や、その細部や、いろいろの持ち物を握った菩薩の右手や、宝冠や、奇妙な形をした水さし様のびんや、そうしたいろいろな物が、幾枚かの紙に描かれて、それが何枚も散らばっていた。どの絵も稚拙な形と稚拙な傳彩とを持っていた。

(1) 密教の秘密壇場での儀式・軌則を記述した経典。(2) 釈迦の悟りの境地を意味する壇（神聖な道場）を図絵したもの。

業行の語るところによれば、彼は義浄訳の経典の筆写の仕事をいちおう仕上げてしまったので、これから何年になるかわからない故国からの遣唐船が来るまでの時間を、儀軌類の転写の仕事で埋めようと思い立ち、その仕事を毎日やっているということであった。

「このほうがむしろたいへんな仕事でしてね。いつまでやってもきりのないことです」

業行は言った。業行の机の周囲は、この前のいかなるときよりも乱雑になっていた。経典もあれば、図像もあった。そして書きつぶしらしい反古の絵もあちこちに散乱していた。

普照はそこにあった業行の写した『出生無辺経法二部』(1)と題してある筆写本のページをめくりながら、なるべく相手を刺激しないように自分がここへ尋ねて来た目的について語った。業行は自分の経典の一部を船に積みこみたいという話を耳にすると、瞬間はっとしたような顔をしたが、やや しばらくしてから、

「なるほどおっしゃるとおり、あれは幾つかの便船に託すべきものでしょう。何も私といっしょに日本へ渡らなければならぬ理由はない。要は無事に日本へ渡りさえすればいいんです。あなたがたが確実に日本へ着くというのならお預けしましょう」

と言った。

「確実に着くかどうかはわからない。しかし、万一難船して、船が荷物を捨てなければならぬような場合は、あなたの経巻の身代わりに、私が海にはいりましょう。それぐらいのことならします」

(1) 菩薩の四法(貪欲に着せず、もろもろの有情に嫉妬せず、一切自己の財物を施して悔いず、昼夜に法を愛し娯しむ)を成就して陀羅尼を得ると説く。

普照は言った。普照はそのときほんとうにそう思った。無事に日本へ持って行けるかどうかはわからなかったが、それだけのことは自分がしてやれるだろうと思った。普照がそう思い、そう言葉に出して言わずにはいられないものを、唇を赤や青の色で染めた老日本僧は持っていた。

それから三日ほどして、業行は自分が写した経巻の一部を詰めた二つの箱を、唐人に運ばせて崇福寺へ持ちこんで来た。二つともひどく重い箱であった。

その夜、栄叡と普照は業行といっしょに、崇福寺の坊舎の一室で夕食をとった。そのとき、話に玄朗の名が出たが、業行はごく断片的なものではあったが、玄朗のその後の消息について知っていた。

業行は去年の春長安に行ったが、そのとき、唐人の女を妻に持ち、子供も持っていた玄朗と会った。場所は長安の商舗街の一角で、そのとき二人はごく短い時間立ち話をした。どこでいかなる生活をしているかはわからなかったが、まだ僧衣をまとっていたところからみて、玄朗がまだ僧籍から脱していないことだけは明らかであった。業行の知り得たのはこれだけであった。これが業行でなくて、他の者であったらまだ何か玄朗について知り得たはずであったが、そうしたことを業行に望むことは無理のようであった。

業行は、その夜、少しばかりの酒に顔を赤くして、たっぷり十五、六町の道のりはあると思われる梵寺へと帰って行った。門のところまで送り出した普照の眼には、業行の貧弱な体が前屈みに折れ曲がって不具者のように見えた。

六月の初めに準備が完了すると、栄叡は鑒真と相談して乗船の日を二十七日と定めた。一行は事の発覚するのを防ぐために、当日は分散して、べつべつに新河の乗船地に向かうことにした。

月なかばに江南一帯を大風が吹いたが、二十日を過ぎると快晴の日和が続いた。乗船の日、鑒真は夕刻を待って、祥彦、思託を従えて崇福寺を出た。栄叡、普照はそれより早く寺を出ていて、城の南門を出たところで鑒真らに会し、五人は城と揚子江を通じている運河に沿って三叉河まで行き、そのあたりの蘆の中に身をひそめていて夜の来るのを待った。そして、一刻ほどの時間をそこで過ごし、あらかじめ定められた時刻にそこからほど遠からぬ乗船地に行くと、船にはすでに六十余人の者が乗り組んでいた。

この前天宝二年の船出は月明の夜であったが、こんどは漆黒の闇夜であった。船はこの前のときよりも一回り小さく、天平五年入唐した際の遣唐使船に比べると半分にも足りなかった。簡単な屋根があるだけでとくに屋形といったものは造られてなかった。乗員はごちゃごちゃと板子の上に並んでいた。

船は新河に浮かぶと、瓜州鎮に出て、揚子江へはいり、東に下って狼山(1)に至った。このころから強い風が吹き始め、船は江中にある三つの島の周囲を旋回し続けた。

一夜が明けると風は静まった。江口へ出て越州に属する小島三塔山(2)に着き、ここで順風を待つことにした。とどまること一か月、ようやく好風を得て発し、署風山(3)に至り、またここに停住すること一か月、こうしている間に、いつか暦は十月にはいっていた。

(1) 江蘇省通州に属しており、今日でも揚子江下流北岸の重要な港である。(2) 江蘇省の最南端、蘇・越の境界であり、古来揚州江付近から日本へ行く船はこの島の付近を通っていた。風がよければ狼山からは一日の里程である。(3) 詳細不明。江浙海中の一島で、舟山列島のあたりであろうといわれている。

十六日の明け方、鑒真は、

「昨夜夢に三人の官人を見た。一人は緋の衣を着、二人は緑の衣を着ていた。そしてその三人は岸の上からこちらへ向かって挨拶を送ってよこした。思うにこれは中国の神がわれわれに別れを告げに来られたのであろう。こんどこそ無事に海を渡れそうな気がする」

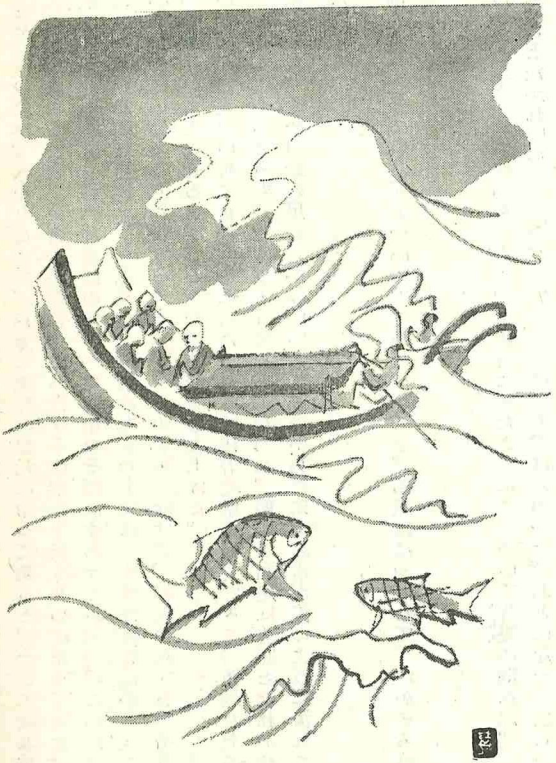
と言った。その鑒真の言葉を聞いたのは、そのとき眼覚めていた祥彦と普照の二人であった。

問もなく風が出てきた。この月にはいってずっと逆風ばかり吹いていたのが、今度の風はまさしく北へ向かって吹いていた。祥彦も普照も、これこそ和上が夢に見た国神の吹かせ給うた風であろうと思った。

舟夫も出帆の決意をした。早朝、船は錨を上げ、一か月停泊した署風山の岸を離れ、頂岸山を指して発した。午前中に、東南海上に小さい島影を見た。一同は頂岸山かと思ったが、午ごろになるとその島影は消えてしまった。そのころからようやく大海へ乗り出した感じを一様に皆が持った。夕方から強風が吹き始め、にわかに波浪が高くなった。潮は墨のように黒く不気味であった。夜になるとますます風は強く、船は波浪にもてあそばれ、さながら山頂から谷底へ落ち、谷底から山頂へ上るに似て、いまや総勢七十余人を乗せた船は一片の木片にしかすぎなかった。

いつか乗員の全部が観音経を唱えていた。風波の音に混じって、船頭のどなる声がちぎれちぎれに経を誦する者の耳にはいって来た。

（1）役人。（2）詳細不明。『日本書紀』の須岸山、檀岸山と同じであろうか。舟山列島の東南端の朱家尖という島であろうといわれる。この辺は日中交通の要地で第四回遣唐使も立寄っている。



「このままでは船は沈むぞ。荷物は全部海へ投げこんでしまえ。早く投げこめ」

船頭は言っただけでは足りなくて、自分で帆柱の根元にやって来ると、そこに積み重ねてあった荷物へ手をかけた。何人かの舟夫が荷物を海に投ずる仕事を手伝うためにやって来た。

普照は、業行から託された経巻類のはいった木箱のそばにすわっていたが、これだけは海に投ずることから防がねばならないと思った。経巻の木箱の上には、大きな桟香籠[1]が載っていた。船頭は、いちばん重い物から海に投ずるつもりか、普照を押し除けて、経巻の箱を動かそうとしたが、それが動かないことを知ると、その上の桟香籠を取り上げた。

船の動揺が何人かの舟夫を横倒しにした。船頭は桟香籠を抱えたまま、普照の上に倒れて来たが、すぐ何か叫えるような声を張り上げて立ち上がった。船頭の右足は普照とたれかほかの乗員との間にあった。その船頭の足にしがみついた普照のからだに、海水が滝のように流れこんで来た。そのとき、突然、

「抛つことなかれ」

風雨の荒れ狂っている頭上の闇で、そんな声がした。船頭ははっとして、かかえている桟香籠を取り落とした。

「抛つことなかれ」

二度めの声で、船頭はあたかも何物かに打たれたようによろめいて背後に倒れた。

「抛つことなかれ」の声を聞いたのは船頭ばかりではなかった。あとになって話し合ったことだ

(1) 香木を入れてある大きな籠。

が、思託も栄叡もはっきりその言葉を聞いたと言い、祥彦は意味はわからなかったが、何か人の声らしいものを耳にしたと言った。普照は夢中だったので何を聞いたか覚えていなかった。

風波は夜半になってもなお、その力を弱めなかった。この夜、もう一度不思議なことが起こった。一同が風と船内に進入して来る海水と戦っている最中、突然船頭は大声で叫んだ。こんどもまたその声は風と波の音の間から、ちぎれちぎれに人々の耳に届いた。

「もうこわいことはないぞ。みんな、見ろよ。甲を着け、杖を持った神王が、舳先のところに立っている。帆柱の根もとにも立っているぞ」

人々は舳先と帆柱のほうへ視線を注いだが、もちろん、そこには闇以外何物をも見ることができなかった。しかし、船頭の言葉で、一同はそのときの恐怖を少しでも向こうへ押しやることができた。

翌日風波は幾分おさまったが、船はなお大きい波濤に揺られながら、早い潮の流れに乗ってどこともなく運ばれていた。舟人の話では日本と反対の方向へ流されているということであった。たれももう日本へ渡るとか、渡れないとかいうことは考えなかった。どこでもよかった。無事に陸地の上に立つ日が来ることだけが望ましかった。

三日めに、船は蛇の群がっている海にはいった。その長いものは一丈(1)余、小さいものでも五尺はあり、蛇は海面一面をうごめき泳いでいた。普照は三年前禅林寺で戒融に会ったとき、彼が蛇の海も見たと言ったことを思い出し、このようなところへ戒融もまた来たのであろうかと思った。

蛇の海を過ぎること三日、こんどは飛魚の海域にはいった。白銀色の魚は、いずれも水面を出る

(1) 十尺、約三メートル。

ときにきらきらとその白い肌を光らせ、その輝きは船の行く手の空間を、そこだけ異様な光で埋めた。魚はいずれも長さ一尺ばかりであった。(1) こんな日が三日続いて、その後の五日間は大きな鳥の群れが海を渡るのを毎日のように見た。鳥たちは、ときどき船の上に集まって来ては羽を休めた。そのたびに船はその鳥の重みで沈むかと思われた。追おうとすると、かえって人間のほうがその嘴で傷を受けた。(2)

その後の二日ほどは、またまた強い風が吹き、船は潮に揺られながら漂流を続けた。乗員はほとんど全部板子の上に横たわったままだった。

普照だけはやや元気で、毎日生米を少しずつ船内に配って歩いたりした。思託は一日じゅう板子の上に倒れてはいたが、ときどき腹ばいになると、思い出したことを小さい字で巻物の裏面に書きつけていた。それでなくてさえ船に弱い栄叡は、死んだように横たわって動かなかった。船酔いと何度めかの渡海の失敗による落胆が、栄叡を口もきけなくさせていた。普照は、栄叡のこのような姿を何回見たことだろうと思った。

いちばん難渋したことは、水の無いことであった。米を噛んでも喉がかわいているために飲みこむこともできず、吐こうにも口から出ず、鹹水(3)を飲むとたちまちにして腹がふくれ、たれもこれほどの苦しみを味わったことはないと言い合った。

そうしたある日、海中に丈一丈ほどの金色の魚が泳いでいるのを見た。見つけたのは祥彦だった。

(1) 南支那海あたりでは、激しい季節風の前後には特に群れをなして飛ぶという。(2) アホウドリであろうといわれ、人が手で追えば餌かと思って嘴でつつくのである。(3) 塩からい味をもった水。

た。何匹かの金色の魚はいずれも船から離れず、船の周囲を泳いでいた。この魚を見た翌日、風はまったくおさまり、人々は船の行く手遠くに島影を見た。

風が凪ぎ波が静かになると、鑒真は起き上がり、舳先近いところに座を占め、海のほうに顔を向けてすわった。鑒真が起きると、他の僧たちも起きだして、その背後にすわった。遠く水平線をにらんでいる鑒真の顔は、普照にはやはり犯しがたい凛としたものに見えた。鑒真は平生と少しも変わらなかった。ただ無口になっていた。

午近いころ、鑒真の背後にすわっていた栄叡が突然口を開いた。

「いま私は夢を見た。官人がやって来て私に戒を受けたいという。私が喉がかわいてたまらない、水をもらいたいと言うと、すぐ水を持って来てくれた。水の色は乳汁のようで、口に含むとそのうまさは譬えようがなかった。そこで私は船の上には私同様渇しているものが七十余人いる。あの人たちにも水をやってもらいたいと頼んでみた。すると官人は雨を司っている老人を呼んで、おまえたちなら簡単に事を運ぶだろう、早く船の人たちに水をやれと命じた。ここで夢はさめた。雨がきっと降るに違いない」

一同は栄叡のその夢を当てにした。

栄叡の夢のためかどうかわからなかったが、その翌日午後三時ごろ西南の空に雲が沸き出し、やがてそれが船の上をおおうと、大粒の雨が落ち出した。雨は短い時間ではあったが、沛然と滝のように降った。人々は手に手に椀を取って雨を受けて飲んだ。翌日もまた雨が来た。人々はこれですっかり渇をいやすことができた。

その翌日船は島に近づいた。四匹の白い魚が船の前を泳いでいた。人々にはその魚が船を導いて行くように見えた。船は船を入れることのできる浦へはいった。

乗員たちは岸壁を攀じ登り、島へ上がって水を探した。見たことのない大きい葉の樹木が生い茂っている岡を一つ越えると池があった。みんなそこで飲みたいだけ水を飲み、器物に汲んで船に持ち帰った。

船はしばらくここに停泊していることになった。四、五日して人々はまた水を汲みに島に上がって行ったが、こんどは、前にあった池はなくなっていた。みな神霊の化出せる池であったろうと言い合った。祥彦も思託もそう信じているふうであった。普照は池の水はおそらく雨水で、何か特殊な土質のために吸収されてしまったのであろうと思った。

暦はいつか十一月になっていた。十一月と言えば冬の寒さがきびしくなるころであったが、冬の気配はまったくなかった。島には見慣れぬ果実が実り、花も開き、筍も生えていた。冬というより夏の姿であった。

十四日間、船はその島の岸近くにとどまっていて、ようやく船をつなぐことのできる海岸を捜し、全員そこから上陸した。そして手分けして人の住む部落を捜すことにした。幸い四人の唐人と会った。彼らは口々に、この辺の住民は人間を捕えて食うから、早く立ちのいたほうが安全だと教えてくれた。

全員すぐ船に戻って、船を他の安全そうな入江に入れた。が、その夜、刀を持った土人が船へやって来た。乗員はみなふるえ上がったが、食物を与えると、土人は黙って去って行った。物騒だっ

たので、その夜のうちに、船は入江を出て再び海上に漂い、昼間唐人から聞いた海南島を目指すことにした。そして三日めに船は海南島の南端、振州(1)の一河口に到着することができた。

島へ到着した翌日、船の荷揚げを行なった。三人の舟人が業行の経巻の箱を、船から強烈な陽光が降っている白い砂浜の上に運んだ。舟人の一人は、その箱の上に腰を降ろして水を飲んだ。

午後一同はこの土地の役人の取り調べを受けた。一行は砂浜の上で昼間を過ごし、夜は陸揚げした荷物に番人を付けて船に帰った。

栄叡と普照は、地理の観念がはっきりしていなかったので、これからいったいどのような道を通って日本へ帰ることができるものか見当がつかなかった。現在二人にわかっていることは、いま自分たちは広い唐土の南端から、さらにまた南方にある島の、しかもそこのいちばん南の端の一河口に身を置いているということであった。

鑒真はこうしたときいつもそうであるように、無表情に押し黙っていた。その表情からはいかなる感情も、いかなる意志もまったくうかがい知ることはできなかった。祥彦、思託の二人は、そうした和上にならって、これまた沈黙を守っていた。これまで何回も計画が挫折したが、いつも祥彦と思託だけは二人の日本僧のところへやって来て、やがて必ずや再挙をはかれるだろうといった慰めの言葉をかけてよこしたが、こんどの場合は違っていた。二人はとんでもないところへ漂着したといった表情も示さなければ、またまた計画が挫折したことに対する落胆の表情も見せなかった。そうしたことが鑒真の心の内部を計りかねて、うっかりしたことを口走れないといった気持ちから

(1) 唐の振州は現在の海南島の南端、崖県の地である。

来ていることは明らかであった。

祥彦、思託以外の僧たちは明らかに栄叡と普照の二人に冷たい眼を向けていた。二人の日本僧のために、どうして自分たちはこのように何回も死ぬ目に会わなければならぬのかといった気持ちを露骨に顔に現わしていた。

漂流直後の何事もする気にならぬ一種異様な懈怠感が、島へ上がってから二、三日のあいだ、一行のすべての者をとらえていた。

四日めに、州の役所から別駕馮崇債(1)が知らせによって兵四百余を率いてやって来て、一行を迎えて州城へ案内した。城内は一行がこれまで見たいかなる都邑とも異なっていた。民家も商家も役所も台風に耐えるために低く堅固に作られてあり、家々の周囲には見慣れない南方の植物が大きい葉を茂らせて生い茂っていた。空気はかわいていて、陽の当たるところにいるとからだは汗ばんだが、樹木の陰にはいると涼しかった。

粗末な役所の石畳みの庭で、馮崇債は、自分は昨夜夢で前世において自分の舅であったという人物に会った。彼は現世に生まれ替わって僧となり豊田という姓を持っていると私に語った。こうした夢を見たことは前世で舅であった人物が自分のところを尋ねて来るということであろうと思う。もしもこの一行の中に豊田という姓の僧侶がいたら教えてもらえないだろうかと言った。鑒真に代わって祥彦が、あいにくそういう姓の僧侶はいないと答えると、

(1) 地方次官。長官は現地へ赴任していないから、事実上の長官である。(2) 馮氏は嶺南の歴代の豪族である。一族は嶺南の各州の刺史となり、大いに繁栄した。高力士はこの一門の出身である。

「それではおそらく大和上がわたしの前世の舅なのであろう」

馮崇債はそう言って、それから一行を役所の内部に招じ入れ、斎壇を造って供養した。

一行はそこを仮りの宿舎として、三日間滞在し、さらに大守の庁内において会を設けて、鑒真は役人たちに戒を授けた。

それからしばらくして一行の宿舎は正式に大雲寺と定められ、鑒真初め三十余人の者はその寺へはいった。大陸の大きい寺を見慣れて来た者の眼には、伽藍も境内もひどく貧しく見えた。ことに仏殿は荒廃して、いつ倒壊するかわからぬような状態にあった。

一行はこの破れ寺で天宝八年を迎えた。雨というものはまったく降らず、強風が吹くと城外の砂漠地帯で舞い上がった砂塵が霧のように丈低い民家が詰まっている小さい城邑の上に降った。鑒真たちは、土地の工人たちを指揮して、仏殿を作る工事を始めた。建築工事は冬の乾燥期から夏の雨期に及んだ。仏殿が落成すると、それを機に一行はこの地を発して、本土に渡るために島の東南部の万安州(1)を目指すことにした。別駕馮崇債は甲兵八百を率いて一行を護衛し案内することになった。

出発に当たって鑒真は日本への将来品のすべてを、仏具も、仏像も、経典も自分たちが八か月を過ごした大雲寺へ納めた。栄叡と普照は相談して、業行から預かって来た写経の箱二個もこの寺へ納めることにした。これからの長い道中を思えば、この処置がいちばん賢明であったし、業行もまたこれを諒解してくれるであろうと思った。

重い二個の箱を土民の手を借りて自分たちが造り上げた仏殿へ運びこんだ帰途、栄叡は宿坊まで

(1) 唐の万安州は現在の海南島万寧県と陵水県を合した地にあたる。

の五丁[1]ほどの道を歩くのに何回か椰子の葉陰にからだを休めた。普照には栄叡の健康がこれからの万安州までの長い行旅に耐え得ようとは思われなかった。漂流に引き続いてのこの振州における八か月の慣れない南方の生活で、栄叡はひどく弱っていた。食事もすすまず、からだのやせも目立っていた。かつて天宝元年に初めて帰国の話が出たとき、普照は現在の栄叡と同じようにすっかり健康を害して自分のからだに対する自信を失って、そのためになお唐土にとどまって勉学する計画を破棄したのであったが、それから七年、普照のほうはすっかり異境の生活に鍛えられて健康になり反対に当時頑健であった栄叡のほうがいまは少しのことですぐ発熱するようになっていた。

普照ばかりでなくたれの眼にも万安州までの四十余日の行程は栄叡には無理に見えた。けっきょく鑒真の勧めで、栄叡は海路を取って先回りして乗船地崖州[2]に向かうことになり、普照が彼に付き添って行くことになった。

栄叡と普照の二人は鑒真の一行が出立して数日たってから、舟便を得て振州を発した。万安州を経て、崖州までに四十日を要した。

崖州は海南島第一の都邑で、二人の日本僧は久しぶりにここで都会らしい空気に触れることができた。二人は城内の古い南蛮寺に宿泊して、ここで鑒真らの一行の到着するのを待った。

栄叡は崖州へ着くと、そのまま病床に臥した。やせはいっそうひどくなっていた。普照は栄叡を看護するかたわら、暇を見つけては市街を歩いた。珍しい果実を売っている店が多かった。益知子、檳榔子、荔支子、竜眼、甘蕉、拘薬、楼頭などがあった。大きい物は鉢や盆ほどあり、どの果実も蜜より甘い液を持っていた。花はいずれも原色に近い鮮かな幾つかの色を持っていた。

予定より半月ほど遅れて鑒真の一行は崖州へ到着した。鑒真らが州の遊奕大使張雲[1]の礼を尽くした出迎えを受けて、城内の開元寺にはいったという噂が耳にはいった日、普照は病める栄叡を連れて開元寺へおもむき一行に合流した。

一行は崖州へはいった地点で、そこまで一行を護衛して送って来た馮崇債と別れていた。普照は一行から、自分たちが別れてからの鑒真たちの旅の模様を聞いた。それによると、一行は振州を発して四十余日めに万安州へはいった。そしてそこの土人の大首領馮若芳の歓迎を受け、その家に泊まって三日間供養を受けた。そこで見た馮若芳の生活は一行の眼を驚かすに足るものだった。その家では客に接すると、乳頭香[2]を用いて燈火とし、一焼に百余斤を費していた。あとで知ったことであったが、この馮若芳は毎年付近を航海するペルシャの船を略奪し、その財宝を奪い、その人をかすめて奴婢とすることを業としていた。その家の裏庭には略奪品である赤、黒、白、紫等の檀木が山のごとく積み重ねられ、その他の財宝も同様に家の内外に堆高く置かれてあった。また彼は、劫掠して来た奴婢を集団的に住まわせ、彼の住居を中心にして、南北三日、東西四、五日の行程の間はすべてそれら異国人の部落であるということであった。

普照は崖州に滞在中、よく思託といっしょに街を歩いた。市街に群がっている人々の風俗は異様

（1）一丁は六〇間、一間は六尺、一丁は約一一〇メートル。従って五丁は約五五〇メートル。（2）現在の海南島瓊県の一部、文昌、澄邁の両県をあわせた区域である。

（1）唐の官職中には見あたらず、八世紀末の記録に「崖に遊奕使あり」とある。山賊を討伐する司令官と推測されている。

（2）アラビア産の香料。

だった。男は木笠をかぶり、女は日本の着物に似たものを着けていた。人はみな蹄を彫り、歯を染め、顔に入れ墨して、水を鼻から飲んでいた。

郊外には胆唐香樹の林があった。風が吹くとその香気は五里の遠きにまで伝わるということだった。そのほかに波羅榛樹の林もあった。この波羅榛樹については思託は次のごとく記していた。

「果の大きさは冬瓜のごとし。その樹木は檳榔（かりん）に似、葉は水葱のごとく、その根の味は乾柿に似たり」

この地方は十月田を作り、正月粟を収穫した。蚕も盛んで、蚕を飼うこと年に八度、稲の収穫は二度あった。

滞在中、大使の張雲を初めとして部下の役人たちはときどき交代に一行を見舞ってくれた。張雲は自分で食事の采配をふるい、優曇鉢華の葉を菜とし、その実を僧侶たちに馳走して、鑒真に説明した。

「これは優曇鉢華の実です。この樹には実はなりますが花は咲きません。たいへん不思議な樹ですが、私が和上にお会いすることのできたのも、これに劣らず不思議な御縁でございましょう」

思託はそのそばで、さっそく優曇鉢華の樹を紙に写し、その説明を記した。――「その葉は赤色、円形にして径一尺、実の色は丹紫、味甘くして美味」。

しかし、この開元寺へはいってから三日めに、街に大火が起こり、開元寺も類焼の厄に会い、一同は焼け出されの身の上となった。

大使張雲に乞われて、鑒真はここで寺の再興に当たった。病床にある栄叡を除いて、他の者たち

はこの仕事のために忙しくなった。仏殿、講堂、塔等の伽藍をつくらねばならず、その材木の入手が一苦労であった。

ところが鑒真が開元寺を建てるという噂を聞いて、振州の別駕馮崇債は奴隷にそれぞれ一本ずつの用材を運ばせてよこした。そのために三日間で必要な用材は全部集まった。

寺は予定より早く竣工し、鑒真は余った材木で丈六の釈迦像をつくった。新しい伽藍が竣工すると、鑒真は登壇受戒し、律を講じ僧を度した。普照は久しぶりで峻厳な和上の風貌に接し、頬から流れ落ちる涙を止めることができなかった。多年にわたる流離の生活の中に少しも傷つかず、その行く先々で寺を建て、戒を授け、人を度す和上が仏陀そのものに見えた。

この日は病軀を押して栄叡もまた儀式にのぞんだが、授戒が終わって、一同が堂を出たとき、栄叡は普照に、

「自分はいま堂を出たとき、ふと、日本の奈良の都の大きい寺にいるような気がした。空の色も樹木の色も土の色もまるで違っているのに、どうしてここが奈良であるかのような錯覚を起こしたのであろうか」

そして、どうしても和上には日本に渡っていただかねばならぬ。そう熱っぽい口調で言った。

栄叡と普照はかつて初めて遣唐僧として渡唐する交渉を隆尊から受けたあと、興福寺の境内で、早春の光を浴びながらそれについて語り合ったことがあったが、普照はいまそのときのことを思い出していた。そのときと同じようにいま二人は向かい合って立っていた。長身の栄叡は上からうつ

（1）高さ一丈六尺（約四・八メートル）のこと。

むくようにして普照に対し、普照は普照で見上げるようにして栄叡を仰いでいた。

普照は、興福寺のときとはまるで違ったやせ衰えたからだをして、傲然とした気性の激しさだけをようやく持ち堪えている友の顔をいつまでも見つめていた。普照は何か言いたいことがある気持ちであった。それははっきり言えば鑒真を伝戒の師として日本へ招ずる計画を、いまここで打ち切ったらどうだろうという考えであった。和上も老いていたし、栄叡の健康ももはやそうした計画を実行するにはあまりにも弱っていた。鑒真自身は一言も自分の考えを外にもらさず、渡日の計画についてはいっさい語らなかったが、しかし鑒真のときどきの話から推して、彼が故国揚州へ帰る意志を微塵も持っていないことだけは明らかであった。ここから対岸の雷州に渡ったとき、当然一行はこれからの行程を決めなければならなかった。このままでは鑒真はどこか日本へ渡る良港を捜して、そこを目指すに違いないと思われた。普照はいま鑒真にも、栄叡にも必要なものは官の庇護であり、流浪の生活を一日も早く打ち切ることであると信じて疑わなかった。

しかし、普照は栄叡の顔から眼をそらすと、そのことを口から出す誘惑に耐えた。栄叡はおそらくその普照の言葉には耳もかさないであろうし、またその言葉が病める友にとってはいかに大きな打撃になるかということがわかっていたからである。

それから数日後、鑒真は崖州を去ることを発表した。大使張雲は和上に別れを惜しみ、澄邁県をさして出発する一行を城外まで送り、県の役人をして船まで見送らせた。

一行は振州に漂着以来一年余の歳月を過ごした海南島を離れて海に浮かんだ。二日三晩にして、船は雷州に達した。

四章

鑒真の一行は久し振りで大陸の土を踏んだ。一行は雷州から羅州(1)、弁州(2)、象州(3)、白州(4)、繍州(5)を経て、西江沿岸の藤州(6)、梧州(7)を過ぎ、梧州から舟で桂江をさかのぼり、始安郡の郡治(8)である桂林に到着した。一行は各地で、官人や道俗、父老のさかんな迎送を受けた。桂林からは湘江を舟で下って江南へ出る予定であった。これは言うまでもなく、ひとまず渡日を断念した上で選んだ行程であった。広西、広東方面から渡日の船便を得ることも考えられたが、鑒真はそれを取らなかった。栄叡は再挙の機会が遠くなったことで落胆したが、普照はこの際黙って鑒真の考えに従うべきであることを説いた。

桂林へはいると、ようやく南方の熱帯的な気候から脱して、一行の者は久しぶりで唐土にある思いを持つことができた。空の色も水の色も陽の光も、南方のあくどい色彩とは代わって、静かなものに置き替えられた。季節の感覚も正常に身に感じられた。

桂林には長く滞在する予定ではなかったが、一行がこの都邑へはいると、始安の都督上党公馮古璞は鑒真和上の来着を知って、自ら徒歩で城外へ出て、からだを地に投げ、足を組み、礼拝して、

(1) 広東省高雷道廉江県あたり。(2) 広東省高雷道化県。(3) 広西省来賓付近。(4) 広西省桂白。
(5) 広西省陸川県。(6) 広西省藤県。(7) 広西省蒼梧。(8) 都の役所のある町。桂林は始安郡の中心地であるとともに、広西地方の中心地であった。

一行を開元寺へ迎え入れた。

開元寺はこれまで久しく仏殿を開かなかったが、和上を迎えてこのとき何年かぶりで仏殿を開いた。たちまちにして香気は城内に満ち満ちた。城内の僧徒は幢(1)を捧げ、香を焚き、梵を唱えて寺に集まって来た。そして連日連夜州県の官人百姓たちは開元寺に詰めかけ、境内にあふれた。

都督馮古璞は自ら食事の支度をして衆僧を供養し、鑒真を招いて菩薩戒を受けた。また七十四州の官人や選挙試学(2)の人々がみなこの都邑に集まり、都督にならって菩薩戒を受けた。

一行の止宿した開元寺は隋時代の創建にかかる寺で、もとは縁化寺といったが、失火によって炎上し、のちに再建されて、玄宗に至って初めて開元寺となった。一行がはいったときは開元寺になってからまだ幾年もたっていなかった。

かくしてはからずも一行はこの桂林の地で一年足らずの歳月を送った。気候が変わったせいか、この地へ来てから栄叡は一見健康を取り戻したかに見えた。

折りしも南海の大都督、五府の経略採訪大使、摂御史中丞の幾つもの肩書を持つ広州大守の盧煥が、鑒真を広州に迎えるための使者をよこした。広州への道は江南とは逆になっていたが、鑒真は盧煥の乞いを入れて、広州へおもむくことを承諾した。一行の中にはこの大きな寄り道に対して内心不服な者もあったが、鑒真が決心した以上これに従わざるをえなかった。

(1) 旗のこと。(2) これはおそらく「南選」のことだろうと思う。今の広東省の東部から広西省一帯はもともと馮氏のような蛮族の大首領たちが山洞に割拠していて、中央の政令は必ずしも及ばなかった。唐の中央集権が強まるにしたがって、土人に対しても四年に一度、試験を行なって土着の人を官吏に登用することとした。この嶺南における特別試験を「南選」といった。桂林はその南選の試験場であった。(安藤更生)

盧煥は唐代の一流の名族、范陽の盧氏の出で、秀才と清廉をもって聞こえ、玄宗の信任の厚い人物であった。栄叡と普照は、かつて十数年前鴈に随って洛陽より長安に向かう途中、当時陝州の刺史であった盧煥に会っていた。玄宗が盧煥の政治を賞して、その役所の壁に親ら賛したときのことである。(2) もちろん盧煥のほうは覚えているはずもなかったが、二人の日本僧のほうは盧煥を見知っていた。

盧煥は諸州に牒を下して鑒真一行を広州へと迎えしめた。一行が桂林の地を離れるとき、都督馮古璞は自ら手を下して鑒真を舟に乗せ、

「いよいよお別れすることになりましたが、もはや今生での再会は望めないことでありましょう。このうえは弥勒の天宮(1)においてお目にかかるばかりです」

と言った。一行もまた一年間ばかり世話になった桂林の人々との別れを惜しんだ。このとき、栄叡はまた健康すぐれず、高熱に見舞われていた。彼は普照と思託と祥彦に助けられ、いちばん最後から、熱のため火のように熱くなっているからだを舟の上に移した。

桂江を下ること七日、梧州に至る。ついで端州(2)の竜興寺に至る。栄叡師奄然として遷化す。大和上哀慟悲切なり。喪を送りて去る——『唐大和上東征伝』には栄叡の死についてはこれだけの記述しか見いだせない。後年この東征伝の著者に記録を提供した思託の記述がここにはそのまま使われているのかもしれない。

(1) 五十六億七千万年ののちにこの娑婆世界の壊滅のときに出現して衆生を助ける仏。(2) 現在の広東省高要。硯の産地の端渓が近くにある。(2) 五八ページ参照。

桂江を下って、江岸の梧州に到着、それから西江の本流を下った一行が途中端州に上陸して、その地の竜興寺にはいったのは船中で栄叡の病状がにわかにあらたまったためであった。

一行が土地の役人に導かれて竜興寺の門をくぐったときはすでに死は栄叡を取り巻いてしまっていた。寺にはいった栄叡の亡骸を前に、鑒真はその枕頭にすわってさながら生ける人間に対するように言った。

「私が桂林を経て江南を目指したのは、叡の健康を案じたからである。一刻も早く暑熱の地を離れたかったからである。またこんど、広州からの招きに応じたのは、叡の健康が回復したので、江南へ帰る代わりに広州へ行って日本への船便を得ようと思ったためである。しかし、いまやすべてはむなしいことになってしまった」

鑒真の言葉が途切れると同時に、慟哭の声がそこここから起こった。

その翌日、栄叡は竜興寺の裏の岡に葬られた。普照がその亡骸の上に最初の土をかけ、鑒真、祥彦、思託の順でこれにならった。天宝八年の暮れのことである。開元二十一年（天平五年）に入唐してから十七年を経ている。普照は一行の中でいまやただ一人の日本人であった。鑒真の渡日については一行の中にもいろいろの考え方をしている者があったが、ともかく、栄叡のひたむきな情熱が鑒真を動かし、天宝元年以来今日まで一行をいつ実現するともわからぬ渡日の冒険へと駆り立てて来たのであった。普照自身にしてもこの八年間の流離の日々はまったく栄叡に引きずられて来ていたと言ってよかった。普照の心には、計画が蹉跌するごとに鑒真を日本へ招ずるということに対する疑惑の念が頭をもたげてきたが、いつも栄叡の不屈な闘志に押し切られていた形であった。そ

の栄叡は今は亡かった。

栄叡の喪をすますと、一行は竜興寺を出て、端州の大守に迎えられて、広州まで案内してもらった。広州にはいるとこんどは都督盧煥が道俗を率いて、城外まで出迎えた。接待はすこぶる鄭重をきわめ、一行は導かれて大雲寺へとはいった。この寺には大棗のような実をつけた訶梨勒樹が二本あった。ここで一行はいろいろの供養を受け、登壇授戒を求められた。

この大雲寺に滞在中、普照は栄叡を喪った寂しさを紛らわせる気持ちも手伝って、毎日のように付近の名所仏跡を見回った。だいたいこの広州の城は三重の城壁を持ち、都督盧煥は文武の権を掌握して、その権勢は玄宗帝にも劣らぬくらいで、商館、民家は城の内外に満ちあふれていた。郊外には何里ともわからぬ荔枝(1)の森が続いており、緑の葉の中に、点々と鮮紅色の果実が配されていて、普照の眼にはこの世ならぬ美しさで映った。この芳香とみずみずしい甘露を持った果実を、最近玄宗皇帝が愛妃楊貴妃のために、騎馬をもって長安に送るように命じて来たという噂が巷間にはもっぱらであった。

開元寺にも行った。ここには白檀で造られた華厳九会(2)があった。かつてこの寺に止住していた胡人が、工匠六十人を率いて、三十年の歳月と三十万貫の費用とを投じてこれを造り、もともと、天竺へ持って行くつもりのものであったが、採訪使劉巨鱗が委細を奏上し、ために勅が下ってこの寺へ止め置かれるに至ったものであった。七宝をもって荘厳してあり、その美しさは形容しようのな

（1）福建、広東、四川に産する木で、肉が白く甘い味のする汁の多い実をつけるという。（2）『華厳経』に説く毘盧舎那仏の説法を三段三列に曼荼羅ふうに配置したもの。別に華厳変相ともいう。（3）インド。（4）仏像・仏堂を飾る装飾のこと。

いものであった。

また普照は婆羅門の寺へも行った。婆羅門の寺は三つあって、そのいずれにも梵僧が止宿していた。その寺の一つには池があって、その面を青蓮華がおおっていた。これについて、思託は「華葉根茎並に芬馥奇異なり」と記した。

この蓮池のある婆羅門の寺へ行ったとき、普照はこの寺に日本僧が半年ほど前より止宿していることを聞いて、ひどく懐しい気持ちがして、それから何回か尋ねて行ったが、いつも留守で会えなかった。

しかし、一か月ほどして何回めかに行ったとき、普照が朱や黄や緑で塗られた奥まった小さい門の横手の建物の内部に見出した人物は思いがけず戒融であった。二人は思わず互いの眼を見入った。そして互いの両腕をそれぞれの両の手で握り合った。戒融も寄る年波にはかなわないと見えて老けていた。前歯が二本欠けていたので、笑うと多少妖怪じみて見えた。戒融は鑒真や普照たちがこの地に来ていたことは噂で知っていたと言った。どうして尋ねて来なかったのかと、普照がなじると、これだけは昔と変わらない皮肉な口調で、

「だんだん日本人に会うのがいやになる。故国の土を再び踏むまいと決心した者には、故国の匂いを持っているものはなべていやなものだ」

と言った。戒融は梵僧といっしょに暮らしているためか、何から何まで梵僧臭くなっていた。か

(1) インド四姓の最高に位する種族で、神の知を持つものとして王者の上にあって権威をふるった。婆羅門教は仏教以前に同族を中心にひろまった一種の国民的宗教である。(2) においのさかんな有様。

らだもやせて色も黒くなり、梵僧独特の着ふくれた風態をしていた。普照が栄叡の死を語るとそのときだけ、戒融はさすがに暗然たる表情をして、

「惜しい男を失くしたな」

と言って、それからしばらく瞑目していた。

その日、普照は戒融に案内されて、異国の食物を食べるために異国の船の群がっている港へ出た。珠江の江口であった。婆羅門の船もいれば、崑崙の船も、ペルシャの船もいた。そしてどの船も異国の品物を山のように満載しており、船の深さは六、七丈もあった。港には獅子国、大石国、骨唐国、白蛮、赤蛮等、今までにその名を聞いただけで一度も眼にしたことのない、皮膚の色も眼の色もまったく違った異国人たちの姿が見受けられた。その多くが船に居住しているということだった。

埠頭に近い一郭に食物屋がぎっしりと並んでおり、人々はそこに群がっていたが、その食物屋の一軒で二人は異国の酒を飲んだ。そのとき、普照は戒融の口から、彼が海路天竺へ渡ろうとしていることを知った。行きは海路を取り、帰途は玄奘三蔵の『大唐西域記』の道を取って唐土へ帰るつもりだと戒融は語った。戒融の口からは玄奘三蔵を初めとして、多くの唐僧たちによって切り開

(1) マレー人の漢名。(2) 約一八～二一メートル。(3) 六〇二～六六四。十三歳で出家し、仏教の哲学に関するあらゆる種類の勉強をなし、律についても深く研究したが、各人各説であるためいずれに従うべきかに悩み、インドに赴いて学び、これを解決しようと決心した。十七年にわたるインド旅行と留学の末、六四五年に帰国、以後没するまで二十年間、仏典の翻訳に没頭し七〇〇〇部一三三八巻の大事業を完成した。『大唐西域記』は右のインド旅行でえた見聞を太宗の命によって巡歴した約一四〇国の気候、物産、風俗、地理などを記述したもの。

かれた天竺への道やそれに関する旅行記の名が出たが、普照はその一つの名をも知っていなかった。そうした知識からはひどくうとかった。

「お互いに海を渡ることで苦労しているな」

戒融は言って笑った。同じように海を渡ることで苦労しているといっても、いっしょにしてもらっては困ると普照は言いたかった。戒融の言葉に反発したいものを普照は感じたが、しかし、異国人たちの群がる埠頭にいて、異国語を耳にし、異国の船を眼のあたりに眺めていると、普照も戒融の気持ちは気持ちとして、それを必ずしも否定する気にはならなかった。

この日、戒融から、普照ははからずも業行の消息を聞いた。戒融は、栄叡や普照のここ何年かの苦労に対してはさほど動かされているふうではなかったが、業行のことになると、口をきわめて賞賛した。といっても、戒融は業行に会っているわけではなかった。戒融は戒融なりの知人の筋をあちこちに広く持っていて、業行の近況もそうした方面から耳に入れたものらしかったが、かなりくわしいものであった。業行は洛陽の大福先寺にいて、相変わらず儀軌類を写しており、大福先寺でも業行を特別に扱って坊舎を与え、衣食を給しているということであった。からだはすっかり小さくなり、背は曲がり、視力は衰え、その姿は見る影もなくなっているらしかった。そんな業行の姿が普照には眼に見えるようであった。

普照が戒融に会ったのはこの日一回きりであった。普照は数日後にもう一度婆羅門寺を尋ねて行ったが、そのときは戒融が多勢の梵僧たちとともにいずこへともなく立ち去ったあとだった。

広州の地に鑒真らは一春を過ごした。異国との往来頻繁な港ではあったが、日本への便船はなかった。鑒真はついにここで渡日の便宜を得ることをあきらめて、こんどは韶州(1)を経て、江南を目指すことにした。一行の出発に当たっては、広州の道俗は大挙して遠方まで一行を見送って来た。

北江を船でさかのぼること七百余里、一行は韶州に到着、禅居寺にはいって、久しぶりで船上の眠りでない眠りをむさぼるように取った。そして韶州の官人道俗に迎えられて郊外の法泉寺(2)に移った。この法泉寺は則天が慧能禅師(3)のために造った寺で、禅師逝いて三十八年、方丈には禅師の影像が残っていた。この寺にしばらくいて、こんどは開元寺に移った。

開元寺に移ったとき、普照の気持ちは決まった。栄叡の亡い現在、鑒真を初めとする一行の僧たちをさらに新しい冒険へかり立てる力は自分にはないと思った。それからもう一つ、他の唐僧たちとは違って、普照は日本の留学僧としての資格はなくなっていたし、鑒真らと再び揚州の地を踏めば、鑒真らの使嗾者として官からいかなる罪が下らないとも限らなかった。このことについては普照ばかりでなく、祥彦も思託も同じ見方をしていた。彼らにしても今や一行中ただ一人になった日本僧の立場がすこぶる微妙なものに見えているようであった。

「和上は栄叡の死後、渡日のことについては一語も語られない。まだ日本へ渡ろうとしていられるのか、その考えを捨て去ったのか、その心の内部はわれわれにはうかがい知ることはできない。自分たちは和上の心のままである。和上がなお日本へ渡ろうとなさるなら、私たちはよろこんでお供するし、もはやその考えを捨てて唐土にとどまられるというのなら、私たちもまた唐土にいて和

(1) 現在の広東省曲江県付近。(2) いまは南華寺といい曹渓という川の東岸にある。いくつもの堂塔を有する大伽藍である。(3) 六三八～七一三。六祖大師、曹渓大師ともいう。シナ禅宗の第六祖。嗣法の門弟四三人。南宗禅と呼ばれる、シナの禅宗はこの門下の時代から盛大になる。

上のおそばにいるだろう」

祥彦は言った。そして、

「私たちの態度は決まっているが、照上座(1)の立場は違っている。和上の心がいかようなものであれ、あなたは日本へは帰らなければなるまい」

思託のほうはとくにこのことについては意見を述べなかったが、渡日の問題に関する限り若い唐僧の考えも祥彦と同じであろうことは普照にわかっていた。祥彦と思託を除いた他の者の気持ちは、栄叡の没後表面には出さないが、渡日をはっきりと忌避していることは今や明らかであった。

普照には、鑒真の考えだけがわからなかった。渡日問題についてはいっさい口を緘して語らないし、その日本の武人のように意志的な激しいものを持った顔からは、いかなる考えをその内部に蔵しているかうかがうことはできなかった。ただ一つ普照にわかっていることは、今や鑒真が再び揚州を目指しているということだけであった。

鑒真がいかなる考えを持っているにせよ、普照は自分がこの一行から離脱することによって、いちおうこの小さい団体をしばっている渡日計画が解消することを知っていた。そうなれば、それこそ一行の大部分の者の望んでいることであり、祥彦、思託にとってもあながち不本意なことではないはずであった。鑒真を伝戒の師として日本へ招ずることは日本にとっては大きい問題であったが、しかし、さらに高所に立って考えれば、鑒真ほどの高僧をこれからも生死のほどもわからない渡海の冒険に誘うことがいいことか悪いことかすぐには判断できなかった。

(1) 上座は、寺内の僧を統轄し、すべての事務を総覧する僧の職名、年長者で高徳の僧が任命される。

普照は自分だけこの一行から脱しようと思った。そうすることによって、栄叡の死は意味を失い、自分のここ八年間の放浪生活の労苦もまったく徒労に帰するわけであったが、この際自分の信ずる道を取る以外しかたがなかった。普照の瞼には鑒真にかわって、新しく業行が浮かんで来ていた。業行の持っているあの膨大な経典類の束は、これこそなんの躊躇も疑いもなく日本へ持ち運ばなければならぬものであった。不幸にして彼の仕事の一部は日本の土を踏まずして、南の辺土にとどまることになったが、しかしまだ彼の写した経典の山は大きかった。それを故国へ運ぶ仕事に、普照は自分のこれからの生命を賭けようと思った。

こうした普照の考えは栄叡の没後、約半年の間に彼の心の中で徐々に固まってきたものであるが、しかし、これを決定的なものとしたのは、韶州で三つの寺を転々としている間に、鑒真の視力が急速に衰えて来たことであった。鑒真は六十三歳になっていた。一行の者のすべてが、若い思託は別にして、ほとんど別人のような風貌になっていた。体力も衰え、相貌も変わっていた。ことに老齢の鑒真ははなはだしかった。今や一刻も早く自分はここを去り、鑒真は官の庇護のもとにおかなければならぬと普照は思った。

普照は鑒真の前に出て、自分の考えを語った。自分はここで一行に別れ、鄧山の阿育王寺に行って、そこで日本への船便を待ちたいと思う。ごいっしょに日本へ渡ることのできないのは残念だが、これ以上流離艱苦の生活を和上に強うべきではないと信ずる。鑒真は瞑目して普照の話すのを聞いていたが、やがて眼を大きく見開いて、普照を見つめると、

「私は戒律を日本国へ伝えんがため願を発して何回も海に浮かんだ。が、不幸にしていまだに日

本の土を踏めないでいる。しかし、この本願はいつかは遂げなければならぬものである。現在、自分たちは揚州を目指している。永年の流浪の生活で一行の者はみな疲れ果て、祥彦も健康をそこねているし、私の眼も衰えている。ひとまず揚州に帰り、からだを休め、再挙をはかる以外しかたがないだろう。再挙までにはなお多少の年月を要すると思う。しかし、照は立場が違っている。このままではいたずらに滞唐生活が長引くのみである。もし、船便があれば先に日本へ帰るのもよかろう。ただ多年労苦をともにし、いっしょの船で日本へ渡れないことが残念である」

と言った。そして言い終えると、普照に近く寄るように言った。普照は鑒真のそばに膝を進めた。普照は和上の手が自分の手を取るのを感じた。鑒真に手を取られたまま普照は泣いた。

翌日、普照は永年艱苦をともにした一行と袂を別って一人陸路鄧山を目指した。思託は普照を送って来たが、いつまでたっても別れ去ることができなかった。城門を隔たること十里の地点で、二人はようやくにして反対の方向へ歩きだした。このとき天宝九年の夏六月、普照は四十のなかばを過ぎ、思託は二十七歳であった。

普照は秋の終わりに鄧山の阿育王寺に到着したが、この半年にわたる旅のあいだで二つの不思議なことに会った。

一つは、彼が韶州を発して二か月ほどしてからのことである。普照はそのとき福州へはいろうとしていた。福州への道を取ったのは、福州から温州へ出れば、あとは天宝三年に鑒真とともに一度歩いたことのある道で、鄧山へ行くには勝手がわかっていたからであった。

普照は大庾嶺を越え、二か月にわたった山岳地帯を抜けてようやく海に近い平野へはいっていた。平坦な道が続いていた。ある日午刻を少し過ぎたころ、にわかに天日が曇り、夜のように四辺が薄暗くなった。ま夏の季節だというのに、ひんやりとした風が吹き、街道の樹木の葉がざわざわと音を立てるのが聞こえた。普照は暁闇のような薄暗さの中に立ちすくんだまま、一歩も踏み出せないでいた。そのとき、

「照よ」

というまぎれもない鑒真の声を、普照はすぐ身近いところで聞いた。はっとして四辺を見回したが何も見えなかった。

「和上」

普照は叫んだままそこに立っていた。どうして鑒真はこんなところに来られたのであろうかと思った。その異変はごくわずかの時間のことで、やがてまた徐々に昼の明るさに立ち返った。もちろん鑒真の姿はどこにもなかった。普照は鑒真の身の上に何か変事でもあったのではないかと思った。もし、鑒真が一と月前と同様に韶州に今もとどまっているのがわかっていれば、すぐにも引き返して行きたい気持ちであった。

あとでわかったことであったが、このとき、普照が案じたように鑒真の身の上には変事があったのである。

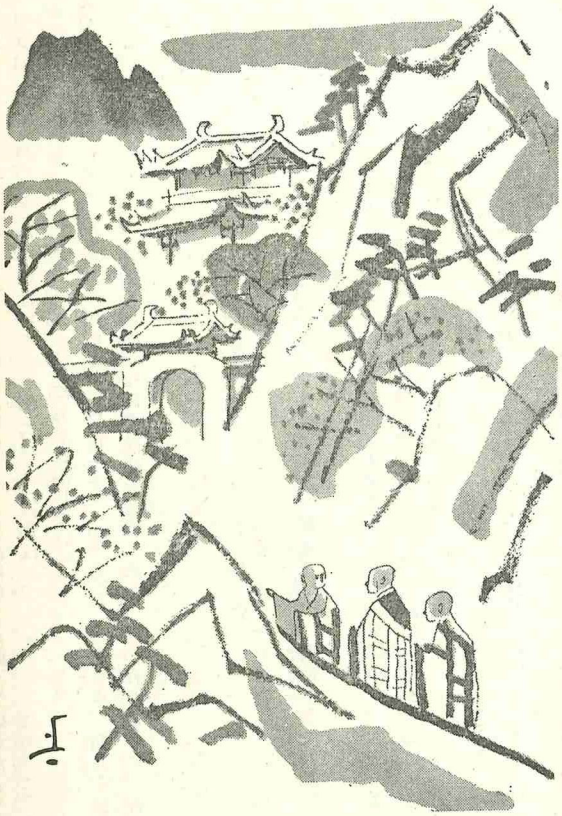
（1）別名を梅嶺といい五嶺山脈の東端、高さは海抜一二〇〇メートル前後。この山脈は東西に連っていて嶺より北を嶺北、南を嶺南と呼び、華中と華南を分っている。

普照が立ち去ったあと、鑒真は日一日眼光が薄れ、物象がしだいにぼんやりしてくる一方だったので、周囲の者の勧めもあって、眼をよくなおすという胡人の療治を受けた。が、その効験もなくついに明を失するに至ったのである。異変が起こり、普照が「照よ」という和上の声を聞いたのはこの鑒真失明のときのことだったのであった。

もう一つの不思議は、さらに一か月ほどして、普照が福州へ出て、福州から海岸沿いに温州へ抜けているときのことであった。普照はその夜温州の荒廃した禅寺へ泊まっていたが、明け方近く祥彦の夢を見た。祥彦はひどくやせていた。普照が一行と別れたときも、祥彦はとかく健康がすぐれず、それでなくてさえ貧弱なからだにやせが来ていたが、夢の中の祥彦はもっと痩せていた。祥彦は懐しそうに普照の前へ来てすわると、静かな声で「南無阿弥陀仏」とひとこと言った。それで夢は破れた。床の上に起き上がった普照の耳には、いつまでも祥彦の声が残っていた。普照は激しい不安に襲われて、祥彦の身の上が気遣われてならなかった。

これもまたあとで知ったのであるが、このとき祥彦は栄叡よりおくれること幾ばくもなくして他界したのであった。鑒真の失明後一行は開元寺を発し、霊鷲寺、広果寺を巡遊し、貞昌県(1)に至り、梅嶺関の嶮(2)を越えて嶺北に出て、贛江を船で下り、虔州の開元寺にはいった。ここには中書令鐘紹京(3)が隠棲していて、一行は乞われるままにその邸にはいり、壇を立てて戒を授けた。そして再び舟上の人となり、吉州(4)を過ぎ長江へ出ようとした。

(1) 現在の広東省南雄県の東。 (2) 大庾嶺の別名。 (3) 国内一般の政務を担当する中書省の長官。 (4) 現在の江西省吉安。



明け方、病床にあった祥彦は突然起き上がると端座して、思託に和上が眠っているかどうかを聞いた。思託がまだ鑒真の目覚めていないことを伝えると、祥彦は、

「いま私の命数は尽きようとしている。和上にお別れがしたい」

と言った。思託はそのことを鑒真に知らせた。鑒真はすぐ起きると、香を焚き、曲几を持って来て、それに祥彦をもたれさせ、西方に向かって阿弥陀仏を念ぜしめた。言われたように、祥彦は素直に、

「南無阿弥陀仏」

と、一声唱えた。そしてあとはなんの声もその口からはもれなかった。

「彦、彦」

と、鑒真は呼んだ。そのときはもう端座したまま祥彦は息絶えていた。普照が夢で祥彦に会ったのはこのときのことであったのであろう。

普照は阿育王寺にはいると、一か月ほどそこで長い流離の生活の疲れを休めた。ここには旧知の人も多勢いて、さながら郷里へ帰ったような気持ちで、長いあいだ放浪した辺土のことがまるで夢の中の出来事のように思われた。

普照は体の疲れが癒ると、戒融から洛陽の大福先寺の坊舎にいると聞いた業行に会うためにすぐ洛陽への旅に上った。途中揚州を過ぎたが、まだ鑒真和上の一行が揚州へはいったという噂は聞かなかった。

普照にとって洛陽の都は、開元二十四年玄宗の駕に随ってこの地を去って以来のことであった。

十四年ぶりで大福先寺を尋ねると、かつての師定賓はすでに他界しており、知人もいなかった。しかし、戒融が言ったように、かつて、景雲という不幸な老僧のいた同じ坊舎に、業行は止宿していた。普照が寺僧に面会の仲介を頼むと、すぐ業行は姿を現わした。業行はまたひと回り小さくなっていた。彼は普照の顔を見ると、はっとしたような表情をして、いったいどうしたのかと聞いた。

普照がその寺の庭で漂流から始まる長い放浪生活のことを手短く話すと、業行はひどく不機嫌な顔になって、歩きながらがたがたとからだをふるわせた。そして、それでは自分が預けたあの経巻類をそんな南の国の名も知れない寺へ置いて来たと言うのか、と相変わらずはっきりしないしゃべり方で、しかし明らかに激しく非難する口調で言った。

「名も知れない寺と言っても、大雲寺は振州では一、二の名刹です。海底の藻屑になったと思えば、それが現在、この唐土にあって、仏陀の功徳を説いていることであきらめていただけませんか」

普照は静かに諭すように言った。他の者から言われたら腹立たしかったに違いないが、業行に言われると、さして腹は立たなかった。それに日本へ送り届けると言っておきながら、何千里も離れている南海僻阪の地へ置いて来たのであってみれば、たとえやむをえない事情にあったとは言え、自分のほうに落ち度があるわけであった。

「あれは日本へ持って行くための経巻です。なるほど仏像以外一物もない辺土の寺へ収めたとすれば意味はあるでしょうが、しかし、あれは日本へ持って行くために、私が生涯をかけた仕事の何分の一かです」

「では、船が来るまで何年あるか知りませんが、そのあいだに、振州の大雲寺に置いて来た経巻類の写経を私がやりましょう。たとえいくらかでも、私の力でそれを埋めましょう」

普照は言った。ほんとうにその仕事で船便のあるまでの時間を埋めようと思った。業行のためでもあり、また当然自分の果たすべき仕事でもあるように思われた。

普照は業行から振州の大雲寺に置いて来た写経の目録の控えを写してもらうと、それを持って再び覃山の阿育王寺へ帰った。途中揚州へ立ち寄ったが、まだ鑒真ら一行の噂は聞かなかった。

普照は阿育王寺では、そこの廃園のような感じの竹の疎林に面した一室で、業行との約束を果たすために写経の仕事に専念した。普照が写さなければならぬものは義浄訳の経典ばかりで、手にはいるものもはいらないものもあったが、普照は簡単に手にはいるものから写していった。

普照が、鑒真らが揚州へ帰着したことを噂で知ったのは天宝十年の春であった。

端州の竜興寺において栄叡に死なれ、それから幾ばくもなくして自ら盲い、さらに贛江を下る船の中でこれまで影の形に添うごとく付き随っていた祥彦に先立たれたあとの鑒真の行動については、普照は後年のことではあるが、それを思託から聞くことができた。

鑒真の一行は吉州を出て、さらに贛水を下り、南昌を過ぎ、鄱陽湖を通り、江州(1)を目指して旅を続ける途中、廬山の東林寺(2)に立ち寄った。ここは晋の慧遠法師(3)が太元十一年(4)に建てた寺で、慧遠はここに壇を立て戒を授けたが、そのとき天が甘露を降らしたので、世人はこれを甘露壇と称した。

(1) 現在の江西省九江県である。(2) 現在の江西省九江県廬山北三区東林街の北にある。(3) シナの国号。ここは東晋(二六五～四一九)をさす。(4) 三三四～四一六。中国浄土宗の祖。廬山の東林寺で行を積み、三十年間下山しなかったという。(5) 西暦三八六年。

この甘露壇は現在もなお存在し、現に最近、鑒真の弟子の志恩律師がこの寺へ来て授戒を行なったが、そのときもまた天は甘露を降らした。そのとき列席していた者の着衣をぬらした露は、ある粘りを持っていて、その色は紫で、その味は蜜より甘かった。道俗はこれを見て、慧遠法師の故事とまったく同じであることに驚き、甘露壇の名の偽りでないことを知ったと言う。

こうした自分の弟子に関する噂を懐しく聞きながら、鑒真はここで三日を過ごし、それから潯陽の竜泉寺におもむいた。この寺も慧遠法師の建てた寺であるが、建てたとき水がなかったので、慧遠法師は願を発して錫杖で地面をたたいた。するとどこからともなく二匹の青竜が現われ、錫杖を立てたところから天に上った。と見る間に、水は地面から三尺の高さで噴きだした。この伝説によってこの寺は青竜寺と名づけられていた。

一行はここから陸路を江州城へと向かった。江州(現在の九江)では大守が州内の僧尼、道士、女官たちを集め、また州県の官人、百姓を集め、香を焚き華を飾り音楽を奏して一行を迎え、三日間供養した。そして一行の出発に際しては大守親しく潯陽県より九江駅まで見送った。鑒真らはここで船に乗り大守と別れた。

それから大江を下って東すること七日、潤州江寧県(現在の南京)に到着、ここでは瓦官寺に詣でて有名な宝閣に登った。閣は梁の武帝の建てたもので、二十丈の高さを持ち、三百余年の歳月を経て、多少傾いていた。伝説によると、一夜暴風が吹き、翌朝人が見ると閣の下の四隅に塔を支えるようにして立った四神の跡があった。そんなことから現在でも四神王の像が閣の下隅に造られて

(1) シナの魏晋南北朝時代における南朝の一(五〇二～五五七)。

あった。高さは三尺で、その下端は地に三寸ほどはいっていた。問題の神跡というのもいまもなお存していた。

この江寧県にはおびただしい数の伽藍があった。現存する江寧寺、弥勒寺、長慶寺、延祚寺等、いずれも梁の武帝の興建にかかるもので、一行は次々にそれらの寺に詣でたが、荘厳も彫刻もその巧を尽くしたものであった。

一行がそうした見物に日を送っているある日、思いがけずこの地からほど遠からぬ摂山の麓の栖霞寺に止宿していた霊祐が尋ねて来た。霊祐は鑒真の前に出ると、五体を地に投げ、その足に顔をすりつけて、涙に顔をぬらして言った。

「大和上は遠く東の日本国へ向かって去って行かれました。私は一生再びお目にかかることはできないと考えておりましたが、今日こうしてはからずもお目にかかっております。まことに盲いた亀が眼を開いて天日を仰ぐような思いでございます。戒燈は再び明るくなり、街衢に立てこめていた陰鬱な気はたちまちにして消え去ってしまうことでありましょう」

鑒真も現在は、かつての好意的密告者に対する怒りを解いていた。鑒真は霊祐に案内されて、盲いている身を栖霞寺に移した。

この栖霞寺は、斉の永明七年に明僧紹が自宅を捨てて寺としたのが始まりで、三論宗の高僧慧布、慧峯らもここに住んだことで知られていた。また近年、霊祐のほかに同じ鑒真の弟子である璿光、希瑜、曇朏らもここに住んでいたことがあり、鑒真にとっては因縁浅からぬ寺であった。

(1) 南斉（四七九～五〇二）ともいう。シナの南北朝時代の南朝の一。

ここにとどまること三日、摂山を下って、いよいよ最後の行程である郷里揚州への道を取った。大江を船で渡り、瓜州から新河の岸に至り、一行は何年かぶりで遠く平原の果てに懐しい揚州城の城壁を見た。しかし一行は城内にはいらないでひとまず郊外の既済寺にはいった。この既済寺は第一回の渡日の計画のとき使った寺で、鑒真や思託にとっては、ここの一木一草には感慨深いものがあった。

鑒真が帰って来たことを聞くと、江都の道俗は城を出て道路に満ちあふれ、出迎えの船は舳艫相接して運河を埋めた。

かくして一行は城にはいり、鑒真はもとのように竜興寺に住むことになった。鑒真は長い放浪生活があたかもそこになかったかのごとく、何年か前と同じように竜興寺で意志的な顔をまっすぐに上げて、律を講じ戒を授けた。ただ昔と違うところは、眼窩が深く落ち窪み、その両眼が痛々しく盲いていることであった。

五　章

普照は阿育王寺で天宝十年の春から夏へかけて、毎日のように写経の筆をとった。春に鑒真らの一行が揚州へ帰り着いたことは聞いたが、普照は揚州へは出かけて行かなかった。自分が顔を出して鑒真の気持ちを乱すことを恐れたことが一つ、もう一つはそこへ行く時間が惜しまれたからである。普照は写経の仕事に取りかかってから初めて、それがいかに時間と労力を要するたいへんな仕事であるかを知った。朝から晩まで一室から出ないで机に向かっていても、一日に進捗する分量は知れたものであった。

普照は、鑒真が竜興寺ばかりでなく、崇福寺や大明寺や延光寺などで律を講じ戒を授ける噂を聞いた。そうしたことを耳にした日は、普照はときどき写経の筆をおいては、眼を暗い室内から明るい窓外へと向けて、和上の姿を瞼に思い描いた。和上が盲いたことは人伝てに聞いていたが、普照はどうしても師の盲いた顔を想像することはできなかった。

写経の仕事のうちに普照は天宝十年を送り、十一年を迎えた。心待ちにしている渡日の船便はなかった。しかし、普照は渡日の船便を自分が待っているのか、あるいはそれがないことを望んでいるのか、自分でもはっきりと自分の気持ちを見定めることはできなかった。普照は自分がいつか業行に似て来ているのを知った。業行のために写した経巻は天宝十年いっぱいで三十余巻を数えていた。しかしまだ写すべきものの約半分であった。残りの半分を写し終わるまでに、どうか船便がな

いようにと、そんな矛盾した思いに取りつかれている自分に気づくと、普照は今さらのようにかつて業行が持っていた、第三者には煮え切らないとしか見えなかったその複雑な表情の意味に思い当たるのであった。

普照は年が改まるとすぐ洛陽に向けて出発した。義浄訳の経典で阿育王寺で入手できないものの所在を業行に聞くためであった。大福先寺に尋ねて行くと、業行は病床に臥していた。これまで普照が尋ねて行ったときはいつも彼は写経の筆をとっていたが、こんどだけは机から離れて床の上に仰向けに横たわっていた。

義浄が大薦福寺において景雲二年に訳出した『稱讃如来功徳神呪経』等十二部二十一巻の経典の写しの所在を聞くと、業行は、それが蔵されていそうな幾つかの寺の名を挙げた。その全部が長安の寺であった。普照が長安まで行く労を省くために、洛陽か揚州の寺々で、それのありそうなところを知っていないかと聞くと、業行は、

「知りませんね。経典を求めるということはなかなか困難なことですよ。私は一つの経典を捜すために西都と東都を何回も往復した」

と言った。いかにも普照の骨惜しみする態度を難ずるような口調であった。この前会ったときに初めて感じられた業行の気むずかしさは、一年ほどの間にいっそう激しいものになっていた。往時の、一見愚鈍に見えるような人のよさは表面から消えてしまい、皺の深く刻まれている顔には老いの気むずかしさだけが目立って来ていた。生涯の大部分を異国にあって写経の仕事に過ごして来た

（1）西暦七一二年。

人物の、当然行きつくべきところへ行き着いた姿といった感じであった。

普照は振州の大雲寺へ業行が写した二箱の経巻を納めて来たことに対して、業行の怒りがまだ消えていないことを知った。しかし、現在の普照には業行の怒りの執拗さが、たとえそれが自分本位のわがままな態度であるとは言え、やはり理解できないではなかった。大雲寺に納めて来た二箱の経典は確かに業行が文字どおり心血を注いだものに違いなかった。

普照は洛陽を発して長安に上った。天宝元年帰国を思い立ってこの都を離れてから満十年の歳月が流れていた。眼にはいるすべての物が、普照には懐しかった。普照は自分がかつて留学僧として配せられていた崇福寺を尋ねた。情熱の全部を傾けて『四分律疏』や『飾宗義記』等をひもといたころの思い出が寺門をくぐるとすぐ胸によみがえって来た。旧知の人が何人かいたが、みな普照がまだ日本に帰らず唐土にとどまっていることを驚いているふうであった。

普照はこの寺に彼が求めている経典の写しのあることを知って、それを借り出すことを交渉したが、普照が留学僧としての籍もなく、また在唐八年以上の外国僧に与えられている帰化僧としての資格も持っていないために、それは許可されなかった。

普照は阿倍仲麻呂をわずらわして、経典の借用方の便宜を取りはかってもらおうと思った。当時、仲麻呂は衛尉卿の官名を帯びていて、武器、武庫、守宮の三署を統べ、器械文物の政令を掌握している高官であった。そしてまた李白、(1) 王摩詰ら(2)と交わってその文名は一世に高かった。普照の十年の流浪生活のあいだに、仲麻呂は廷臣として、文人としていっそう華やかな存在になってい

(1) 七〇一～七六二。唐の詩人。杜甫と並んで李杜と称される。(2) 七〇一～七六一。王維のこと。盛唐の詩人。山水画の祖師でもある。

た。かつて普照は洛陽の皇城の中にある門下外省で仲麻呂に会ったことがあったが、こんどはそのときのように簡単には会えなかった。幾人かの役人を通して、普照の言葉は仲麻呂のもとに達し、その返事はまた何人かの人を介して普照に伝えられた。普照は仲麻呂に会うために四日間待たなければならなかった。

普照が仲麻呂と会ったのはゆるやかな坂道を上り切ったところにある官庁街の一角であった。仲麻呂は十余年前そうであったごとく、いまも終始無表情で無感動であった。彼は普照の言葉を、いかにも耳で受け取るといったふうに、少し横向きの姿勢で聞いていたが、やがて普照の言うところを理解したのか、そのままの姿勢で一つ二つ大きくうなずいてみせた。そして彼は、今日はこれから用事があるからと言って、そのまま立ち上がって、自分から先にその部屋を出て行った。

そんな仲麻呂は、普照にはひどく冷たくたよりない老人に見えた。しかし、この対談しているときの印象とは違って、すぐその翌日、普照は仲麻呂の部下の官吏の訪問を受け、すべて普照の希望するように取りはからってあるからという仲麻呂の言葉を伝えられた。実際にまたそのように取りはからわれてあった。

普照はそれから夏まで崇福寺の寺坊の一室で、『稱讃如来功徳神呪経』を初めとする幾つかの経典の文字を写す仕事に没頭した。この間に、普照は玄朗の消息を知りたくて、八方に声をかけておいたが、ついにその後の玄朗については何も知ることはできなかった。

七月、普照は洛陽から来た僧侶から、日本の遣唐使船が揚州の海岸に漂着し、四船の乗員全部が無事に唐土を踏んだという話を聞いた。普照にとってはまさに寝耳に水の話であった。二十年ぶり

で第十次の遣唐使の一団は唐土へ派せられて来たのである。

それから一か月ほどして、長安の都でも日本の遣唐使入唐の噂が一部に流れた。このころから普照は寸陰を惜しんで写経に没頭した。遣唐使の一行が入唐した以上、彼らを乗せて来た船が帰国するのはそう遠いことでないことは明らかであった。早ければ今年の秋、遅くても来年中には帰国するものとみなければならなかった。そのころから追い立てられるような気持ちで普照は終日机に向かった。

奈良の朝廷で第十次の遣唐使派遣のことが議せられたのは天平勝宝二年（天宝九年）のことであった。この前の多治比広成らのときから二十年めのことである。九月二十四日に藤原清河が遣唐大使に、大伴古麻呂が副使に任ぜられ、判官、主典の発表もあった。続いて十一月にこの前の遣唐船で帰国した吉備真備も一行に加わることになり、大伴古麻呂と並んで副使の任命をみた。

しかし、藤原清河らが内裏において節刀を賜わったのは翌々年の勝宝四年閏三月九日のことである。この日光明皇后は大使清河に御歌を賜わった。大船に真梶しじぬきこの吾子を韓国へやるいはへ神たち。*これに対して清河は、春日野に斎く御室のうめのはな栄えてありまて還りくるまで、*と詠った。

また衛門督大伴古慈斐はその一族である副使の大伴古麻呂のためその家で壮行の宴を張った。から

（1）鑒真招来帰朝ののち、陸奥鎮守将軍・按察使ともなったが橘奈良麻の変にあい投獄されて杖の刑をうけて獄死した。
（2）宮門を守る衛門府の長官。（3）壬申の乱で功績があった大伴吹負の孫として持統天皇の九年に生まる。若くして才幹あり家をおこし出世して衛門督にまで累進したがにわかに出雲守に左遷されさらに土佐守に移された。橘奈良麻の変にあい、任地に流された。

くにゆきたらはして帰りこむますらたけをに御酒たてまつる。*——万葉集所載のこの歌は、このときの宴席で多治比真人鷹主が古麻呂に贈ったものである。

春の終わりに難波津を発した四船五百余人が無事に寧波付近に上陸したのは七月であった。そして一行は秋の終わりに都長安にはいった。

普照は一行の入京の噂を聞くとすぐ鴻臚寺（迎賓館）に久しぶりで故国の匂いをいっぱい身に着けた人々を尋ねて行った。普照はそこで清河にも、古麻にも、真備にも会った。

見るからに名門の出であることを思わせる端麗な容貌と、閑雅な挙措動作を持っている大使清河は、普照に長い滞唐中の生活について尋ねた。普照は鑒真と労苦をともにしたこの国での何年かにわたる流離の生活をかいつまんで語ったが、その話はさして自分と同年配と思われる故国の高官を感動させることはできなかった。

感動しないという点では副使の吉備真備も同じであった。普照は二十年前に洛陽の四方館の一室で、当時留学生であった帰国前の真備に会っていたが、真備のほうは普照をまったく記憶していなかった。四方館では普照は真備から唐人に近い鷹揚な印象を得ていたが、いまはまったくそうしたものは感じられなかった。どこかに傲岸なところのある自尊心の強そうな気むずかしい老人でしかなかった。真備は故国で異数の出世をして右衛士督となり、年齢はいまや六十歳に近かった。真備は普照に留学僧たちの勉学方法とその専攻について一つ二つ質問した。普照は故国の高名な指導者を満足させるような答えはできなかった。栄叡は流浪生活のあいだに物故していたし、戒融とは天

（1）橘奈良麻の変のくわだてに参加したが、おそらくは発覚ののち獄死または配流させられたであろうといわれている。

竺へ行くという彼と広州で別れたまま、その後の消息についてまったく知っていなかった。玄朗についても同じであった。かつて唐土で秀才留学生として名を挙げた真備の場合と比べるとたいへんな違いであった。

普照は、真備の眼にあらわではないが、嘲笑の光のさすのを見た。真備は鑒真については当然その盛名を知っているはずであったが、普照が多年にわたる鑒真の労苦を語っても、そのために眉一つ動かさなかった。

「渡れるように準備してかかれば、自然に船は海を渡るだろう。月、星、風、波、あらゆるものの力を、船が日本へ向かうように働かせなければならぬ。もし反対の働き方をさせていれば、いつまでたっても、船は日本へは近寄らぬだろう」

そんなことを真備は気むずかしい口調で言った。まるで遭難そのものを非難しているような口ぶりで、唐土で経史を研究し、陰陽暦算を究めたという人物のいかにも口から出しそうな言葉であった。

大伴古麿だけは黙って普照の言うことに耳を傾けていたが、たれへともなく、

「それほどまでに日本へ渡りたいのなら、その鑒真とやらをいっしょに連れて帰ってはいかがであろうか」

と言った。古麿は鑒真がいかなる人物であるか、また伝戒の意味がいかなるものか知っていないようであったが、しかし、普照の言葉に多少でも心を動かしたのはこの人物だけであった。

普照はその日鴻臚寺を辞すと、久しぶりで長安の街衢を歩いたが、そのとき、一人の商人の口から宰相李林甫が薨じたことを聞いた。さすがに感慨無量であった。普照は林甫には最初の渡航計画のとき世話になって以来、一度も顔を合わせていなかった。林甫に会ったのはずい分遠い昔のことのような気がした。

普照はそれから翌天宝十二年の春まで崇福寺の一室から出ることなく、机にばかり向かって過ごした。そのあいだにときどきこんどの遣唐使船で入唐して来た若い留学僧たちの訪問を受けた。普照は、かつて自分が入唐早々景雲や業行を尋ねて行ったときのことを思い出し、現在の自分もまた、若い僧たちの眼には、あのときの景雲や業行と同じように、無気力で貧しい人物として映っているのであろうかと思った。

それらの若い日本の僧たちの口から、普照はいろいろのことを聞いた。清河らが拝朝したとき、玄宗が、有義礼儀君子の国より使臣来たると言って賛嘆したということや、仲麻呂が玄宗の命によって使節の一行を儒教、道教、仏教の経典を安置してある三教殿を初め、東西両街を埋める一百十坊中の主な寺々に案内したということや、それからまた唐朝の新年の賀筵には、清河、古麿、真備らが出席したが、その席次を新羅の使臣と争い、古麿は譲らず、けっきょく諸外国の使臣の中では最上位の椅子を占めることができたという話など。

しかし、こうした日本の使節の一行の、長安における派手な動静より、普照には、二か月前に薨じた李林甫の官爵が剝奪されたという事件のほうが強くこたえた。これは林甫が玄宗に叛意を持っていたということが、その没後わかったために採られた措置であったが、そこにはどこかに政争の匂いのする暗い不健康なものが感じられた。そしてその余波は林甫の一族すべての者にまで及ん

だ。普照は、栄叡が二十年前に大唐の政治と文化の中に、かすかに亡びに通ずるものを予感するという意味のことを言ったことがあったのを思い出した。普照自身いまそれを感じていた。

三月になると、早くも遣唐使たちの帰国のことが噂に上り始めた。それによると、秋の初めには一行は長安の都を発して乗船地へ向かうということであった。そして、こんどは阿倍仲麻呂も長い唐土の生活を打ち切って、遣唐使節の一行とともに故国へ帰るという噂がもっぱらだった。

こうした噂を耳にし始めると、普照は一日も早く長安を立たなければならぬと思った。洛陽の大福先寺にいる業行にも会って彼に帰国の準備もさせなければならなかったし、自分は自分で阿育王寺に帰り、そこを引き揚げる手はずもととのえなければならなかった。幸い、普照はこれまでに予定した経典の大部分を写し終えていた。

普照は長安を立つ二日前に、大伴古麿を尋ねて、改めて鑒真を日本へ招くということの意義を説明した。鑒真の渡日ということは、それによって、初めて日本に真の戒律が伝わることであり、その戒律が伝わるということによって、仏教は東流後百八十年、初めて完全な形を備えることになる。普照の話を古麿は黙って聞いていたが、やがて普照に、鑒真とともに招聘すべき唐僧たちの名を提出するように言った。

普照は鑒真以外に五人の唐僧の名を挙げた。現在台州開元寺に止住していると聞いている思託を初めとして、揚州白塔寺の法進、泉州超功寺の曇静、揚州興雲寺の義静、徧州霊耀寺の法載、いずれも普照の尊敬する持戒堅固な律僧たちであった。思託、法載、曇静らは第一回の渡航計画以来、つねに鑒真とともに流浪の生活に何年かを過ごした僧たちであった。古麿は玄宗に奏上して堂々と

正面から鑒真らを招ずる手段を講ずるつもりらしかった。

普照は古麿が玄宗帝へ奏上するのを待たないで長安を立った。鑒真たちのことは遣唐使たちに任せておけばいいと思った。鑒真に今もなお渡日の意志があれば日本使節の招きに応ずるであろうし、もしその意志を放棄しているならば、それを拒絶するであろう。

普照が長安を立ったのは四月の終わりであった。普照は再び見ることがないと思われる九街十二徧を最後に眼に収めるために、城を出ると北方の丘に上り、新緑に包まれた町々を眺め、そこを降りると、そのまま長安を後にした。

洛陽へ着くと、普照は大福先寺へ業行を尋ね、この二年間に自分が写した経典のことを業行に伝えた。そして遣唐使船の帰国はおそらく今年中に実現するであろうから、すぐそれに乗船する準備を始めるように勧めた。業行は自分が失った経典が自分のもとへ返ることになったことで別人のように穏やかになっていた。今まで普照に対して持っていた怒りをすっかり解き、己が老いさき短い身とおびただしい経典の山を、素直に普照の指図に任せるといった態度を示した。

普照はほうぼうに散らばっている経典を揚州の禅智寺へ集めるように言いおいて、業行と別れると、洛陽を立ち、すぐ自分は鄮山の阿育王寺へ引き返し、そしてそこで帰国の日を待った。遣唐船の出帆の日の決定次第、連絡があることになっていた。

普照には阿育王寺の生活が、長い唐土の生活の中でいちばんびったりと気持ちに合ったものであった。ことに帰国することが決定し、乗船の日の来るのを待つ間のこの地の明け暮れは身心ともに満ち足りたのびやかなものであった。五十歳にすぐ手が届こうとしている普照には、長安よりも、

洛陽よりも、揚州よりも、刺激の少ない静かな鄧山の地のほうが好ましかった。由緒ある、しかし、現在は寂びれている小さい寺も好きだったし、そこの廃園に降る陽の光も、そこの竹林を揺るがす風の音も好きだった。

そうしているある日、普照は一人の訪問者を庭先に見出した。普照はすぐには相手がたれであるかわからなかった。短い時間を置いてから、

「玄朗じゃないか」

と、普照は低い声で言った。玄朗は唐衣を着て、まったくの唐人になりきっていた。玄朗はいまにも泣きだしそうな複雑な表情を取ると、ほんとうに心からそう思っているように会いたかったと口に出して言った。お互いに久濶を叙してから、

「お願いがあってやって来た」

と玄朗は自分が尋ねて来た用件について語りだそうとした。若いころの眼鼻立ちのととのった玄朗の面影はなかった。服装も僧衣ではなく、頭髪も伸ばしており、さほど貧しげではなかったが、どことなく孤独な影を身に着けていた。

普照は部屋のなかへ玄朗を招じ入れた。すると玄朗は連れがあるが呼び入れていいかと聞いた。普照がうなずくと、玄朗は再び庭へ降りてしばらく姿を消していたが、やがて中年の平凡な顔立ちの、しかしおとなしそうな女と十歳前後の二人の女児を連れてやって来た。玄朗の妻と子供であった。女は言葉少なに普照に挨拶すると部屋へは上がらないで、子供が庭で遊びたがるからと言って、再び庭のほうへ出て行った。

玄朗が尋ねて来た用件は、妻子を同伴して日本へ帰りたいが、何かいい方便はないものかということであった。

「自分は留学僧として唐土を踏んだが、二十年間に何一つ身につけなかった。入唐当初何年か学んだものも、いまはすっかり忘れてしまった。わずかに持っているものは皮膚の色も顔立ちも異なっている妻と二人の子供だけである。金でもあれば日本への将来品の一つや二つはあがなえるかもしれないが、金も持っていない。しかし、どうしても故国へは帰りたい。自分の生まれ育った国を、妻と二人の子供にも見せてやりたい」

そんなことを玄朗は暗い表情で語った。普照も返す言葉はなかった。たとえ留学生活中身を持ちくずしていても、身一つであれば、帰国してからなんとでも言いわけは立ったが、妻子同伴での帰国となると、玄朗の立場は厄介なものであった。たとえ帰国を許されても、帰国後の世間の批判の眼は相当きびしいものと見なければならなかった。

「乗船の許可がもらえるかどうかわからないが、ともかく私から話してみよう」

普照は言った。しかし、話してやるにしても、それは使節の一行が乗船地へ来てからのことであった。普照は、いつでも乗船できるように、揚州に妻子といっしょに待機しているように玄朗に言い、そして連絡先として禅智寺の名を挙げておいた。

玄朗はこのことを普照に依頼するために遠路わざわざ鄧山までやって来たのであったが、話が終わると、すぐ席を立とうとした。普照は何年かぶりで昔の友だちと食事でもしてゆっくり話したかったが、玄朗のほうは落ち着けないらしく、旅宿を取ってあるからと言って、

「やっぱり今日は失礼しよう」

そんな言葉を残して、あわただしく辞去して行った。

玄朗が去ってから、普照は縁先にすわったまま長いことぼんやりしていた。玄朗の生き方は、留学僧としての立場から見ると、もちろんいろいろ批判すべきものを持っていたが、しかし一個の人間としてみると、少しも難ずべき点はないようであった。自分も栄叡も、鑒真を日本へ招ずるという仕事に自分たちのすべてを打ちこんで長い唐土での生活を過ごしていたが、もしこの仕事がなかったら、自分たちも玄朗のような立場になりかねなかったと思った。その差は紙一重であった。

それに玄朗は異国の女と関係を持ったが、その関係を大切にしていた。妻や子供を捨てて、自分だけ故国へ逃げ帰るというわけではなかった。妻や子供を自分の故国の自然や人情の中へ置こうとしているのではないか。普照は、玄朗のためにも、連絡のあり次第すぐこの地を離れなければなるまいと思った。

日本の遣唐使節が、玄宗に鑒真および五人の僧の招聘を上奏したのは、一行が長安の都を立つ日取りが決まってからであった。玄宗は鑒真の渡日には反対しなかったが、鑒真らとともに道士(1)もいっしょに連れて行くようにと言った。道士を日本へ連れて行くということは、使節たちにとって困る問題であった。玄宗は老子を尊び、道教を好んでいたが、仏教以外のものは日本では行なわれていなかった。

使節の一行はしかたがないので、自分たちの希望を引っこめ、玄宗の機嫌を損じないために、反対に一行中から春桃源ら四人を選んで、彼らを唐土にとどめて、道士の法を学ばせることにした。そして鑒真招聘の問題は、それはそれとして、別個にこれを処理することにした。すなわち、清河らの一行は夏の終わりに長安を立ち、乗船地を目指したが、その途中清河、古麿、真備、それに一行といっしょに帰国することになった阿倍仲麻呂を加えて、四人で揚州延光寺に鑒真を尋ねた。一行はこれまでの経緯を鑒真に話し、古麿が、

「願わくば大和上自ら方便を作していただきたい」

そのような言葉で言った。表向きの許可は下りないが、鑒真に渡航の意志があるならば、行装具足した大船四隻の用意があるからそれを利用してもらいたいという意味であった。すると鑒真は静かにうなずいて、自分はこれまでに五回海を渡って日本へ向かったが、いつも失敗した。こんどこそ日本国の船で本願を果たしたいものだと答えた。

しかし、日本使節の一行が四人も鑒真を尋ねたことは穏便ではなかったらしく、揚州の街には鑒真が再び日本へ渡ろうとしているという噂がひろまった。そしてそのために、鑒真が渡航準備のためにはいった竜興寺に対する役人の警戒は急にきびしくなった。

普照が鄧山の阿育王寺を離れて、揚州へはいったのは十月二日であった。普照はすぐ業行と打ち合わせてあった禅智寺を尋ねた。業行はおびただしい経巻の山を十幾つかの箱に収め、いつでも運び出せるようにしてあった。玄朗からの連絡はまだなかった。

(1) 道教を修めた僧侶。(2) 楚の人、周に仕え、没年二〇〇歳といわれる。その思想は道の観念で、現実主義的な人間の行為の面を本領とし、治身治世の方途として当時の社会に受け入れられた。

普照は禅智寺へはいった翌日、遣唐使一行の泊まっている宿舎を尋ね、そこで大伴古麿と会い、玄朗のことを話した。玄朗のことは普照が案じていたほどのことはなく、簡単に帰国の手続きを取ることができた。

普照はこのとき初めて古麿から鑒真が依然として渡日の意志を持っており、近く機を見て竜興寺を脱け出して発航地黄泗浦(1)に行き、遣唐船に乗りこむ手はずになっているという話を聞いた。普照は一刻も早く和上に会い、何か師のために役に立ちたかったが、竜興寺の監視もきびしいようすであったし、自分の訪問が大事決行の妨げになってはという気持ちもあって、竜興寺に近寄ることを固く自分に禁じた。

乗船の日は、一日一日近寄って来たが、禅智寺には玄朗からなんの連絡もなかった。玄朗親子四人の帰国の手続きはすでにすんでいて、あとはただ彼らが現われるのを待つばかりであったが、肝心の四人の乗船者が姿を見せなかった。帰国の許可が下りないことを予想してか、あるいはこの期になって気遅れでもして、姿を見せにくくなっているのではないかと思われた。普照は気が気ではなかった。四艘の遣唐船が黄泗浦を発航するのは十一月の半ばと予定されていた。どんなにおそくも乗船者は十月中には黄泗浦に行っていなければならなかった。

遣唐使の一行は三班に別れて黄泗浦に向かった。第一班が揚州を発したのは十月十三日、それから二日おいて第二班が、さらに二日おいて第三班が出発した。業行は膨大な経巻類とともに第二班の船に乗った。

(1) 江蘇省常熟県の揚子江岸、福山港の西北にあり古来有数の河港であったが、清末以後積砂のため使われていない。

普照はぎりぎりまで玄朗を待って第三班の船で揚州を離れるつもりであったが、乗船の日、やはり同じ船に乗ることになっていた古麿から、鑒真らが十九日の夜に揚州を立つ手配がととのったということを聞いて、予定を変えて、自分も鑒真らといっしょに立つことにした。わずか二、三日のことではあったが、玄朗のためにぎりぎりまで揚州にとどまっていてやることにしたのである。

古麿の話では、鑒真の弟子である婺州（現在の浙江省金華県）の仁幹という僧侶が、鑒真の渡日のことを聞いて、当夜ひそかに江頭に船を回し、それで鑒真の一行を黄泗浦に運ぶことになっているということであった。

普照は十九日夕刻まで禅智寺にいたが、ついに玄朗からの連絡はなかった。しかたがないので玄朗のことはあきらめて、普照は単身揚州を出て江頭に向かった。仁幹禅師の船はすぐわかったが、普照の到着したときは、まだ鑒真ら一行の姿は見えなかった。普照は船に乗って不安の中に一刻を過ごした。河岸の暗闇の中を何人かの人々が近づいて来る気配がして、普照は船を出て堤の上に立った。やって来たのは鑒真らではなく、二十四人の沙弥であった。彼らは口々に和上は海を東へ向かおうとしている。もはやここでお別れすれば再びお目にかかることは望めない。どうか最後に、結縁に預かりたいものであると言った。

沙弥たちが来てさらに半刻ほどして、こんどは鑒真らの一行がやって来た。普照は堤の上に出て、暗闇の中で自分の名を言った。すると、すぐ闇の中から「照」と和上の声が応じて来た。

普照はその声のほうに近寄って行って、師の手をとった。かつて、天宝九年の夏六月、韶州の開

(1) 仏道にはいって未来往生の縁を結ぶこと。救われるために仏菩薩と縁を結んでもらうこと。

元寺の一室で別れるときそうしたように、普照は鑒真の骨太の、しかし皺だらけの手が自分の頬に、肩に、胸に触れるのを感じた。普照は感動のあまり一語をも口から発することはできなかった。

鑒真は河岸で自分を待っていた二十四人の人々のために具足戒を授けた。そしてそれが終わり、一行が船に乗ると、ただちに船はゆるやかに大江を下り始めた。

普照は感慨無量であった。鑒真といっしょに日本へ向かうために大江を下るのはこれで三回めであった。第一回めの天宝二年十二月の船出は月明の夜であったが、二回め天宝七年六月のときはこんどと同じような漆黒の闇夜であった。最初のときからは十年、二回めのときからは六年の歳月がたっていた。

普照は船に乗ってから自分が大伴古麿にその名を挙げておいた思託、法進、曇静、義静、法載の五人が鑒真に随っており、そのほかに、竇州開元寺の法成ら九人の僧侶、十人の同行者があることを知った。その同行者の中には胡国人、崑崙人、瞻波国人もはいっていた。(1) 荷物はほとんどなかった。鑒真は膨大な将来品を用意したが、何回かにわたって、それらはすでに発航地に送り出してあるということであった。

普照は鑒真の顔はもちろんのこと、思託の顔も見たかったし、法載や曇静の顔も見たかった。しかし、夜が明けるまではその声を聞くだけで満足しなければならなかった。

(1) 鑒真に従った弟子は法進(揚州白塔寺)、曇静(泉州超功寺)、思託(台州開元寺)、義静(揚州興雲寺)、法載(蘄州霊耀寺)、法成(竇州開元寺)、恵雲(揚州白塔寺)、仁幹(婺州の僧)らの十四人、智首(藤州通善寺尼僧)ら三人、潘仙童(揚州の優婆塞)、安如宝(胡国人)、軍法力(崑崙人)、善聴(瞻波国人)らすべて二十四人である。瞻波国はカルカッタの東南部の地にあった。

明け方、普照は眠りから覚め、初めて盲いた師鑒真の顔を見た。鑒真は眠っているのかいないのか、船縁りに背をもたせるようにして、少し顔を仰向けてすわっていた。普照は三年の歳月が和上の顔を老いたものにしているとばかり思いこんでいたが、鑒真はむしろ若々しい顔になっていた。両眼は明を失していたが、そこには少しも暗いじめじめしたものはなかった。かつての鑒真の持っていた激しい古武士的なものはもう少し落ち着いた形のものになり、六十六歳の鑒真の顔は静かな明るいものになっていた。

鑒真は突然、そこから三間ほど離れていた普照のほうへ顔を向けた。正面から見ると、穏やかではあったが、やはり鑒真独特の意志的な顔であった。

「照よ、よく眠れたか」

鑒真は言った。

「ただいま、眼を覚ましました。おわかりになりましたか」

普照が驚いて言うと、

「盲いているのでわかるはずはない。さっきから何回かむだに声をかけていたのだ」

そう言って鑒真は笑った。普照は笑わなかった。早暁の冷たい江上の風に顔を向けたまま、普照は涙を頬に伝わるに任せた。一声の嗚咽をももらさなかったが、

「照は泣いているのか」

と、鑒真は聞いた。

「泣いてはおりませぬ」

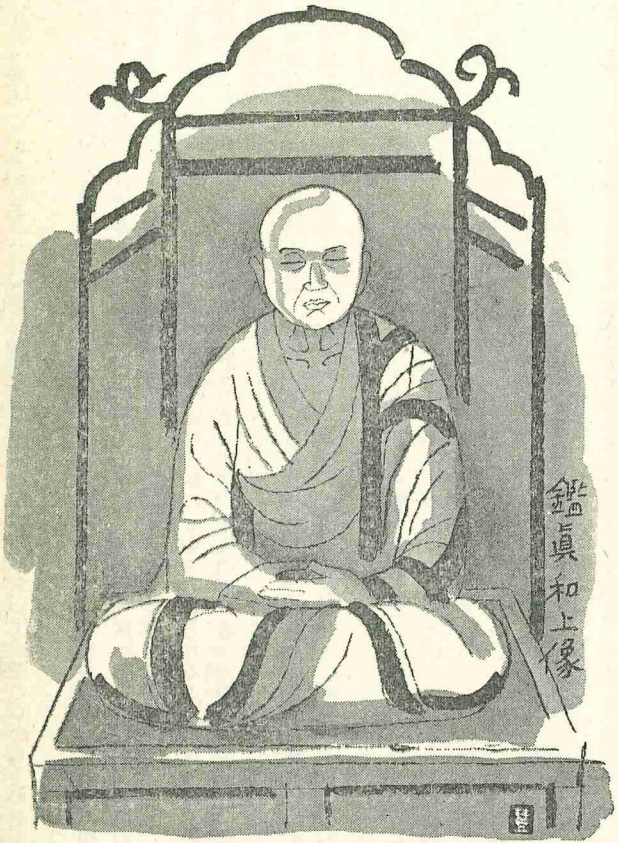
普照は答えた。他の僧侶たちも間もなく眼を覚ました。思託はかつての青年僧の面影はまったく消え、体軀も堂々として落ち着きができ、もはやどこから見ても鑒真門の高僧の一人といった貫禄を備えていた。法載、曇静も放浪時代とは違って見違えるほどの健康体になっていた。普照にはこうした唐僧たちを見るにつけても、いっしょに何年も流離の生活を送った栄叡と祥彦の姿がここにないことが今さらのように寂しく思われた。

黄泗浦に着くと、一行はすぐ将来品の詰まっている箱を、第二船と第三船に積み込む仕事に携わった。

将来する仏像は主なものだけでも阿弥陀如来像、彫白栴檀千手の像、繡千手の像、救世観音像、薬師像、弥陀像、弥勒菩薩像等があった。

経巻類に至っては、その数は膨大なものであった。大方広仏華厳経八十巻、大仏名経十六巻、金字の大品経一部、金字大集経一部、南本涅槃経一部四十巻、四分律一部六十巻、法礪師の四分の疏五本各十巻、光統律師の四分の疏百二十紙、鏡中記二本、智首師の菩薩戒の疏五巻、霊渓釈師の菩薩戒の疏二巻、天台の止観法門、玄義文句各十巻、四教義十二巻、次第禅門十一巻、定賓律師の飾宗義記九巻、補釈僻宗記一巻、戒疏二本各一巻、観音寺亮律師の義記二本十巻、南山宣律師の含注戒本一巻及び疏、行事鈔五本、羯磨疏二本、懐素律師の戒本疏四巻、玄奘法師の西域記一本十二巻等々。

普照は思託に将来品の目録を見せてもらって、その経典の多くが自分に親しいものであることを知った。在唐二十年の前半を普照は眠る時間も惜しんで、これらの経典の勉学に費したのであっ



た。目録の最後に記されてあった玄奘法師の『西域記』は広州において戒融の口からその名を聞いたものであった。

このほかに将来品の目録には、如来の肉舎利三千粒(1)を初めとして、各種の珍宝、仏具類、図像等の名がぎっしりと記されてあった。とくに「阿育王の塔様の金銅塔一区」という文字が普照の眼をひいた。

二十三日に、鑒真ら一行二十四人はそれぞれ四艘の船に分乗せしめられることになって、その発表があった。鑒真及び従僧十四人は大使清河の第一船に、十人の同行者は真備の第三船に、業行と普照は古麿の第二船に乗ることになった。

この発表のあった日、普照ははからずも玄朗からの便りを得た。それは揚州から黄泗浦に来た舟人に玄朗が託してよこして来たものであった。その手紙には、約束しながら禅智寺へ連絡しなかったことを詫び、帰郷の情耐えがたいものがあるが、何分にも虫のいい望みと思うので、自分は自分らしく唐土に果てるつもりであるといった意味のことが簡単にしたためられてあった。これを託された舟人の話では、揚州の南西部の市場の商舗の一室に玄朗は止泊していたということであった。

普照は繰り返して何回も玄朗の手紙を読んだ。そして玄朗がさしてはっきりした理由もなく、ただ自分の現在の身の上を恥じて帰国を思いとどまったのであることを知ると、なんとかして彼をいっしょに日本へ連れ帰りたいものだと思った。四船の発航は十一月の中旬を予定されており、この予定が変更されない限り、自分が再び揚州に行って、玄朗親子を連行して来る余裕は充分あるはず

(1) 仏陀の遺骨を塔におさめてまったものを骨舎利、骨以外の髪・爪などをまったものを肉舎利という。

であった。

普照はすぐこのことを古麿にはかってみた。古麿は、もともと、日本の留学僧が僧籍から足を洗おうと洗うまいと、また勉学しようとしまいと、そんなことは別段たいして問題にしていなかった。むしろ、唐の女を妻にしているというだけで、いいかげんなことを頭に詰めこんだ連中より、充分帰国の資格があるだろうと、そんなふうに考えているらしかった。

こんども古麿は、玄朗が帰国をはばかっている理由がよくは飲みこめないらしく、

「愚かな奴だな。帰りたくないならともかく、帰りたいのなら、行って引き立ててくるがよかろう」

と言った。普照はすぐ揚州へ向かった。二度と揚州の地を踏むことはないと思っていた普照は、はからずも玄朗のおかげでもう一度、十月末のようやく楡や槐樹の葉が黄ばみ始めようとしている揚州の土を踏むことができたのであった。普照は玄朗の泊まっていると聞いた市場の商舗を尋ねて行ったが、そこには玄朗の姿はなかった。玄朗とその家族たちは何日か滞在していたが、二日前長安へ向けて立って行ったということであった。

普照はひどく落胆した。自分が忙しい中をわざわざ乗船地から引き返して来たことはまったくむだになってしまったわけであった。

普照はすぐ黄泗浦へ引き返すつもりであったが、疲労のためか急に発熱して、揚州の旅宿で五日間病臥しなければならなかった。普照は寝ていても気が気でなかった。そして熱がいちおう取れると、すぐ、まだふらふらしているからだを引きずるようにして揚州を立った。乗船地黄泗浦に着い

たのは十三日のことであった。

黄泗浦に帰ってみると、第一船と第三船に乗るはずであった鑒真らの一行は全員、古麾の第二船に収容されていた。普照の留守のあいだに、鑒真ら一行には一つの事件が起こっていた。普照が揚州に立った日、一行はすぐ船に収容されたが、幾ばくもなくして全員下船を命じられた。使節団の幹部の中から意見が出て、いまもし広陵郡(1)の役人が鑒真一行の渡日を知り、船を捜索して鑒真らを船中にとらえるようなことがあれば、遣唐使船であるだけに問題はうるさくなる。またこの地はうまく発航できても、漂流でもして、唐国のどこかに吹き流されれば鑒真渡日のことは露顕する。この際和上並びに衆僧を下船せしめるにしかずということになったのであった。もちろん、この措置に対しては、いろいろの意見が出たが、けっきょく大使清河が自重説を採って、鑒真らに下船を命じたのであった。

またまた思いがけない支障のため渡日を阻まれ、呆然としてそのまま黄泗浦にとどまっている一行を救ったのは古麾であった。古麾はまったく独断でひそかに自分の船に鑒真ら二十四人を収容した。それが普照が船に戻った三日前の十一月十日の夜のことであった。

普照と業行は古麾の第二船に乗るはずであったが、第二船の人員が多くなったので、第三船の吉備真備の船に鞍替えさせられていた。

もう一つ、普照の留守中に業行も問題を起こしていた。彼は自分の携行する経巻類を自分と同じ船に積みこまなければ承知しなかった。業行が第二船から第三船に移ることは、同時に彼のおびただしい経巻の箱を第二船から第三船へ積み替えることであった。これは、それでなくてさえ解纜前の多忙さに追われている舟人たちにとっては厄介な仕事であった。何人かの人間が業行に会ったが、業行は聞き入れなかった。けっきょく、業行の希望どおりに事はなされたが、そのために業行は多くの同船者や舟人たちから憎まれていた。

(1) 揚州のこと。

普照が第三船に乗りこんでみると、業行は一人船尾に近いところに座を占めて、自分の周囲に何十個かの写経の詰まった箱を配していた。というより箱と箱とを積み重ねてあるわずかの隙間に、業行はかろうじて自分のすわれるわずかの場所を作っているといった感じであった。

十四日の夜、普照は船を出て、第二船に行き、和上や思託に会った。お互いに異なった船で大海へ乗り出すのであるから、どのような異なった運命がお互いの身の上に見舞って来るかわからなかったからである。

十五日夜半、折りからの月明を利して、四船は時を同じくして発航した。大使清河の第一船に乗っていた在唐三十六年の阿倍仲麻呂が、あまのはらふりさけみればかすがなるみかさの山にいでし月かも(1)、と歌ったのはこの夜のことであった。

故国へ向かう遣唐船は、第一船、第二船、第三船、第四船の順で黄泗浦の岸を離れたが、江上に出て半刻ほどすると第一船の前を一羽の雉が飛ぶのが見えた。雉は檣の高さのあたりを、黒い物体でも投げられたような、そんな直線的な飛翔の仕方で空間を横切った。真昼のように照り輝いている江上で、その小さい物体だけが黒く見えた。雉の姿を見た者は第一船に乗っていたごくわずか

(1) (大意) 遠く目をはなって大空をみると、この見える月は、日本にいたころ春日の三笠の山に出た月かな。

の者たちであったが、船頭はそれから不吉なものを感じた。すぐあとに続く第三船に燈火で信号が送られ、四船ともその場に碇を降ろして、江上に一夜を明かすことになった。

四船は再び十六日の朝発した。幸い風波はなく江上は静かであったが、一刻ほどすると船列は乱れ、第一船と第二船は順序を変えたが、そのまま黄濁した流れの上を四船は江口へと向かった。

普照と業行の乗っていた副使真備の第三船が無事阿古奈波（沖縄）島に到着したのは、黄泗浦を発してから六日めの二十日の夜半であった。三日めまでは遙か前方に第一船、第二船の船影を見、遙か後方に第四船の続くのを見ていたが、四日めの朝から僚船とは離れてしまって、第三船はまったく単独の航海であった。

第三船が阿古奈波に着いた翌日の暮れ方、まる一日おくれて、大使清河の第一船と副使古麿の第二船が相前後して島の港にはいって来た。

翌日、三船の乗員たちはそれぞれ船より降りて島に上がり、互いに身の幸運を喜び合ったり、第四船の消息を気づかったりした。

その翌日から海上は荒れだした。港の断崖へ大きな波が押し寄せては、それが白く砕け、日に何回か名を知らぬ鳥の大群が荒れている海の上を過ぎた。三船とも風波がまったく収まるまで発航を見合わせて、この島にとどまることになった。

毎日のように乗船者たちは島に上がった。海上は荒れていたが、空は紺碧に澄み渡り、島の白い土と島をおおっている檳榔樹の林の上に照る陽は、この季節とは思われぬ明るさと輝きを持ってい

た。普照は思託と連れ立って島を歩いた。かなり遠隔の地まで出かけて行った。思託は昔と同じようにこの島の風物を仔細に記録していた。

十二月にはいると間もなく乗員の一部に乗る船の変更が行なわれた。それは古麿の船に鑒真の一行が定員外に乗っていたので、危険を避けるために、それを他の二船に分乗せしめることになったのである。鑒真、思託ら七名は今までどおり第二船にとどまり、一行の他の者はそれぞれ、第一船と第三船に分けられた。

これと同時に、唐語を解する者が三船に配分されることになり、業行は第二船に、普照は第一船に乗り替えることになった。しかし、この割り当てに対して業行は不服であった。業行は清河の第一船へなら移るが、第二船へ移ることはいやだと言いだした。普照がその理由を尋ねてみると、第一船は大使の船ではあり、船体も大きく、舟夫も渡海の経験を持った者が多く配されている。どうせ移るのなら、第一船に移りたい、これが業行の言い分であった。

普照はその業行の希望を古麿に話し、自分と業行の船を取り替えることを頼んだ。普照にとっては、むしろ第一船に乗るより、第二船に乗って、鑒真のかたわらで故国への最後の航海の何日かを過ごすことのほうがありがたかったし、鑒真といっしょに日本の土を踏む喜びもともにしたかった。

しかし、この船を替える場合も、黄泗浦のときと同じように業行はまた一悶着を起こした。彼は自分の携行する経巻を自分といっしょに第三船から第一船へ移さなければ承知しなかった。普照はこの場合もまた古麿に頼んで業行の希望を入れてもらった。他の者とは違って、普照にはこの業行の経巻へ執着する気持ちがよくわかっていた。

風波がまったく静まったのは十二月三日であった。あとは順風を待つばかりであった。五日の夕方、普照は船を降りて、第一船に業行を尋ねた。業行は第三船のときと同じように、第一船においても船尾に近いところに座を占めて、堆高く積み上げた経巻の間に、老いたからだを埋めていた。

普照は業行を誘って島の台地へ上がった。普照としては、いつ船が発するかわからないので、いちおう業行と会っておこうと思ったのであった。業行はこの日は、いつもの彼とは違って素直であった。台地へ上がると、ここへ上がったのはいまが初めてだというようなことを言った。十日以上もこの港に停泊しているのに、今までに一度もこの台地へ上がらなかったということは普照にはほとんど信じられぬことであったが、しかし、業行ならそういうことがあるかもしれないと思った。台地の上で暮れ方の海を見降ろしている業行の姿は気の毒なほど老いさらばえて見えた。広い明るい風景の中に置いてみると、業行の唐土における労苦は容赦なくむき出しにされ、洗い出されている感じで、唐人でも日本人でもない、一人の背の曲がった貧弱な老人がそこには立って潮風に吹かれていた。

業行は海のほうへ顔を向けたままで、例の低いぼそぼそした口調で言った。

「あなたはどう思っているか知らないが、私が大使の船を希望したのは、自分の生命が惜しいためではない。私が何十年かかけて写した経典にもしものことがあったら取り返しがつかないと思ったからです。あれだけは日本へ持って行かなければならない。律僧の二人や三人はかけ替えはあるが、あの写経には替わるものはない。そうじゃないですか」

業行はそんなことをくどくどと長くしゃべった。何十年もしゃべらなかったので、その替わりにいましゃべっているといったふうに、あとからあとから低い言葉を口から出した。たれも自分の仕事の価値を認めてくれないので、いま天に向かって、それを主張しているといったようなところがあった。

律僧の二人や三人と言ったのは、おそらく遣唐使の一行が自分に対するとは違って、鑒真らを手厚く遇していることに腹を立てているのであろうと思われた。

しかし、普照にも、鑒真の渡日と、業行が一字一句もゆるがせにせず写したあの膨大な経典の山と、はたして故国にとってどちらが価値のあるものであるかは、正確には判断がつかなかった。一つは一人の人間の生涯からまったく人間らしい生活を取り上げることによって生み出されたものであり、一つは二人の人間の死と何人かの人間の多年にわたる流離の生活の果てに初めてもたらされたものであった。それだけがわかっていた。

普照はふと、この老僧は日本へ帰って何をするのであろうかと思った。僧侶としてのなんの特殊な資格も持っていなければ、一つの経典に対する特殊な知識も、おそらく持っていないであろうと思われた。帰国の上に約束されているものは何もなかった。すると、そうしたことを考えていた普照の心の内部をあたかも見抜きでもしたかのごとく、

「私の写したあの経典は日本の土を踏むと、自分で歩き出しますよ。私を捨ててどんどんほうぼうへ歩いて行きますよ。多勢の僧侶があれを読み、あれを写し、あれを学ぶ。仏陀の心が、仏陀の教えが正しくひろまっていく。仏殿は建てられ、あらゆる行事は盛んになる。寺々の荘厳は様式を変え、供物の置き方一つも違って来る」

それから業行はつかれたように、

「阿弥陀仏の前、内陣[1]には二十五菩薩[2]をかたどって二十五個の花がまかれる。日本では、菊か、椿の花が。そして、五如来をかたどって五葉の幡が吊り下げられる。そして――」

業行の声はしだいに低くつぶやくような調子に変わって行った。普照は聞き耳を立てたが、わずかに「伎楽」「舎利」そして「香水」といった言葉が聞き取れたぐらいで、そのあとは何を言っているかまったくわからなかった。不思議な、彼自身しか理解できない陶酔がいま故国へ帰ろうとしている老留学僧をとらえているようであった。

陽がかげると潮風が寒かった。普照は業行を誘って台地を降り、彼が乗る第一船の前で業行と別れた。別れるとき、普照は波止場から船縁りへかけられた板の橋を渡って行く業行の姿がまったく船内に隠れるまで見送っていた。

普照の乗る第二船に第一船から半丁ほど先の岸に停泊していた。普照は業行と別れてそこへ行く途中、自分が業行を連れ出しておきながら、けっきょくは何も話さなかったことを思い出し、もう一度激しく業行に会いたい気持ちが衝き上げて来るのを感じた。普照は自分が業行に対してそうした気持ちになったことが不思議だったが、そのまま自分の船のほうへ歩いて行った。

その翌朝南風起こって、三船はただちに、半月停泊した阿古奈波島を発した。が、発航して間もなく、先頭を進んでいた清河の第一船は座礁して動かなくなってしまった。船が暗礁から離れるのにどのくらいの時間を要するかたれにもわからなかった。第一船から合図があって、第二船、第三船はかまわず出航することにした。二艘の船は、第一船のかたわらを通り抜けて沖へ向かった。第一船では乗員ことごとくが船から降りて浅瀬に立ち、そのうちの何十人かが離礁作業に従事しているのが見えた。浅瀬の上に立っている人々の中に業行もいるはずであったが、普照の眼はそれをとらえることはできなかった。

（1）寺の本堂の本尊をまつるところ。（2）臨終に際しては、来迎して極楽浄土へ誘ってくれるという観世音をはじめとする二十五人の菩薩。

翌七日、普照の乗っている第二船は益救島[1]に到着、ここでまた順風を待つこと十日、十八日に益救を発した。翌十九日は終日暴風雨に見舞われ、一同は生きた気持ちもなかった。午後浪の上に山頂を見た。薩摩の国の南部の山であろうという舟人の言葉で、乗員全部がわずかながら生色を取り戻した。波浪はその日から翌二十日朝へかけてもおさまらなかったが鑒真も思託も普照も船が難破するとは思わなかった。もっと激しい波浪にもてあそばれて何十日も漂蕩した経験を持っていた。

二十日の明け方、普照は夢とも現実ともなく、業行の叫びを耳にして眼覚めた。それは業行の叫びであるというなんの証しもなかったが、いささかの疑いもなく、普照には業行の叫びとして聞こえた。波浪は高く船は相変わらず木の葉のように揺れていた。船は波濤の頂に持って行かれては、波濤の谷へ落とされていたが、船が谷に落ちこむたびに、普照の眼には不思議に青く澄んだ海面がのぞかれた。潮は青く透き通っており、碧色の長い藻が何条も海底に揺れ動いているのが見えた。そしてその潮の中を何十巻かの経巻が次々に沈んで行くのを普照は見た。巻物は一巻ずつ、あとからあとから身ぶるいでもするような感じで潮の中を落下して行き、碧の藻のゆらめいている海底へ

（1）現在の屋久島。

と消えて行った。その短い間隔を置いて一巻一巻海底へと沈んで行く行き方には、いつ果てるともなき無限の印象と、もうけっして取り返すことのできないある確実な喪失感があった。そしてそうした海面が普照の眼に映るたびにどこからともなく業行の悲痛な絶叫が聞こえた。

船は何回も波濤の山に上り波濤の谷に落ちこんだ。普照の耳には何回も業行の叫び声が聞こえ、普照の眼には何回もおびただしい経巻が次々に透き通った潮の中へころがり落ちて行くのが見えた。

普照はふと我に返った。自分がいままで夢を見ていたのか、現実の世界にいたのか区別することはできなかった。なんの意味をも現わさないただ悲痛さだけの感じられる業行の絶叫は、まだ彼の耳に残っていた。そして何十、何百という経巻のゆらゆらと碧の藻の間に揺れ落ちて行ったありさまも、そしてまたそれらの経巻を飲みこんでいる透んだ潮の色も、はっきりと瞼に残っていた。

普照は氷のように冷えきった気持ちを抱いて、改めて周囲を見回した。大きい波濤の上に船はゆっくりと漂っていた。波浪は高かったが、もう暴風雨が過ぎ去って危険なときが過ぎてしまったあとの、あの異様な静けさがあった。明け方の白い光のもとで、海面は幻覚の海とはまるで違って、墨のような黒い潮をぶつけ合っていた。

普照は、また改めて周囲を見回した。鑒真も思託も法進も気を失ったように仰向けに倒れていた。船内どこを見回してもたれも身を起こしている者はなかった。二日にわたる巨浪との戦いが彼らを正体なく眠らせていた。

この日の午後、第二船は薩摩国阿多郡秋妻屋浦（薩摩半島西南部の漁村）へ着いた。

秋妻屋浦に上陸すると、副使古麻を初め遣唐使の一行は時を移さずただちに大宰府に向かって出発した。普照は鑒真、思託、法進ら八人の唐僧とともに古麻たちに少し遅れて秋妻屋浦を出て、二十六日大宰府にはいった。

二十年ぶりで故国の土を踏んだ普照の眼には、故国の自然が小さく見えた。山も、川も、森も、平原も、そして平原に散らばる人家の聚落も、何もかもがひどく小さかった。空気は澄んで美しく、大陸のそれと比べるとかすかに香気を持っていた。

大伴古麻が唐土への使いを果たし、筑紫大宰府に帰朝したことが正式に奏せられたのは、正月十一日のことである。

普照は鑒真の一行とともに二月一日に難波に到着した。二十年前に栄叡とともにこの港を出て行ったが、いま一人で普照はここへ帰着したわけであった。難波には唐僧崇道らが出迎えていた。一行は三日河内の国にはいった。河内の国府にはまた大納言正二位藤原朝臣仲麻呂が歓迎使として出迎えており、前回の遣唐船で入国した道璿から派せられた彼の弟子の善談らの姿も見えた。それから志忠、賢璟、霊福、暁貴らの僧三十余人が一行の労を慰するために出迎えていた。急に鑒真らの周囲は賑やかに騒がしくなった。

翌四日、一行は河内の国府を発し、竜田を越え、大和の平原へ降って平群の駅（1）に至った。そし

（1）現在の奈良県平群郡。竜田を下りて平野に出た法隆寺付近にあって奈良時代には外客が都にはいるときには、ここまで迎えを出す慣わしがあった。

て短い休憩の後に、出迎えの人々に案内されて、一行はただちに奈良の都を目指した。

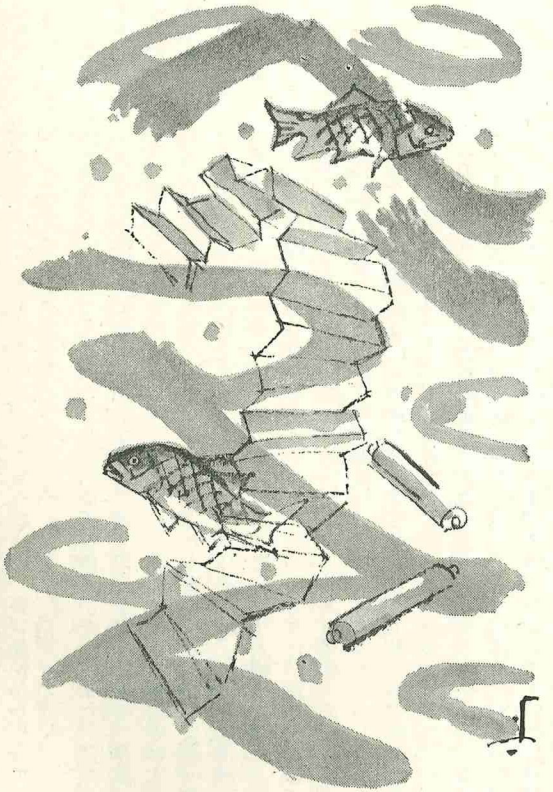
鑒真も普照も思託も馬の背にあった。普照は馬の背に揺られながら、丘陵の裾の寺々を見た。法隆寺、夢殿、中宮寺、法輪寺、法起寺の堂塔が清澄な空気の中で日本の静かな陽を浴びている。奈良の都へはいるまでに寺々の甍はあちこちの森陰に見られた。前に建っていた寺もあれば、普照の在唐中に建てられた寺もあった。

一行は東西三十二町、南北三十六町といわれる奈良の都にはいり、羅城門(1)の前で馬から降りた。正四位下安宿王(*)が勅使として出迎えていた。すぐ一行は宿舎東大寺に案内された。東大寺にはおびただしい出迎えの人が群がっていた。武人もいれば、公卿も、僧侶もいた。

東大寺別当少僧都良弁(2)の案内で一行は大仏殿に導かれ、そこで高さ十五丈もあるといわれる盧舎那仏を拝した。大仏は一昨四年四月に開眼供養を行なったばかりで、まだ全面には鍍金がかけられていず、半造りの感じであった。普照はこんどの清河たちの遣唐使の使命の一つが、この大仏に塗る金を得ることであると聞いたことがあったのを思い出し、なるほどと思った。

良弁は小がらで、額の冷たい感じの無表情な僧侶であった。彼は大仏造建の由来を説明して、唐にはこのような大きな仏像があるであろうかと聞いた。ありませぬ、と鑒真は静かに答えた。普照はなんとなく鑒真が盲いていて、この仏像を見ないことでほっとした思いであった。確かに唐にはこ

(1) 平城京の正門、朱雀大路の南方正面の大門。(2) 六八九～七七三。はじめ義淵について法相宗を学び東大寺の前身の金鐘寺にて七四〇年に華厳経講をひらき日本に華厳宗をひろめた。東大寺の建立に力をつくし初代別当（長官）となり、七七三年に僧正になった。



のような大きい仏像はなかったが不思議に良弁のそのときの言葉は普照の心にはなじまなかった。

一同は盧舎那仏に礼拝して、大仏殿を出ると、寺の客堂へはいり、再び勅使から慰労の言葉をかけられた。

翌五日、道璿とやはり道璿といっしょに入国した波羅門僧菩提僊那がやって来た。道璿は天平八年日本へ来てからずっと大安寺西唐院に住し、梵網経および四分律行事鈔を講じて、律蔵のひろく行なわれる基を作っていたが、天平勝宝三年四月に隆尊とともに律師となり、東大寺の大仏開眼供養会には呪願師として列し、奈良の仏教界では今や押しも押されもせぬ大きい存在であった。菩提のほうは、入朝後道璿と同様大安寺に住し、天平勝宝四年僧上に任ぜられ、大仏開眼供養の折りは勅を受けて導師となっていた。これまた奈良仏教界では指導的立場に立つ人物であった。道璿と会うと、普照は亡き栄叡や、まだ唐土にいる戒融や玄朗のことが思い出された。道璿に初めて渡日の話をきり出したのは戒融であり、正式にその交渉に当たったのは、普照と栄叡であった。道璿、菩提に少しおくれて、林邑国（安南）の僧仏哲も顔を出した。仏哲も道璿らといっしょに入朝するや、これまた大安寺に住し、大仏開眼供養には僊那とともに請ぜられて参列し、舞楽を奏していた。この日は右大臣豊成、大納言仲麻呂以下の藤原氏の高官も次々とつめかけて来た。

これから一か月ほどの間、鑒真ら一行は毎日のように人にばかり会って日を送った。ことに第九次遣唐船で渡唐した留学僧の中でただ一人の帰国者である普照は人との面接に忙しかった。

普照が唐土にあった二十年のあいだに日本の政界も仏教界もすっかり変わっていた。普照を最も驚かせたのは、この前の遣唐船で帰った秀才僧玄昉の持った運命の大きい転変であった。

玄昉は帰朝後ただちに頭角を現わし、天平九年には早くも僧正となって仏教界に君臨し、いっしょに帰朝した真備も一年のうちに二階を越えて従五位上となり、その翌年には右衛士督となった。そして二人とも唐帰りの新智識としてようやく日本の政界の大きい存在となったが、あまりにも早い出世のため、藤原氏一部の嫉視を買い、大宰少弐藤原広嗣は真備、玄昉を除くために挙兵するような事件までであった。乱はすぐ平定したが、このために事件の余波を受けて哀れをとどめたのは真備、玄昉を連れ帰った遣唐副使の中臣名代であった。彼は反乱者の与党として流刑に処せられ、十三年に配流を許されはしたが、十七年に逆境のうちに物故していた。

玄昉は帰朝後十年間は天皇の寵を得て権勢を誇ったが、十七年についに失脚して筑紫の観音寺（1）に追われるに至り、翌十八年その地で寂していた。

宗教界そのものの事情もこの二十年の間にすっかり変わっていた。普照が渡唐する当時は、課役を免れる目的で百姓の出家が多く、これが大きい社会問題となっていたし、行基を指導者とする一派が民衆の間に根強い力を持ち始めて、そこから来る混乱が全国的に広がっており、僧尼の行儀も極度に堕落し、政府は仏徒を取り締まるのに手を焼いていた。いかなる法律も無力であった。だからこそ唐国から伝戒の師を招び、釈尊の至上命令で僧尼を取り締まり、僧尼を淘汰することが、隆尊によって策せられたのであった。

しかし、その後民衆の支持を得た行基はしだいに実力を持って来て、政府も行基の力をかりて宗

（1）大宰府の近くにあり、東大寺、下野薬師寺とともに三戒壇の一。天智天皇が斉明天皇のために営まれたが、なかなか完成に至らなかった。この三戒壇のどれかで受戒しないかぎり当時は大僧となれなかった。

教界の混乱を整理しなければならない状態になった。かくて行基に随った浮浪の僧たちもそれぞれ度牒(1)を得、天平十七年には、かつて政府があらゆる禁圧と迫害を加えていた行基がついに大僧正に任じられるに至ったが、しかし、その行基もまた数年前の二十一年には薨じていた。

玄昉、行基と強権をふるう人物は相次いで物故し、ここにようやく菩提、道璿らの前回の遣唐船で日本へ来た異国の僧たちがその学才を認められて替わって登用されるに至ったのであった。

普照の渡唐前と現在では仏教界の事情はまったく変わっていた。栄叡と普照の入唐の目的である伝戒の師を求めるということには、二つの意味があったが、その一つである日本の仏教界の混乱を防ぐといういわば政治的とも言うべき意味は完全に解消し、今や授戒伝律はまったく純粋な宗教的の問題だけになっていた。

普照たちの第二船に少し遅れて、副使真備の第三船は同じく薩摩の国に漂着したが、大使清河の第一船と、判官布勢人主の第四船の消息はまったくわからなかった。

無事帰国した第二、第三船の乗員たちは顔を合わせると、いつもすぐまだ消息のない第一船と第四船の噂をして、その安否を気づかっていた。

普照は自分の乗った第二船が薩摩に漂着する日の朝、夢とも現実ともなく、自分が見た一種の幻覚とも言うべきものをたれにも語らないでいたが、毎日のようにそれが気になった。普照はあの朝、第一船に何事か大きい変事があったのではないかと思っていた。沈没したか、あるいは沈没しないまでも、業行のあの経巻が海に沈んで行くようなことがあったのではないか。普照は自分が経験した幻覚がすぐ不吉な結論と結びつくために、それを口から出すことを避けていた。

第一、第四の二艘の船の消息のないままに、二月は過ぎ、三月にはいると、吉備真備が勅使の資格で東大寺にやって来て口ずから勅を宣した。

大和上遠ク滄波ヲ渉リ、此ノ国ニ来タリ投ス。誠ニ朕カ意ニ副フ。喜慰スルコト喩フル無シ。朕此東大寺ヲ造リテ十余年ヲ経、戒壇ヲ立テ戒律ヲ伝受セムト欲ス。此心アリテヨリ日夜ニ忘レス。今諸ノ大徳遠ク来タッテ戒ヲ伝フルコト寔ニ朕カ心ニ契ヘリ。今ヨリ以後授戒伝律一ヘニ和上ニ任カス。

またこれと前後して、臨壇の僧の名を記して差し出すようにという勅命があった。法進が名を記して良弁のもとに提供すると、それから間もなく、鑒真、法進、普照、延慶、曇静、法載、思託、義静らに伝燈大法師位が贈られた。

そうしているうちに、三月十七日に、大宰府から第一船についての報告が届いた。大宰府が使いを阿古奈波島へ派して調べたところ、清河らは帆を挙げて奄美を指して去ったが、その後のことは不明であるというそれだけの知らせであった。

四月の初めに、東大寺の盧舎那仏の前に戒壇(2)を立て、聖武天皇は壇に登り、鑒真及び普照、法

(1) 僧侶になるとき官からもらう免許証。

(2) 戒を受授する式場で、壇を築くために戒壇という。

進、思託らを師証として菩薩戒を受け、皇后、皇太子も登壇受戒、続いて沙弥証修ら四百四十余人も戒を受けた。

この日、この未曾有の盛儀の行なわれたあと、日暮れ方ではあったが、普照は思託と二人で長安の制をとって作ったといわれる奈良の街衢を歩いた。朱雀大路(1)を歩いて行くと、それに沿った寺坊は、どこも桜花が満開であった。もちろん長安の都の賑わいはなかったが、それでも桜花を楽しむ男女が出盛っていた。

人々はときどき二人を振り返った。一人の唐僧と、その唐僧と親しげに唐語を交わしている日本僧は、人々の眼には異様に映っているようであった。普照は日本語より唐語のほうが話しやすかった。しかし、普照が自分自身最も日本人と違ってしまったと思うのは、言葉以上に物の感じ方と考え方であった。普照はたれと向かい合ってすわっているよりも、鑒真の前にいるときのほうが落ち着けたし、たれと話すよりも、思託や法進らと話しているほうが気持ちがぴったりした。何年かの生命を賭けた大陸における放浪の生活が、もうどうすることもできない絆で普照と唐僧たちとを結びつけているようであった。

この日本での最初の天子の授戒が行なわれてから十日ほどして、判官布勢人主の第四船が薩摩国石籬浦に到着したという報がはいった。この吉報に力を得て、人々はまた第一船の運命に希望を持つようになった。

五月、鑒真は唐土から持って来た如来の肉舎利三千粒を初めとして、西国の瑠璃瓶、菩提子三

(1) 大内裏の南面、朱雀門から羅城までの南北に通ずる大路。

斗、青蓮華二十茎、天竺の草履二十、王羲之の真蹟行書一帖、王献之の真蹟行書三帖、天竺朱和らの雑体書五十帖等の将来品を宮中に献じた。

そしてこのころから、鑒真が将来し、先に献じた新渡の経疏は東大寺の写経所で写され始めた。普照はある日、写経所をのぞいて、多勢の僧侶たちがそれぞれ机に向かって写経している姿を見た。普照は長い間そこから立ち去り得ないで、その写経所の隅にすわっていた。長安の禅定寺における、揚州の禅智寺における、また洛陽の大福先寺における、そしてまた今は名も忘れてしまった洛陽の郊外の小さい寺における、業行の前かがみになって机に向かっている姿を思い出したからである。

普照のすわっているところからは縁越しに小さい中庭が見え、そこに椿の木がわずかの遅咲きの花をつけているのが見えた。室内が暗かったので、その花はひどく赤く見えた。普照は阿古奈波島の台地の上で最後に業行に会ったとき、業行がつかれたように内陣に二十五菩薩をかたどって二十五の花をまくというようなことを口走り、確か、そのとき椿という言葉が彼の口からもれたことを思い出すと、ふいに悲しみとも怒りともつかない感情が激しく五体に突き上げて来るのを感じた。普照は立ち上がって、静かに写経所を出た。

(1) 三〇七?～六五? 始め官吏となり退官してからのちは名士とともに山水の間にあそび、晩年になって新しい書芸術の美しさを完成した。書風は精神と技巧とがよく調和して自然の風神を備えている。古今書家の典型とされた。(2) 三四四～八八。玉羲之の第七子。父とともに二王といわれる書の名人である。その書風は南朝士大夫の間に流行した。いずれも日本への影響はきわめて大きく、名品も多く伝来されている。

大使清河の第一船の消息は長いこと日本には伝わらなかったが、その遭難の噂が唐の長安に伝わったのは天平勝宝六年（天宝十三年）の夏のことである。『唐詩紀事』や『全唐詩』(1)の李白の阿倍仲麻呂を弔う詩は、このとき作られたものである。日本晁卿帝都ヲ辞ス。征帆一片蓬壺ヲ繞ル。明月帰ラズ碧海ニ沈ム。白雲愁色蒼梧ニ満ツ。*

しかし、清河、仲麻呂はその翌天勝宝七年六月に、十余人の生存者とともに都長安にはいって来た。船は遠く安南の驩州沿岸に漂着し、大部分の乗員が土人に襲われたり、病没したりしたが、清河、仲麻呂らはかろうじて身をもってのがれて来ることができたのであった。生存者の中に業行の姿はなかった。仲麻呂は再び唐朝に仕え、清河は新しく唐の官吏となった。

しかし、この清河、仲麻呂生存の報が日本に伝わるにはなお四年の歳月がかかった。唐には清河、仲麻呂が長安にはいったときから幾ばくもなくして、安禄山の乱が起こり、玄宗皇帝は翌天平勝宝八年（天宝十五年）にはついに蜀都に蒙塵する(2)に至った。そうした唐の大乱のために、清河、仲麻呂のことはすぐには日本へは伝えられなかったのである。

仲麻呂が生きて再び長安の都にはいったころ、奈良では大仏殿の西に戒壇院が落成しようとしていた。これは前年天子受戒のあと、五月一日に戒壇院建立の宣旨が下され、ただちに工を起こしたもので、戒壇堂、講堂、回廊、僧房、経蔵等が規矩を正して建てられ、鑒真の住居である唐禅院も戒壇院の北方に池を隔てて建てられた。この日本では最初の結界浄潔の地がまったく成ったのは九月であった。戒壇堂には金銅四天王像が安置され、全身に甲冑をつけた武将の姿は、戒律持得を誓う受戒の場所にふさわしいものとして、初めて戒壇院を見る奈良の僧侶たちの眼には映った。

そしてこの戒壇院が落成すると間もなく、一つの問題が起こった。それは鑒真が三師七証の授戒をもって、仏道入門の正儀となさんとすることに対する反対であった。賢璟、志忠、霊福らの布衣高行の僧たちは、自誓授戒でいっこうにさしつかえないことを主張して、唐僧による新渡の戒を排そうとした。

そしてこの問題についての討論は興福寺維摩堂で行なわれることになった。

この対決の場に鑒真側としてはたれを送ってもよかったが、しかし、たれにしても日本語が不自由であるというひけ目があった。法進でも思託でもよかったが、普照はその役を自ら買って出た。相手はいずれも錚々たる学匠たちであったが、このとき、普照は不思議に相手を論破できる勇気を感じ、また論破しなければならぬという激しい意欲を感じた。

当日興福寺維摩堂にはこの討論を聞こうとする僧侶たちが詰めかけ、堂内にははいりきれないで、堂の周囲を埋めた。午刻に賢璟らが入堂し、東側にすわると、少し遅れて鑒真らが入堂し西側に座を造った。そして鑒真側では普照だけが一同より離れて、少し前にすわった。討論はほどなく開始された。賢璟らは『占察経』を引いて論陣を張ったが、普照は『瑜伽論』決択分五十三巻に基

(1) 『唐詩紀事』は宋の計有功の撰、全八一巻。唐代の詩人の名篇とその略歴を付し、収めるところ一一五〇篇あまりで、唐の詩集で逸書はこの書によって一端がうかがわれる。『全唐詩』は清の康熙四二年に編まれた。全九〇〇巻及び目録十二巻。一、帝王后妃の作。二、楽章、楽府諸臣。三、聯句、逸句、名媛、僧道、外国、神仙、鬼怪、諧謔及び諸雑体。収めるところ二二〇〇人あまり詩数約四八九〇〇。 (2) 蜀都は現在の四川省成都市。蒙塵は天子が難を避けて他所を漂泊すること。

(1) 修道の障害になるものをはいらせない清潔な地区。 (2) 質素な服装で徳の高い行ないをすること。

づいて、相手を詰問した。賢璟らは口を閉ざして答えなかった。答えることができなかったのである。普照は二回答えをうながした。依然として賢璟らは答えなかった。堂内は一瞬水底のように静まりかえった。普照は何も考えていなかった。そのとき、どういうものか、顔を少し仰向けて、薄暗い堂内にすわっている普照の瞼に、端州竜興寺で客死した栄叡の顔がちらっと浮かんできた。

この討論から幾ばくも経ないで、賢璟を初め八十余人の僧侶たちは、旧戒を捨てて、戒壇院において戒を受けた。賢璟は後年大僧都となり、勅により西大寺に住して、八十歳で寂した人物である。

このことがあってから普照の声名は大いに上がった。普照は東大寺に住み維摩堂でもっぱら開遮(1)を説き律疏を講じた。

天平勝宝七年二月、鑒真は西京の新田部親王の旧地を賜わり、そこに精舎を営み、建初律寺と号した。この工事の途中聖武天皇崩ぜられて、造営は一時中止となったが、孝謙天皇は先帝の遺志をつぎ、天平宝字元年勅して金堂等の工を始め、三年八月にして成り、天皇より「唐招提寺」の勅額を賜わって山門に懸けた。

そしてこの唐招提寺の落成と同時に、天皇は詔して、出家たる者はまず唐招提寺にはいって律学を学び、のち自宗を選ぶべしと宣したので、寺には四方から学徒が集まり講律受戒はすこぶる盛んになった。

(1) 戒律においてあるいは許可し、あるいは制止すること。例えば殺されそうになったとき、戒律を破るもよしと許し(開)、またあるときは殺されても戒律を守れ(遮)というようなもの。

この唐招提寺の工事の進行中、この天平勝宝九年七月、大伴古麿は右大弁橘奈良麿らの廃立に座し、事あらわれて獄に下って杖死した。古麿らしい運命であると見られないこともない。そしてその翌天平宝字二年には渤海国へ送った使小野国田守が帰朝して、唐国の大乱の報を初めて伝えた。そしてそれといっしょに清河、仲麻呂らが安南に漂着して十余名の者だけが生き残って長安へはいり、目下清河、仲麻呂ともに唐朝に仕えているという報をもたらした。くわしいことはわからなかったが、生存者はわずか十余名でしかも身をもって長安へはいったと聞いて、普照はこのとき初めて、これまで持っていたあるいは業行がまだ生きていないものでもないという思いを断った。わずか十余名の中に、あの老いた僧侶がはいっていようはずはなかった。経巻を失って、なお生きている業行を想像することはできなかった。

普照は、清河らの消息のはいった日、業行の霊を祭り、そしてその供養の意味で、都の城外の路傍に果物の樹を植えたいと思った。長安の九街十二衢の楡の並木のことを思い出し、奈良の都の街路をも、夏季は葉の茂りで、秋はその果実で行人を楽しませることができたらと考えたのである。

この普照の願いはそれから間もなく実現した。六月奏上して、そのことが許可され、普照はその年いっぱい暇をみてはその仕事に当たった。

遣渤海使小野国田守の帰朝は、普照に業行のことをあきらめさせたばかりでなく、普照のためにもう一つの役割りを持っていた。それは彼が、一個の甍を普照のために持って帰国したことであった。名宛は日本の僧普照となっており、それが唐から渤海を経て日本へ送られて来たものであることだけはわかったが、これを託した人物がいかなる者であるかはわからなかった。

甍は寺の大棟の両端に載せる鴟尾であった。古いものでほうぼうがかけている上に太い一本の亀裂がはいっていた。普照にはこの鴟尾の形にはかすかに記憶があった。唐のどこかで見たものに違いなかった。普照はそれを思い出そうとしたがどうしても思い出すことはできなかった。彼が入唐早々二年余の歳月を送った洛陽の大福先寺で見たものか、あるいはその後長く止住した長安の崇福寺で、あるいはまた鄧山の阿育王寺で見たものか、はっきりした記憶はなかった。しかし、いずれにせよ、かって何回も何回も眼にしたものであるか、あるいはそれに似通っている形態を持った物であるに違いなかった。

普照はこれをだれが自分に送ったか見当がつかなかった。唐人がこのようなものをわざわざ送るはずはなかった。唐土にいる彼の親しい友人といえば日本人では玄朗か戒融であった。普照は、送り主がたれであるにせよ、大乱の唐を出て、渤海を渡り、いままた日本の自分のところへ届けられた一個の瓦製の異形の物体を、ある感慨をもって眺めた。

鴟尾は長い間、東大寺の普照の住む寺坊の入り口に置かれてあったが、それが日本へ来てから三月めに、普照のもとから唐招提寺の工事の司である藤原高房のもとにさし出された。

唐招提寺の主な建物がだいたい落成したのは三年八月であった。普照は唐招提寺の境内へはいると、そのたびにいつも金堂の屋根を仰いだ。そこの大棟の両端に自分がさし出した唐様の鴟尾の形がそのまま使われてあったからである。

翌宝字四年二月、菩提僊那は諸弟子に遺誡し、阿弥陀仏を念じて、五十七歳で寂した。菩提の死を追いかけるようにして、四月道璿は五十九歳で寂した。道璿と親交のあった真備はその行実を纂

し、最澄の『内証仏法相承血脈譜』にはその文を引いて「和上毎に梵網の文を誦す。その謹誦の声零々として聴くべく、玉の如く金の如く、人の善心を発し、吟味幽味あり。律蔵細密、禅法玄深なり」とある。後世道璿は華厳宗の初伝、禅宗の第二伝とみなされている。道璿が寂した同じ日に、律師招請の首唱者で、普照、栄叡を渡唐せしめた隆尊も遷化した。

鑒真が寂したのは、唐招提寺ができてから四年めの天平宝字七年の春であった。弟子の僧忍基が講堂の棟梁がくじける夢を見た。忍基は驚いて、これ和上が遷化せんと欲する相であるとして、多勢の弟子を集めて、鑒真の肖像を描いた。この年五月六日、鑒真は結跏趺座して、西に面して寂した。年七十六。死してもなお三日間頭部は暖かかった。このため久しく葬ることができなかった。

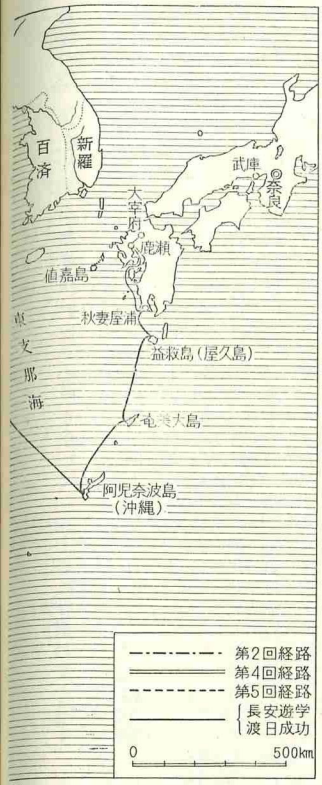
翌八年、朝廷は使を扶州の諸寺に派した。揚州ではどこの寺でも僧たちは喪服をつけ、三日間東に向かって哀悼の意を表した。鑒真の長く住んでいた竜興寺では大斎会を設けた。後年竜興寺は失火で焼失したが鑒真の住した坊だけが焼けなかった。

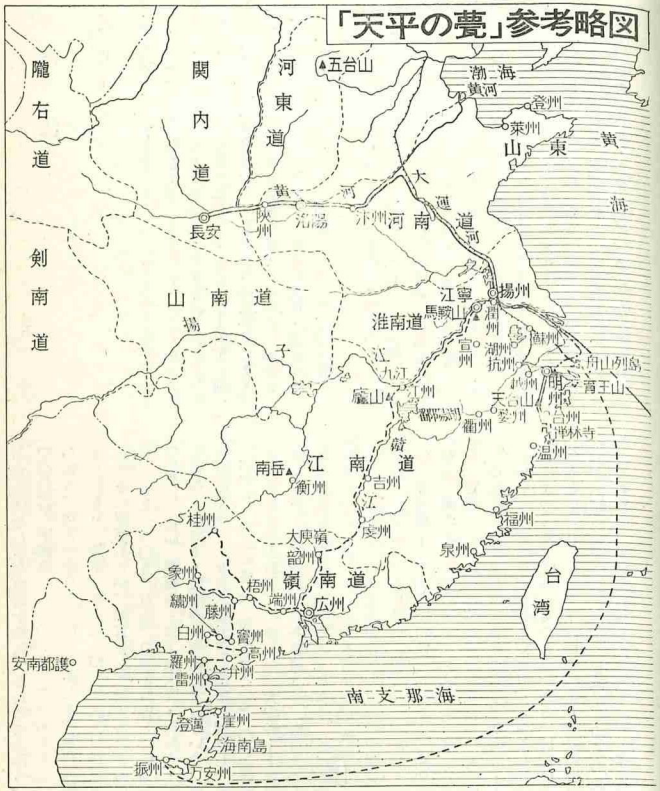
この年、新羅使節金才伯が来朝して、渤海国経由で新羅に来た唐勅使韓朝彩の依頼で、さきに唐より渤海国を経て日本へ向かった日本留学僧戒融の帰朝の有無を尋ねたことがあった。このことから判断すると、戒融は再び故国の土を踏まないと言っていたその志を曲げて、いつか日本へ帰っていたのかもしれない。この戒融の帰国の裏づけとみなしてよさそうなもう一つの史料がある。それは天平宝字七年に、戒融という僧侶が優婆塞一人伴って唐から送渤海使船に乗って渤海を経て帰国

(1) 足の背で左右の腿を押える形の如来または禅定修業のすわり方。 (2) 大いに斉会（正午をすぎてから、食べるのではなく午前中にとる食事）を設けて僧にほどこすこと。

したが、途中、暴風雨に会い、船師が優婆塞を海に投じたということが古い記録に載っていることである。

普照の没年は不明である。この戒融の消息が伝えられたときはすでに物故していたのではないかと思われる。もしこのときまで生きていたとすれば、普照は六十歳近い年齢のはずである。





補注

天平の甍

【七頁2】 従四位上 養老令（七一八）による官人の序列を示す等級。それまでの臣下の位階を三十等級に分け、一位から三位までは正・従、四位から八位まで正・従をおのおのさらに上・下に分けた。初位（九位）は大・小をさらに上・下と細分した。五位以上は天皇の勅によって叙せられる勅任官である。

【七頁3】 判官、録事 遣唐使後期には大使が四位、副使は五位が相当ということとなった。判官、録事は大使・副使をたすける役で、聖武天皇のとき以来、員数を四名、判官は六位、録事七位と定められた。

【七頁9～八頁1】 知乗船事……以下 遣唐使の職員のうち「知乗船事」はいまの船長のこと。「訳語」は通訳。「主神」は神官。「陰陽師」は吉凶の占いをする職員。「卜部」は航海にあたって方向を定めたり風を計ったりする役。「都匠」は大工。「音声生」は雅楽の楽士。遣唐使船は風を利用して航海するため、不能のときは左右両舷に設けられた多くの棹櫓をあやつって船を進ませたため、総員五百八十余名のうち大半は「水手」であったろうと推定されている。また南海のどこかの島に漂流したとき蛮人の劫掠を防ぐために「射手」があり、難破漂流にそなえて都匠や船工、新羅・奄美訳語などを用意していたと考えられている。他の音声生・玉生・鋳生・細工生などを連れて行ったのはむしろ新技術を輸入するためであろう。

【八頁14】 平城京 七一〇～七八四。元明天皇のとき藤原京から移り、現在の奈良市の西方にあたる。東西約四・四キロ、南北約五キロ。延暦三年（七八四）桓武天皇が平城京より山城国長岡京に遷都したが、旧宮として諸大寺とともに存続させた。薬子の乱（八〇九）以後、急速に荒廃していった。

【八頁15～16】 興福寺……以下東大寺・興福寺・西大寺・元興寺・大安寺・薬師寺・法隆寺を南都七大寺という。**興福寺**――藤原鎌足の発願により夫人鏡女王が山階に創立し、壬申の乱ののち（六七八）飛鳥に移し、和銅三年（七一〇）藤原不比等が現在地（奈良市登大路町）に移した。**大安寺**――聖徳太子が推古二五年（六一七）創設、のち百済大寺、高市大寺と移りかわり奈良遷都後に左京に移って大安寺となる。再度の大災で衰微し、いまは一堂が残っているのみである。**元興寺**――天平一七年（七四五）に完成。広大な寺領をもち、伽藍の配置は大安寺式によるが、たびたび火災にあい、現在は三堂を残しているだけである。**薬師寺**――天武天皇の九年（六八〇）勅願によって皇后の病気平癒を祈って建立され文武天皇の二年（六九八）に完成した。遷都とともに奈良に移り金堂を前面に東西両塔が並んで建てられた。薬師三尊像は名品である。**葛城寺**――一名を妙安寺といい、聖徳太子の創建といわれ、葛城寺の氏寺としてその一族によって建立されたものと思われる。旧址は奈良県南葛城郡朝妻といわれている。平城遷都により奈良に移り、宝亀十一年（七八〇年）雷火のため焼失。**紀寺**――紀氏の氏寺で元興寺の近くにあり、天台宗に属し、天智天皇のとき百済より来朝した訳経者のために建立したもので訳田寺と号し奈良県高市郡飛鳥にあった。平城遷都により行基が天平十七年京都五条に移し、瑠城寺と改めた。

【九頁1～2】 香椎宮――仲哀天皇、神功皇后をまつる。福岡市香椎にある。**宗像神社**――福岡県宗像郡玄海町にある。祭神は瑞津姫命。**阿蘇神社**――熊本県阿蘇郡一ノ宮町宮地にある。祭神は健磐竜命。**国分寺**――天平十三年（七四一）聖武天皇の発願により国ごとに置かれた官寺。**神宮寺**――神社に付属して建てられた寺、神も仏教を喜ぶという考えから社僧が祭祀を仏式で挙行する。奈良時代に始まる。

【一四頁4】 王辰爾 生没年不明。応仁朝に来朝した百済の貴須王の孫、船連の祖、蘇我氏と結び瀬戸内海の海上交通や貿易に重要な役割を担っていたと推測されている。鳥の羽に墨書した文書を蒸して帛に写しとり解読したという逸話の持ち主。

【一五頁1～9】（大意）神代から言い伝えていることには、この大和の国は皇神の神威の厳としています国、言霊のさかんに活躍する国と人々のあいだに語りつぎいいつがれて来ました。今の世の人もみんなそれを眼の前に見ており知ってもおります。人は世間にたくさん満ちてはいますが、天つ日のような天皇が神のままにご恩寵なされるままに天下の政治をおとりになった立派な家柄の家の子として、とくにあなたをお選びになったので、勅命を奉じて、唐という遠い国に使いとしてさしむけられてご出発になる。海上の岸辺にも沖にも留まって大海を治めていられる多くの大御神たちが、船の舳に立って導かれ、天地の大御神たちとくに大和の大国霊の神は 大空を翔けてお見わたしになり、任務を終えて帰って来る日にはまた、大御神たちが船の舳に御手をおかけになって墨縄をまっすぐに引いたように、九州の値嘉の岬から大阪の御津の浜辺に御船は到着するでありましょう。さわりなく、ご無事でいらっしゃって、早くお帰りなさいませ。（語句）**そらみつ**――大和にかかる枕詞。**いつくしき国**――イツは稜威。**言魂**――言葉に魂があってよい事をいえば良い結果があらわれ、悪いことをいえば悪い結果があらわれると信じられている。**さきはふ**――繁昌する、幸福にする。**高光る**――日にかかる枕詞。**罷りいませ**――おでかけになられると。イマセは已然形だけで確定条件を示す語法。**神づまり**――神が留まって。**うしはき**――主人として領有する。**大国魂**――大和の大国魂神社（現在、天理市にある大和神社）の祭神。**あちかをし**――値嘉にかかる枕詞。**値嘉の岬**――小値嘉島が長崎県にあるが昔は遣唐使船の発着場である五島列島・平戸島を指した。**大伴の**――今の大阪の付近一帯の総称。**はまび**――はまべ。

【一五頁10】【大伴の御津の松原かき掃きて吾立ち待たむ早帰りませ】（大意）大阪の御津の松原を掃きよめて、私は立ってお待ちしておりましょう。早くお帰りなさいませ。

【一一頁11】【難波津にみ船泊てぬと聞こえ来ば紐解きさけて立ちましりせむ】（大意）難波津に御船がついたと知らせてまいりましたならば、私はきものの紐が解けたまま走ってお迎えにまいりましょう。（語句）**紐解きさけて**――衣の紐も解き放して、衣服を整える際をも惜しんでの意。

【一七頁8】【旅人の宿りせむ野に霜ふらば吾が子羽ぐくめ天

の鶺群】（大意）旅人が宿りをするであろう野に霜が降ったならば、わたしの子を羽で包んでやってください。空飛ぶ鶴の群れよ。（語句）**はぐくめ**――羽で包む意の命令形。

【一七頁10】【波の上ゆ見ゆる小島の雲がくりあな息づかし相別れなば】（大意）波の上を通して見える小さな島が、雲に隠れて見えないのでうっとうしい、ああそれと同じように嘆息されることだ。あなたと別れたならば。

【一七頁5】**則天武后**　六二四～七〇五。十四歳で太宗の後宮に召され、六五五年高宗の皇后となり自分の利益に反するものは除き一族の者を用いて勢力をかためた。則天武后の専権にたえかねて挙兵した李敬業を平定してのちは密告を奨励して大いに唐の宗室を殺し、六九〇年国号を周とかえた。その性質は残忍で品行は収まらなかったが大いに人材を登用して政治につとめたため国内はさしたる変化も起こらなかった。唐の天下を奪うと官名地名をかえて周制を復興しようとし、またいわゆる則天文字（水戸光圀の圀の字など）を作って、自己の権力を示した。

【一九頁10～11】**勝光天子**――七一〇年に訳した『勝光王信仏経』のこと。勝光王の本生譚、信仰譚などを含む『根本説一切有部毘奈耶雑事』の第八巻を抄出したもの。**香王菩薩呪**――七〇五年に訳した『香王菩薩陀羅尼呪経』のこと。香王菩薩の真言を千八百遍となえ、観音像の前に暁に至るまで目覚めていればその日に銭財を送る人が現われ、これを貧しい人に施すのを香王法といい、香王菩薩の供養法や功徳などを明らかにした経典。**一切荘厳王経**――七〇五年に訳した『一切功徳荘厳経』のこと。世尊が荘厳王菩薩に陀羅尼の功徳を賛嘆した、願生浄土の思想を持つ経典。この経を供養しない国には災難、悪事、禍変があるとも説く。

【一九頁12】**善無畏**　東インド、カシミールの西北、烏茶国の人。仏手王の子、十三歳で王位をつぎ、のちに位を譲って出家した。達磨鞠多に師事し、師のすすめによって唐に布教に赴く。開元四年はじめて長安につき玄宗に厚遇されて興福寺のち西明寺に居をあたえられた。同十二年洛陽の大福先寺に住み大日経七巻を訳す。帰国せんことを願い出たが許されず、開元二十三年、七十七歳で没した。

【三九頁17～四〇頁1】『新唐書』芸文志を参照すると、『**唐礼**』百三十巻は巻数の一致している点から高宗の「永徽礼」であろうといわれている。『**大衍暦経**』は「僧一行大衍暦」に当たり、「大衍暦」は経・議・立成と一揃いの書である。この大衍暦は真備の将来後二十八年の天平宝字七年（七六三）に約七十年使われて来た儀鳳暦を廃して採用されることとなった。『**楽書要録**』は則天武后撰の音楽書であり、わが国にのみ残存している漢籍をわが国に将来した記事は六国史ではきわめて稀で、真備のこのことは当時においてはよほど顕著だったのであろう。

【四〇頁1～2】以下「**測影鉄尺**」は天文関係の用具、「**銅律管**」は楽器であろうと推定されている。また「**絃纊漆角弓**」「**馬上飲水漆角弓**」「**露面漆四節角弓**」はともに角の弓で騎兵用である。それまでのわが国は木弓立射だったので最新兵器だったであろう。「**射甲箭**」は剛よく鋭く長く甲を射るに用いる矢。「**平射箭**」は鏃の鋭くない矢。

【九七頁7】**楊太真**　楊貴妃のこと。七三五年玄宗の皇子の妃となったが、玄宗の寵妃の没後、その代わりとして七四〇年皇子のもとを出て宮中にはいり太真の名を与えられた。聡明で歌と舞いがうまく玄宗の寵愛を一身にうけて皇后に等しい待遇を授かり、一族もみな高位高官にのぼった。七五五年安禄山の乱にあい縊死させられた。ときに三十八歳である。

【九七頁8】**玄宗**　六八五～七六二。唐の第六代の皇帝。七一二年に即位した玄宗は革新の意気にもえ、官製を改革し、土地問題を処理し、募兵制を採用し天下を十五道に分けたり、農民生活を安定させる政策をとった。晩年は政治を怠り宴遊にふけったため安史の乱とよばれる大乱を招いた。

【九七頁8】**安禄山**　七〇五～七五七。ソグド系突厥の雑胡の出身である。六種の言語を理解して官に仕え、出世して節度使となった。中央の高官が辺境に力を用いるのをおそれ、異民族や卑賤のものを節度使に任用した宰相李林甫の政策による。七五四年、挙兵して反乱し七五七年二男に殺された。

【九七頁10】**韋堅**　唐代の財政家、七四三年漕渠を通じて江南の産物を長安に運び玄宗の信任をえた。帝の寵をえて宰相になるのを恐れた李林甫によって罪におとされ、天宝六年配所で殺された。**李適之**　唐代、京兆の出身。天宝のはじめに牛仙客に替わって宰相となったが、李林甫のはかりごとによってその職を去った。客をよろこび斗酒なお辞さなかったという。

【一二五頁7～8】**獅子国**――僧迦羅ともいい、シンハラドヴィーパ、現在のセイロン島をいう。**大石国**――大食国とも書き、唐代の中国人がアラビア人の住む国をこう呼んだ。**骨唐国、白蛮、赤蛮**――ともに蛮族の住む国。

【一三二頁15】**鐘紹京**　生没年不明、唐代の江西省の人。即位前の玄宗の知遇をうけて蜀州刺史にまでなったが、玄宗の即位後ゆえあって罪せられ、不遇な年月を送った。晩年は中央に返り咲き八十余歳で没した。書画をよくし、特にその楷書は有名で、唐初の正統をよく受けついでいるという。

【一四一頁8】**称讃如来功徳神呪経**　現在十方如来の功徳、神呪を説き、この経に示されている諸仏の名号を受持し、専心に敬う者は犯した罪のことごとくが消滅し、生死に処すとも流転を免れ、命の終わったのちも諸々の仏国に生ずべきと説く。

【一四四頁12～13】〔大船に真梶しじぬきこの吾子を韓国へやるいへ神たち〕（大意）大船に梶を十分にそなえて、この子を唐の国に遣わします、神さまたちよ、守ってください。（語句）**真梶しじぬき**――「ま」は接頭語で充分なことを表わす。「まかぢ」は船の両舷の艪櫂。「しじぬき」は密に船に取りつけること、「ぬく」は船に梶を取りつけるさまが船の内から外へ貫くのでこういう。

【一四四頁13】〔春日野に斎く御室のうめのはな栄えてありまて帰りくるまで〕（大意）春日野にお祭りしてある神社の梅の花は栄えて待っていてくれ。帰ってくるまで。（語句）**いつく御室の**――「いつく」は大切に守り祭る。「御室」は神の座。当時、春日神社がすでに造られていたと見える。

【一四四頁15～一四五頁1】〔からくにのゆきたらはして帰りこむますらたけを御酒たてまつる〕（大意）唐の国へ遣唐使となって行き大事な役目を無事に果たして帰ってくるであろう立派な男子に、御酒をさしあげて無事に帰ってくることを祈り

ます。（万葉集巻十九）

【一六八頁3】**五如来**　南方宝生仏（宝勝如来）、東方阿閦仏（妙色身如来）、西方阿弥陀仏（甘露王如来）、中央毘盧遮那仏（広博身如来）、北方釈迦牟尼仏（離怖畏如来）のこと。

【一六八頁5】**伎楽**　百済人味摩之が呉に赴いて学び、推古天皇の二十年（六一二）わが国に伝えた舞楽。聖徳太子がこれを仏教の行事に用い少年に学ばせた。伎楽は仮面を用い、当時伝来した伎楽面は正倉院などに今日も残っている。**舎利**――体、身、身骨、遺身などと訳され死屍または遺骨をいう。**香水**――香気ある浄水のことで、諸種の香を混和した浄水をいい、身体を灌沐し、あるいは諸物をきよめるために用いる。

【一七二頁7】**安宿王**　長屋王の子、母は藤原不比等の女。橘奈良麻呂の変に坐して密告にあい、捕えられて逆賊の名をうけ、妻子とともに佐渡に流された。没年は不明であるが、長命だったといわれる。

【一七四頁5】**梵網経**　釈迦が天にあって菩薩の心地を説いたところ、光を放って蓮華台蔵世界が現われ、その周囲には千葉あって各一葉に一世界一釈迦が現われ、さらに一葉の世界に百億の須弥山、百億の菩薩が現われ、この千百億の菩薩の本源は廬舎那仏であることを明かしている。また菩薩の学ぶべき戒を示して、菩薩大乗の大戒をあきらかにしたものとして重んじられている。

【一八〇頁3～4】〔日本皇帥帝都ヲ辞ス。征帆一片蓬壺ヲ繞ル。明月帰ラズ碧海ニ沈ム。白雲愁色蒼梧ニ満ツ。〕（大意）日本の皇衡卿はいよいよ国へ帰るので長安の都を辞した。やがて船を乗り出して征帆一片蓬萊をめぐって進んで行った。明日が碧い海に沈んでかえらないように、二度と帰って来ない。白雲は愁色を帯び、海中の仙山たる蒼悟をおおっている。

【一八一頁17】**占察経**　『占察善悪業報経』のこと。善悪宿世の業、現世の苦楽や吉凶などを占察する法を明らかにし、大乗の実義、その学習方法を説いてある。

【一八五頁1】**内証仏法相承血脈譜**　比叡山延暦寺仏教の内容としている天台・禅・戒・密の四宗の相承を明らかにしたもので伝教大師最澄の書。最澄が戒壇を建てようとしたとき、南都の僧の反対にあい、翌弘仁十一年『顕戒論』とともに朝廷に進め、一家相承の確証を示した。

【一八五頁16】**優婆塞**　仏教を信ずる在家（妻子をもち世務にたずさわる俗人）の男子、三宝（仏・法・僧）に親しみ、これに仕えるものをいう。

鑒真略年譜

西暦	日本	日本関係事項	唐	鑒真関係事項
六八八	持統天皇 二年		垂拱 四年	鑒真、揚州江陽県に生まる。
六九八	文武天皇 二年	*薬師寺の堂塔ほぼ完成。		*則天武后、大いに唐の宗室を殺す。
七〇一	大宝元年	第七次遣唐執節使として栗田真人、以下を任命する。山上憶良、少録として参加。翌年出航。	長安 元年	鑒真十四歳、出家し、揚州大雲寺、智満に師事す。
七〇五	慶雲二年	前年九月一日、栗田真人ら帰朝。	神竜 元年	*詔して天下諸州に僧を度す。 鑒真十八歳、道岸より菩薩戒を受く。
七〇七	〃 四年	*この頃、疫病流行す。		*則天武后没す。中完復位し、諸州に中興寺を置く。
七〇八	和銅元年	*この年、武蔵国より自然銅を献上。和銅開珎を鋳造す。	景竜 元年	鑒真二十歳、洛陽長安へ旅に上る。
七一〇	〃 三年	*三月十日、平城京に遷都する。	二年	長安の実際寺にて登壇する。
七一二	〃 五年	*太安万侶『古事記』を撰上す。	景雲 元年	*睿宗即位す。
		*諸国の役民、帰郷のとき飢えるもの多し。	大極 元年	*睿宗の旧宅に安国寺建立さる。 *玄宗の治世始まる。
七一三	〃 六年	*「風土記」の編纂を諸国に命ず。	先天 二年	
			開元 元年	*義浄没す。 鑒真二十六歳、初めて講座に上り、律

七一六	霊亀二年	八月、多治比県守ら第八次遣唐使任命さる。留学生に吉備真備、阿倍仲麻呂、大和長岡、玄昉らあり。	開元　四年
七一七	養老元年	三月、第八次遣唐使出発。	開元　五年
七一八	〃　二年	*四月、行基の民間伝道を僧尼令違反として禁圧する。 *養老律令成る。 *九月、元興寺、平城京へ移転建立す。	開元　六年
七二〇	〃　四年	十月、多治比県守帰朝。 *五月、『日本書紀』成る。 *八月、舎人親王を知太政官事に任命する。藤原不比等没す。	開元　九年
七二三	〃　七年	*二月、筑紫に観世音寺を造営。 *四月、三世一身法発令。	
七二七	神亀四年	*七月、太安万侶没す。 *十二月、渤海使が入京する。	開元十五年
七二九	天平元年	*二月、長屋王の変。	
七三一	〃　三年	*八月、光明子夫人、皇后となる。 *七月、大伴旅人没す。	開元十七年
七三二	〃　四年	八月、第九次遣唐使、多治比広成らを任命する。 *八月、諸道に節度節を置く。	開元十九年

疏を講ず。

*阿倍仲麻呂(二十四歳)、左春坊司経局校書となる。

鑒真四十歳。『羯磨疏』を講ず。

*阿倍仲麻呂、(左)拾遺となる。

開元二十年

*阿倍仲麻呂、左補闕となる。

七三三	天平五年	四月三日、第九次遣唐使船難波津を出発。 *この年、山上憶良没す。 八月、遣唐使船、蘇州の岸に漂着、ついで東都洛陽にはいる。	開元二一年
七三四	天平六年	四月、日本国使、絁四百疋を唐の政府に献上。 (この年、阿倍仲麻呂三六歳、吉備真備、ほかに僧玄昉が留学生として唐にあった。)	開元二二年
七三五	天平七年	十月、大使多治比広成ら吉備真備玄昉を同船して帰途につく。十一月、第一船のみ種子島に着き翌年三月奈良に帰着する。 副使中臣名代の船は前年インドシナにまで流され、やっと洛陽に戻る。 *十一月、舎人親王没す。	開元二三年
七三六	天平八年	唐政府に保護されていた副使中臣名代道璿、菩提僊那、仏哲らを伴って再び日本へ向かう。七月帰国する。	開元二四年
七三八	天平十年	五月、諸国の健児停止。	開元二六年

鑒真、四十六歳。

*正月、玄宗が洛陽に行き、二四年十月まで唐の政府は洛陽にある。

*十一月、善無畏示寂す。九十九歳。

十月、栄叡、普照ら玄宗の駕に随って長安にはいる。

〔江東道採訪使、揚子津から瓜州に至る二十五里の運河を開き大江に直結さ

七四〇	天平十二年	九月、藤原広嗣の反乱。
七四一	〃十三年	三月、国分寺、国分尼寺の造営を発願。
七四二	〃十四年	八月、紫香楽宮を近江に造営。
七四三	〃十五年	五月、墾田永世私有令を発す。
		十月、盧舎那大仏造営を発願する。
七四四	〃十六年	

開元二八年	鑒真、五五歳。十月、栄叡と普照が揚州の大明寺に鑒真を訪れ伝律授戒のため日本に渡航を求める。鑒真、受諾。東河にて船を造り、出航の準備を整える。四月、如海の密訴にあい栄叡普照ら官憲に捕えられる。第一次渡航計画が失敗する。
開元二九年	十二月、第二次渡航計画を企てる。揚州江を下り、狼溝浦に至って烈風のため難船し修理して大板山を目指す。
天宝元年	桑石山で難破し明州の阿育王寺に収容される。
天宝二年	鑒真この年五七歳。越州、杭州、湖州宣州を巡錫して阿育王寺に還る。
天宝三年	栄叡、越州の僧たちの密告にあい、山陰県にて突如捕縛される。第三次渡航計画が着手しないうちに挫折。

せる。これが「新河」である。七五八年の項および九八ページ参照】

七四五	天平十七年	*正月、行基を大僧正とする。
		*六月、大宰府を復す。
		*十一月、玄昉を筑紫に左遷する。
七四六	天平十八年	*四月ころ、東大寺の造営に着手。
		*六月、玄昉筑紫にて没す。
七四七	天平十九年	*九月、東大寺の大仏鋳造を開始する。
七四八	天平二十年	

天宝四年	冬、鑒真一行三十余名天台山国清寺へ巡礼する。
	黄巌県禅林寺にて、出発寸前のところを一同捕縛される。第四次渡航計画が挫折する。
天宝五年	栄叡普照、同安郡にあり。
	*楊太真、貴妃となる。
天宝六年	
天宝七年	鑒真、この年六一歳。春、栄叡普照が揚州の崇福寺に至り五たび和上の渡日を懇請する。
	六月二十七日、崇福寺をたって揚州新河に至る。新河を出航し狼山を経て三塔山に到着。
	九月、署風山に至り、一か月停泊する。
	十月十六日出帆し、中国東海にて季節風にあい漂流する。
	十一月、海南島に漂着し、第五次渡航もここに失敗する。

七四九	天平二十一年	*二月、行基、没す。	天宝八年
	天平感宝元年	*二月、陸奥よりはじめて黄金献上。 *四月、天皇、東大寺大仏を礼拝。	
	天平勝宝元年	*七月、東大寺大仏完成。	
七五〇	天平勝宝二年	*一月、吉備真備、筑前守に左遷。 九月、藤原清河を第十次遣唐大使に任命する。	天宝九年
七五一	天平勝宝三年	四月、道璿を律師に波羅門僧、菩提僊那を僧正に任命する。 十一月、吉備真備、第十次遣唐使の副使に追加任命される。 *十一月、『懐風藻』成る。	天宝十年

海南島にて振州の別駕、馮崇債は鑒真漂着の報を聞き、四百余人の兵を迎えに出す。居所を振州の大雲寺に定められ、鑒真これを修築する。
万安州に馮若芳を尋ねる。
鑒真一行、崖州にはいり、開元寺に案内さる。開元寺罹災にあい、これを再建する。
澄邁より雷州へ渡り、羅州、弁州、象州、白州、繡州、藤州、梧州を巡錫して桂州に赴く。
桂州より広州に向かう。
広州より西江を利用して端州の竜興寺に至る。端州にて栄叡没す。
この年、鑒真六三歳。広州より韶州へ向かい、韶州の開元寺にて普照、鑒真一行と別れ明州阿育王寺に向かう。
鑒真、失明す。祥彦没す。
春、鑒真一行、揚州に帰着する。

七五二	天平勝宝四年	閏三月、第十次遣唐使、藤原清河ら一行、難波津を発す。 *四月九日、東大寺大仏開眼供養のため行幸あり。この頃、藤原仲麻呂、政権を確立する。	天宝一一年
七五三	天宝勝宝五年	*一月、東大寺西塔成る。	天宝一二年
七五四	天平勝宝六年	阿倍仲麻呂、藤原清河ら安南に漂着する。	
七五五	天平勝宝七年	*この年、東大寺講堂成る。 六月、阿倍仲麻呂、藤原清河ふたたび長安に戻り、唐朝に仕えるようになる。	

夏、遣唐使一行入唐し、明州に着く。
普照、明州にて藤原清河らに会う。
*十一月、宰相李林甫死す。
正月、日本使節ら含元殿に拝賀す。
*二月、李林甫誣告される。
十月、遣唐使ら揚州延光寺にいた鑒真を尋ね渡日を懇請する。
十月十九日、鑒真ら一行、竜興寺を脱し蘇州黄泗浦に向かう。
十一月十五日、出帆。
十一月二十一日、沖縄に着く。
十二月六日、出帆。同月二十日、秋妻屋浦に到着。二十六日、大宰府安着。
二月一日、鑒真一行、難波に到着す。
三日河内に、四日奈良にはいる。
三月、授戒伝律一任の詔を受く。
四月、聖武、孝謙天皇をはじめ四百三十余人に授戒する。
五月、如来の肉舎利など珍宝を内裏に献ず。
〔*唐、安史の乱はじまる。〕

七五六	天平勝宝八年	五月二日、聖武天皇崩御。六月、筑前に怡土城を築く。
七五七	天平宝字元年	一月、橘諸兄没す。七月、橘奈良麻呂の変。
七五八	〃二年	十二月、渤海国より使節、小野国田守帰朝し、唐の政変を伝う。
七五九	〃三年	六月、京外の道に街路樹を植えんことを願い、許さる。
七六〇	〃四年	四月十八日、道璿、隆尊没す。六月、光明皇太后崩御。
七六一	〃五年	この年、下野薬師寺、筑紫観世音寺に戒壇を設立。十月、第十二次遣唐使任命される。船が壊れたため中止となる。このころより、道鏡抬頭す。
七六二	〃六年	四月、第十三次遣唐使を任命するが、便風を得ず中止となる。
七六三	〃七年	一月、渤海使貢物を献上す。八月、儀鳳暦を廃し、大衍暦を採用する。

五月二十四日、鑒真、大僧都に任ぜられる。この年六十九歳。

〔玄宗、長安を脱出する。〕

十一月、備前の国の墾田百町歩を東大寺唐禅院に施す。

〔＊安禄山、その子安慶緒に殺さる。〕

八月一日、鑒真、僧綱を辞し大和上の尊号を賜う。

八月一日、唐律招提〈唐招提寺〉を創む。

〔＊李白没す。〕

鑒真この年七十六歳。春より健康大いに衰え、忍基、肖像を作る。

五月六日、招提寺にて示寂す。

補陀落渡海記（ふだらくとかいき）

熊野の浜の宮海岸にある補陀落寺(1)の住職金光坊が、補陀落渡海(2)した上人たちのことを真剣に考えるようになったのは、彼自身が渡海しなければならぬ年である永禄八年(3)の春を迎えてからである。それまでも自分の先輩であり、自分が実際にその渡海を眼に収めた何人かの渡海上人たちのことを考えたことがないわけではなかったが、同じ考えるにしても、その考え方はまるで違ったものであったのである。

と言うのも、金光坊自身、自分が渡海するかしないかといった問題は、実際のところそれまではそれほど切実に自分の身に結びつけては考えてはいなかったのである。なるほど補陀落寺の彼の前の住職である清信上人は六十一歳で永禄三年(4)に渡海しており、その前の日誉上人も天文十四年(5)十一月、六十一歳で渡海している。それからその前の正慶上人は天文十年の十一月の渡海で、やはり六十一歳の時である。こうして補陀落寺の住職の前任者を並べてみると、三代続いて、六十一歳の年の十一月に、補陀落の浄土をめざして、浜の宮の海岸から船出していることになる。しかし、だからと言って、補陀落寺の住職がすべて六十一歳の十一月に渡海しなければならぬというような掟はどこにもないのである。

補陀落寺は確かにその寺名が示すとおり補陀落信仰の根本道場である。往古からこの寺は観音

(1) 和歌山県東牟婁郡那智村にあり、天福元年（一二三三）智定房上人が創建した。俗姓を下河辺行秀といい源頼朝が那須野で狩りをしたとき面目を失したことがあって出家し、南海補陀落山に渡って帰り、本寺を創めたという。(2) 観世音菩薩の住むという山の名で「華厳経」によれば南インドの摩頼矩吒国の補陀落山（ポータラカ）が観音の浄土であるという。日本では紀州の那智をそれになぞらえていた。(3) 一五六五年。(4) 一五六〇年　(5) 一五四五年。

浄土である南方の無垢世界(1)補陀落山に相対するといわれ、そのために補陀落山に生身の観音菩薩を拝し、その浄土に往生せんと願う者が、この熊野の南端の海岸を選んで生きながら舟に乗って海に出るようになったのである。浜の宮はその解纜場所、補陀落寺はいつかその儀式を司る寺となったが、しかし、補陀落寺の住僧が自ら渡海しなければならぬといった掟はそもそもの初めからどこにもないのであった。ただそうした補陀落信仰と関係深い寺であるので、創建以来長い歴史を通じて、渡海者の多くは補陀落寺に一時期身を寄せ、そしてこの寺から出て船出しているし、住職の中からも何人かの渡海者を出しているのである。寺記に残っている渡海上人たちの名は十人近くあろうか。いずれも渡海した年齢はまちまちであり、十八歳の上人もいれば、八十歳の高齢の渡海者もいる。

それが、たまたま近年になって、三代続いて補陀落寺の住職が六十一歳で渡海することがあって、そのためになんとなく補陀落寺の住職は六十一歳になると、その年の十一月に渡海するものだといった見方が世間において行なわれるようになり、またそうした見方が、この寺の歴史からするとさして不自然でなく成立するようになったところもあって、六十一歳になった金光坊もそうした世間の見方から逃れられぬはめに立ち至ったわけであった。

世間のこうした見方というものに、これまで彼自身さして深い関心を示さなかったというのは、あるいはまた、そうした見方に気づいていてもそれほどそれが決定的な強い力を持つものであるということに思い至らなかったというのは、なんといっても若年から僧籍にはいった金光坊の世間知らずの迂闊さというほかはなかった。

(1) 海に住み水を供給する沙羯羅竜王の娘である八歳の竜女が男に変じて成仏したという清浄世界。

金光坊とて補陀落寺の住職である以上、いつか自分もそうした心境に立ち至れば渡海上人としてここから船出しないものでもないぐらいのことは考えていたし、また僧侶としてそうしたいつか自分のところへやって来るかも知れない日を、必ずしも期待しないわけのものでもなかった。金光坊にしても僧侶として多少の自負もあったし、渡海ということへの仏へ仕える身としての一種の憧憬に似た陶酔もあった。自分の師である三代前の正慶上人の渡海の日の立派さは、今もありありと眼に残っていて、自分もできるならそうなりたいとかねがね思っていたのである。ただそうした高い信仰の境地へ、正慶上人は六十一歳で到達できたが、鈍根の自分はさらに何年かの修行の年月を必要とすると思っていたのである。渡海する心境に到達することが、補陀落寺で一生を過ごした僧としての金光坊のやはりそれは一つの悲願でなかろうはずはなかった。

そうした金光坊に対して、永禄八年という年は、思いがけずひどく意地悪い年としてやって来たのであった。金光坊は年の初め早々から、寺を尋ねて来る人から、渡海は十一月の何日であるかとか、いよいよ渡海の年になったが、せめてものお役に立ちたいので、自分にやれることならなんなり申しつけてくれないかとか、そんな言葉をかけられた。渡海するその年になるまでは、さすがにロから出さないでいたが、もうその年が来てしまったのだから、これ以上黙っていてそのことに触れぬのはかえってお上人さまに対して失礼であろうからといったそんなものが、いささかの悪意もなしにどの人の顔にも、その言葉にも感ぜられた。

意地悪い考えからそのようなことを言う者はなかった。金光坊は若いときから身を処するにはい

ちおう厳しいほうだったし、ずっと目立たない存在ではあったが、どこかに素朴な人がらのよさもあって、そうしたところが中年を過ぎてから地方の檀徒の間では想像以上の信望をかち得ていた。もうここ何年も金光坊は自分に対する人々の眼に、自分に対する崇敬と親愛の念がこめられているのを見ないことはなかった。こうしたことは里人の間でも、寺関係の人々の間でも、熊野三社関係の、いわゆる那智の滝衆(2)の間でも同様だった。金光坊はたれからも充分尊敬され親しまれていたのである。

金光坊は正月から春まで、そうした自分が渡海するという世間の見方に迷惑を感じ、近い機会にそれを訂正して、自分の渡海の時期は、自分がその心境になるまで何年か先に延ばさねばならぬし、またそうしなければせっかく渡海の船出をしても、補陀落山へ行き着くことはできないであろうということを諒解してもらうつもりだった。しかし、春になると、金光坊はそうすることに絶望を感じた。一人や二人なら理解してもらえたし、理解させることもできたが、彼の渡海を信じている者は十人や二十人や百人や二百人ではなく、それは広い世間全部と言ってよかった。

金光坊が巷へ一歩足を踏み出すと、渡海上人であるということで、彼の足もとには賽銭が降り注いだ。子供までが追いかけて来て賽銭を投げた。そのために街を歩く金光坊のあとには、いつも賽銭を拾う乞食が何人もつきまとうほどだった。それからまた観音の浄土まで携行してくれと故人の

(1) 熊野本宮、新宮、那智の三宮をいう。新宮は新宮市にあり熊野速玉神社といい速玉之男神を祭る。那智は那智山にあり熊野夫須美神社または飛竜権現といい伊邪那美尊を祭り、仁徳天皇の代の創建と伝えている。本地垂迹にのっとり本宮は阿弥陀、新宮は観音、那智は勢至を本地とするとした。(2) 那智神社の信徒たち。

位牌が届けられて来たり、生きている者までがわざわざ己が位牌を作って、それを金光坊のもとに持参して来たりした。

こうなると、金光坊は好むと好まざるにかかわらず、渡海しなければならぬもののようであった。もし自分に目下渡海する考えのないことなどを口走ったり、それが何年か先のことであるなどと言おうものなら、世間というものは承知しないに違いなかった。どのような騒ぎが起こり、どのような危害が身に及ぶか見当がつかなかった。

金光坊はそのために自分がいかに世の中から葬り去られようと、それはそれで耐えられぬこともなかったが、そのために観音信仰(1)というものに汚点のつくことを考えると、それには耐えられなかった。もし小さい自分というものの言動一つで観音(2)に対する信仰に瑕でもつこうものなら、それこそ僧として仏に対して詫びのしようはなかった。死んでもその罪は消えないものと思われた。

金光坊が正式に自分がこの十一月に渡海するということを発表したのは、三月の彼岸の中日だった。発表の折りは熊野本社(3)で古儀に則って儀式が行なわれた。金光坊はこれまでこの儀式に侍僧として七回出席していたので、そのことについてはたれよりもくわしかった。金光坊はその日に先立

(1)『法華経』に集約して述べられている観世音菩薩の信仰である。観音が三十三の化身をもっていて信仰者のために随所にあらわれて救いを垂れるという点に魅力があった。(2) 菩薩の一つであらゆる菩薩中もっとも衆人に親しまれた救世護身の菩薩である。危難のとき一心に観世音の名を呼べば、火難、水難などの七難をまぬがれ貪欲憎悪無知の三毒をはなれることができるといわれる。(3) 本宮町にあり熊野坐神社といい、祭神は家都御子大神。熊野の本地が救世観音であるといわれる(本地乗迹説は外来文化がわが国に同化した好例で、本地つまり仏陀が人間を利益し済度せんがために迹を諸所に垂れて、神となっていろいろの形をあらわすという考えで、わが国の神はその源をたずねればみな仏にあり仏も神も帰するところは一つであるという説)。

って多くの関係者に対して、その儀式の順序次第や、供花や楽器のことなどを教えた。金光坊が諳んじているものを口から出すと、清源という十七歳の弟子の僧侶がそれをかたわらで記録した。

この清源の姿を見たとき、金光坊には多少の感慨があった。金光坊は二十七歳のとき、いまの清源と同じように、やはり渡海して行く祐信上人の前にすわって、彼の口から出る儀式の次第を聞いて書き写したものであった。清源もまた、この補陀落寺にいる限りは何十年か先には渡海するような運命に見舞われぬものでもなく、なんとなくわが身に引き比べた痛ましい気持ちで、金光坊は稚い僧侶の剃られた青い頭を見守っていた。

補陀落渡海がいつごろから行なわれるようになったかくわしいことはもちろんわからないが、金光坊がひもといた寺の古い記録によれば、貞観十一年[1]十一月三日に熊野の海岸から渡海した慶竜上人が最初ということになっている。貞観というと、金光坊の生きている永禄から六百年ほど昔のことになる。その次が五十年ほどの間隔をおいて、延喜十九年[2]二月の祐真上人。この人は奥州の人だと但し書きがついているから渡海の希望を持って奥州からやって来て、補陀落寺に渡海前の何年か何か月かを過ごした僧侶なのであろう。三番めは天承元年[3]十一月の高畝上人。祐真上人との間には二百年以上の歳月が置かれている。それからさらに三百年を経た嘉吉三年[4]十一月に四番めの祐尊上人が渡海している。それからさらに五十余年を経て、明応七年[5]十一月の盛祐上人の渡海となるわけだが、この盛祐上人の渡海は金光坊の生まれる七年前のことであり、この僧侶の学徳の誉高かったことについては、金光坊も補陀落寺にはいった当座からいろいろと聞かされていた。それから金光坊もよく知っている足駄ばかりはいていて足駄上人といわれ、奇行の多かった祐信上人の渡海までには三十三年の隔たりがある。

（1）八六九年。（2）九一九年。（3）一一三一年。（4）一四四三年。（5）一四九八年。

いまこそ補陀落寺は補陀落渡海あっての寺のように言われ、昔から少し気のきいた僧侶はことごとくこの寺へやって来て渡海の儀式を終え、さっさと渡海して行ったように思われているが、金光坊の知る限りでは決してそのようなものではなかった。この寺の古い記録にある上述の慶竜、祐真、高畝、祐尊の四上人以外に、この寺の住職以外でこの寺から渡海した者は、信ずるに足るものだけを拾えばほんの二、三の例しかない。下河辺行秀という武人が貞永二年[1]に、入道儀同三司房冬が文明七年[2]に、それぞれ渡海したというのは、他の寺の記載にもあるので事実として見ていいであろうが、その他はほとんど信ずるに足らぬものばかりであった。

したがって、補陀落渡海、補陀落渡海と言うが、六百年ほどのあいだに渡海者は十人あるかなしである。また考えてみればそれが当然なことに思われた。普通の人間が寺詣りでもするようにやたらに渡海できるはずのものではなかった。渡海者は僧侶の中でも何千人か何万人かに一人という特殊な人であるに違いなかった。渡海するにふさわしいだけの修行を積み、海上においての特殊な生命の棄て方を信仰の中に生かすことのできる僧侶は、何十年、何百年に一人しか出るものではない。

それがどういうものか近年やたらに渡海者が多くなり、金光坊の六十年の生涯の中に足駄上人を初めとして五年前に渡海した清信上人まで七人の渡海者を算えるに至ったのである。しかもこの中

（1）一二三三年。（2）一四七五年。

の二人は、二十一歳と十八歳の若者である。信仰のために渡海しようという希望を持った者に対して、それを阻止できる権利を持つ者は寺にはもちろんのこと、この世にはいないのである。現世の生を棄て、観音浄土に生まれ代わろうという熱烈な信仰は、万巻の経典が信仰の窮極の境地として説いているものにほかならなかった。

金光坊は永禄八年になって渡海騒ぎが始まるまで、渡海そのものに対して、そこに一抹の疑念もさし挟んだことはなかった。船底に固く釘で打ちつけられた一扉すら持たぬ四角な箱にはいり、何日間かのわずかな食糧とわずかな燈油を用意して、熊野の浦から海上に浮かぶことは、もちろん海上においての死を約束するものであった。しかし、それと同時に息絶えたものの屍は、その者が息絶えると同時に、ちょうど川瀬を奔る笹船のように、それを載せた船とともに南方はるか補陀落山を目指して流されて行く。流れ着くところは観音の浄土であり、死者はそこで新しい生命を得てよみがえり、永遠に観音に奉仕することができるのである。

熊野の浦からの船出は現世の生命の終焉を約束されていると同時に、宗教的な生をもまた約束されているものであった。したがって、金光坊はいまだかつて一度も、渡海者たちの顔に絶対に帰依する者だけの持つ、心の内側から輝き出して来るような一種独特の静けさと落ち着き以外の何ものも見たことはなかった。死への悲しみや怖れなど微塵もなく、むしろそこには新しい生への悦びが窺われた。渡海者は一様にもの静かで晴ればれとした顔をしており、そして彼らを見送る者たちもまた、多少の好奇心を除いては、讃仰の念以外のものは、彼らに対していだかなかった。

しかし、金光坊がそうした過去の渡海者たちに対して今までとは違った向かい方で向かうようになったのは、己が渡海を世間に発表してからであった。金光坊の眼には、寝ても覚めても自分の知っている何人かの渡海者たちの顔が、今までとは少しく異なった表情で入れ代わり立ち代わり現われるようになったのであった。

金光坊は春から夏へかけて補陀落寺の自室から出なかった。外出すると賽銭を投げられたり、生仏のように拝まれたり、あるいは浄土への携行物を託されたり、死にかかっている病人の額に触らせられたり、そうしたいろいろのことも煩わしかったが、それより金光坊はあと三、四か月先に迫っている渡海に対して、曲がりなりにもそれに応じられるだけの自分を作らなければならなかったのである。突然渡海ということに立ちはだかられてみると、金光坊は自分がまだなんの心準備もできていないことを知らなければならなかった。金光坊は明けても暮れても読経三昧にふけった。いつ侍僧が居室へ顔を出しても、金光坊はいつもやせぎすの背を見せ、経を誦す声だけがそこからは立ちのぼっていた。

たまに経を誦していないときもあったが、そうしたときは金光坊は気抜けしたように呆然と室内の一点へ眼を当てていた。侍僧が声をかけても容易なことではその視線を侍僧のほうへは向けなかった。侍僧はそうした金光坊の様子をいつも同じ言葉で周囲の者に伝えた。渡海上人たちは海へはいってヨロリになられるそうだが、このごろのお上人の顔ときたら、渡海せんさきからヨロリそっくりじゃ。

実際に渡海上人の霊はヨロリという魚になると言われていた。ヨロリはミキノ岬と潮ノ岬[1]の間に

(1) 和歌山県西牟婁郡の東南端、串本町の砂州によって南に連っている島の先端。

しか棲んでいず、土地の人たちはこの魚はとらえてもすぐ海に返してやり、決してそれを食用にすることはなかった。

金光坊は生まれつき長身でやせており、それでなくてさえ外見は長細いヨロリに似ていたが、侍僧にヨロリに似ていると言わせたものはそうしたからだ格好から来るものではなく、その目であった。金光坊の放心したように焦点を持たぬ、それでいて冷たい小さい眼は、確かにヨロリという魚のそれに似ていた。

金光坊は瞑目して読経しているか、でないときはヨロリの眼をどこを見るというまでもなく見開いていた。ヨロリの眼をしているときは、金光坊はいつも自分の先輩である渡海上人たちのだれかのことを考えていたのである。

金光坊も一日に何回か、ほんのわずかの時間だったが、ヨロリの眼から人間の眼に返ることがあった。それは自分がもう長いこと渡海上人のだれかのことを考えていたことに気づき、ああ、こんなことをしていてはいけない、こんなことを考えていてはいけない、そんな暇があったら経を誦すことだ。経さえ誦していればいいのだ、と自分を叱りつけるときであった。このときだけ金光坊は本来の自分の眼に立ち返り、それから再び憑かれたように経を誦し始めるのであった。

しかし、経を誦し終わると、いつか、金光坊はまたヨロリの眼になってしまった。渡海した上人たちのだれかのことが彼の心をとらえてしまうのである。いってみれば、この時期の金光坊の毎日は、ともすればヨロリになりがちな自分の眼を、読経によってそうした状態から救うことであった。つまり、執拗に彼の眼の前へ入れ代わり立ち代わり現われて来る渡海した上人たちの顔を自分

の眼から追い払うことであった。それに精根を費していたと言っていいのである。

金光坊が補陀落渡海に立ち会った最初は享禄四年(1)の祐信上人の場合で、祐信はそのとき四十三歳であった。金光坊は郷里の田辺の寺から補陀落寺へ移って来てから半年経ったばかりのときで二十七歳であった。祐信はいつも足駄ばかり履いていて奇行が多く、寺でもなんとなく変わり者として特別扱いにされていたが、突然物にでも憑かれたような格好で補陀落渡海を宣言して周囲のものを驚かせ、宣言してから三か月めに実際に渡海を実行したのであった。この祐信の渡海はその前の渡海者盛祐上人のときから三十三年の開きがあったので世間の視聴を集めるに充分だった。渡海の日は近郷近在はもちろん、遠くは伊勢、津あたりからも渡海を拝もうという人たちが集まって、浜の宮の海岸はたいへんな人出だった。

祐信もまた田辺出身の僧で、金光坊は郷里が同じだということで、短い期間ではあったが、祐信とは他の者より多少親しく話す機会を持った。祐信は金光坊によく自分には補陀落が見えるというようなことを言った。どこに見えるかと聞くと、海の果てに天気のいい日ははっきりと浮かんで見えると言った。そして、自分の心を空しくして仏の心に帰依した者にはだれにも補陀落は見えるはずだ。お前もその気になって信仰生活に徹すれば必ず自分と同じように補陀落が見えて来るだろうと言った。補陀落という所はどのようなところか、あなたの眼にはどのようなところとして映っているかと聞くと、そこは大きな巌ででき上がっている台地で、激しい波濤に取り巻かれている。そ

(1) 一五三一年。(2) 現在の和歌山県西牟婁郡田辺市。

の波の砕け散る音まで自分のところには聞こえてくる。しかし、その波濤に取り巻かれた巌の台地は、どこまで行っても尽きないほどの広さを持ち、限りなく静かな美しいところで、永遠に枯れぬ植物が茂り、尽きることのない泉が至るところから湧き出していて、朱い色をした長い尾の鳥が群がり棲み、永久に年齢を取らぬ人間たちが仏に仕えて喜々として遊びたわむれている。祐信はそんなことを言った。

祐信は渡海の日、とどこおりなく渡海の儀式をすませると、浜の宮の一の鳥居のところから舟に乗ったが、その付近一帯を埋めている見送りの群衆にはまったく無関心であった。そして舟に乗り移るまで付き添って世話をしていた金光坊に、今日は取り分けよく補陀落山が見える。お前もいつかやってくるがいいといって、それから低く声を出して笑った。その笑い顔を見たとき金光坊はなんとなくはっとした。それでなくてさえ、平生でも、据わって見えている祐信の眼が、このときは青い光でも発しているかのように鋭く見えた。

祐信の舟は海上三里の網切島(1)まで同行者の乗り込んだ数隻の舟に付き従われて行き、そこでこんどは同行者と別れて沖合へと一隻だけ押し出されて行った。

網切島まで送った人々の話では、祐信の舟は一隻だけになると、まっすぐ南に向けて黒い波濤の中を揺れ動いて行ったが、それは一本の綱にでも引張られて行くような速い進み方だったということであった。絶えず彼の眼に映っていた補陀落浄土へと仏の力に導かれて進んで行ったのかも知れなかった。

(1) 現在の金光坊島。

祐信は渡海後祐信上人と称ばれたり、足駄上人と称ばれたりした。渡海前後、彼を変人扱いにしていた寺の人たちも、たれももう足駄上人の悪口を言うものはなかった。足駄をはいた僧侶の奇行は、いろいろな意味をもって考えられるようになり、そのどれもが讃仰の念をもって語り継がれるようになった。

金光坊は祐信からお前もやって来いと言われたが、それから三十四年後ほんとうに金光坊は祐信の行った補陀落へ行くことになったのである。現在の金光坊には祐信が舟に乗り移るとき見せた青い光を放った憑かれたような眼が、祐信のことを思うと思い出された。祐信が海の果てに補陀落浄土を見ていたことは疑うことはできないが、それを見ていた祐信の眼は常人の眼とは違っていたのではなかったか。彼の渡海には死の約束はなかったのだ。彼は死など一度も考えてはいなかったに違いない。死も考えなかったし、同時に、また生も考えなかったのだ。彼の青い光の眼は、実際補陀落を見、そしてそこへ憑かれて歩いて行っただけのことなのであろう。

それから十年経って、正慶上人の渡海があった。正慶上人が渡海を発表したとき、世間の人はたれもそのことに少しも異様な感じは持たなかった。渡海などのことは口に出さないで一生寺で過ごしても、正慶上人は世間の人々から充分尊ばれたに違いなかったが、渡海を発表すればしたで、それはそれでまた、正慶上人らしいことに思われた。そうしたところはなんと言っても正慶上人のえらさであった。ひとつかみにできそうな小がらな体、年齢より十歳以上も多く見える皺だらけの顔、その中の慈愛深い二つの眼。

金光坊は正慶上人が渡海すると決まったとき、心は悲しみで閉ざされたが、これはまったく上人

と別れなければならぬということから来る悲しみであった。もう上人の優しいいたわりのこもった言葉にも、心の底に滲み通る噛んで含めるような訓戒にも、もう接することができなくなると思うと、たまらなく悲しかったのである。自分を産んでくれた親と別れても、これほど深い悲しみはないだろうと思われた。

渡海する年の夏、上人の部屋へはいって行った金光坊に、正慶上人は何かの話のはずみで、広い青海原で死ぬのはいいものじゃろうよと言った。死ぬんでございますかと金光坊は聞いた。このときまで金光坊は補陀落渡海が海上での死を意味すると考えたことはなかった。死ぬには違いなかったが、補陀落へ渡り、永遠の生を得ることが目的であるはずであった。そりゃ、死ぬ。死んで海の広さと同じだけある広々とした海の底へ沈んで行く。いろんなうろくずの友だちになる。そう言って上人はいかにもそのことが楽しそうに屈託なく笑った。

正慶上人はこのときばかりでなく、渡海の舟へ乗り込むときも、また綱切島から船出して行くときも、いつもにこにこしており、平生と少しも違わなかった。たいていの渡海者は四角な箱にはいり、その箱を船底に打ちつけてもらったが、上人だけはそんなことはしなかった。箱は置かれてあったが、箱から出て艫端にきちんとすわり、手を挙げて一同と別れを惜しんだ。上人は泣かなかったが、送る側は老若男女を問わずみな泣いた。

上人は屍が補陀落へと流れて行くことを考えず、海底へ沈むことを考えていたが、それではなぜ補陀落渡海したのであろうか。

(1) 魚族。

それに対して、いまの金光坊に考えられることは一つしかなかった。正慶上人はそうすることが、観音信仰への自分のなすべき最上のことだと思っていたのに違いなかったのだ。天文の初めから上人の渡海した十年へかけて、熊野地方には天災地異がたてつづけに起こっていた。七年正月の大地震、同じく八月の山崩れ、このときは本宮の垂木柱がことごとく割れ砕けるという鎮座以来の不思議があった。また九年八月の大風雨には七人衆の川舟はみな流れ、津々浦々で多くの死者を出した。それからまた正慶上人の渡海の年の八月にも大洪水があった。こうしたことに加えて、京方面は争乱続きで、その余波を受けてこの地方にも殺伐なことばかりが起こっていた。夜盗の群れが横行し、やたらに殺人や傷害沙汰が多く、信仰心といったようなものはまったく地を払っていた。正慶上人はそれが悲しかったのだ。そして信仰というものへ世間の心を惹くために、補陀落渡海を思い立ったのである。

しかし、それにしても、いまの金光坊に気になることは、あれだけの上人が、海上における往生以外、補陀落への渡海ということになると、それを少しも信じていなかったのではないかということであった。上人の場合はそれはそれでいいが、金光坊の場合は、それでは心に納得できぬものがあった。上人のような高い信仰の境地に到達すれば、補陀落へ着こうと着くまいと、それはそれでいいわけであったが、金光坊としては自分の死体がただ海の底へ沈んで行くだけでは、それだけのための渡海であるとしたら、死んでも死にきれぬ気持ちであった。

正慶上人の渡海から四年目に日誉上人が渡海した。この上人は正慶上人のあとを継いで補陀落寺

(1) いわゆる応仁の乱以後の京での争乱を指す。

を預かった人であるが、正慶上人とは異なって病弱で気むずかしい僧侶であった。金光坊はこの人物に仕えた四年間は、気持ちの休まるときはない思いだった。寺の人からもみな怖れられていた。だから日誉上人の渡海が発表されたとき、そのことの意外さはともかくとして、ほっとした思いを持ったのは金光坊一人ではなかったはずである。日誉上人は生に執着の強い人で、平生でも風邪一つひいたらたいへんな騒ぎであった。それが渡海の年の正月から持病の喘息がひどくなり医者にかかっても少しも効果はなく、自分でも自分の生命がこのままで行ったらいくらもないことを悟ったのである。そして突然どうせ六十一歳で病没するくらいならいっそ補陀落渡海をと思いたったものらしかった。

しかし、この日誉上人の場合は、補陀落渡海によって、現身のまま補陀落浄土へ行き着けぬものでもあるまいという考えが強く働いていたことは疑えない。渡海前年の秋あたりから、日誉上人は康治二年(1)の一月どこかの国の僧侶が土佐の国から渡海して現身のまま補陀落浄土へ行って、そこを見物して帰って来たという話や、どこのたれそれが文明年間(2)に渡海して、これまた補陀落浄土へ詣で無事に帰国した話などを何かの書物で読んだらしく、そうしたことをたれかれの見境なく話すことが多くなった。

日誉上人の渡海にはこうした伝説か物語かわからぬものが、大きい力をもって働いていたことは否めないようであった。しかし、渡海を決意してから渡海の日まで日誉上人はともかく立派であった。渡海上人の称号を貰ってから急に気持ちがしゃんと立ち直った感じで、渡海の年の夏から秋へ

(1) 一一四二年。(2) 一四六九～一四八七年。

かけては別人のように穏やかになった。よそ目から見ている限りでは、上人の心の内部にはもはや生とか死とかそうした観念はいささかもないようであった。

日誉上人は渡海の前日、自分の乗る舟を浜辺まで見に行った。そのとき金光坊は供をしていっしょに行ったが、上人は舟を見たときだけ、少し不機嫌な顔をして、正慶上人のときもこのように小さな舟だったかと言った。金光坊は前の上人の場合はもっと小さかったと答えた。

渡海の日、日誉上人は舟へ乗り移る際、水際から舟縁りへ渡してある板の橋を踏みはずして、片脚を海水に浸した。このとき日誉上人はたれにもそれとわかる顔色の変え方をして、なんとも言えずいやな顔をした。金光坊はこのときの上人の顔ほど絶望的な顔を見たことはなかった。日誉上人は片脚を船縁りにかけ、濡れた片脚を橋代わりの板に乗せて、しばらくのあいだそのままそこに立っていた。そしてやがて思いあきらめたかのように舟にはいった。五人の同行者の話では、日誉上人はそれから綱切島を出るまでたれともひとことも口をきかなかったそうである。

金光坊は日誉上人の顔を、そのときから二十年経った現在もはっきりと眼に浮かべることができた。そしていやなことには、そうした顔をした上人の気持ちは、そっくりそのまま自分の気持ちでもあるかのようにこちらに伝わって来た。

梵鶏上人は、祐信上人の場合と同じように、自分には補陀落が見えるというようなことをときおり口走っている人物だった。渡海のときの年齢は四十二歳で、からだは大兵肥満で、裸になると土方人足のように頑健で、素行は概して粗暴であった。金光坊は自分より十歳年少のこの僧侶がなんとなく虫が好かなかったが、梵鶏上人が渡海を発表したときは、妙に痛ましいものを感じた。渡海

上人たちは概して繊弱な体格を持った人物が多かったが、梵鶏上人はあまりに大きく、渡海の舟にも似つかわしくなく、補陀落の浄土にもまた無縁の人のように見えた。

梵鶏上人ははっきりと現身のまま自分が補陀落へ行き着くものと信じていた。自分は死ぬのはいやだが、しかし、補陀落山から招きを受けているから、自分がそこへ無事に行きつけることは必定である。補陀落山が自分の眼に見えるということは、そこから招かれていることである。そんなことをくどくどとしゃべった。

みんなそうした梵鶏上人の言葉に対して、彼の満足するような返事は与えなかったが、日誉上人のあとを受けて住職になっている清信上人だけは、いつもそのとおりだと優しく穏やかに答えていた。

その清信上人もまた、五年前の六十一歳のとき渡海したが、金光坊は清信上人の渡海には、それまでのなにびとの場合とも違った見方をしていた。清信上人はもともと身寄りのない孤独な身の上であったが、彼が住職になっているあいだ、人から裏切られるようないやな事件がたて続けに彼を襲っていた。それでなくてさえ、その貧弱な体格同様、小さい風波にでもすぐ痛みやすい上人の心は、すっかり厭人癖に取り憑かれ、世を厭い、人を厭い、生きて行く気持ちを失ってしまったのであった。

金光坊は年齢も近かったので清信とはよく気持ちが合ったが、清信上人の晩年の厭世的な気持ちは何ものも救うことができないほど強いものであった。彼は心の底から死にたかったのである。幼年から僧籍にはいり、一生僧侶で過ごしてはいたが、晩年の彼はたいして仏というものを信じてはいなかった。

もちろんそうした自分の心の内側はたれにも覗かせず、渡海上人として衆生の尊敬を一身に集めて、万事そつなくやってのけたが、金光坊だけには彼の気持ちがよくわかっていた。

渡海の日が迫ると、清信上人は舟は用いないで、鐘を叩きながら浜辺から海へはいり、しだいしだいに深所へ向かって歩いて行く方法を取りたいと言った。しかし、このことは弟子たちから苦情が出て、実行することはできなかった。正慶上人と並んで、清信上人の場合もまた、立派な渡海であった。補陀落浄土へ行けるようなら自分は一刻も早くそこへ行きたい。それゆえ、食糧も燈心も油もいらない。帆柱と南無阿弥陀仏と染めぬいた帆さえあればそれで充分であると言い、実際にそのとおりにしたのであった。

舟の中の上人の顔は僧侶の顔ではなかった。念珠こそ持っていたが、舟に乗ってから他の渡海上人たちのすべてがやるように念仏を誦すわけでも、念珠をまさぐるわけでもなかった。

綱切島を出るとき、上人は多勢の見送り人からようやく解放されるときが来たというように、

「やれやれ、人間というものは、生きるにも死ぬにも人に厄介になるものですわ」

ただ一言そんなことを言った。これでようやく一人になれる、そんなほっとしたものがその表情にはあった。

以上の渡海者たちのあいだに、二十一歳の光林坊、十八歳の善光坊の渡海があった。前者は金光坊が三十五歳のときであり、後者は三十八歳のときである。二人とも申し合わせたように骨と皮ばかりにやせ衰えて死の一歩手前といった状態で、両親に付き添われて寺へ渡海を申し込んで来た。

光林坊の場合は、補陀落渡海には両親が熱心で、万が一にも現身のまま補陀落山に行きつけるものなら、このままにしておいてもどうせ長くは生きない我が子にとって、それはどんなに幸せなことだろう、そういった気持ちから出た措置であった。本人の光林坊は渡海の真の意味がなんであるかよくは理解できないらしかったが、どうせ自分でも助からぬことはわかっているので、両親の言いつけならなんにでも従うといったところがあった。

善光坊の場合は、光林坊とは反対にまったく本人の希望するところであった。両親はどうせ死ぬにしても一刻でも長く現世に置きたい気持ちであるらしかったが、本人のほうは海上で成仏し、己が死体を補陀落浄土へ潮によって運んでもらいたいと両親を説き伏せ、両親はやむなく涙ながらに彼につき従って寺までやって来たということであった。

この二人の若い渡海上人のためには同行者も多く、浜辺の見送り人も多かった。

金光坊は十八歳のやせ衰えた少年の渡海にそのときも涙をそそられたが、現在でもまた、その少年の姿を思い浮かべると、心の底からこみ上げて来る切ないものを感じた。

夏から秋にかけては恐ろしいほど早く日が経った。金光坊は毎日のように今日は何日かとかたわらにいる者に尋ね、返事を聞くたびにそんなことがあろうかと思った。金光坊は相変わらず読経三昧に日を送っていた。立秋からあとは一日の時間が信じられぬ早さで飛んで行った。朝も晩もいっしょにやって来るように思われた。

金光坊は、はっきり言って、依然として補陀落渡海する心用意が何もできていない自分を感じて

いた。読経の合間合間に、相変わらず自分の知っている渡海者たちの顔は次々に立ち現われて来たが、現在の金光坊には、それらの顔は、それぞれに親しみも懐しさも感じはしたが、しかし、例外なく補陀落渡海とはなんの関係もない人間の顔に見えた。自分の渡海など考えてもいない長いあいだ、金光坊が彼らに対していだいていた崇高なものはすっかりその顔からは消えていた。

口癖のように補陀落山が見えると言った足駄上人と梵鶏上人の二人の顔は、いま考えてみると、常人のそれではなかった。世を厭い人を厭う老人の厭世からの行為としか解されぬ清信上人の渡海に至っては、どう考えても信仰とも観音とも補陀落浄土とも無縁であった。清信上人の眼はそんなものは何も見ていなかった。彼の見ていたものは熊野の海の黒い潮のぶつかり合いだけなのである。その点は、いちばん立派な渡海の仕方を見せた師正慶上人の場合でも同じことであった。正慶上人は自分が死ぬということだけをはっきり知っていて、自分の死体を海底へ沈めて行く潮の動きだけを見ていたのである。自分の死体が補陀落山へ運ばれて行こうとも、観音の浄土へ生まれ代わろうとも、そんなことは微塵も考えていなかったに違いない。それでなくて、あんな落ち着いた静かな眼を、人間は持てるものではない。

まだ何かを見つめていたと言うなら、それは日誉上人だろう。日誉上人は舟へ乗り込むときも、乗り込んでからも、そして何日か何十日か経って舟が板子一枚になり、その上に乗っているときも、いつも生きることを見つめていたに違いない。まだ自分は救われるかもしれない、観音の救いの手が自分に及ぶかも知れない。そういう奇蹟を求める心を失わなかったに違いない。しかし、彼もまた、ほんとうの意味では信仰とも観音とも補陀落浄土とも無縁であった。けっきょくは信じると言

える信じ方で、そうしたことを一度も信じたことはなかったのである。

二十一歳の光林坊と、十八歳の善光坊の二人は、静かななんとも言えず心の惹かれる渡海の仕方をしたが、しかし、これとて信仰とは無縁なのだ。骨と皮だけになったやせ衰えた少年たちは、どんな大人たちよりも、自分の生命というものにいさぎよくあきらめをつけていたのである。

金光坊は自分の眼の前に現われて来るそうした幾つかの顔を、それを見つめている自分に気づくと、いつも大急ぎでそれを追い払った。みんな惨めであった。自分はそのどの一つの顔になるのもいやだと思った。それでいて、ともすればそのどの一つの顔にでもなりそうであった。祐信や梵鶏の顔にも、正慶上人の顔にも、日誉の、清信の、光林の、善光のそれぞれの顔にも、少し心をゆるめれば立ちどころにしてなってしまいそうであった。

金光坊としては、自分の知っている渡海上人たちのだれとも別の顔をして渡海したかった。どのような顔であるか、もちろん、自分では見当がつかなかったが、もっと別の、一人の信心深い僧侶としての、補陀落渡海者としての持つべき顔があるはずであった。どうせ渡海するなら、自分だけはせめてそうした顔を持ちたいと思った。

しかし、十月の声も聞いて、渡海する日がわずか一か月あとに迫るころになると、金光坊は、自分の眼に浮かんで来る渡海上人たちの顔に対して、またべつの考え方をするようになった。これはかなり大きい変わり方であった。金光坊は、そのどの一つの顔でもいいから、それに自分がなれるものならなりたいと思うようになったのである。秋の初めまでは、ともすればそうした顔のどれにでも容易になりそうな自分を感じ、それに嫌厭を感じていたが、いまは反対にそのどの一つにでも、

なれるものならなりたかった。なりたいと思ってから、容易になれると思ったことがいかに甘い考えで、簡単なことではそれらのどの一つの顔にもなれるものではないということがわかったのであった。

金光坊は、いまや、自分の眼にも補陀落の浄土が見えて来たら、どんなにいいだろうと思った。祐信や梵鶏の、常人のそれとは思われぬ青い光を発している眼もうらやましかった。清信上人のこれでようやく一人になれたという顔もうらやましかったし、日誉上人の何ものかと戦っているような不機嫌な、足一つ海水に浸したことでさっと変わるような顔もうらやましかった。正慶上人の静かで立派な顔は望んでも及ばないことだったが、年若い二人の少年の顔さえも、自分などのとうてい求めて及ばぬ遠いものに思えた。それにしても年稚いのに、どうしてあのように静かな、しかし、あきらめきった顔が持てたのであろうか。

金光坊は今や急に増えて来た訪問者たちと会わなければならなかった。金光坊はたれがいかなる用件で来たか、そのことを考えることはできなかった。考えるゆとりもなければ考える力も持っていなかった。金光坊は侍僧に本堂の千手観音の前に連れて行かれ、午前中だけを毎日のようにそこにすわっていた。訪問者たちはあとからあとから入れ代わり立ち代わり現われた。金光坊は訪問者に対して一言も発しなかった。訪問者のほうも、けっきょくは別れにやって来たのであるから、金

(1) 大悲観音ともいい全身黄金色で二十七面、千手、千眼をもっている観音菩薩で普通の像では両眼両手のほかに左右におのおの二十手をもち掌に一眼をもっている。これらの四十手が慈悲をもって一手ごとに二十五有を救うから千手千眼となる。一切の衆生を済度し地獄の苦悩を救い、諸願を成就させる菩薩である。

光坊から話しかけられぬほうがむしろ好都合であったし、またこうした別れというようなものは、このようにして行なわれるものだという気がして、何も口から出さぬ金光坊の態度をいささかも異様には感じなかった。

金光坊は自分の眼の前の訪問者が何を話そうと、いっさい受けつけないで、口の中で低く読経しているか、さもないときはヨロリの眼をして暗い堂宇の一隅に視線を当てていた。

十一月へはいってからは、金光坊にはまったく日時の観念はなかった。朝眼覚めると、いつも若い僧の清源を招んで、渡海の日は今日ではないかと、そんなふうに聞いた。そして今日が渡海の日でないことを知ると、ほっとしたように顔を上げて白い砂地でできている庭の雑木へ眼を当てた。雑木の青さが眼に滲み、庭続きといっていい浜の宮の海岸の静かな波の音が耳にはいって来た。金光坊はこのころになって初めて、雑木に眼を当てたり、波の音を聞いたりした。長い間金光坊の眼や耳は、そうしたものを受けつけていなかったのである。

秋晴れの気持ちよく空の澄んだ日、金光坊は例によって、清源を招んで、渡海の日は今日ではなかったかと聞いた。すると若い僧は、今日申ノ刻(1)に寺をお出ましになりますと答えた。金光坊は一度立ち上がったが、すぐまたすわった。そしてあとは急に体軀から力という力がすべて抜けてしまった感じで、身動きしないでいた。身動きしないというよりできなかったのである。

侍僧の一人が顔を出して、見送りの那智の滝衆がやって来たことを告げた。それから続いてもう一人の侍僧が顔を出して、禅家の導師が到着したことを告げた。

(1) 今の午後四時。

このころから金光坊にも寺内の騒然として来るのが感じられた。金光坊は何人かに手伝われて、着衣を改め、それから何人かの人に導かれて、自分がこの寺へはいって以来一日も欠かさず毎朝のように勤行した本堂へはいって行った。本堂の千手観音(1)も、右脇侍の帝釈天(2)、左脇侍の梵天像(3)、それから神将像(4)、天部形像(5)、そうした仏たちに、金光坊はそのときだけは静かな視線を当て、そしてやがて、それをねめ回すようにいつまでも見守っていた。

金光坊はすべて侍僧の指図によって動いていた。本尊の前へ行って読経したり、また自分の席に戻って、仏像たちを見守ったりした。香煙は狭い堂内に立てこめ、僧侶たちはそこにはいりきれないで、回廊から庭先へと流れていた。本堂で読経が行なわれているというより、読経の声によって本堂はすっかり包まれていた。

午刻過ぎに金光坊は本堂を出た。そして居間で何人かの僧侶たちと茶をのんだ。百八個の小石に経文の文字を一つずつ書き込んだものが、袋に入れられて縁側に運ばれて来た。何巻かの経典類、小さい仏像、衣類、手回り品、そうした金光坊とともに舟に乗せられる物も次々に運ばれて来、それらが僧侶たちの手によって改められると、最後にそれらを海岸まで運ぶ板輿がいやにひらべったい感じで担ぎ込まれて来た。金光坊の眼には僧侶や人夫たちの物の取り扱いがすべて粗暴に荒々しく見

(1) この補陀落寺の本尊千手観音は無双の霊仏といわれ古来一般にあつくあがめられている。(2) 須弥山の頂上、善見城に住み、四天王および他の三十二天を統領して仏法およびその帰依者を護る。(3) 梵は清浄の意で欲界の婬欲をはなれて寂静清浄の地に住む菩薩。仏教では帝釈天とともに正法護持の主である。(4) 供奉するものを護り、あらゆる苦難を脱し諸願を達成せしめる守り神。(5) 仏法を守護する天界の神たちの像。

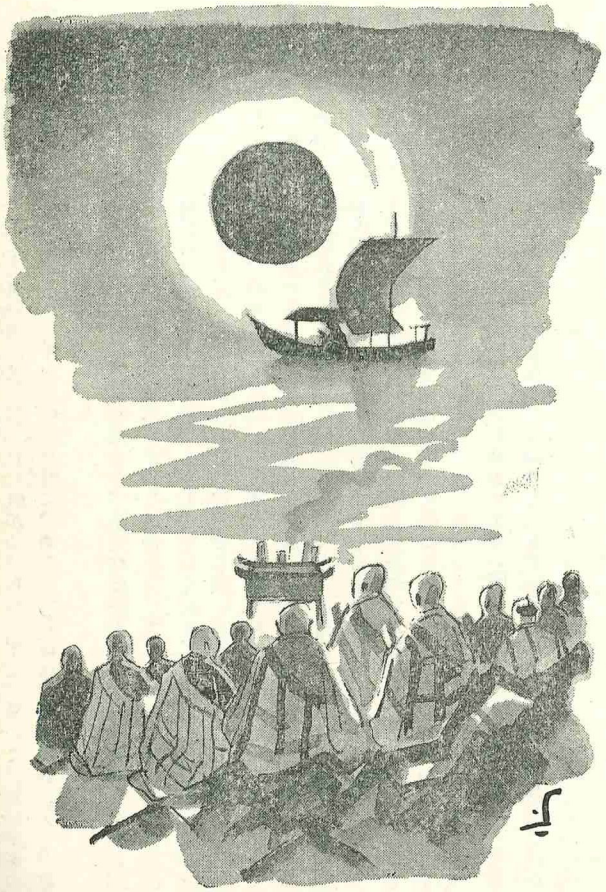
えて腹立たしかったが、それを口に出す気持ちにはならなかった。

定刻の申ノ刻少し前に寺を出た。晩秋とも思えぬ強い陽が眩しく金光坊の眼を射た。境内から海岸へかけては人で埋まっていた。観衆のどよめきの中を、金光坊を真ん中にした一団は一ノ鳥居をくぐって浜の白い砂の上へ出た。見物人は金光坊たちの一団とともに移動して行った。

金光坊は自分の乗る舟がかつての日誉上人のように今までのいかなる上人の渡海の場合より小さく感じられた。どうしてこんな小さい舟を作ったのかと思った。しかも乗船場も作られてなく、舟は同行人の乗る三艘の舟といっしょにあたかも波打ちぎわに打ち上げられでもしたように置かれてあった。同行人の乗る舟のほうがずっと大きかった。

金光坊はすぐ乗船させられた。金光坊が乗船してから、人夫たちによって、大きな木の箱が運ばれて来て、それがすっぽりと頭の上からかぶせられた。金光坊はまたこのことにも怒りを覚えた。屋形舟というものは初めから屋形が舟に設けられてあって、そこへあとから人間がはいって行くものである。それなのに、これでは反対ではないかと思った。

舟に屋形を取りつける釘打ちの音が聞こえ出したが、それはしばらくするとやんだ。屋形の内部はまったくの四角の箱で薄暗かったが、やがて一方の扉が外部から開けられて、そこからいろいろの物が運び込まれて来た。そしてそうしたことがすべて終わってから、金光坊は侍僧によって屋形の外に立って見送り人に挨拶することを求められた。金光坊は言われるままに屋形を出て舟縁りの上に立った。群衆の間にどよめきが沸き起こり、賽銭が雨のように舟縁りや波打ちぎわに投げつけられた。子供たちが争ってそれを拾った。金光坊はすぐ屋形の中へ逃げ込んだ。それからまた金光



坊は帆柱が立てられ、それに南無阿弥陀仏と書かれた帆がつけられるまで、長いこと暗い屋形の中にすわっていなければならなかった。すべては不手際に、のろのろと行なわれているようであった。

かれこれ乗船してから一刻(1)近い時刻が経過したとき、金光坊は舟がなんの前触れもなく動き出すのを感じた。舟底が波打ちぎわの小石の上をぎしぎしした音をたてて滑って、やがて海へ押し出されるのを感じた。金光坊は外を見ようと思った。しかし、どこを押しても屋形の板は動かなかった。さっき出入りした出入口も固く閉ざされていて、押しても突いてもことりとも言わなかった。

しかし、やがて、船頭の漕ぐ艪の音が耳にはいって来たとき金光坊はほっとした。まだ一人ではないと思った。綱切島まで船頭の手で船をあやつられて行き、そこへ行って初めて、一人きりになって潮の流れの中へ押し出されるのである。

波の音のあいだから鉦の音が聞こえて来た。耳を澄ますと、鉦の音といっしょに何人かが和する読経の声も聞こえている。しかし、読経の声のほうは絶えず波の音に妨げられていて、ときどき、ふいにそれは祭礼の日の囃しか何かのようににぎやかに聞こえて来たり、すぐまたかき消えたりした。

綱切島へ着いたとき、金光坊は屋形の板の合わせ目に小さい隙間のあることを発見して、そこへ顔を押しつけて船外を覗いてみた。大きな波のうねりを見せている暮れかかった暗い海面だけがどこまでも果てしなく広がって見えている。

(1) 約二時間。

お上人さん、おさらばですじゃ。そんな船頭の声が屋形の天井板のほうから突然降って来た。金光坊にはおさらばという意味がわからなかった。これまで渡海する場合は、舟は綱切島で一夜を明かし、そこで同行者とも別れを惜しんで、翌朝早くそこを出発することになっていた。

金光坊は、自分でも驚くような大声を出して、舟はここで一夜を明かすはずではないかと尋ねた。すると、天候が荒れ模様で同行の衆が帰れなくなる怖れがあるので、ここで一夜を明かすことは取りやめて、すぐ艫綱を切るということであった。

金光坊はそれに対して何かどなったが、しかし、もう船頭は岸へ飛び移ってしまったらしく、それに対する応答は得られなかった。

舟はやがて大きく揺れ始めた。金光坊は板の隙間へ顔をぴったりと当てて舟の外を覗いた。短い時間なのに、さっきよりいっそう黒さを増した海面が、潮をぶさぶさとぶつけ合って広がっているのが見えるだけであった。

金光坊は今やまったく一人になって舟の屋形の中に倒れた。倒れると、一日の疲労がのしかかって来たのか、恐ろしい力で眠りが彼をとらえた。

どれだけの時間が経ったか、金光坊は眼を覚ました。自分がいま真暗な闇の中に横たわっており、自分を横たえている板が大きく上に下に揺れ動いているのを知った。波濤の音が金光坊の体の下で聞こえたり、頭上で聞こえたりしている。

金光坊は起き上がると、いきなりありったけの力をこめて屋形を形造っている板に己がからだを

(1) 船をつなぎとめるつな。

ぶつけた。金光坊は生まれてからこれほど荒っぽく自分の体を取り扱ったことはなかった。

五、六回同じことを必死に繰返しているうちに、やがて屋形の一方の板が音をたてて外部へ外れるのを感じた。と同時に、物凄い勢いで海風と潮のしぶきが屋形の中へ吹き込んで来た。尾形が風をはらんだので、舟は大きく一方へ傾いた。次の瞬間、金光坊は自分のからだが海中へひどく軽々と放り出されるのを感じた。

金光坊は板子の一枚につかまって、一夜海上に浮かんでいた。夜が明けると、綱切島がすぐ近くに見えた。幼少時代紀州の海岸で泳いでいたので、それが役にたって溺れることから免れることができたのであった。

金光坊はその日の午刻近く綱切島の荒磯へ板子ごと打ち上げられた。死んだようになっている金光坊の体が、昨日同行の者として金光坊をこの島まで送って来た僧侶の一人によって発見されたのは夕刻であった。海上が荒れていたので、同行人たちは全部島にとどまっていたのである。

金光坊は荒磯で食事を供せられた。そのあいだ僧侶たちは互いに顔を寄せ合い、長いこと相談していたが、やがて漁師に一艘の舟を運ばせて来ると、それに再び金光坊を載せた。そのころは金光坊は多少元気を恢復していたが、舟に移されるとき、それでも聞きとれるかとれないかの声で、救けてくれ、と言った。何人かの僧はその金光坊の声を聞いたはずだったが、それは言葉として彼らの耳には届かなかった。

それからどれほどかの時間、舟はそこに打ち棄てておかれた。人々は黙ってそれを見降ろしてい

た。

そうしているとき、若い僧の清源は師の唇から経文ではない何か他の言葉が洩れているらしいのを見てとり、自分の耳を師の口もとに近づけた。しかし、何も聞き出すことはできなかった。清源は懐中から紙を取り出し、矢立の筆とともに師の前に差し出した。

蓬萊身裡十二棲、唯心浄土已心弥陀

金光坊は震えている手でそんな文字をつづった。やっと判読できるような字体であった。それから彼はちょっと間を置くと、こんども危っかしく筆を走らせた。

求観音者　不心補陀　求補陀者　不心海

金光坊は筆を置くと、すぐ眼をつぶった。清源は師の息が絶えたのではないかと思ったが、まだ脈もあり体温もあった。清源は師の筆跡からそれを書いた師の心境をはっきりととらえることはできなかった。それは金光坊がようやくにして到達することのできた悟りの境地のようでもあり、また反対に激しい怒りと抗議に貫かれたそれのようでもあった。

問もなく急ごしらえの箱が金光坊の上にかぶせられ、こんどはしっかりとそれは船底に打ちつけ

(1) 帯に差しこんで携帯できるように筒にはいった墨壺と筆。

られた。その仕事が終わると、まだ生きている金光坊を載せて、舟は再び何人かの人の手で潮の中に押し出された。

金光坊の渡海後、補陀落寺の住職が六十一歳で渡海するということはなくなった。もともとそうした掟があったわけではなかったが、金光坊の渡海の始終が伝えられ、そうしたことが補陀落寺の住職の渡海に対する世間の見方を改めさせたものと思われた。そしてその代わり、補陀落寺の住職が物故すると、その死体が同じく補陀落渡海と称せられて、浜の宮の海岸から流される習慣となった。そうした渡海者は享保のころまで七名をかぞえている。それは渡海者の物故した月に行なわれるので、渡海の行なわれる季節はまちまちであった。春のときもあれば、秋のときもあった。

金光坊の渡海後、ただ一つの例外として生きながら渡海した例があった。それは金光坊の渡海後十三年を経た天正六年[1]十一月の清源上人の渡海であった。清源は三十歳になっており、補陀落寺の記録によると、両親のための渡海となっているが、もちろん、金光坊の渡海に同行したこの若い僧のそのときの心境がいかなるものであったか、それを知る手がかりは何一ついまに残されていない。

（1）一五七八年。

解説

山本健吉

一

かつて井上靖氏は『天平の甍』について、それが事実小説であると言ったのを覚えている。と言ってもそれは、事実そのままという意味ではなく、事実を尊重する心構えで書かれている小説ということである。森鷗外がかつて次のように言った。「わたくしは史料を調べて見て、其中に窺はれる『自然』を尊重する念を発した。そしてそれを猥に変更するのが厭になった。」（歴史其儘と歴史離れ）それと同じような気持ちが井上氏の胸にもきざしたのだと想像できる。

井上氏は『蒼き狼』のあとがきに、それは歴史小説としては、短編を別にして言えば、『天平の甍』『楼蘭』『敦煌』につづく第四作であることを言っている。短編としては、その前に『漆胡樽』『異域の人』『僧行賀の涙』などがあり、長編としては『天平の甍』が歴史小説の第一作だということになる。氏はここでは、歴史小説を厳密に考えようとしているのであって、『戦国無頼』とか『風林火山』とかいった、エンターテインメンツに属する小説は、歴史小説の範囲から除外しようとしているのである。

小説とフィクションとは、元来同義語である。ヨーロッパでは、アリストテレス以来、詩（文学）

と歴史とは厳密に区別されるべきものと考えている。歴史家は実際にあったことを描き、詩人（文学者）はありうることを描く。したがって、詩はむしろ普遍性を描き、歴史は特殊性を描く――というのがアリストテレスの考えであって、この点から詩を歴史よりも上位に置いているように見えるのである。

だが一方、彼はまた次のようにも言っている。悲劇で歴史的人名を固守しているのは、われわれが、まだ起こらないものの可能性を、必ずしも信じないのに反して、実際に起こったものの可能性を容易に信ずるからだ。なぜなら、それが可能性がなかったら、それは決して起こらなかったのであろうから。してみると、起こったことと起こりうることとは対立概念ではなくて、起こりうることの一部に起こったことは属するのである。むしろ起こりうることのうち、その可能度のもっとも高いものが、実際に起こったことだとも言いうる。そうしてみると、歴史もやはり、一回きりしか起こらなかったその特殊の記録を目指しながら、ねらっているのはやはり普遍性にほかならないのである。

歴史の中の「自然」を尊重しようとする思いの中には、そのような特殊であることによってかえって普遍的である歴史の方法への信頼の念が、はっきり存在する。それは史伝を書く鷗外にあり、同時に歴史小説を書く井上氏にも存在する。

歴史を書きながら、同時に詩を実現することができるという信念が、『天平の甍』を書くに際して、井上氏の胸中にはあったのである。

二

『天平の甍』は、唐の名僧鑒真の来朝という、日本古代文化史上の大きな事実を背景に、五人の天平留学僧の運命を描き出している。この五人のうち、業行を除く四人は、多治比広成を大使とし、中臣名代を副使とする天平五年（七三三）の第九次遣唐船で入唐したのである。これは養老元年（七一七）の第八次遣唐船で、阿倍仲麻呂・吉備真備らが渡ったときから、十六年を経ている。そして、栄叡・普照・玄朗・戒融の四人の青年僧たちは、今や留学を了えて帰国しようとする真備や玄昉と、首都洛陽ですれちがう。そのような歴史上高名の人物の登場する、正史上の一瞬の文学的定着は、この上なく感動的である。たとえば、日本僧で玄宗から紫の袈裟を賜わったただ一人の人物玄昉が、青年僧たちが宿っている大福先寺を訪ねて来たときの情景を、作者は簡潔に次のように描き出す。

「玄昉は日本から来たばかりの若い僧侶たちに、これから何を学ぶかを一人ひとりに向かって尋ね、しっかり勉強するように言うと、あとは寺の境内を一巡してある落ち着かないあわただしい印象を残して帰って行った。一陣の強い風がさっと吹いて来て、たちまちにして通り過ぎて行ったような印象であった。普照は同じ血を持ったかつては留学生であり、いまは高名な僧である玄昉から、留学中の注意とか勉学に対する指示とかを受けたいと思っていたが、それを切り出す暇は与えられなかった」

一陣の強風のように通り過ぎて行ったというのがおもしろい。帰国して権力をほしいままにし、

たちまち没落したその運命を、すでに私たちは知っていて、このさりげない一瞬において捕えられた肖像を、いっそう興深く受け取るのである。そしてここに、戒融に玄昉・行基比較論を吐かせているのも、適切である。

吉備（下道）真備とは、大使広成らの宿所である四方館の一室で、普照に会わせている。

「真備は二十四歳で入唐して、現在は四十一歳になっていた。普照には、真備は背の低い、むしろ穏やかな風貌を持った平凡な人物に見えた。強いて普通の人間と違っているところを捜せば、長い唐土の生活が、彼を日本人よりむしろ唐人に近い印象にしていることであった。皮膚の色も唐人のそれなら、眼もまた鷹揚な唐人そのままの眼であった。

真備はそのとき、自分が故国へ持ち帰ろうとしている将来品の目録を遣唐使の一行に報告したあとで、その荷作りと運搬のことを係りと打ち合わせているところであった。彼はゆっくりと将来品の名称を一つ一つ口に出して言い、それを相手に書き取らせ、そのあとで自分がのぞきこんでは、それがまちがっていないかどうかを確かめていた。その同じ部屋に普照がいることなど、ほとんど意識していないかのようであった。」

短い文章のうちに、真備の風貌とその性格の片鱗を的確に捕えている。相並んで秀才の聞こえが高かった阿倍仲麻呂に比べて、風流めいたところは少しもなく、下層から昇進した実務家型の努力家らしい面が、この一節にはさりげなく描かれている。たとえば、「彼はゆっくりと将来品の名称を一つ一つ口に出して言い、それを相手に書き取らせ、そのあとで自分がのぞきこんでは、それがまちがっていないかどうかを確かめていた」という一文など、真備の風貌から心の動きまで、彷彿と浮かび出させてくれるのである。

このとき帰朝の一行に加わらず、ついに終生唐土にとどまった阿倍仲麻呂とは、普照らは何年かあとになって会っている。吉備真備の場合と同じく、彼の肖像も簡潔な文章の中に捕えられている。

「門下外省は、遣唐使の一行の宿舎のあった四方館からほど遠からぬところにあった。そこの建物の中の一室で、三人は初めて高名な留学生上がりの唐の官吏であり、文人でもある人物と会った。このとき仲麻呂は三十八歳であった。中肉中背の、興奮というものを顔に出すことのない人物で、真備、玄昉が無表情であったように仲麻呂もまた無表情であった。彼は三人に、同胞に対する特別な態度は示さないで、用件だけを手短かに話した。こんど玄宗皇帝は西都長安に還幸になるが、もし長安に移ることを希望するなら、皇帝の駕に随って西行するように取りはからうが、どうであろうかと尋ねた。……

そして二日置いて、普照はもう一度門下外省に仲麻呂を尋ねた。このときも仲麻呂はこの前のときとまったく同じ態度だった。普照が自分もまた長安に行くことを希望する旨を伝えると、彼は軽くうなずいて、それではそのように手続きを取ろうと言った。ただ、こんどは訪問者が一人だったせいか、仲麻呂は一言だけではあったが、現在の普照の勉学の状態を尋ねた。」

ここには高級官僚の冷たい心と行動とでよろわれた一人の人物がいる。彼が李白や王維の風雅の

友であるという一面は、この若僧の日本僧たちに対しては閉ざされている。だが彼は、ただ一言、普照に勉学のようすについて尋ねる。それが彼に対してのせいいっぱいの好意の表現であったろう。

以上三人の高名の秀才たちが、三様の姿において、一刷毛の素描でここに描き出されているのである。三人とも時日が経てば、そのとき会った日本僧のことなど、記憶の片隅にもとどめていないであろう。だがその出会いは、僧たちにとっては印象の深いものであり、この作品の読者にとっても、なにか火花の散るような、巨大な人物像との触れ合いなのである。そのほかにも、玄宗の佞臣で「性狡慧、口に蜜あり、腹に剣あり」と言われ、同時にものわかりのいい宰相李林甫や、官僚の冷酷さをいささかも持っていない親切な硬骨漢の遣唐副使大伴古麿や、鑒真への仕打ちに官僚の冷たさとエゴイズムとを見せてしまった遣唐大使藤原清河など、史上に名をとどめた人物像が随所に出て来て、それらと無名の留学僧たちの出会いの場面に、作者はくふうをこらしている。

三

五名の無名の若い僧たちの運命は、当時の留学僧の典型的な生き方として、鮮かに思い描かれている。だがこの五人の名は、恣意に選ばれたものではなく、正史に名を留めている者ばかりなのである。栄叡と業行とは、『続日本紀』の鑒真伝の中に、鑒真の東遊を辞を尽くして乞うた留学僧として出て来る。栄叡の物故に際しては、「和上悲泣シテ失明ス」と書かれている。だがこの業行は、同書の他の部分によれば、普照のことであるらしい。遣唐船の中で普照だけが船酔いに強かったとは、『延暦僧録』という書物に書いてある。玄朗の名も、『唐大和上東征伝』に見え、渡航に失敗して帰朝したかどうか不明の僧である。戒融は『続日本紀』に、鑒真の死んだ年に、優婆塞ひとり

を伴い、送渤海使船に乗って帰朝の途に上ったが、海上難航して、船師が優婆塞を海に投じたと見えている。

これらのきれぎれの記録を基にして、井上氏は彼らの個性的な肖像を描き分けた。だが、もっとも主として拠った史料は、淡海三船が撰んだ鑒真の伝記『唐大和上東征伝』である。これは、鑒真の弟子で、師とともにつぶさに艱難を嘗めながら来朝した思託の著『大唐伝戒師僧名記大和上鑒真伝』三巻（『東征伝』に対して『広伝』という。）を基として、それを要領よくまとめたものである。この『広伝』は鎌倉時代までは伝わっていたらしいが、その後失われ、諸書にその逸文が見えるだけである。なお今日、鑒真の伝記については、安藤更生氏の著書にもっとも詳しい。

さて、五人の留学僧のうち、戒融は唐土の第一印象を、「この国では雲が流れるように、黄河の水が流れるように、難民が流れている。まるで自然現象の一つのようじゃないか。教典の語義の一つ一つに引っかかっている日本の坊主たちが、俺にはばかに見えて来た。きっと仏陀の教えというものは、もっと悠々とした大きいものだと思うな。黄河の流れにも、雲の流れにも、あの難民の流れにも、結びついたものだと思うな」と言ってのけるような男である。そして彼は、出奔して托鉢僧となり、その終わるところを知らなかった。「この国には何かがある。この広い国を経回っている中にその何かを見つけ出すだろう」と彼は言う。はたして何を見つけ出したか、作者は書いていない。彼は唐土で経典を研鑽するというまどろっこしい方法を選ばず、何かに憑かれたように、国中を歩きまわることを自分に課す。続々と引きもきらずにインドから齎らされる経典よりも、彼にとって大陸の国土そのもののほうが広大で、涯しない謎だったからである。それらの思いも行動も、日本に何のみのりをも齎らさないで、広大な国土の中に消えて行ったというべきだが、彼は生きよ

うとする自分の意志に対して、誰よりも忠実だったと言える。そして、ただ一つ、彼が栄叡・普照らに与えた示唆によって、東大寺の大仏開眼のときの咒願師だった律師道璿が来朝するきっかけを作ったということは、もちろん彼の第一義の思いでも行動でもなかったが、ともかく日本文化の上に印した、彼の一つの足跡には違いなかった。

もう一人の玄朗は、唐土へ向かう船の上から、すでに弱音を吐いていた、薄志弱行の僧である。唐へ来て、何をいちばん強く感じたかという普照の問いに対して、彼は恨みでもあるような粘っこい口調で、「日本へ帰りたいということだ。日本がいちばんいいということだ。日本でなければ、日本人は金輪際、ほんとうに生きるといった生き方では生きることはできない」と答えている。

第二章のはじめに、栄叡・普照・玄朗の三人が、長安での勉学態度を述べているが、それが三様の性格を示していておもしろい。普照は最初の目的どおりもっぱら律部の勉学に明け暮れ、師の定賓のみならず、相対する学派の説にも構わずはいって行った。その態度は栄叡には多少不逞に見えた。彼は師定賓の学説の中だけに身を置き、他説を顧みなかった。そして玄朗は、律を中心に天台と浄土とを学び、「まだ浄土に眼をつけるところなどは、玄朗らしいところであった」と書かれている。これは恵心僧都以前に浄土に惹かれた彼の明敏さを物語っているし、とくに意志の弱い玄朗が他力本願思想に触れたということにも、作者の深い心配りを見る。さりげなく書かれた一句にも、それだけの熟慮の後に書かれたことを知る。

だが彼には、「一つのものに深くはいり込んで行く」ことができない。けっきょくは、あれほど日本へ帰りたいと言った彼にとって、運命は皮肉にも、還俗して唐の女と結婚し、子供を得、唐土へ落ち着くという結果をもたらした。

四

航海の困難は、留学僧たちに、海の底へ沈めてしまうだけのために、いたずらに知識をつめこんでいるのかもしれない、という深刻な不安を抱かせている。これが天平の留学僧たちの置かれた一つの限界状況である。だが、このような状況は、考えてみれば、特殊なものではない。現在われわれがしている仕事といえども、けっきょく徒労ではないのかという疑惑は、常につきまとっている。留学僧たちは、無事日本へ持って帰れるかどうか、日本の国土に生かすことができるかどうかわからない知識のために、生涯を賭けているのだ。そしてそういう思いは、彼らを虚無の深淵の前に立たせ、目くるめく思いに陥しいれるのである。

戒融が中国の大勢の人間たちを、雲や黄河の流れのように流れていると言ったとき、栄叡は「仏教とも、政治とも、学問とも無関係に、生きものの意志で、食って、寝て、生きているな」と言う。そのような現象にも、「生きものの意志」を見るところが、そこに自然現象同様の意志を超えるものを見る戒融と、まったく違っている。この二人は、何から何まで虫が合わないのである。自分の一つの意志をどこまでも貫こうとするところに、栄叡の強い性格がある。

彼は知識を個のものと考えず、それを持って日本へ帰るときも、「三人共別々の船に乗ればいいではないか。そしてどれか一艘が着けばいいのだ」と、しごく割り切った考え方をしている。その一人ひとりが、日本に植えつけるべき海外の新知識のための捨石なのだ。そして、そのなかの幸運な星の下に生まれた者が、知識をほんとうに母国へ将来することができると考えている。一人ひとりの生は、個として充足せず、それぞれが過程的に、歴史の鎖の一環として生きているし、またそ

れで十分なのだという考え方が、ここにはある。

それに対して業行は、「自分で勉強しようと思って何年か潰してしまったのが失敗でした。自分がわからなかったんです。自分がいくら勉強しても、たいしたことはないと早くわかればよかったんですが、それが遅かった」と言う。そして、そうと気づいてからは誰にも会わず一室に籠って、たくさんの経文の書写を正確にやり、それを日本へ運ぶという、より確実な方法を選ぶ。知識の運搬者として自分を限定することで、自分の歴史的使命を果たそうとする。数十年にわたる在唐生活のあいだに、彼の知っているところと言えば、幾つかの寺があるに過ぎず、写経一途の彼は完全に自分の生活を捨て、筆写本の数だけが膨大なものとなる。

行動の人である栄叡も、その結論においては、けっきょく業行と同じところに落ち着いているのだ。つまり、自分の知識の完成などという、不確かなものを断念して、日本に始めての戒師として、高僧鑒真を招くという自分に課せられた仕事を仕遂げることで、その歴史的使命を果たそうとするのである。それに、業行の写経への執念を知ってからは、鑒真とともにその写経を日本へ持ちこむことを、いま自分たちのやるべき大事な使命と考えるのである。

だが栄叡は、鑒真を日本へ送ろうとする困難な仕事のさなかに、病死した。彼はついに、伝戒の師を日本へ送りこむ仕事を自分でやり遂げることはできなかった。だが、その計画を支えている力は、栄叡の一貫した意志の力と、法のためにはいかなる困難にも屈せぬ鑒真の不退転の心である。その企てが挫折し、ようやく一行の生命が救われた瞬間に、早くも再挙のことを考えているのは、栄叡と鑒真とであることに、普照は感嘆する。

自分の数十年の生を犠牲にして、ひたすら写したおびただしい経文を、日本へ持って帰ることに

この上なく執心した業行も、帰りの航海で、その経巻とともに海底に沈んでしまう。巻物が一巻ずつ潮の中へ落下し、海底へ消えてゆくのを、普照は夢とも現ともなく見、業行の叫びを耳に聴く。「もう決して取り返すことのできないある確実な喪失感があった」と、普照は感じる。ここには作者自身の、あるいは他の偶然によって別の方向を取ったかもしれなかった歴史の流れに対する感慨が、籠められていよう。これらの膨大な経巻が、このとき無事持ちこまれていたら——。それについては、安藤更生氏が次のように言っている。——「ことに業行が熱中して写した膨大な経巻が『秘密部』、すなわち密教の経巻や儀軌類であって、もしこれらの経巻が海難のために覆没の厄に遭わなかったなら、日本は弘法大師以前に、すでに正式な密教を持ち得たろうとしたことは、まことに玄人っぽい設定で、これは生半可な『調べた小説』などでは書けることではありません。」(『天平の甍』をめぐって)

とすれば、業行の事業は、より壮大な規模で、次代の空海に受け継がれていることになるのである。

一方、栄叡の未完の事業は、協力者であった普照によって完遂される。彼は鑒真を招くことに、栄叡ほどの情熱も行動力も持っていたわけではない。その熱意に引きずられていたに過ぎない。だが、けっきょく鑒真を伴って、日本へ帰ることに成功したのは、この普照である。業行ほどの歳月と熱意をかけたわけでもないいくつかの写経とともにである。

もっとも平凡ではあるが、決して薄志弱行ではなく、しかも自分の運命にもっともすなおに従って、抗うことの少なかった普照に、作者は最後の栄冠を得させている。普照がこの小説の主人公に選ばれているゆえんである。

最後にもう一人、始めのほうにちょっと出てくるだけだが、景雲という僧に興味がある。普照らが乗って来た船で、真備・玄昉らとともに帰国しようとしている。彼は三十年前に、三論と法相とを学ぶために入唐したのだが、三十年唐に遊んでたいしたおもしろいことにも出会わなかった。「持ち帰られるものは？」と普照が尋ねると、彼は「この身一つです」と寂しげに言う。誰もが「なんとかものになって」帰って行くのに、彼ひとり、ものにならないで帰って行く。経巻一つ持ち帰ろうという意志はない。だが、若い留学僧の眼には、彼の姿がいかに「哀れに愚かに」見えようとも、彼もまた、誰にも伝えようのない経験、あるいは心の秘密を持っているのに違いない。

作者は前に『僧行賀の涙』を書き、同じような孤独者の姿を描いていた。同じ小説に書かれた、日本へ帰る気持ちを失って中国の至る所を歩き回り、西域を経て天竺の地を踏む念願を起こした傲岸な仙雲は、戒融の前身ということもできる。

五

作者は鑒真の容貌については、次のように書いている。

「この寺の一室で、一行は鑒真と会った。鑒真の背後には三十数人の僧が控えていた。このとき、鑒真は五十五歳であったが、骨格のいかにもがっちりした感じの大がらな人物で、眼も鼻も口も大きくしっかりと坐っており、頂骨は秀で、顎は意志的に張っていた。普照の眼には、淮南江左、浄持戒律の者、鑒真ひとり秀で、これに及ぶものはないといわれている高名高徳な僧は、故国の武将に似ているように見えた。」

鑒真に「故国の武将」の面影を認めているのである。これはわれわれ現代人が「日本の古武士」の面影というのと、たいぶ違うであろう。天平時代に「故国の武将」と言ったとき、具体的にはどのようなイメージを持ったか。この小説に登場する大伴古麿など、それに近い人物だろう。

井上氏はそのすぐ後に、鑒真自身が日本に行く決意を言い、逡巡していた弟子たちがみなそれに従ったくだりを描き出し、具体的に「故国の武将」がいかなる意味合いを持つか、きわめて感動的に述べている。

「訪問者の中で栄叡が初めに口をきいただけで、あとの者は一言も言葉をさしはさむすきはなかった。普照は自分が奇妙な、名状しがたい酩酊感の中に置かれているのを感じていた。三十余人の僧の頭はことごとく深くたれていた。それは鑒真とともに渡日することの承諾を意味していた。鑒真は一人ひとりの名を口から出した。するとそれに応じて一つずつ頭が上がって行った。十七の頭が上がると、鑒真はそれで名を呼ぶことはやめた。鑒真と、十七名の高弟が日本へ渡ることが須臾の間に決まったのである。」

感動的な、決定的瞬間の描出である。大きなスケールでもって、鑒真像は描かれている。『唐大和上東征伝』を裏返しにして、鑒真来朝という日本の文化史上、思想史上のれっきとした事件の立てた波に、木の葉のように翻弄される普照ら五人の僧の姿を、それぞれ鮮かにここに定着した。彼ら一人ひとりの青年の理想的蹉跌しても、それぞれ自分の運命を貫いて、一途に生きた姿

がみごとにとらえられている。

それに対して、その背後にある鑒真という大きな存在は、その存在感の確かさにもかかわらず、かくべつ個性的に描かれているわけではない。この両者の対比は、大仏の像を前にした、小さな五人の僧たちの姿といった感じである。

鑒真という大きな像を史上に齎らすために、それぞれ過渡的な役割を演じて、悠久の歴史の流れに消え去ったのが彼らである。この場合、井上氏の筆致は、歴史を書くような冷静さで、遠景に小さく、蟻のような彼らの姿をとらえる。何かの爪跡を残して、あるいは何ものをも残さないで、すべては流れ去るといった感慨が、あとに残るのである。

ついでに言えば、この小説の翻訳が機縁となって、中国では鑒真への関心が非常に高まった。一九六三年（昭和三十八年）秋、中国で鑒真和上円寂一千二百年記念祝典が催され、氏は安藤更生氏らとともに、中国に招かれた。中日親善の促進という政治的目的もあったのかもしれない。そして栄叡が壮途の中道で仆れた端州の竜興寺には、彼を記念する碑が建てられたという。

六

『補陀落渡海記』は、氏の歴史小説のうち、特異なものである。補（普）陀落または補陀落山とは、インドの南端にあり、八角形で、観音が住むという山である。日本の南端である熊野の南の海上に、観音の浄土を考え、補陀落寺のある浜の宮の海岸から船出して、びょうびょうとした海波を渡ってその浄土に至り着き、往生することができると考えていた。法悦からの入水死である。大阪の四天王寺の西門も、昔から極楽の東門に向かっていると信ぜられ、日想観往生と言って、

近くの住吉の浜から西方の海をめざして入水して死ぬ風習があった。熊野の補陀落渡海と同じ思想であり、平安朝末期の末法思想の心理的戦慄の時代に、人びとは荘厳な浄土の幻影を追って、「疾く疾く参りて見ばや」といった、うながし立てられる焦燥感に駆られて入水死を急いだのであった。

補陀落渡海の起こりについては、井上氏は記録によってたどられるかぎりのことは、書き記している。もともと熊野には地理的条件からも他界観念が生み出され、海阪（水平線）を越えて死者たちの棲む常世の国に至ることができるとした。そのような信仰があって、この地は平安時代にも宗教的霊地とされ、浄土への再生を願っての熊野三山詣でが盛んとなり、那智山を南方観音浄土に擬し、またこれを補陀落山の東門とし、山麓の浜の宮に補陀落寺が建てられるに至った。

「熊野年代記」によれば、貞観十年（八六八）十一月三日、慶竜上人が補陀落に入ったのを最初として、以下永禄三年（一五六〇）十一月の清信上人まで、井上氏が記すとおりの補陀落渡海の記録がある。中世には屋形船を作りこれを釘し、食料と油とを備えてこの浦から補陀落山へ向かったが、後には補陀落寺の住持が遷化のとき、死骸を船に積んで沖へ流す一種の葬法として行なわれるに至った。年代記の記録のほかに、たとえば平維盛が熊野から入水したというのも、この補陀落渡海の形式によっているわけである。

この作品は、永禄年間に補陀落渡海を決行せざるをえなくなった金光坊の凄惨な物語である。氏も書いているように、六百年ほどのあいだに渡海者は十人あるかなしであり、補陀落寺の住持がかならずある年に達したら決行しなければならない、というわけのものではなかった。ところが、ここ三十年ほどのあいだに七人も渡海者が相ついでいる事実に、作者は目を向ける。それを表にして示せば、次のとおりである。

享禄　四　年（一五三一）　祐信上人
天文　八　年（一五三九）　光林上人
天文　十　年（一五四一）　正慶上人
天文十一年（一五四二）　善光上人
天文十四年（一五四五）　日誉上人
弘治　二　年（一五五六）　梵鶏上人
永禄　三　年（一五六〇）　清信上人

善光上人の一例が十二月で、ほかはすべて十一月である。それに、三代ほど続いて、六十一歳で渡海していることを、作者は言っている。あるいはこれは、作者の虚構かもしれない。

金光坊は六十一歳の春ごろまで、渡海するつもりはなかった。だが彼の渡海を信じているものは、広い世間の全部だった。彼は好むと好まぬとにかかわらず、渡海しなければならぬもののようであった。彼は二月の彼岸の中日に、正式に、この十一月に渡海することを発表する羽目になる。

だからこれは、世間から追いつめられた者の渡海である。その点は『楢山節考』とは逆である。だが『阿部一族』の殉死の場合と同じことである。金光坊は前に七回も、渡海の儀式に立会っている。彼はそれらの渡海上人たちの誰とも別の顔をして渡海したいと思う。だが、渡海があと一と月に迫るころは、渡海上人のどの一つの顔でもいいから、それに自分がなれるものならなりたいと思うようになる。

「十一月へはいってからは、金光坊にはまったく日時の観念はなかった。朝眼覚めると、いつも若い僧の清源を招んで、渡海の日は今日ではないかと、そんなふうに聞いた。そして今日が渡海の日でないことを知ると、吻としたように顔を上げて白い砂地でできている庭の雑木へ眼を当てた。雑木の青さが眼に滲み、庭続きといっていい浜の宮の海岸の静かな波の音が耳にはいって来た。金光坊はこのころになって初めて、雑木に眼を当てたり、波の音を聞いたりした。長い間金光坊の眼や耳は、そうしたものを受けつけていなかったのである。

秋晴れの気持ちよく空の澄んだ日、金光坊は例によって、清源を招んで、渡海の日は今日ではなかったかと聞いた。すると若い僧は、今日申ノ刻に寺をお出ましになりますと答えた。金光坊は一度立ち上がったが、すぐまたすわった。そしてあとは急に体軀から力という力がすべて抜けてしまった感じで、身動きしないでいた。身動きしないというよりできなかったのである。」

この不思議な残酷物語の、さりげない秋の日の風光の中に、戦慄する魂が透けて見えるような一節を引用してみた。この短編小説が、人間生命の本質を無惨に摑み出して見せた、怖ろしい傑作であることは、こういう一節からでもうかがわれるであろう。

筆者――文芸評論家。明治十年長崎県生まれ、慶大国文科卒。『私小説作家論』『古典と現代文学』『俳句の世界』『芭蕉』など著す。戸川秋骨賞、読売文学賞など受く。

二つの僧の物語

河上徹太郎

戦後間もないころ、文壇が半ばもの珍し気に、半ば時代の当然の風潮として「堕落」だとか性の解放だとかいって騒いでいたとき、井上靖さんの小説の出現は、何かすがすがしい、心温まる思いで私は迎えたものであった。その印象を私は自分で語るより、三人の同感者の言葉を引用するほうがより納得してもらえるであろう。

まず神西清氏は、「井上靖氏の小説作品は、戦後の荒廃しきったわが国の情操の世界に吹き入った、さわやかな一陣の微風であった。それは人びとが、みずから意識することすら忘れていたある渇きを、おもいがけず癒したのである。……氏の作風を奥で支えているものは、ある静かな古風さとあえて呼んでも差しつかえない美質であると思われる。……〔それは〕人間の情操そのものが歴史の波だちや社会の変転をこえて絶えず静かな底流をなしてつづいている、その永遠に新鮮な古風さをさすのである。」

次に佐藤春夫氏は、「何はともあれ第一に面白い。……小説の面白さというものを忘れようとしている我国で久しぶりにそれを思い出させた。」

佐藤氏は、文学の格調の高さを崩すことは絶対に許さぬ審美家であり、しかも自らすぐれたストリー・テラーであったが、その氏が「面白い」といっているのは意味あることである。

最後に中村光夫氏は、几帳面な理論家らしく次のようにいっている。「氏はこれまで私小説に独占されていた抒情と大衆文学に任されていた物語性を総合して、新しい型の小説をつくりだすこと

に成功したのであります。氏の小説は物語性と詩を兼ねそなえているわけで、この我国の近代小説の性格上ばらばらに発達してしまった二つの要素を総合し得ただけでも氏は我国の小説史上に一つのはっきりした足跡を遺したといわれます。」

三氏のいい分だけで、私のいいたい氏の小説の独自な性格はいい尽くされているのである。

氏が四十歳で長編『闘牛』を執筆する前十年ばかりは、新聞社にいて、それも社会部を主とする記者生活を送った。この経歴が氏の初期の長編にルポルタージュ的題材を提供し、その「面白さ」の因をなしているのである。しかも氏はそれをがさつな事件小説に堕さしめず、情緒豊かなものに仕上げていることは前記三氏の証言の示すとおりで、ひとえに氏の温厚な人がらのさせたわざである。

それにもう一つの性格は、氏が学生時代に美学を学んで東洋史に興味を持ち、特に西域地方にエキゾチックな憧れを抱いたことである。『敦煌』から『王朝記』に至る系列の作品はそれであって、そのファンタジイの特異な豊麗さは他の追随を許さないものがある。

本書に所載の二編は、その題材は違うが、作者の好奇心の動きやその宿命観といったものには他の歴史小説と一脈通じるものがある。

ともにきわめて異常な境遇におかれた僧の物語である。そのうち『天平の甍』は氏の従来の作品の中でも最高傑作に属する力作で、奈良時代の遣唐使に加わった留学僧を中心とするところの、われわれの想像を絶する宗教的情熱と冒険との記録である。当時の渡航は、辛苦をきわめ、しかも半分以上生還を期し得ないものであった。しかもそれを押してあちらの文物を身につけたいという欲求には、艱難を艱難と思わぬ驚くべき意志の力がある。作者の情熱は、彼らの情熱をそのままし

き写しにしてそれに導かれて筆を進めているかのようだ。唐の文化に眩惑され、底知れぬ仏法の深さに魅入られ、その研学にも、またそれに要する航海や旅行にも、その日程は日や月でなく年・数年が単位であるとは、われら近代人には気が遠くなるような話であるが、しかもこの小説にはそれがあたりまえの常識のように書いてあるのを見ると、読者はそれが改めてあたりまえのこととして読んでゆく気になる。この魅力がこの小説の独自なすぐれた点である。

主人公は大体普照という敬虔な一仏徒だが、彼と行動をともにして客死する栄叡、托鉢に出て行くえ不明になる戒融、唐の女を娶って市井人となる玄朗、数十年かかって写経にのみ日を送り、しかも帰途あえなくその膨大な写経とともに海に没する業行など、副人物のそれぞれ一徹な面魂が非情なまでに鋭く描いてある。しかもその背後に大きく浮かび上がる人物は揚州の高僧鑒真である。彼はもちろん実在の人物だが、彼は日本に渡って仏法を説くのが使命だと信じ、数回の難破と途上矢明するのにも屈せず、ついに渡海に成功し、聖武天皇の帰依を得て奈良に唐招提寺を開くのである。この小説が先年本国で翻訳されることによって彼の地で鑒真認識が急に昂まったという国際的事実は、何よりもこの小説の価値を保証するものであろう。

も一つの『補陀落渡海記』もまたきわめて異常な信仰上の事蹟を扱った小説である。南紀の海岸にある補陀落寺は南方の補陀落浄土に相対すと称せられ、ためにそこに往生しようとしてこの寺から上人が単身舟出して海に入る行事が昔から行なわれたのであった。何もこの寺の住職が必ず渡海せねばならぬという掟はないのだが、たび重なる先例が不文律となり、周囲の人も送り出す心構えができ、当の住職もその覚悟を強いられる心境になる。

住職はまだ悟りがそこまで至らないために逡巡する。この不決断がこの小説のテーマである。

作者はそこをかなり非情な残忍さと皮肉をもって描いているが、それがこういう場合の一僧侶の心事であろうとともに、この残忍な行事に対するわれら後世の近代人の心理でもある。人々に送られ海へ乗り入れたこの僧が難破して岸へ打ち上げられ、もういいのかと思ったら再度送り出されるのもみじめである。

この伝説は那智に遺っている由。また井上氏は山形の湯殿山で自らミイラになる小説を書いているが、ともに中世の暗さというものであろう。

筆者——文芸評論家・日本芸術院会員。明治35年山口県生まれ、東大経済学部卒。読売文学賞・新潮文学賞・芸術院賞各受賞。著書に『河上徹太郎評論集』『私の詩と真実』『日本のアウトサイダー』『異端と正統』『文学的回想録』ほか多数。

四高の先輩たち

杉森久英

井上さんの名前をはじめて聞いたのは、窪川鶴次郎氏の口からであった。

そのころ私は神田の河出書房に勤めていて、雑誌「文芸」の編集を担当していたが、ある夕方、窪川さんが訪ねてみえた。何の用だったか忘れたが、私はそのころ、窪川さんに時評風の文章を書いていただいていたから、何かそういうことの打ち合わせのためだったかと思う。

窪川さんは中野重治氏の友人で、プロレタリア文学者だが、ふつうのプロ文士にないような、繊細な感覚と豊かな詩情を持っておられることは、人の知るとおりである。

中野さんも窪川さんも四高の出身で、私はそれより数年後の四高出だから、お二人は私の先輩に当たられるわけで、そういう意味でも、私はふだんからお二人に尊敬と親しみを抱いていた。窪川さんは中野さんの「歌のわかれ」に出て来る鶴来という人物のモデルで、「歌のわかれ」は私が学生時代愛読した作品だった。

ちょうど夕方のひけ時だったから、私は用談をすませると、窪川さんといっしょに、河出を出て、省線（いまの国電）で新宿までいった。

私は小田急、窪川さんは練馬だったから、新宿でお別れするところだが、まだ話したりないような気がしたので、駅の出口の喫茶店でコーヒーを飲もうということになった。窪川さんは話のおもしろい人で、いつまでもしゃべっているうちに、私はよく編集上のヒントを得た。

いまはすっかり様子が変わったが、そのころ新宿の西口は、せまい改札口を出たところがゴミ

ミしたマーケットになっていて、その取っつきに、うまいコーヒーを飲ませる店があった。そこでしゃべっているうちに、窪川さんは、

「おもしろい新人が出ましたね。今月の『文学界』に『猟銃』という小説を書いている井上靖という人ですが、これは伸びますね。谷崎潤一郎と芥川龍之介を合わせたような作風で、大物になる素質がありますよ」

といった。私はまだ「文学界」を読んでいなかったけれど、窪川さんのほめ方がいかにも熱心なので、ぜひ読んでみようと思った。谷崎と芥川を合わせたような作風なんて、最大級のほめ方は、ふつうの人の口から出ると、わざとらしく、大げさに聞こえるものだが、窪川さんは、ふだんから誇張した言い方をしない人だから、自然に聞こえた。

私はさっそく『猟銃』を読んで、これはすばらしい人が出たと思った。

まもなく、井上さんは『闘牛』で芥川賞を受賞された。いろんなところに載った人物紹介を読むと、井上さんも四高出身で、私の一年上級になるらしい。してみると、井上さんは私が一年のとき二年生で、高校三年のうち二年間はいっしょに通っていたらしい。

おまけに、井上さんは柔道部の選手だったという。

——はて、そんな人がいたかなあ。

私はいくら考えても、はっきり思い出せない。同じクラスに、柔道をやっていた友だちが何人かいたから、そんな誰かれに

「井上っていう人いたかね」

と聞くと

「なんだ、君は井上を知らないのか」

と笑われるようなしまつであった。井上さんは校内の花形的存在で、それを知らなかった私は、どうやら日本人のくせに三宅選手を知らないみたいに、世間知らずの変人というところだったらしい。

窪川氏も、井上さんを同窓と知って、私にむかってほめたのか、まったく知らずにほめたのか、いまだに私にはわからない。どうもあのときの口ぶりでは、窪川さんは井上さんを同窓と知らなかったような気がする。もし知っていたら、私にむかって、「われわれの同窓ですがね」くらい言いそうなものである。私が井上さんと二年も同じ校内にうろうろしながら、知らなかったくらいだから、何年も前に卒業した窪川さんが知らないことに、ふしぎはなかった。

その後、まもなく、誰かの紹介で、井上さんに会ったとき、とたんに、

「ああ、これは見た顔だ」

と思った。そのころの高等学校は、いまのマンモス大学とちがって、生徒は全部で七、八百人くらいしかいないから、そこいらをうろうろしていると、毎日顔を合わさないわけにゆかないのである。何年何組の誰と、名前を知らなくても、顔はおぼえないわけにゆかないのである。

もっとも井上さんも、私にあった途端に、

「この男には見おぼえがある」

と思ったそうである。

井上さんが芥川賞を受賞されてまもなく、在京の知人たちで、ささやかなお祝いの会をひらいた。私は出席者の顔ぶれを見ながら、この中で、私は井上さんといちばん最近に知り合った仲だが、昭

和三年ころから、顔だけは見ているのだから、いちばん古いほうかも知れんと思った。

そのとき、いろんな人の祝辞があり、最後に井上さんが立って、こんな意味のあいさつをされた。

「私はこれまで、いろんなことをして来たが、何をしても、心の底から楽しくはなかった。ただ、作品を書くことだけが楽しかった。会社の重役になっても、社長になっても、どんな金持ちになっても、しんからたのしいとは思えない。ただ、小説を書いているときだけが、ほんとうに充実した時間です。」

言葉はちがうかも知れないが、こういう意味であった。

そのころ私は、編集者としての自分の能力に絶望して、違った道を歩くことを考えていたので、井上さんの言葉がいちいち胸にしみ、目頭が熱くなった。『闘牛』で世に出るまでの井上さんの戦いが、どんなに孤独で、苦しいものであったか、私にはわかるような気がした。

著者――小説家。明治45年石川県生まれ、東大国文科卒。中央公論編集部、河出書房雑誌「文芸」編集長を経て『猿』により文筆生活に入る。主著に『黄色のバット』『天才と狂人の間』（第四七回直木賞）『大風呂敷』『啄木の悲しき生涯』など。

代表作品解題

〔猟銃〕（昭和24年10月、雑誌「文学界」）

夫婦と一人の女性との三角関係の心理の綾を、愛人の娘、妻、愛人の三人が、夫へあてた手紙の形式で描いたものである。「白い河床」という心象風景をとった落莫たる人生観が中心になっている。佐藤春夫から大仏次郎、今日出海の手を経て文学界に掲載された、処女作である。

〔闘牛〕（昭和24年12月、雑誌「文学界」）

大阪の戦後の新興新聞の編集局長をつとめる津上が、社運を賭して四国の宇和島から闘牛を呼んで、大がかりな見世物を企画する物語である。津上はこの仕事に没頭しながらも、仕事に賭けることができず、愛人との交渉に酔うことのできないニヒルな一面を持つ。いわば井上靖の小説の虚無的行動人の原型をなす人物である。この作品によって昭和二四年度下半期の芥川賞を受賞した。

〔あすなろ物語〕（昭和28年1月～6月、雑誌「オール読物」）

「あすなろ」とは井上氏の故郷伊豆に多い木で、明日は檜になろうとつとめながら遂に檜にはなれないという、悲しい伝説を持つ。「あすなろ」の運命を背負った少年鮎太を主人公に、自伝的要素を加えながら、一人の少年の成長をたどり、人生の虚無と孤独と、その孤独に支えられた情熱との交錯を描いている。

〔黒い蝶〕（昭和30年9月、書き下ろし作品として新潮社より刊行）

若い一介の事業家にすぎない三田村が、だれにも不可能と思われていたソ連の世界的ヴァイオリニストのムラビョフの日本招聘のために奔走する話である。三田村の出資者である富豪の江藤の妹みゆきという美しい女性への意地のようなものから、三田村はこの仕事に情熱を傾ける。三田村は「闘牛」の津上の系列を引く人物であり、みゆきは井上靖の小説の理想的女性像の典型といえよう。

〔射程〕（昭和31年1月～12月、雑誌「新潮」）

戦後間もないころ、諏訪高男という青年が、三石多津子という美しい女性に無償の愛情を捧げながら、綿布の闇で巨万の富を作り、やがて射程外の能力の及ばぬところにきて一挙に没落する物語である。物語の構成としては『黒い蝶』に似ているが、戦後間もないころの大阪の風景が活写され、井上靖独自の虚無的行動人という形をとりながら、戦後青年の一典型を描いている。

〔氷壁〕（昭和31年11月～32年8月、「朝日新聞」）

登山家魚津は友人小坂と前穂東壁を登攀中、ナイロン・ザイルが切れて小坂を死なせてしまう。事件は刑事事件にまで発展し、魚津は小坂の妹かおると美貌の人妻美那子への愛情の間で苦しむが、やがて美那子への愛を思い切るため穂高滝谷を登攀中遭難死する。実際にあったナイロン・ザイル事件に想を得たものだが、連載中から大きい評判を呼んでベスト・セラーとなり、登山ブームを引き起こす機縁とさえなった。昭和三四年度、芸術院賞受賞。

〔北国〕（昭和33年3月、創元社より刊行）

井上靖が昭和一〇年ごろから二〇年ごろにかけて、関西で新聞記者をしているとき同人雑誌に発表した初期詩編は、昭和二五年一二月、詩誌「日本未来派」三七号にまとめて掲載された。この初期詩編を中心に、その後発表したものを加えて刊行されたのが詩集『北国』である。井上靖の小説に盛られている叙情の原型をこの詩集の中に見いだすことができる。

〔楼蘭〕（昭和33年7月、雑誌「文芸春秋」）

紀元前百二、三十年ごろから約五十年間ほど東洋史のなかに名前を表わして消えていったタクラマカン砂漠の王国がある。紹介者は砂漠の冒険家張騫である。〈ディンの発見した、「さまよえる湖」ロプ湖とともに砂漠のなかに現われて消えていった一王国の運命をポエティックに歌い上げたものである。ここでは人物はすべて遠景の中に後退し、砂嵐のなかで消えていく楼蘭王国だけが主人公である。井上氏の歴史的運命観が最も透徹した硬質の叙情として結晶した、歴史小説の傑作である。昭和三五年度、毎日芸術大賞受賞。

〔朱い門〕（昭和33年1月～12月、雑誌「文学界」）

井上氏は、昭和三二年一〇月から一一月にかけて約一か月、第二次中国訪問日本代表団の一員として、山本健吉、中野重治、本多秋五、十返肇氏などと中国を訪れた。これは、そのときの体験を小説化したものである。ジャーナリスト、学者、デザイナー、評論家などの一行が、それぞれの性格に応じて、さまざまな反応と洗脳のされ方をする過程を、諷刺とアイロニーをこめて描いたものである。

〔敦煌〕（昭和34年1月～5月、雑誌「群像」）

『敦煌』は、宋の時代、宋に滅ぼされた西夏が、千仏洞に隠した経典や仏画が、後年仏人ペリオに発見されたという事実にもとづいて、これを小説化したものである。主人公超行徳は若い時官吏登用試験に没頭していたが、都でふと目にした西夏の女が忘れられず、兵士となって西域におもむく。超行徳の運命とともに、西夏滅亡と千仏洞への仏典隠匿が語られ、小説家の想像力によって歴史の空間を埋めた作品といえよう。『楼蘭』とともに昭和三五年度、毎日芸術大賞受賞。

〔蒼き狼〕（昭和34年10月～35年7月、雑誌「文芸春秋」）

「元朝秘史」に出てくる「蒼き狼伝説」にもとづいて、蒙古の英雄ジンギスカンの生涯を描いたものである。ここでは文字通り、古代叙事詩の叙事的文体が現代に生かされている。なおこの作品は、発表後、史実と虚構の問題をめぐって、大岡昇平との間に有名な「蒼き狼論争」を呼び起こした。

〔しろばんば〕（昭和35年1月～37年12月、雑誌「主婦の友」）

『あすなろ物語』の「深い深い雪の中で」に相当する。伊豆湯ヶ島での幼少年時代を、事実に忠実にたどった自伝的物語である。しろばんばとは、伊豆地方で夕方になると空中を飛ぶ白い虫である。両親とはなれて、田舎の自然のなかでおおらかに暮らす洪作少年の胸にはぐくまれる、年長の女性への思慕が美しく描かれている。

〔風濤〕（昭和38年8月及び10月、雑誌「群像」）

元寇はこれまで小説化されたことはあるが、すべて日本側の資料で、日本側から描かれたものだけである。『風濤』は、元寇の出発基地となった高麗の資料により、高麗側から描いたもので、いわば裏側から描いた「元寇」としてきわめて特異なものである。元と日本の板ばさみに合い、元の圧迫によってとぼしい資源と人力を徴発して日本進攻に追いこまれて行く小国高麗の悲劇を描いたものである。文体はますます硬質緊密の度を加えている。昭和三九年度、読売文学賞受賞。

〔夏草冬濤〕（昭和39年10月～40年7月、「産経新聞」）

『あすなろ物語』の「寒月がかかれば」に当たる、浜松および沼津の中学時代を、事実に忠実に回想した自伝的物語である。

（福田宏年）

参考文献

【単行本に収録されたもの】

「井上靖」　十返　肇　「現代文壇人群像」　昭和三一　六月社
「井上靖論」　吉田健一　「現代日本文学全集」第八一巻　昭和三二　筑摩書房
「井上靖論」　高山　毅　「井上靖集」　昭和三二　芸文書院
「井上靖論」　浅見　淵　「昭和の作家たち」　昭和三二　弘文堂
「村上元三と井上靖の小説」　宇野浩二　「独断的作家論」　昭和三二　文芸春秋新社
「井上靖の人について」　小松伸六　「井上靖長編小説選集」第一巻　昭和三二　三笠書房
「井上靖論」　中村光夫　「現代作家論」　昭和三三　新潮社
「井上靖論」　吉田健一　「日本の現代文学」　昭和三五　雪華社
「井上靖・人と作品」　河盛好蔵　「現代文学大系」　昭和三八　筑摩書房
「井上靖」　山本健吉　「十二の肖像画」　昭和三八　講談社
「井上靖論」　山本健吉　「井上靖西域小説集」　昭和四〇　講談社
「井上靖論」　福田宏年　「井上靖自選集」　昭和四〇　集英社

【雑誌に掲載されたもの】

「人生の探訪者」　瀬沼茂樹　「文学界」　昭和二九・九
「孤独なリリシズム」　桶谷繁雄　「文学界」　昭和二九・九
「井上靖について」　浦松佐美太郎　「新潮」　昭和三一・五
「井上靖論」　三浦朱門　「文芸」　昭和三一・一一
「井上靖の時代小説」　村松　剛　「文学」　昭和三二・一二
「『蒼き狼』は歴史小説か」　大岡昇平　「群像」　昭和三六

【『天平の甍』に関するもの】

「日支交通史」　木宮　泰彦　昭和　二　金刺芳流堂
「日華交化交流史」　木宮　泰彦　昭和三〇　富山房
「日支交渉史話」　秋山　謙蔵　昭和一〇　内外書籍株式会社
「日支交渉史研究」　秋山　謙蔵　昭和一四　岩波書店
「日本仏教史」上世篇　辻　善之助　昭和一九　岩波書店
「日支仏教交渉史研究」　塚本　善隆　昭和一九　弘文堂書房
「遣唐使」　森　克己　昭和四一　至文堂
「阿部仲麻呂伝研究」　杉本直次郎　昭和一五　育芳社
「吉備真備」　宮田　俊彦　昭和三六　吉川弘文館
「長安の春」　増訂版　石田幹之助　昭和四二　平凡社
「唐史叢鈔」　石田幹之助　昭和二三　要書房
「唐代の長安と洛陽」　平岡武夫編　昭和二九　京大人文科学研究所
「鑑真大和上伝之研究」　安藤　更生　昭和三五　平凡社
「鑑真」　安藤　更生　昭和四二　吉川弘文館

【『補陀落渡海記』に関するもの】

「火山列島の思想」　益田　勝実　昭和四三　筑摩書房
「我が国民間信仰史の研究」（新版）　堀　一郎　昭和四二　東京創元新社
「補陀落渡海」　尾畑喜一郎　（「国学院雑誌」昭和三九・一一）

年譜

（福田宏年）

一九〇七（明治四〇）五月六日、北海道上川郡旭川町第二区三条通り一六ノ二に、父隼雄、母八重の長男として生まれる。原籍地は静岡県田方郡上狩野村湯ヶ島。父は石渡家の出で、母は井上家の長女。当時、父は第七師団軍医部勤務、陸軍二等軍医であった。井上家は代々、伊豆の医家であったが、曽祖父潔は初代軍医総監松本順の門下で、地方軍医としては一応知られていた。

一九〇八（明治四一）一歳。朝鮮暴動鎮圧のため第七師団が出動し、父の従軍にともなって、母と郷里静岡県伊豆湯ヶ島に帰る。翌四二年から、父の任地の変わるままに、静岡、豊橋などを転々とする。

一九一三（大正二）六歳。父母のもとをはなれて郷里に帰り、祖母かのの手で育てられた。この幼年時代の環境は、『グウドル氏の手套』『あすなろ物語』『しろばんば』に描かれている。

一九一四（大正三）七歳。四月、郷里の湯ヶ島小学校に入学。

一九二一（大正一〇）一四歳。四月、静岡県立浜松中学校に入学。父母のもとより通学。前年一月、祖母かの死亡。

一九二二（大正一一）一五歳。四月、父、台北衛戍病院長に転勤のため、静岡県三島町の親戚の家に下宿、沼津中学校へ転校。

一九二四（大正一三）一七歳。春より沼津市港町の妙覚寺に下宿。このことは、『あすなろ物語』『夏草冬濤』にくわしい。

一九二七 日韓協約調印　片山潜、平民新聞を設立　漱石『虞美人草』

一九二八 戊申詔書宣布　川上眉山自殺　国木田独歩死す　「パンの会」誕生

一九二三 第二バルカン戦役起こる　岡倉天心、伊藤左千夫死去　荷風『珊瑚集』　鷗外『阿部一族』発表される

一九三一 ワシントン会議　志賀直哉『暗夜行路』発表

一九三三 第一次日本共産党結成　森鷗外死去

一九三四 レーニン死去

一九二五（大正一四）一八歳。父、一等軍医に昇進。このころより卒業まで文学好きの友人と交わり、飲酒喫煙を覚える。

一九二六（昭和元）一九歳。三月、沼津中学校卒業。父の任地金沢において、一年間高校入試の勉強。

一九二七（昭和二）二〇歳。四月、旧制第四高等学校理科甲類に入学。柔道部にはいり、爾来卒業まで選手生活。二年生のとき、父が弘前第八師団軍医部長に転任したため、金沢市桜畠の下宿より通学する。このころより詩作を始める。

一九三〇（昭和五）二三歳。四高卒業。九州帝大法文学部に入学。一時福岡唐人町に下宿したが、登校の興味を失って上京、駒込に下宿し、文学書を乱読した。

一九三一（昭和六）二四歳。福田正夫の詩誌「焔」の同人となり詩作に専心した。このころ辻潤氏を知った。父は陸軍軍医少将に昇進して退職した。

一九三二（昭和七）二五歳。九州帝大を退学、京都帝大哲学科に入学して美学を専攻し、植田寿蔵博士の教えを受けた。これより卒業まで四年間はすこぶる怠惰な学生生活を送った。哲学科の友だちだけで同人雑誌「饗宴」を出したが三号でつぶれた。

一九三四（昭和一〇）二八歳。卒業試験を放擲し、六月、戯曲『明治の月』を雑誌「新劇壇」に発表した。これは一〇月、新橋演舞場で守田勘弥、森律子等により上演された。一一月、京大名誉教授足立文太郎長女ふみと結婚。

一九三五 ラジオ放送開始、治安維持法、普通選挙法公布

一九二六 大正天皇崩御　文芸家協会設立

一九二七 金融大恐慌起こる　山東出兵　ジュネーヴ軍縮会議決裂　芥川龍之介自殺

一九三〇 ロンドン軍縮会議　横光利一『機械』発表　『ナップ』創刊

一九三一 満州事変勃発　谷崎潤一郎『盲目物語』　荷風『つゆのあとさき』発表

一九三二 上海事変勃発　五・一五事件　「プロレタリア文学」創刊　梶井基次郎死去

一九三五 「日本浪漫派」創刊　芥川賞、直木賞が設定される　藤村『夜明け前』完結　小林秀雄『私小説論』発表

一九三六（昭和一一）二九歳。京都帝大卒業。「サンデー毎日」の懸賞応募小説『流転』で千葉亀雄賞を受けた。八月、毎日新聞社大阪本社へ入社し、学芸部に勤務する。この大阪の新聞記者時代に、安西冬衛、竹中郁、小野十三郎、野間宏、杉山平一などの詩人と交わるようになり、伊東静雄と相知ったのもこの時代であった。

一九三七（昭和一二）三〇歳。九月、日支事変に応召し、第三師団輜重隊に入隊して北支方面各地に駐屯したが、翌年一月、病気のため四か月で内地送還となり、四月、除隊した。

一九四四（昭和一九）三七歳。毎日新聞社副参事となり、社会部勤務を命ぜられた。

一九四五（昭和二〇）三八歳。六月、鳥取に家族疎開。八月一五日、終戦の日、社会面に終戦の記事を書き、新聞記者として最も感銘深い仕事をする。このころより詩作に専念し、京都大学新聞、関西の同人雑誌等に詩を発表した。また新聞、美術雑誌等の美術関係の評論の筆をとることが多くなった。一二月、京都の妻の実家に移った。

一九四六（昭和二一）三九歳。学芸部副部長。

一九四七（昭和二二）四〇歳。二月から三月にかけて、千葉賞の『流転』以来一年ぶりで小説『闘牛』を書いた。

一九四八（昭和二三）四一歳。一月、小説『狐銃』を脱稿。八月、戯曲『夜霧』を書く。一二月、毎日新聞社書籍部副部長として東京に転勤し小説執筆のために比較的自由な時間を持つようになった。

一九四九（昭和二四）四二歳。六月、『狐銃』を佐藤春夫氏に見てもらって激励される。ついで『狐銃』は大仏次郎、今日出海、上林吾郎の手を経て雑誌「文学界」一〇月号に掲載された。続いて『闘牛』が「文学界」一二月号に、『通夜の客』が「別冊文芸春秋」（第十四号）に掲載された。

一九五〇（昭和二五）四三歳。二月、『闘牛』によって芥川賞受賞。以後新聞社幹部了解のもとに、出勤を自由にして創作に専念。三月、『比良のシャクナゲ』を「文学界」に発表。最初の作品集『闘牛』を文芸春秋新社より刊行。四月、『漆胡樽』を「新潮」に発表。七月、『鰯い潮』を「文芸春秋」に連載。一二月、雑誌「日本未来派三七号」に『井上靖詩抄』として十数年にわたって書いた詩三四編を発表。

一九五一（昭和二六）四四歳。昭和一一年から一五年にわたる記者生活に終止符を打ち、五月、毎日新聞社を退社、社友となる。一月、『白い牙』を「新潮」に連載。六月、『澄賢房覚え書』を文学界に、八月、『玉碗記』を「文芸春秋」に、一〇月、『ある偽作家の生涯』を「新潮」に、それぞれ発表。

一九五二（昭和二七）四五歳。一月、『楼門』を「文芸」に、二月、『北の駅路』を「中央公論」に、三月、『小さい旋風』を「文学界」にそれぞれ発表。七月、『暗い平原』を「新潮」に連載。一〇月、『緑の仲間』を「毎日新聞」に連載。一一月、『風と雲と砦』を「読売新聞」に連載。

一九五三（昭和二八）四六歳。一月、『あすなろ物語』を「オール読物」に

一九三六　ロンドン軍縮会議脱退を通告　二・二六事件　阿部知二『冬の宿』発表

一九三七　日支事変勃発　日独伊防共協定成立　川端康成『雪国』発表

一九四四　アメリカ軍、サイパン島に上陸

一九四五　日本降伏し、ポツダム宣言受諾　米軍占領時代はじまる　国際連合成立　「新潮」「文芸」復刊

一九四六　新憲法公布

一九四七　新憲法施行　露伴、横光利一死去

一九四八　極東軍事裁判の判決下る　太宰治自殺、菊池寛死去

一九四九　下山事件、三鷹事件、松川事件、相ついで起こる　芥川賞復活　丹羽文雄、中村光夫の間に「風俗小説論争」おこる

一九五〇　朝鮮戦争勃発　日本共産党の公職追放　警察予備隊令公布　レッド・パージおこる　金閣寺炎上　中村光夫『風俗小説論』発表

一九五一　日米サンフランシスコ講和条約調印　民間放送開始される　原民喜自殺　宮本百合子、林芙美子死去

一九五二　宮城前メーデー流血事件起こる　破防法公布施行　武田泰淳『風媒花』　野間宏『真空地帯』発表

一九五三　朝鮮休戦協定調印　スター

連載（六月完結）。六月、『橋本関雪』を「芸術新潮」に、七月、『異域の人』を「群像」に発表。一〇月、『末裔』を「新潮」に発表、『風林火山』を「小説新潮」に連載。一二月、『グウドル氏の手套』を「別冊文芸春秋第三七号」に発表。

一九五四（昭和二九）四七歳。三月、『僧行賀の涙』を「中央公論」に発表、『あした来る人』を「朝日新聞」に連載。四月、『あすなろ物語』を新潮社、『井上靖作品集』（五巻）を講談社より刊行。五月、『胡桃林』を「新潮」に発表。一〇月、『夜の金魚』を改造に発表。

一九五五（昭和三〇）四八歳。一月、『合流点』を『新潮』に、『姨捨』を「文芸春秋」に発表。六月、「ジャパン・クォータリー」に『比良のシャクナゲ』の英訳が掲載される。七月、『川の話』を「世界」に発表。八月、『淀殿日記』を「別冊文芸春秋第四七号」に連載しはじめる。九月、最初の書き下ろし小説『黒い蝶』を新潮社より刊行。この年、芥川賞選考委員になる。

一九五六（昭和三一）四九歳。一月、『射程』を「新潮」に連載。四月、『蔵』を「群像」に発表。五月、『暗い舞踏会』を「文芸」に、八月、『夏の草』を「中央公論」に発表。一〇月、上高地から穂高に登り、初雪に会う。『孤猿』を「文芸春秋」に発表。一一月、『氷壁』を「朝日新聞」に連載。

一九五七（昭和三二）五〇歳。一月、『ある関係』を「文学界」に、『司馬遷』を「群像」に発表。三月、『天平の甍』を「中央公論」に連載。四月、『井上靖長編小説選集』（八巻）を三笠書房より刊行。

リン首相死去　テレビ放送開始

「第三の新人」の活躍が目立ってくる

一九五四　造船疑獄で吉田内閣動揺する　ビキニ被災事件起こる　鳩山内閣成立

一九五五　米英仏ソ四大国巨頭ジュネーヴ会談　アジア・アフリカ会議バンドンで開催　石原慎太郎『太陽の季節』に芥川賞受賞　トーマス・マン死去

一九五六　スターリン批判　ブダペスト暴動起こる　スエズ運河国有化宣言　中国の百家争鳴の新文芸政策きまる

一九五七　石橋内閣総辞職、岸内閣成立　東海村原子炉に点火される　ソ連スプートニク一号を発射

六月、『星と祭』を「文芸春秋」に発表。七月、上高地より穂高に取材の山行きをし、大雨に会う。一〇月、『夏の終り』を「新潮」に、『四つの面』を「群像」に発表。この月、第二次中国訪問日本文学代表団として山本健吉らとともに約一か月中国各地を回る。

一八五八（昭和三三）五一歳。一月、『朱い門』を「文学界」に連載。二月、『天平の甍』で芸術選奨文部大臣賞を受賞。三月、『満月』を「中央公論」に発表。詩集『北国』を創元社より刊行。四月、『ある落日』を読売新聞に連載。五月、『花のある岩場』を「新潮」に、『幽鬼』を「世界」に発表。七月、『楼蘭』を「文芸春秋」に発表。九月、『作家のノート』を「新潮」に連載。一〇月、『平蜘蛛の釜』を「群像」に発表。

一九五九（昭和三四）五二歳。一月、『敦煌』を「群像」に連載。『井上靖集』（新選現代日本文学全集）を筑摩書房より刊行。二月、文芸春秋新社講演のため沖縄に行く。『氷壁』その他により三三年度芸術院賞を受賞。七月、『洪水』を「声」（四号）に発表。一〇月、『蒼き狼』を「文芸春秋」に連載。『渦』を「朝日新聞」に連載。

一九六〇（昭和三五）五三歳。一月、『敦煌』『楼蘭』により毎日芸術大賞を受賞。『しろばんば』を「主婦の友」に連載。五月、『私の自己形成史』を「日本」に連載。六月、ミイラ学術調査団の一員として酒田に行く。同月末、毎日新聞よりローマ・オリンピックに特派されてローマにおもむき、オリンピック終了後、ヨーロッパ各地及びアメリカを回って一一月末帰国。一一月、作家生活一〇年を一応の区切

三島由紀夫の『金閣寺』発表される

一九五八　ソ連核実験の停止を声明　米英、核実験の期限付停止を声明　フランス第五共和制発足　警職法をめぐる論議さかんになる　横山大観死去

一九五九　勤務評定の反対運動起こる　伊勢湾台風　ソ連月の裏側撮影に成功　永井荷風、高浜虚子死去

一九六〇　五月、アメリカU2型機ソ上連空で撃墜される　三池争議で労組と警官隊衝突する　六月安保反対運動高まり、岸内閣退陣し、池田内閣成立、一〇月浅沼稲次郎刺殺事件起こる　火野

りに作品を整理し、全集の形で『井上靖文庫』（全二六巻）を新潮社より刊行。第一回として『渦』が出た。イタリアのポムピアーニ社出版の「文芸年鑑」一九六一年版に『比良のシャクナゲ』のイタリア語訳が掲載された。

一九六一（昭和三六）五四歳。一月、『崖』を「東京新聞」に連載。同月、大岡昇平の「『蒼き狼』は歴史小説か」（「群像」一月号）を契機に、大岡氏との間に論争が起こる。二月、評論「自作『蒼き狼』について」を「群像」に発表。五月、英訳『猟銃』をタトル社より刊行。六月末、中国対外文化協会の招きで、亀井勝一郎、平野謙、有吉佐和子らと中国を訪れ、約一か月各地を回る。八月、『井上靖・田宮虎彦集』（現代日本文学全集）を講談社より刊行。九月、『狼災記』を「新潮」に、一〇月、『補陀落渡海記』を「群像」に発表。一一月、『小磐梯』を「新潮」に発表。一二月、『滞在の日記』により第一四回野間文芸賞を受賞。

一九六二（昭和三七）五五歳。二月、『井上靖集』（新日本文学全集）を集英社より刊行。四月、随筆『わが青春放浪』を「読売新聞」に連載。七月、『城砦』を「毎日新聞」に連載。一〇月、『井上靖集』（昭和文学全集）を角川書店より刊行。一二月、詩集『地中海』を新潮社より刊行。

一九六三（昭和三八）五六歳。一月、『古い文学』を「文学界」に発表。二月、『楊貴妃伝』を「婦人公論」に連載。三月、沼津千本浜で、「井上靖文学碑」の除幕式がおこなわれる。四月、『僧加羅国縁起』を

葦平死去

一九六一　ソ連人間衛星船ヴォストーク号を打ち上げる　ベルリン封鎖　ソ連、大気圏内核実験再開を発表　韓国軍事クーデター起こる　中央公論所載の深沢七郎『風流夢譚』により、右翼少年の殺傷事件起こる　青野季吉、宇野浩二死去

一九六二　アルジェリア臨時政府成立　アメリカ、キューバ海上封鎖をし、キューバ危機おとずれる　中印国境紛争　犀星、白鳥、吉川英治死去

一九六三　ケネディー暗殺事件起こり、ジョンソン大統領就任　米ソ三国部分核実験停止条約調

「心」に発表。同月書き下ろし小説『風濤』取材のため韓国に旅行。五月、『盛装』を「読売新聞」に連載、『西域』（岩村忍と共著）を筑摩書房より刊行。六月、仏訳『猟銃』をストック社より、中国語訳『天平の甍』を中国作家出版社より刊行。八月、『風濤』（一部）を「群像」に発表。九月末、鑑真和上円寂一千二百年記念訪中日本文化会代表団の一員として約一か月、中国訪問。一〇月、『風濤』（二部）を「群像」に発表。『井上靖集』（現代文学大系）を筑摩書房より刊行。一一月、芸術院会員に推される。

一九六四（昭和三九）五七歳。一月、『風濤』により読売文学賞受賞。五月末、日本人のアメリカ移民を題材とした小説取材のため長男修一をともなって渡米、七月末帰国。六月、『花の下にて』を「群像」に発表。十月、『夏草冬濤』を「産経新聞」に、『後白河院』を「展望」に連載。一一月、『井上靖』（日本の文学）を中央公論社より刊行。この年、独訳『猟銃』をズールカンプ社、イタリア語訳『比良のシャクナゲ』をポムピアーニ社より刊行。

一九六五（昭和四〇）五八歳。一月、『井上靖西域小説集』を講談社より刊行。五月始めから約一か月、永田修一らとソ連領中央アジアのシルク・ロードのあとをさぐる。七月、『井上靖自選集』を集英社より刊行。一一月、『化石』を「朝日新聞」に連載。

一九六六（昭和四一）五九歳。一月、『テペのある街にて』を「文学界」に発表。『わだつみ』を「世界」に、『おろしや国酔夢譚』を「文芸春秋」に連載。『井上靖』（われらの文学）を講談社より刊行。二月、

印　吉展ちゃん事件起こる　黒部第四ダム完成　松川事件最終公判で全員無罪の判決下る　久保田万太郎、佐々木信綱死去

一九六四　フランス中共承認　中共核実験　中ソ対立深刻化する　新幹線開通　東京オリンピック開催　三島由紀夫『宴のあと』裁判で三島側敗訴　尾崎士郎、三好達治、佐藤春夫死去

一九六五　インドネシア国連を脱退　米のベトナム北爆始まる　日韓条約調印　谷崎潤一郎、高見順死去

一九六六　中国に文化大革命おこる　日本近代文学館開館　国立劇場開場　『沈黙』遠藤周作

『古代ピャンジケント』を「オール読物」に発表。五月、『井上靖集』（現代文学篇）を文芸春秋より刊行。六月、『夏草冬濤』を新潮社より刊行。八月、『井上靖集』（豪華版日本文学全集）を河出書房より刊行。十一月、『傾ける海』を文芸春秋より刊行。

一九六七（昭和四二）六〇歳。二月、『胡姫』を「小説新潮」に発表。三月下旬、郷里湯ヶ島で友人達と還暦を祝う。五月、六日の誕生日に、軽井沢で一家で還暦を祝う。六月、毎日新聞夕刊の「現代日本の小説」第二作として『夜の声』を連載。『魔法壜』を「別冊文芸春秋」に発表。『化石』を講談社より、詩集『運河』を筑摩書房より刊行。六月二八日、ハワイ大学の日本文学講師に招かれて出発、九月一日帰国、七月、『崑崙の玉』を「オール読物」に発表。

一九六八（昭和四三）六一歳。一月、四日の読売新聞紙上で志賀直哉と対談。一五日、東京都成人式で講演。「風景」に一年間、詩を連載。五月九日より六月二一日まで、「おろしや国酔夢譚」取材のため、妻ふみ、次女佳子をともなってソ連各地を回る。九月、『夜の声』を新潮社より刊行。一〇月、『おろしや国酔夢譚』を文芸春秋より刊行。

い雨』井伏鱒二　小宮豊隆・亀井勝一郎死去

一九六九　アラブ・イスラエル紛争再燃　中国で初の水爆実験　『暮が下りてから』安岡章太郎『万延元年のフットボール』大江健三郎　山本周五郎・壺井栄死去

一九七〇　メキシコ・オリンピック開催　川端康成、ノーベル文学賞受賞　広津和郎死去

「旺文社文庫」刊行のことば

いかなる時代においても、書物は人間の最大の喜びであり、最高の救いである。若い日読んだ書物は、人間の生涯にわたって影響をあたえ、第二の天性となり、人格となるであろう。

かかる観点から旺文社は、若き世代のための出版社としての使命感にたって、ここに旺文社文庫を刊行する。内容は、洋の東西にわたり、時代の古今をつらぬき、文学・科学・伝記・随筆・思想、万般におよび、いやしくも知識人たらんとする者が、生涯の教養の基盤として、若い日一読すべき価値のあるものを可及的に多く刊行せんとするものである。

読むに価値あるものを、でき得るだけ楽しく、消化しやすく、読みやすく提供することは出版社の義務である。出版道義を強く信奉せんとしているわが社は、この目的にひたむきに献身するものである。あえてわが社の志を理解されご支援あらんことを。

旺文社社長　赤尾好夫

〔編集顧問〕　小田切進　茅誠司　木村毅
中島健蔵　森戸辰男　（五十音順）

旺文社文庫　天平の甍　他一編　定価はカバーに表示してあります

昭和43年12月20日　初版発行
昭和49年　第15刷発行

著者　井上靖
発行者　鳥居正博
印刷所　慶昌堂印刷株式会社
（中村印刷・穴口製本）

発行所　株式会社　旺文社
162　東京都新宿区横寺町
電話　東京（03）267-1111〔代〕

落丁・乱丁・不良本はお取り替えします
本社に直接お申し出ください

0193 | 610-66 | 0724
908046
© 旺文社　1968
（許可なしに転載，複製することを禁じます）
Printed in Japan

旺文社文庫目録（＊印は近刊）

日本文学

吾輩は猫である 他一編　夏目漱石
坊っちゃん・草枕 他一編　夏目漱石
三四郎 他一編　夏目漱石
こころ 他一編　夏目漱石
それから 他一編　夏目漱石
門 他一編　夏目漱石
道草 他二編　夏目漱石
硝子戸の中 他一編　夏目漱石
彼岸過迄 他一編　夏目漱石
行人 他一編　夏目漱石
虞美人草 他一編　夏目漱石
明暗（上）（下）　夏目漱石
二百十日・野分 他一編　夏目漱石
夢十夜・幻影の盾 他四編　夏目漱石
阿部一族・雁・高瀬舟　森鴎外
舞姫・山椒大夫 他四編　森鴎外
青年 他一編　森鴎外
渋江抽斎 他二編　森鴎外
浮雲 他三編　二葉亭四迷
野菊の墓 他三編　伊藤左千夫

武蔵野・牛肉と馬鈴薯 他四編　国木田独歩
源おぢ・忘れえぬ人々 他四編　国木田独歩
運命論者・号外 他五編　国木田独歩
田舎教師 他一編　田山花袋
蒲団・一兵卒の銃殺 他一編　田山花袋
たけくらべ 他三編　樋口一葉
修禅寺物語 他四編　岡本綺堂
高野聖・歌行燈 他一編　泉鏡花
生れ出づる悩み 他三編　有島武郎
或る女　有島武郎
石川啄木歌集　久保田正文編
与謝野晶子歌集　吉田精一編
若山牧水歌集　木俣修編
土　長塚節
長塚節歌集　北住敏夫編
北原白秋歌集　木俣修編
友情・愛と死 他一編　武者小路実篤
若き日の思い出 他一編　武者小路実篤
真理先生 他一編　武者小路実篤
幸福者 他詩十編　武者小路実篤
或る男（上）（下）　武者小路実篤
その妹 他一編　武者小路実篤

暗夜行路　志賀直哉
和解・城の崎にて 他四編　志賀直哉
網走まで 他十六編　志賀直哉
高村光太郎詩集　北川太一編
細雪（上）（中）（下）　谷崎潤一郎
刺青・春琴抄 他二編　谷崎潤一郎
少将滋幹の母 他四編　谷崎潤一郎
萩原朔太郎詩集　那珂太郎編
青銅の基督 他一編　長与善郎
竹沢先生という人 他一編　長与善郎
父帰る・恩讐の彼方に 他七編　菊池寛
幼年時代 他三編　室生犀星
室生犀星詩集　山室静編
出家とその弟子 他一編　倉田百三
羅生門・鼻・侏儒の言葉 他二編　芥川龍之介
河童・或る阿呆の一生 他四編　芥川龍之介
地獄変・戯作三昧 他六編　芥川龍之介
奉教人の死・邪宗門 他六編　芥川龍之介
舞踏会 他十編　芥川龍之介
南京の基督・山鴫 他九編　芥川龍之介

西方の人 他六編　芥川龍之介
偸盗・袈裟と盛遠 他五編　芥川龍之介
佐藤春夫詩集　阪本越郎編
田園の憂鬱・都会の憂鬱　佐藤春夫
宮沢賢治詩集　山本太郎編
銀河鉄道の夜 他九編　宮沢賢治
三好達治詩集　村野四郎編
天の夕顔・失楽の庭 他一編　中河与一
旅愁（上）（下）　横光利一
伊豆の踊子・花のワルツ 他三編　川端康成
雪国 他二編　川端康成
山の音 他一編　川端康成
川のある下町の話 他一編　川端康成
掌の小説五十編　川端康成
名人　川端康成
抒情歌・たまゆら 他八編　川端康成
風立ちぬ・聖家族 他三編　堀辰雄
菜穂子 他四編　堀辰雄
李陵・弟子・山月記 他二編　中島敦
帰郷　大仏次郎
二十四の瞳 他二編　壺井栄

母のない子と子のない母と 他一編　壺井栄
柿の木のある家 他十五編　壺井栄
次郎物語（上）（中）（下）　下村湖人
足摺岬 他五編　田宮虎彦
夕鶴・彦市ばなし 他七編　木下順二
野火 他一編　大岡昇平
俘虜記　大岡昇平
あすなろ物語 他一編　井上靖
天平の甍 他一編　井上靖
しろばんば　井上靖
蒼き狼　井上靖
孤猿・小磐梯 他八編　井上靖
洪水・異域の人 他八編　井上靖
真空地帯　野間宏
＊暗い絵・第三十六号　野間宏
パンドラの匣　太宰治
人間失格 他五編　太宰治
走れメロス・新樹の言葉 他九編　太宰治
檸檬・ある心の風景 他二十編　梶井基次郎
出発は遂に訪れず 他八編　島尾敏雄
花筐・光る道 他四編　檀一雄
寒い朝 他四編　石坂洋次郎

若い川の流れ　石坂洋次郎
人生劇場（青春編）他三編　尾崎士郎
伊東静雄詩集　林富士馬編
村野四郎詩集　杉本春生編
海潮音　上田敏
ひめゆりの塔　石野径一郎

外国文学

〈ドイツ文学〉

若きウェルテルの悩み　ゲーテ　井上正蔵訳
ファウスト（上）（下）　ゲーテ　佐藤通次訳
美しき魂の告白　ゲーテ　井上正蔵訳
ゲーテ詩集　井上正蔵訳
ハイネ詩集　井上正蔵訳
みずうみ・三色すみれ 他一編　シュトルム　石丸静雄訳
シュトルム詩集　石丸静雄訳
アルト・ハイデルベルク　マイアー＝フェルスター　植田敏郎訳
リルケ詩集　石丸静雄訳
マルテの手記　リルケ　星野慎一訳
トーニオ・クレーガー 他一編　トーマス・マン　植田敏郎訳
魔の山（一）（二）（三）（四）　トーマス・マン　川崎芳隆訳

車輪の下　ヘッセ　岩淵達治訳
郷愁　ヘッセ　佐藤晃一訳
デーミアン他一編　ヘッセ　常木実訳
春の嵐他一編　ヘッセ　石丸静雄訳
ヘッセ詩集　ヘッセ　植村敏夫訳
漂泊の魂・美しき青春　ヘッセ　北垣篤訳

〈イギリス文学〉

ハムレット　シェイクスピア　大山俊一訳
ロミオとジュリエット　シェイクスピア　大山敏子訳
ヴェニスの商人　シェイクスピア　大山敏子訳
マクベス　シェイクスピア　大山俊一訳
オセロウ　シェイクスピア　大山俊一訳
ジュリアス・シーザー　シェイクスピア　大山敏子訳
リチャード三世　シェイクスピア　大山俊一訳
真夏の夜の夢　シェイクスピア　大山敏子訳
お気に召すまま　シェイクスピア　大山俊一訳
リア王　シェイクスピア　大山俊一訳

ロビンソン・クルーソー　デフォー　佐山栄太郎訳
バイロン詩集　バイロン　宮崎孝一訳
ロンドン塔　エインズワース　石田幸太郎訳
他一編縮訳版
クリスマス・カロル　ディケンズ　神山妙子訳
二都物語　ディケンズ　神山妙子訳
ジェーン・エア（上）（下）　C・ブロンテ　神山妙子訳
嵐が丘　E・ブロンテ　中村佐喜子訳
宝島　スティーヴンソン　中村佐喜子訳
ジーキル博士とハイド氏　スティーヴンソン　田中西二郎訳
ドリアン・グレイの肖像　ワイルド　日高八郎訳
林檎の木・小春日和　ゴールズワージー　渡辺純訳
月と六ペンス　モーム　守屋陽一訳
お菓子とビール　モーム　龍口直太郎訳
怪談　ハーン　繁尾久訳

〈アメリカ文学〉

緋文字　ホーソン　刈田元司訳
黒猫・黄金虫他四編　ポー　刈田元司訳
アンクル・トムの小屋（上）（下）　ストウ夫人　大橋吉之輔訳
若草物語　オールコット　恩地三保子訳
トム・ソーヤーの冒険　マーク・トウェイン　鈴木幸夫訳
ハックルベリ・フィンの冒険　マーク・トウェイン　刈田元司訳
あしながおじさん　ウェブスター　中村佐喜子訳
野性の呼び声　ロンドン　龍口直太郎訳
白い牙　ロンドン　鈴木幸夫訳
子鹿物語（上）（下）　ローリングズ　繁尾久訳
大地（一）（二）（三）　パール・バック　佐藤亮一訳
キリマンジャロの雪　ヘミングウェイ　高村勝治訳
他十二編
日はまた昇る　ヘミングウェイ　守屋陽一訳
はつかねずみと人間たち　スタインベック　龍口直太郎訳
赤い子馬　スタインベック　繁尾久訳
白い鯨（上）（下）　メルヴィル　高村勝治訳

〈フランス文学〉

人間ぎらい・町人貴族　モリエール　鈴木豊訳

クレーヴの奥方　ラファイエット夫人　生島遼一訳
マノン・レスコオ　アベ・プレヴォ　青柳瑞穂訳
ボールとヴィルジニー　サン・ピエール　鈴木豊訳
パルムの僧院（上）（下）　スタンダール　大久保和郎訳
谷間のゆり　バルザック　石川湧訳
純愛　バルザック　山口年臣訳
レ・ミゼラブル　ユゴー　大久保和郎訳
縮訳版（上）（下）　デュマ・ペール　竹村猛訳
モンテ・クリスト伯爵　縮訳版（上）（下）　デュマ・ペール　石川湧訳
三銃士（上）（下）　デュマ・ペール　江口清訳
カルメン他一編　メリメ　杉捷夫訳
愛の妖精　サンド　篠沢秀夫訳
ボードレール詩集　ボードレール　佐藤朔訳
ボヴァリー夫人　フローベール　白井浩司訳
椿姫　デュマ・フィス　石川湧訳
十五少年漂流記　ヴェルヌ　波多野完子訳
海底二万リュー　ヴェルヌ　江口清訳
八十日間世界一周　ヴェルヌ　木村庄三郎訳

風車小屋だより　ドーデ　大久保和郎訳
月曜物語　ドーデ　大久保和郎訳
居酒屋（上）（下）　ゾラ　古賀照一訳
女の一生　モーパッサン　稲田三吉訳
ピエールとジャン　モーパッサン　稲田三吉訳
くび飾り・メニエット　モーパッサン　平野威馬雄訳
他十一編
ジュールおじさん　ルナール　辻昶訳
他十一編
にんじん　ルナール　辻昶訳
ジャン・クリストフ　ロマン・ロラン　白井健三郎訳
縮訳版（上）（下）
シラノ・ド・ベルジュラック　ロスタン　岩瀬孝訳
三人の少女　ジャム　田辺保訳
ジャム詩集　ジャム　田辺保訳
青い麦　コレット　河盛好蔵訳
狭き門　ジッド　村上菊一郎訳
背徳者　ジッド　新庄嘉章訳
田園交響楽他二編　ジッド　新庄嘉章訳
ドルジェル伯爵の舞踏会　ラディゲ　江口清訳

さすらいの青春　フールニエ　田辺保訳
奇岩城　ルブラン　江口清訳

〈ロシア文学〉

大尉の娘他一編　プーシキン　小沼文彦訳
スペードの女王他一編　プーシキン　小沼文彦訳
死せる魂　ゴーゴリ　平井肇訳
検察官・外套・肖像画　ゴーゴリ　北垣信行訳
父と子　ツルゲーネフ　工藤精一郎訳
罪と罰（上）（下）　ドストエフスキー　江川卓訳
貧しき人々　ドストエフスキー　北垣信行訳
カラマーゾフの兄弟（一）（二）（三）　ドストエフスキー　原卓也訳
白痴（上）（下）　ドストエフスキー　小沼文彦訳
戦争と平和　トルストイ　小沼文彦訳
縮訳版（上）（下）
復活（上）（下）　トルストイ　工藤精一郎訳
アンナ・カレーニナ（上）（下）　トルストイ　工藤精一郎訳
桜の園・三人姉妹他一編　チェーホフ　佐々木彰訳

赤い花・信号　他四編　ガルシン　小沼文彦訳
先駆者　メレジコフスキイ　谷崎精二訳
どん底　他一編　ゴーリキー　和久利誓一訳
（その他）
人形の家　イプセン　林房二訳
クオーレ　アミーチス　柴田治三郎訳
阿Q正伝・狂人日記　他六編　魯迅　松枝茂夫訳
変身　他四編　カフカ　川崎芳隆訳
赤毛のアン　モンゴメリ　浦山光之訳　神山妙子訳

伝記・教養・他

ネルシュワイツァー　木村毅　山室静
チャーチル　佐藤亮一
リンカーン　石井満
ガンジー　坂本徳松
ベートーベン　諸井三郎
ケネディ　中屋健一
フランクリン自伝　フランクリン　鶴見俊輔訳
シーザー　長谷川博隆
ゴッホ　嘉門安雄
キュリー夫人　松岡洋子
ベートーヴェンの生涯　ロマン・ロラン　蜷川譲訳
ミケランジェロの生涯　ロマン・ロラン　蜷川譲訳
福翁自伝　福沢諭吉　会田倉吉校注
若人におくることば　赤尾好夫
文学入門　吉田精一
哲学入門　ショウペンハウエル　斎藤信治訳
論語物語　下村湖人
若い人々のために　ステーヴンソン　守屋陽一訳
友情論・恋愛論　モナール　山口年臣訳
幸福論　アラン　白井健三郎訳
恋愛論　スタンダール　白井浩司訳
惜しみなく愛は奪う　他一編　有島武郎
博物誌　ルナール　辻昶訳
シートン動物記（上）（下）　シートン　小林清之介訳
文章読本　谷崎潤一郎
学問のすゝめ　福沢諭吉　伊藤正雄校注
文芸的な、あまりに文芸的な　他三編
孤独な散歩者の夢想　他一編　ルソー　山口年臣訳
ソクラテスの弁明・饗宴　プラトン　戸塚七郎訳
大和古寺風物誌　他一編　亀井勝一郎
愛の無常について　他一編　亀井勝一郎
読書論　亀井勝一郎
我が精神の遍歴　他一編　亀井勝一郎
青春について　亀井勝一郎
信仰について　亀井勝一郎
翼よ、あれがパリの灯だ（上）（下）　リンドバーグ　佐藤亮一訳
わが青春記　チャーチル　佐藤亮一訳
アルプス登攀記　ウィンパー　石一郎訳
パンセ（抄）　パスカル　松浪信三郎訳
エセー（抄）　モンテーニュ　原二郎訳
徒然草　現代語訳対照　安良岡康作訳注
奥の細道　他四編　現代語訳対照　麻生磯次訳注
枕冊子（上）（*）（下）　現代語訳対照　田中重太郎訳注
万葉集（上）（中）（下）　現代語訳対照　桜井満訳注
山行　楓有恒
東洋語源物語　渡辺紳一郎
ロウソクの科学　ファラデー　日下実男訳
文章入門　野間宏